

# 横壁中村遺跡(5)

— 縄文時代中期後半住居編 —

八ッ場ダム建設工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書第14集

2007

国 土 交 通 省

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団



# 横壁中村遺跡(5)

— 縄文時代中期後半住居編 —

八ッ場ダム建設工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書第14集

2007

国 土 交 通 省  
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団





林地区

吾妻川

横壁中村遺跡

楡木Ⅱ遺跡

吾妻川右岸の横壁中村遺跡は中位段丘面、対岸の楡木Ⅱ遺跡は上位段丘面、林地区は最上位段丘面にあたる。横壁中村遺跡の基盤にローム層はないが、楡木Ⅱ遺跡と林地区にはローム層が堆積している。



20区78号住居 確認段階の礫出土状況



20区96号住居 確認段階の礫出土状況



20区78号住居 覆土中の礫



20区96号住居 覆土中の礫



20区116号住居 地山礫の状況



20区79号住居1



20区87号住居1



20区120号住居3



20区79号住居19



20区113号住居1



20区 105号住居 1



20区 104号住居 51・52



20区 104号住居 1



20区 79号住居 104



20区 78号住居 60



20区 79号住居 103



20区 93号住居 18



20区 122号住居



20区 87号住居 100



# 序

八ッ場ダムは、首都圏の利水および治水を目的として計画され、現在は吾妻郡長野原町を中心に工事が進められています。

八ッ場ダムの建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査は、当事業団が平成6年度から実施し、本年度で12年目を迎えます。横壁中村遺跡は平成8年度から発掘調査が開始され、平成18年度以降も調査の継続が予定されており、長期にわたる大規模な調査となりました。また調査された遺構や遺物は本遺跡が縄文時代を中心とする、非常に大きく、また長く続いた集落であることを示しております。これら膨大な資料を整理し報告する作業は平成15年度から開始され、今回は縄文時代中期の住居跡30軒に関する報告を纏めることができました。本書は縄文時代の集落の構造を考える上で、また長野県、新潟県地域との広域な交流を考える上で重要な資料となると考えております。

発掘調査から報告書刊行に至るまで、国土交通省八ッ場ダム工事事務所、群馬県教育委員会、および長野原町教育委員会をはじめとする関係機関や地元関係者のみなさまには、多大なるご尽力を賜りました。本報告書を上梓するにあたり、衷心より感謝申し上げます。

また本書が吾妻郡内、ひいては群馬県の歴史を解明する上で末永く活用されることを願い序といたします。

平成19年3月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団  
理事長 高橋 勇夫



## 例 言

- 1 本書は、八ッ場ダム建設工事に伴う事前調査として、平成8年度から実施されている「横壁中村遺跡」の発掘調査報告書である。横壁中村遺跡の発掘調査報告書は、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第319集『久々戸遺跡・中棚Ⅱ遺跡・下原遺跡・横壁中村遺跡』を第1冊目として既に4冊が刊行されている。本書は、横壁中村遺跡20区で検出された縄文時代中期の竪穴住居30軒の遺構と出土遺物を掲載しており、横壁中村遺跡の発掘調査報告書の第5冊目である。
- 2 横壁中村遺跡は群馬県吾妻郡長野原町大字横壁字観音堂530他に所在し、長野原町教育委員会と協議の結果、本遺跡名が決定された。
- 3 本発掘調査は、群馬県教育委員会の調整に基づき、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が国土交通省関東地方整備局（平成13年1月までは建設省）の委託を受けて実施した。平成14年度からは、八ッ場ダム地域埋蔵文化財調査を目的に設置された、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団八ッ場ダム調査事務所が担当している。
- 4 発掘調査は平成8年4月1日から平成18年3月31日まで実施し、平成18年度以降も調査は継続する予定である。今回報告する住居の調査年度は、第3章第1節内で住居ごとに記載しているが、おもに平成15・16年度に調査されたものである。
- 5 発掘調査組織は下記の通りである。

管理・指導 理事長 小寺弘之（平成8・9年度）、菅野 清（平成10年度）、小野宇三郎（平成11～17年7月まで）、高橋勇夫（平成17年7月から平成18年度）

常務理事 菅野 清（平成8・9年度）、赤山容造（平成10～12年度）、吉田 豊（13・14年度）、住谷永市（平成15・16年度）、木村裕紀（平成17・18年度）

事務局長 原田恒弘（平成8・9年度）、赤山容造（平成10～13年度）

事業局長 神保侑史（平成14～16年度）、津金澤吉茂（平成17・18年度）

管理部長 蜂巢 実（平成8年度）、渡辺 健（平成9・10年度）、住谷 進（平成11～13年度）、萩原利通（平成14・15年度）、矢崎俊夫（平成16・17年度）、萩原 勉（平成18年度）

調査研究部長 赤山容造（平成8～10年度）、神保侑史（平成11年度）、能登 健（平成12・13年度）、巾 隆之（平成14年年度）、右島和夫（平成15・16年度）西田健彦（平成17・18年度）

調査研究課長 岸田治男（平成8年度）、能登 健（平成9～11年度）、飯島義雄（平成12年度）、下城 正（平成13年度）

八ッ場ダム調査事務所長 水田 稔（平成14・15年度）、巾 隆之（平成16～18年度）

同調査研究部長 津金澤吉茂（平成14・15年度）、佐藤明人（平成16～18年度）

同調査研究課長 下城 正（平成14年度）、斎藤和之（平成15・16年度）、中沢 悟（平成17年度）、佐藤明人（平成18年度兼務）

事務担当 井上 剛、大島信夫、岡島伸昌、小淵 淳、笠原秀樹、片岡徳雄、国定 均、小山建夫、坂本敏夫、須田朋子、野口富太郎、町田文雄、宮崎忠司、富澤よねこ、森下弘美、矢嶋知恵子、柳岡良宏、吉田有光

調査担当 阿久津 聡、池田政志、石坂 聡、石田 真、今井和久、岡部 豊、小野和之、金井 武、唐沢友之、久保 学、児島良昌、小林大悟、斎藤幸男、関 俊明、田村公夫、原 雅信、榛沢健二、廣津英一、藤巻幸男、松原孝志、諸田康成、渡辺弘幸、綿貫邦男
- 6 整理期間は平成18年4月1日から平成19年3月31日である。
- 7 整理組織は下記の通りである。

管理・指導 理事長 高橋勇夫、常務理事 木村裕紀、事業局長 津金沢吉茂、総務部長 萩原 勉、  
ハッ場ダム調査事務所長 巾 隆之、同事務所調査研究部長兼整理 GL 佐藤明人  
事務担当 ハッ場ダム調査事務所庶務 GL 吉田有光、庶務臨時補助員 鈴木理佐  
整理担当 藤巻幸男

8 本報告書作成の担当

編 集 藤巻幸男

本文執筆 新山保和（遺物観察表）、藤巻幸男（前記以外）

石材鑑定 渡辺弘幸、藤巻幸男

遺構写真撮影 各調査担当者

遺物写真撮影 佐藤元彦

機械実測 富沢スミ江 伊東博子 岸 弘子 廣津真希子

委託関係 遺構測量および空中写真 株式会社測研

遺構図デジタル編集 株式会社測研

整理補助 新山保和（専門囑託員）吉田豊子 宮沢直樹 湯本よし子 山口由利枝 唐澤美恵子  
川津えみ子 日野亮子

9 出土遺物及び記録図・写真などの記録類は、すべて群馬県埋蔵文化財センターで保管している。

10 発掘調査及び本書の作成にあたっては、次の機関、諸氏から貴重なご教示やご指導をいただいた。記して感謝の意を表したい。（敬称省略、五十音順）

国土交通省関東地方建設局ハッ場ダム工事事務所、群馬県教育委員会文化課、長野原町教育委員会  
飯島義雄 石田 真 大竹幸恵 金子直行 小池岳史 佐藤雅一 白石光男 寺内隆夫 富田孝彦  
能登 健 萩原昭朗 平林 彰 福島 永 松島榮治 綿田弘実 渡辺清志

## 凡 例

- 1 挿図中に使用した方位は、座標北を表している。本書で使用する測量図の座標はすべて、2002年4月改正以前の日本測地系を用いている。
- 2 遺構図の縮尺は、住居の全体にかかる図は1/50、住居内の炉等、個別の図は1/25を基本とした。
- 3 遺構番号は、調査時の番号を用いている。今回の報告は、縄文時代中期の竪穴住居を対象としているため、遺構番号は連続しない。また、発掘調査中、整理作業中に住居と認定できないものもあり、これらも欠番としている。
- 4 遺構図面中における遺物番号は遺物実測図の番号と一致する。また、●は土器、▲は石器を表し、図示した遺物でこの表示のない遺物、遺構図中に番号のない遺物は出土位置を記録しなかったものである。
- 5 遺物図の縮尺は土器実測図は1/4、土器拓本は1/3、石器1/3を原則としたが、これ以外の縮尺を用いている場合も多い。その場合は各遺物実測図に記した。
- 6 写真図版中の遺物の縮尺は、概ね遺物実測図と同縮尺とした。
- 7 遺物観察表、石器計測表の記載方法は下記の通りである。
  - (1) 土器の計測値の単位はcmである。
  - (2) 石器の計測値の単位はmmである。
  - (3) 石器類の重量はすべて残存値であり、単位はgである。
  - (4) 色調については、農林水産省水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修の新版標準土色帖に基づいている。
- 8 石器実測図では、自然面は点描、磨り面と欠損面は白抜きとした。

# 目次

序	
例言	
凡例	
目次	
挿図目次	
図版目次	
表目次	

## 第1章 調査の方法と経過

第1節	調査に至る経緯	1
第2節	調査の経過	1
第3節	調査の方法	4

## 第2章 遺跡の環境

第1節	地理的環境	5
第2節	歴史的環境	5

## 第3章 発見された遺構と遺物

第1節	遺跡の概要	11
第2節	基本土層	12
第3節	縄文時代の竪穴住居	15

## 第4章 まとめ

第1節	竪穴住居について	181
第2節	出土土器について	185
第3節	出土石器について	195

遺物観察表	199
-------	-----

抄録	245
----	-----

写真図版

## 挿図目次

- 第1図 年度別調査区全体図
- 第2図 遺跡位置及び周辺遺跡図
- 第3図 横壁中村遺跡全体図
- 第4図 横壁中村遺跡基本土層図
- 第5図 横壁中村遺跡20区住居全体図
- 第6図 20区72号住居(1)
- 第7図 20区72号住居(2)
- 第8図 20区72・73号住居柱穴
- 第9図 20区72号住居出土遺物(1)
- 第10図 20区72号住居出土遺物(2)
- 第11図 20区72号住居出土遺物(3)
- 第12図 20区73号住居
- 第13図 20区73号住居出土遺物
- 第14図 20区78号住居(1)
- 第15図 20区78号住居(2)
- 第16図 20区78号住居出土遺物(1)
- 第17図 20区78号住居出土遺物(2)
- 第18図 20区78号住居出土遺物(3)
- 第19図 20区78号住居出土遺物(4)
- 第20図 20区78号住居出土遺物(5)
- 第21図 20区79号住居(1)
- 第22図 20区79号住居(2) 炉
- 第23図 20区79号住居(3)
- 第24図 20区79号住居出土遺物(1)
- 第25図 20区79号住居出土遺物(2)
- 第26図 20区79号住居出土遺物(3)
- 第27図 20区79号住居出土遺物(4)
- 第28図 20区79号住居出土遺物(5)
- 第29図 20区79号住居出土遺物(6)
- 第30図 20区79号住居出土遺物(7)
- 第31図 20区79号住居出土遺物(8)
- 第32図 20区79号住居出土遺物(9)
- 第33図 20区80号住居
- 第34図 20区80号住居出土遺物(1)
- 第35図 20区80号住居出土遺物(2)
- 第36図 20区80号住居出土遺物(3)
- 第37図 20区80号住居出土遺物(4)
- 第38図 20区84号住居
- 第39図 20区84号住居出土遺物(1)
- 第40図 20区84号住居出土遺物(2)
- 第41図 20区85号住居(1)
- 第42図 20区85号住居(2)
- 第43図 20区85号住居(3)
- 第44図 20区85号住居出土遺物(1)
- 第45図 20区85号住居出土遺物(2)
- 第46図 20区86号住居(1)
- 第47図 20区86号住居(2)
- 第48図 20区86号住居出土遺物
- 第49図 20区87号住居(1)
- 第50図 20区87号住居(2)
- 第51図 20区87号住居(3)
- 第52図 20区87号住居出土遺物(1)
- 第53図 20区87号住居出土遺物(2)
- 第54図 20区87号住居出土遺物(3)
- 第55図 20区87号住居出土遺物(4)
- 第56図 20区87号住居出土遺物(5)
- 第57図 20区87号住居出土遺物(6)
- 第58図 20区87号住居出土遺物(7)
- 第59図 20区87号住居出土遺物(8)
- 第60図 20区87号住居出土遺物(9)
- 第61図 20区88号住居
- 第62図 20区88号住居出土遺物
- 第63図 20区89号住居
- 第64図 20区89号住居出土遺物
- 第65図 20区92号住居(1)
- 第66図 20区92号住居(2)
- 第67図 20区92号住居(3)
- 第68図 20区92号住居出土遺物(1)
- 第69図 20区92号住居出土遺物(2)
- 第70図 20区92号住居出土遺物(3)
- 第71図 20区93号住居
- 第72図 20区93号住居出土遺物(1)
- 第73図 20区93号住居出土遺物(2)
- 第74図 20区94号住居
- 第75図 20区94号住居出土遺物(1)
- 第76図 20区94号住居出土遺物(2)
- 第77図 20区94号住居出土遺物(3)
- 第78図 20区96号住居(1)
- 第79図 20区96号住居(2)
- 第80図 20区96号住居(3)
- 第81図 20区96号住居出土遺物(1)
- 第82図 20区96号住居出土遺物(2)
- 第83図 20区96号住居出土遺物(3)
- 第84図 20区96号住居出土遺物(4)
- 第85図 20区96号住居出土遺物(5)
- 第86図 20区97号住居
- 第87図 20区97号住居出土遺物(1)
- 第88図 20区97号住居出土遺物(2)
- 第89図 20区101号住居
- 第90図 20区101号住居出土遺物
- 第91図 20区102号住居
- 第92図 20区102号住居出土遺物(1)
- 第93図 20区102号住居出土遺物(2)
- 第94図 20区102号住居出土遺物(3)
- 第95図 20区103号住居
- 第96図 20区103号住居出土遺物(1)
- 第97図 20区103号住居出土遺物(2)
- 第98図 20区103号住居出土遺物(3)
- 第99図 20区104号住居(1)
- 第100図 20区104号住居(2)
- 第101図 20区104号住居(3)
- 第102図 20区104号住居出土遺物(1)
- 第103図 20区104号住居出土遺物(2)
- 第104図 20区104号住居出土遺物(3)
- 第105図 20区104号住居出土遺物(4)
- 第106図 20区104号住居出土遺物(5)
- 第107図 20区104号住居出土遺物(6)
- 第108図 20区105号住居
- 第109図 20区105号住居出土遺物(1)
- 第110図 20区107号住居
- 第111図 20区107号住居出土遺物(1)
- 第112図 20区107号住居出土遺物(2)
- 第113図 20区107号住居出土遺物(3)
- 第114図 20区111号住居(1)
- 第115図 20区111号住居(2)
- 第116図 20区111号住居出土遺物(1)
- 第117図 20区111号住居出土遺物(2)
- 第118図 20区111号住居出土遺物(3)
- 第119図 20区111号住居出土遺物(4)
- 第120図 20区112号住居(1)
- 第121図 20区112号住居(2)
- 第122図 20区112号住居(3)

第123図	20区112号住居出土遺物(1)
第124図	20区112号住居出土遺物(2)
第125図	20区113号住居(1)
第126図	20区113号住居(2)
第127図	20区113号住居(3)
第128図	20区113号住居出土遺物(1)
第129図	20区113号住居出土遺物(2)
第130図	20区113号住居出土遺物(3)
第131図	20区113号住居出土遺物(4)
第132図	20区116号住居
第133図	20区116号住居出土遺物(1)
第134図	20区116号住居出土遺物(2)
第135図	20区118号住居
第136図	20区118号住居出土遺物(1)
第137図	20区118号住居出土遺物(2)
第138図	20区119号住居(1)
第139図	20区119号住居(2)
第140図	20区119号住居出土遺物(1)
第141図	20区119号住居出土遺物(2)
第142図	20区119号住居出土遺物(3)
第143図	20区120号住居(1)
第144図	20区120号住居(2)
第145図	20区120号住居出土遺物(1)
第146図	20区120号住居出土遺物(2)
第147図	20区122号住居(1)
第148図	20区122号住居(2)
第149図	20区122号住居出土遺物(1)
第150図	20区122号住居出土遺物(2)

図1	横壁中村遺跡20区住居	時期別配置図
図2	横壁中村遺跡20区住居	石囲い炉の変遷
図3	横壁中村遺跡20区住居	出土遺物量比一覧
図4	横壁中村遺跡20区住居	出土土器集成(加曾利E1式期)
図5	横壁中村遺跡20区住居	出土土器集成(加曾利E2式期)
図6	横壁中村遺跡20区住居	出土土器集成(加曾利E3式期古段階)
図7	横壁中村遺跡20区住居	出土土器集成(加曾利E3式期中段階)
図8	横壁中村遺跡20区住居	出土土器集成(加曾利E3式期新段階)
図9	横壁中村遺跡20区住居	出土土器集成(加曾利E4式期)
図10	横壁中村遺跡20区住居出土の石棒	
図11	横壁中村遺跡20区住居出土の敲石	
図12	横壁中村遺跡20区住居出土の大型砥石	

## 図版目次

PL1	1	遺跡の位置と周辺の地形
PL2	1	報告対象地区と周辺の景観(北から)
	2	上方の丸い山はこの地域のランドマーク「丸岩」
	2	報告対象地区の調査状況(北から)
		地山礫の多い地点と少ない地点がある。
PL3	1	20区72号住居 覆土上層の礫(西から)
	2	20区72号住居 炉検出状況(東から)
	3	20区72号住居 床面確認状況(西から)
	4	20区72号住居 炉全景(北から)
	5	20区72号住居 周囲の状況(西から)
PL4	1	20区72号住居 貼床(北から)
	2	20区72号住居 掘り方全景(西から)
	3	20区72号住居 平成15年度調査区掘り方(北から)
	4	20区73号住居 炉内埋設土器確認状況(西から)
	5	20区78号住居 全景(北から)
PL5	1	20区78号住居 確認状況(西から)
	2	20区78号住居 覆土上層の礫と遺物(北から)
	3	20区78号住居 覆土中層の礫と遺物(北から)
	4	20区78号住居 セクション(南から)
	5	20区78号住居 覆土下層の礫と貼り床(南から)
	6	20区78号住居 炉確認状況(南から)
	7	20区78号住居 炉全景(南から)
	8	20区78号住居 炉掘り方(南から)
PL6	1	20区79号住居 確認状況(南東から)
	2	20区79号住居 覆土中の礫と遺物(南東から)
	3	20区79号住居 覆土下層の礫(北から)
	4	20区79号住居 床面と遺物出土状況(北東から)
	5	20区79号住居 全景(東から)
PL7	1	20区79号住居 炉確認状況(南西から)
	2	20区79号住居 炉セクション(北から)
	3	20区79号住居 炉内焼土検出状況(東から)
	4	20区79号住居 炉掘り方の礫(南から)
	5	20区80号住居 全景(南西から)
PL8	1	20区80号住居 確認状況(北西から)
	2	20区80号住居 全景(南西から)
	3	20区80号住居 石棒出土状況(南から)
	4	20区80号住居 炉確認状況(南東から)
	5	20区80号住居 炉全景(北東から)
	6	20区80号住居 炉内焼土の確認(南東から)
	7	20区80号住居 旧炉の埋設土器(南東から)
	8	20区80号住居 炉の北東床面に置かれた扁平礫(南東から)
PL9	1	20区84号住居 全景(南から)
	2	20区84号住居 確認状況(北から)
	3	20区84号住居 覆土上面の礫(北から)
	4	20区84号住居 床面と遺物の状況(南から)
	5	20区84号住居 炉周囲の遺物(南から)
PL10	1	20区84号住居 炉の埋設土(西から)
	2	20区84号住居 炉全景(東から)
	3	20区84号住居 炉掘り方セクション(東から)
	4	20区84号住居 炉石の組み方(西から)
	5	20区85号住居 全景(北東から)
PL11	1	20区85号住居 床面と遺物の出土状況(北から)
	2	20区85号住居 埋設土の状況(西から)
	3	20区85号住居 炉全景(西から)
	4	20区85号住居 炉内埋設土器(南から)
	5	20区85号住居 柱6内埋設土器確認状況(西から)
	6	20区85号住居 柱6内埋設土器とセクション(東から)
	7	20区85号住居 柱6埋設土器(北から)

	8	20区85号住居	柱6内埋設土器上面の礫（南から）		5	20区97号住居	全景（北東から）
P L 12	1	20区85号住居	柱6内埋設土器の上面を覆う礫群（東から）	P L 23	1	20区101号住居	遺物出土状況（南東から）
	2	20区86号住居	全景（北東から）	2	20区101号住居	堀り方全景（南東から）	
P L 13	1	20区86号住居	炉検出状況（東から）	3	20区101号住居	炉全景（南東から）	
	2	20区86号住居	炉セクション（南西から）	4	20区101号住居	炉の断面（南から）	
	3	20区86号住居	炉使用面全景（北から）	5	20区101号住居	1号埋甕（南から）	
	4	20区86号住居	炉内焼土検出状況（北から）	6	20区101号住居	1号埋甕断面（南から）	
	5	20区87号住居	全景（北から）	7	20区101号住居	2号埋甕（南東から）	
P L 14	1	20区87号住居	遺物出土状況（南から）	8	20区101号住居	2号埋甕埋設状況（南東から）	
	2	20区87号住居	遺物出土状況（南東から）	P L 24	1	20区102号住居	全景（北から）
	3	20区87号住居	遺物出土状況近接（北から）	2	20区102号住居	確認状況（北から）	
	4	20区87号住居	床面の土器20出土状況（南東から）	3	20区102号住居	炉全景（東から）	
	5	20区87号住居	炉埋没土（南西から）	4	20区105号住居	炉内埋設土器確認状況（東から）	
	6	20区87号住居	炉内遺物出土状況（西から）	5	20区105号住居	炉内埋設土器（南から）	
	7	20区87号住居	炉全景（西から）	P L 25	1	20区103号住居	確認状況（南東から）
	8	20区87号住居	炉堀り方全景（西から）	2	20区103号住居	埋没土（南から）	
P L 15	1	20区88号住居	全景（北から）	3	20区103号住居	遺物出土状況（南から）	
	2	20区88号住居	柱2の埋没土（南から）	4	20区103号住居	全景（南東から）	
	3	20区88号住居	柱3の埋没土（南から）	5	20区103号住居	炉の埋没土（東から）	
	4	20区88号住居	炉全景（北から）	6	20区103号住居	炉全景（北から）	
	5	20区88号住居	炉堀り方（西から）	7	20区103号住居	炉内埋設土器（東から）	
P L 16	1	20区89号住居	全景（東から）	8	20区103号住居	炉堀り方（東から）	
	2	20区89号住居	遺物出土状況（東から）	P L 26	1	20区104号住居	全景（南から）
	3	20区89号住居	炉内焼土と遺物（北から）	2	20区104号住居	遺物と埋没土（西から）	
	4	20区89号住居	土器2出土状況（北から）	3	20区104号住居	遺物と埋没土（西から）	
	5	20区89号住居	炉堀り方（南から）	4	20区104号住居	遺物出土状況（東から）	
P L 17	1	20区92号住居	全景（東から）	5	20区104号住居	貼り床検出状況（南から）	
	2	20区92号住居	遺物出土状況（北東から）	P L 27	1	20区104号住居	炉確認状況（南から）
	3	20区92号住居	遺物出土状況（東から）	2	20区104号住居	炉の調査状況（北から）	
	4	20区92号住居	炉埋没土（南から）	3	20区104号住居	炉の調査状況（東から）	
	5	20区92号住居	炉全景（北から）	4	20区104号住居	炉堀り方全景（東から）	
P L 18	1	20区92号住居	炉全景（北から）	5	20区107号住居	全景（北から）	
	2	20区92号住居	炉堀り方（北から）	P L 28	1	20区107号住居	周囲の地山礫（東から）
	3	20区92号住居	埋甕検出状況（北から）	2	20区107号住居	炉全景（南から）	
	4	20区92号住居	埋甕埋設状況（西から）	3	20区107号住居	土器5の出土状況（北から）	
	5	20区93号住居	全景（北西から）	4	20区107号住居	床面伏甕2の出土状況（西から）	
P L 19	1	20区93号住居	床面付近の礫と遺物（南東から）	5	20区107号住居	埋甕確認状況（西から）	
	2	20区93号住居	炉全景（西から）	6	20区107号住居	埋甕と蓋石（西から）	
	3	20区94号住居	確認状況（北東から）	7	20区107号住居	埋甕（西から）	
	4	20区94号住居	炉と石組み（南から）	8	20区107号住居	埋甕の埋設状況（西から）	
	5	20区94号住居	炉検出状況（南から）	P L 29	1	20区111号住居	礫と遺物の出土状況（北東から）
	6	20区94号住居	炉（南から）	2	20区111号住居	全景（北東から）	
	7	20区94号住居	炉堀り方（西から）	P L 30	1	20区111号住居	確認状況（北から）
	8	20区94号住居	石組み全景（東から）	2	20区111号住居	敷石面の確認（北から）	
P L 20	1	20区96号住居	確認状況（東から）	3	20区111号住居	柄部出土の大型多孔石（東から）	
	2	20区96号住居	覆土上層の礫（東から）	4	20区111号住居	埋甕（東から）	
	3	20区96号住居	覆土中層の礫（東から）	5	20区111号住居	炉検出状況（東から）	
	4	20区96号住居	覆土下層の礫（東から）	6	20区111号住居	炉上面の土器14・15（北から）	
	5	20区96号住居	床面の確認状況（東から）	7	20区111号住居	炉埋没状況（西から）	
	6	20区96号住居	埋没土（北から）	8	20区111号住居	土器3の出土状況（南から）	
	7	20区96号住居	土器6出土状況（東から）	P L 31	1	20区111号住居	炉全景（東から）
	8	20区96号住居	黒曜石出土状況（西から）	2	20区111号住居	炉内埋設土器1（東から）	
P L 21	1	20区96号住居	炉確認状況（東から）	3	20区111号住居	炉掘り方調査（南東から）	
	2	20区96号住居	炉内の状況（東から）	4	20区111号住居	炉掘り方から旧埋設土器を確認（東から）	
	3	20区96号住居	炉内埋設土器検出状況（北から）	5	20区112号住居	全景（北から）	
	4	20区96号住居	炉全景（北から）	P L 32	1	20区112号住居	確認状況（北から）
	5	20区96号住居	全景（東から）	2	20区112号住居	炉と周囲の敷石（東から）	
P L 22	1	20区97号住居	全景（北から）	3	20区112号住居	敷石と周囲の地山礫（北から）	
	2	20区97号住居	遺物出土状況（北から）	4	20区112号住居	炉内の埋没土（西から）	
	3	20区97号住居	炉検出状況（北から）	5	20区112号住居	石囲い炉の復元（南東から）	
	4	20区97号住居	炉全景（西から）	6	20区113号住居	確認状況（北から）	



	7	20区113号住居	遺物出土状況（北から）
P L 33	1	20区113号住居	全景（北から）
	2	20区113号住居	遺物出土状況（東から）
	3	20区113号住居	遺物出土状況（西から）
	4	20区113号住居	炉内の焼土と埋没状況（北から）
	5	20区113号住居	掘り方全景（北東から）
P L 34	1	20区116号住居	全景（北東から）
	2	20区116号住居	確認状況（東から）
	3	20区116号住居	炉検出状況（西から）
	4	20区116号住居	炉の調査（西から）
	5	20区116号住居	炉全景（東から）
P L 35	1	20区118号住居	全景（北東から）
	2	20区118号住居	遺物出土状況（北東から）
	3	20区118号住居	遺物出土状況（北東から）
	4	20区118号住居	炉全景（北から）
	5	20区118号住居	掘り方全景（北東から）
P L 36	1	20区119号住居	全景（北から）
	2	20区119号住居	遺物出土状況（北から）
	3	20区119号住居	埋没土（南から）
	4	20区119号住居	炉全景（東から）
	5	20区119号住居	旧炉の埋設土器を確認（西から）
P L 37	1	20区120号住居	全景（東から）
	2	20区119号住居	埋甕の確認状況（東から）
	3	20区119号住居	埋甕（東から）
	4	20区120号住居	炉検出状況（北から）
	5	20区120号住居	炉全景（東から）
P L 38	1	20区122号住居	全景（東から）
	2	20区122号住居	遺物出土状況（東から）
	3	20区122号住居	炉全景（南東から）
	4	20区122号住居	黒曜石大型剥片の出土状況（南から）
	5	20区122号住居	黒曜石大型剥片の出土状況（南から）
P L 39		20区72号住居	出土遺物 (1)
P L 40		20区72号住居	出土遺物 (2)
		20区73号住居	出土遺物
		20区78号住居	出土遺物 (1)
P L 41		20区78号住居	出土遺物 (2)
P L 42		20区78号住居	出土遺物 (3)
P L 43		20区79号住居	出土遺物 (1)
P L 44		20区79号住居	出土遺物 (2)
P L 45		20区79号住居	出土遺物 (3)
P L 46		20区79号住居	出土遺物 (4)
P L 47		20区80号住居	出土遺物 (1)
P L 48		20区80号住居	出土遺物 (2)
		20区84号住居	出土遺物 (1)
P L 49		20区84号住居	出土遺物 (2)
		20区85号住居	出土遺物
P L 50		20区86号住居	出土遺物
		20区87号住居	出土遺物 (1)
P L 51		20区87号住居	出土遺物 (2)
P L 52		20区87号住居	出土遺物 (3)
P L 53		20区87号住居	出土遺物 (4)
		20区88号住居	出土遺物
P L 54		20区89号住居	出土遺物
		20区92号住居	出土遺物 (1)
P L 55		20区92号住居	出土遺物 (2)
		20区93号住居	出土遺物 (1)
P L 56		20区93号住居	出土遺物 (2)
		20区94号住居	出土遺物 (1)
P L 57		20区94号住居	出土遺物 (2)
		20区96号住居	出土遺物 (1)

P L 58		20区96号住居	出土遺物 (2)
P L 59		20区96号住居	出土遺物 (3)
		20区97号住居	出土遺物 (1)
P L 60		20区97号住居	出土遺物 (2)
		20区101号住居	出土遺物
		20区102号住居	出土遺物 (1)
P L 61		20区102号住居	出土遺物 (2)
P L 62		20区103号住居	出土遺物
P L 63		20区104号住居	出土遺物 (1)
P L 64		20区104号住居	出土遺物 (2)
P L 65		20区104号住居	出土遺物 (3)
		20区105号住居	出土遺物
		20区107号住居	出土遺物 (1)
P L 66		20区107号住居	出土遺物 (2)
P L 67		20区111号住居	出土遺物 (1)
P L 68		20区111号住居	出土遺物 (2)
		20区112号住居	出土遺物
P L 69		20区113号住居	出土遺物 (1)
P L 70		20区113号住居	出土遺物 (2)
		20区116号住居	出土遺物 (1)
P L 71		20区116号住居	出土遺物 (2)
		20区118号住居	出土遺物 (1)
P L 72		20区118号住居	出土遺物 (2)
		20区119号住居	出土遺物 (1)
P L 73		20区119号住居	出土遺物 (2)
		20区120号住居	出土遺物
P L 74		20区122号住居	出土遺物

## 表目次

表 1	周辺遺跡一覧表
表 2	横壁中村遺跡遺構数集計表（平成8年～17年度）
表 3	横壁中村遺跡20区縄文時代中期の住居一覧
表 4	横壁中村遺跡20区縄文時代中期の住居 時期別一覧
表 5	横壁中村遺跡20区住居 出土土器総量一覧
表 6	横壁中村遺跡20区住居 出土石器総量一覧



# 第1章 調査の方法と経過

## 第1節 調査に至る経緯

ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査は、建設省関東地方建設局（当時。現在は国土交通省関東地方建設局）と群馬県教育委員会、長野原町教育委員会、吾妻町教育委員会（当時）が、その実施に関する協議を重ね、建設省関東地方建設局長と群馬県教育委員会教育長が、平成6年3月18日に「ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財調査の実施に関する協定書」を締結し、ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査事業の実実施計画が決定されたことによって開始されることとなった。実施計画書に示された調査組織等の役割は、調査実施機関は群馬県教育委員会で、調査機関は財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団である。

この協定をふまえて、平成6年4月1日に関東地方建設局長と群馬県教育委員会教育長により発掘調査受託契約を、同日に群馬県教育委員会教育長と群馬県埋蔵文化財調査事業団理事長により発掘調査受託契約を締結し、ハッ場ダム進入路関連遺跡を調査箇所とするハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査事業がスタートした。平成6年度から実施されている調査は、工事用進入路に関するものが主体となっている。これは、ハッ場ダム建設工事の大規模な工事を円滑に進めるため、機材や重機を搬入・搬出する進入路や仮設道路の整備が先行される状況にあったためである。

平成6年度に締結された協定によると、調査対象の遺跡は48遺跡であり、そのうち本遺跡の位置する長野原町横壁地区の遺跡は7遺跡であった。横壁地区でも工事用進入路を原因とする調査が先行され、平成6年度には協定対象遺跡である横壁勝沼遺跡の調査が実施された。

本遺跡も、平成6年度に締結された協定での対象遺跡であり、平成6・7年度に行われた横壁勝沼遺跡の調査が終了した後、平成8年度から調査が行わ

れることになった。工事用進入路部分の調査は平成11年度に終了し、平成12年度からは横壁地区護岸工事部分の調査に着手した。詳しくは次節「調査の経過」に譲る。

なお、関東地方建設局長と群馬県教育委員会教育長と群馬県埋蔵文化財調査事業団理事長は、平成11年4月1日に「ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財調査の実施に関する協定の一部を変更する協定書」を締結し、平成11年4月以降は調査実施機関を財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団に変更し、現在の調査体制に至っている。

また、協定書の対象遺跡で、横壁地区に位置する7遺跡のうち、上野IV遺跡と観音堂遺跡は、長野原町教委との協議の結果、本遺跡に統合されることとなった。

## 第2節 調査の経過

横壁中村遺跡の調査は平成8年度より行われた。平成8年度から11年度までは工事用進入路部分、平成12年度からは横壁地区護岸工事部分を中心とした調査であるが、これら工事は一体のもので、調査は継続して行われてきた。各年度ごとの調査範囲は、図示したとおりであるが、年度をまたいで調査された範囲もあるので、図示した範囲は調査の終わった年度を表している。各年度ごとの調査の経過を調査日誌を元に抜粋する。

**平成8年度** 調査事務所の設置、調査区への進入路等の造成工事等を行ったため、本調査は7月1日開始となった。担当者は3名による1班での調査である。本年度は、中グリッドの18区、28区を中心とする調査である。進入路が狭く重機を導入できなかったため、人力による掘削を強いられ調査は困難であった。11月23日に現地説明会を開催し、見学者は157名であった。

**平成9年度** 前年度の継続である18・28区の調査とともに、その西側に当たる19・20・29・30区の表土掘削を実施し、調査に着手した。担当者は4名の配置であったが、7月から9月まで1名は久々戸

## 第1章 調査の方法と経過

遺跡の調査にまわっている。調査面積は約5,000㎡である。11月3・4日に当事業団主催の平成9年度出土文化財巡回展示会を八ッ場地区で実施にあたり、遺物・パネルを出展した。

**平成10年度** 平成8・9年度の継続調査である。担当者は年度当初4名の配置であったが、うち1名は林地区及び横壁西久保遺跡の調査を担当することになったため、実質3名による1班体制による調査となった。本年度の調査面積は約6,200㎡であった。

**平成11年度** 前年までの継続調査と20・30区で調査区を拡張した。担当者は5名、2班の体制であったがうち2名が長野原地区の調査を担当することになったため、10月末までは3名、1班での調査となった。4月29日に前年度に検出された大型敷石住居、環状柱穴列等を現地説明会で公開し、153名の見学者を集めた。さらに、本年度は調査区西側にあたる11区でも調査を行ったが、試掘の結果、遺構は確認できなかった。

また、平成11年8月13日からの豪雨により横壁地区が被災したため、8月22日まで調査を休止した。本年度で工食用進入路部分の調査はすべて終了した。調査面積は約6,200㎡である。

**平成12年度** 工食用進入路の調査が終了したため、この南側の代替地護岸工事部分の調査を担当者7名による2班体制で開始する予定であったが、1班は林地区の調査に対応することとなり、残る1班も横壁西久保遺跡との掛け持ちとなったため、調査対象面積は当初予定よりも大幅に減少した。本年度の調査は20区の調査が中心となり、一部18区の試掘調査を行った。また、本年度は調査区南側にあるゲートボール場の東側にバンザマスト（気象用観測マスト）設置に伴って42㎡も併せて調査を行い、縄文時代後期の住居、中世の土坑を検出している。本年度の調査面積は約1,800㎡であった。

**平成13年度** 発掘作業員の雇用システム変更に伴って手間取り、調査開始が6月4日となった。本年度の調査対象地は遺跡の中央を流れる山根沢の両側にあたり、18・19・20区にあたる。工事が予定されてい

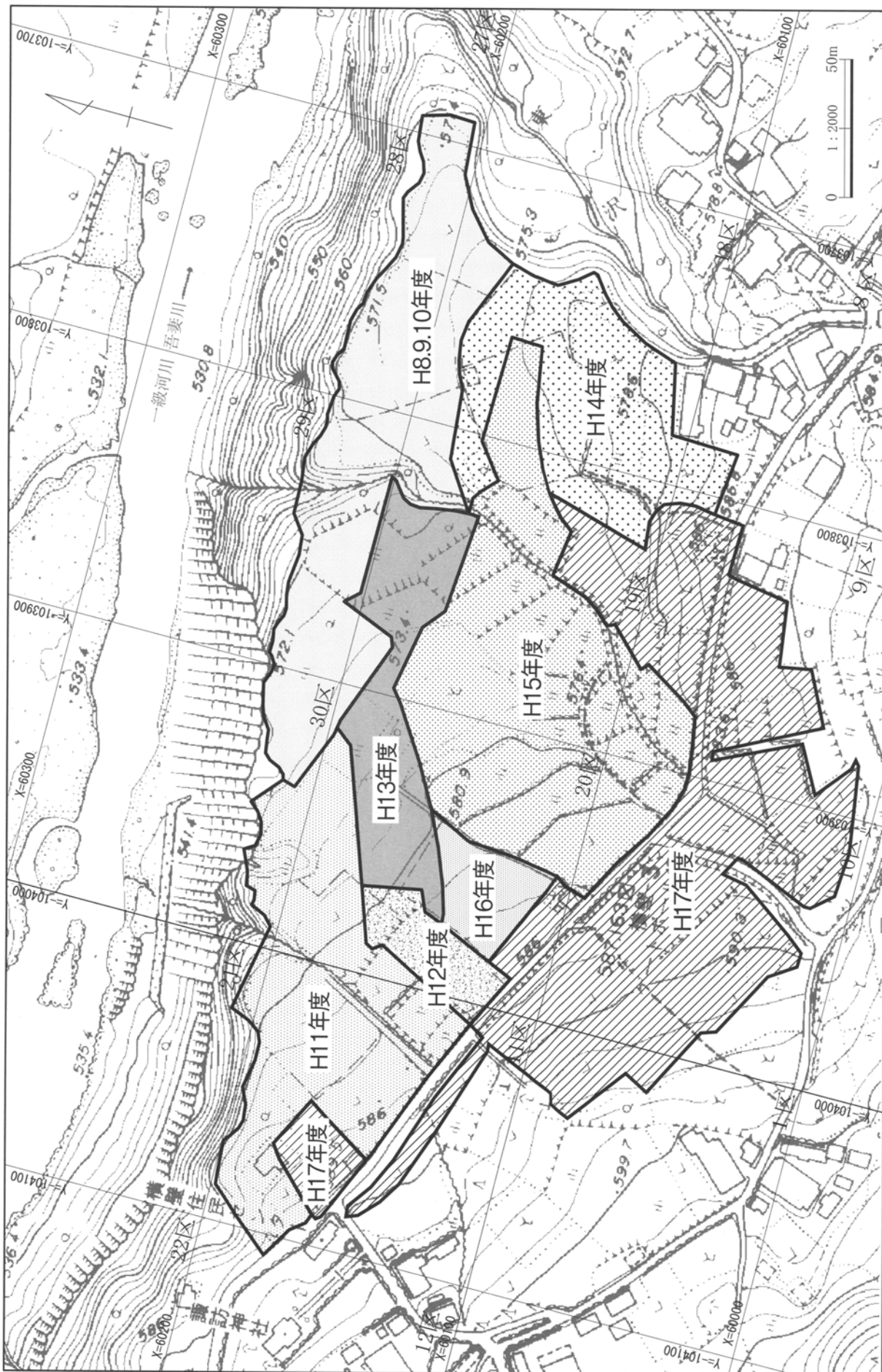
る山根沢の西側地区は、工事工程にあわせて調査が終了した地区を順次、工事側に引き渡ししながら進められた。11月に国土交通省より希少猛禽類の保護のため対策を講じてほしいとの要請があり、12月1日から調査体制を縮小したため調査の一部は次年度に継続となり、調査面積は年度当初予定の6,100㎡から5,200㎡となった。

**平成14年度** 本年度より八ッ場ダム調査事務所が開所し、八ッ場地区の調査を管轄することになった。担当者は7名の2班体制での調査となり、前年度からの継続である18区を中心に行った。本年度は6月から8月にかけて担当者2名が西ノ上遺跡へ、10月からは担当者4名が上郷岡原遺跡へ異動している。また、前年度と同様に11月下旬からは希少猛禽類保護のため調査体制を縮小しての調査となった。調査面積は5,400㎡であった。

**平成15年度** 前年度の継続調査の18区と9・10・19・20区の調査を行った。担当者は年度当初6名の配置であったが、4～6月は担当者2名が久々戸遺跡の調査を行い、7月からは1名が整理事業に異動となった。また11月からは1名が増員となった。調査は前年度からの継続となった埋没河道の調査から開始して、その後19・20区の調査を行った。本年度は平成12・13年度の調査区まで終了する予定であったが、用地買収が遅れ、次年度に継続となった。本年度の調査面積は約8,000㎡であった。

**平成16年度** 前年度に調査未了となった20区の調査を行った。担当者2名による1班体制である。本年度で代替地護岸工事部分の調査は終了の予定であったが、調査区南側の道路沿いの一部が用地買収と墓地移転の遅れにより調査が未了となり、次年度以降に継続となった。本年度の調査面積は約1,400㎡であった。

**平成17年度** 国道145号線部分の調査を、担当者5名による2班体制で行った。調査区は、9・10区である。調査面積は14,000㎡であった。本年度で平成8年度より続いた横壁中村遺跡の調査は一旦終了となる。



第1図 年度別調査区全体図

## 第3節 調査の方法

### (1) 調査の手順

調査は初めはバックフォーによる表土掘削を行い、順次作業員による遺構確認、遺構調査へと進んでいった。遺跡地の現況は畑、水田、道路であった。

出土遺物は遺構から出土したものは、その遺構番号を付し、さらに図面上に出土位置を記録したものについては番号を付し、標高を測定して取り上げた。遺構外から出土した遺物については後述するグリッド単位で取り上げた。さらに出土位置を記録したものは遺構出土のものと同様に取り上げた。遺構測量は作業員によるものと測量会社に委託して測量したものがあつた。縮尺については住居・土坑・配石等は1/20、炉・埋甕・埋設土器等は1/10、その他の遺構も1/20を原則としたが、溝・列石等規模の大きい遺構については1/40、全体図は1/100、1/200で作成した。また、列石の一部においては、パルーン撮影による空中写真測量も委託して実施した。

遺構の個別写真は、主に35mmモノクローム及びリバーサル、6×7判モノクロームで撮影し、一部6×7判リバーサルも状況に応じて使用している。

### (2) 遺跡の名称

本遺跡は、吾妻郡長野原町大字横壁字観音堂に位置する。発掘調査時の遺跡名称は、群馬県埋蔵文化財調査事業団で行っている遺跡命名の慣例に従うと遺跡所在地の大字名+小字名となり、「横壁観音堂遺跡」となるべきであるが、国土地理院1/25,000地形図「長野原」によると遺跡地には「中村」という小字名が記されているため、平成8年度の発掘調査開始時に「横壁中村遺跡」と命名した。しかし、この「中村」という小字名は行政的には用いられておらず、正確には前述の通り「観音堂」である。また、「長野原町の遺跡－町内遺跡詳細分布調査報告書－」（長野原町教委 1990）によると本遺跡は「観音堂遺跡」「上野IV遺跡」の範囲に入っている。さらに群馬県遺跡台帳には「横壁中村遺跡」が記載されているが、記述によるとこれは本遺跡の南西にあ

たり、位置がやや異なる。このように、本遺跡の遺跡名に関しては若干混乱があるが、長野原町教育委員会との協議により、「横壁中村遺跡」が本遺跡の正式名称として決定されている。

### (3) 調査区の設定

調査区の設定に関しては「ハツ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第1集『長野原一本松遺跡(1)』」に詳しいので、詳細はそちらを参照していただきたい。

本遺跡の調査区は、地区（大グリッド）と呼称する、発掘調査対象地全域に設定した1kmグリッドでは「27地区」、その地区を1辺100mの正方形で100分割した「区」（中グリッド）では「9・10・17・18・19・20・27・28・29・30区」に相当している。本遺跡の遺構名称は、区ごとに連続する番号を付し、区をまたぐ遺構の場合は遺構の主体と考えられる区の番号を付している。

## 第2章 遺跡の環境

ハッ場地区の遺跡の立地する環境については、既刊の(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第287集『長野原一本松遺跡』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第1集(諸田2002)および同第303集『ハッ場ダム発掘調査集成』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第2集(松原2003)に詳細に記述されているのでそちらを参照していただきたい。ここでは、横壁中村遺跡の立地する地理的環境および今回報告する縄文時代についての歴史的環境について概観するにとどめたい。

### 第1節 地理的環境

横壁中村遺跡の位置する長野原町は群馬県の北西部に位置し、草津町、嬭恋村、六合村、東吾妻町と接するとともに、長野県とも県境をなしている。本遺跡はこの長野原町の北東に位置し、吾妻川の右岸の崖上に立地する。吾妻川は長野県境の鳥居峠付近に源を発し、東流して渋川市付近で利根川と合流する全長76.2kmの1級河川である。本遺跡はこの合流点から約43km遡った地点である。また、本遺跡から約6km下流には「関東の耶馬溪」の異名を取る国指定名勝である吾妻溪谷がある。

横壁中村遺跡の標高は約570mを測る。吾妻川との比高差は40mほどであり、急峻な崖により隔られている。調査区は、西は深沢、東に東沢という2本の沢によって形成された扇状地形上に立地する。吾妻川に向かって北東に緩く傾斜しており、調査区内での比高差は約15mである。調査区のほぼ中央を山根沢が北流しており、小さな谷を形成している。南側には山が迫っており、調査区内にはこの山から押し出されたと思われる夥しい数の礫が存在し、縄文時代の遺構面はこの礫に覆われている。

本遺跡の環境を語る上で欠かせないのが丸岩の存在である。調査区の南南西約1.5kmに位置する標高1,124mをはかる岩峰で、南側を除いた3方が

100mにも達する垂直の崖に囲まれ、本遺跡から望むと巨大な円柱状にも見える特徴的な山容を呈している。この崖面には柱状節理による割れ目が顕著に現れており、山の形状と併せ見た独特の景観は、この遺跡に暮らした人々がランドマークとして仰ぎ見たであろうことを推測するに足る奇峰と言えよう。

また、浅間山も長野原町の自然を語る上で重要である。本遺跡の中心となる縄文時代中期から後期にかけては大きな活動はないと考えられているが、本遺跡の立地する吾妻川の段丘面は、浅間山の約2万年前の噴火によって発生した応桑泥流によって形成されたと考えられている。また、今後の報告になるが、本遺跡で検出された平安時代の住居の埋土の中には浅間山起源と思われる火山灰の堆積が認められるものも存在している。

### 第2節 歴史的環境

横壁中村遺跡のある長野原町は明治22年の町村制実施の際に、川原畑、川原湯、横壁、林、長野原、大津、羽根尾、古森、与喜屋、応桑の旧十ヶ村を合併して成立した。町内での遺跡の調査は、昭和29年に行われた勘場木遺跡の調査を嚆矢とし、昭和38・47・48年には群馬県による分布調査が行われ、昭和53年には石畑I岩陰遺跡が発掘調査された。

昭和62年からはハッ場ダム建設に先行して、町教委による埋蔵文化財詳細分布調査が実施され、183箇所の遺跡地が確認された。(その後の調査で、平成17年3月現在では214遺跡に増加している。)これ以降、町教委による発掘調査が行われている。さらに平成6年からはハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査事業が当事業団によって進められている。これらの調査をもとに横壁中村遺跡の歴史的環境を概観してみる。

**旧石器時代** 現在までの調査では旧石器時代の遺跡は確認されていない。吾妻川流域は前述したように応桑泥流堆積物や浅間-草津黄色軽石(As-YPk)によって厚く覆われており、この下位を調査することは掘削方法や安全上の問題などから難しいのが現

## 第2章 遺跡の環境

状である。従って山間部の遺跡などでこれらの堆積物の下位の調査が可能になれば、当該期の遺跡が確認される可能性は否定できない。

**縄文時代** 長野原町による埋蔵文化財詳細分布調査によれば現在までに214箇所の遺跡地が確認されており、このうち約半数の105遺跡で縄文時代の遺構、遺物の存在が確認されている。

まず、草創期の遺跡としては石畑Ⅰ岩陰遺跡(24)があげられる。奥行4m、幅40mのかなり大規模な岩陰遺跡であり、草創期から前期、そして晩期にわたる遺物と獣骨が出土している。旧石器の遺跡は確認されていないが、縄文時代草創期には長野原町域に人間が生活していたことを証明する遺跡である。早期では、楡木Ⅱ遺跡(20)で多くの撚糸文土器、表裏縄文土器、スタンプ形石器とともに、竪穴住居が31軒検出されている。この住居の中には石囲炉を持つものがあるとともに、重複関係を示すものもあることから、同時期の集落における定住性について新たな視点を与えるものと思われる。また、立馬Ⅰ遺跡(18)でも撚糸文期の住居と田戸下層式期の住居が検出されている。この立馬Ⅰ遺跡では早期から晩期までのほぼ全ての時期の遺物が出土している。山間の狭隘な谷に位置するこの遺跡からこのように長い時期にわたって遺物が出土していることはこの地域の縄文時代の環境を復元する上で興味深い事実である。さらに同時期の遺物は坪井遺跡(9)、長野原一本松遺跡(5)、幸神遺跡(6)でも出土が確認されている。

前期の遺跡は、坪井遺跡で花積下層式期の住居と土坑が検出されているほか、長野県域を主体とする塚田式、北陸地方の極楽寺式と関連すると思われる遺物が出土している。また、暮坪遺跡(12)では二ツ木式期の住居が検出されている。さらに長畝Ⅱ遺跡(13)では黒浜式期の住居が検出されている。本遺跡でも関山式、あるいは黒浜式期と思われる遺物が出土しているが、量は少なく、遺構も確認されていない。前期後半では、楡木Ⅱ遺跡で諸磯式期の住居が、川原湯勝沼遺跡(23)で同時期の土坑が検出されてお

り、本遺跡でも同時期の土坑が確認されている。

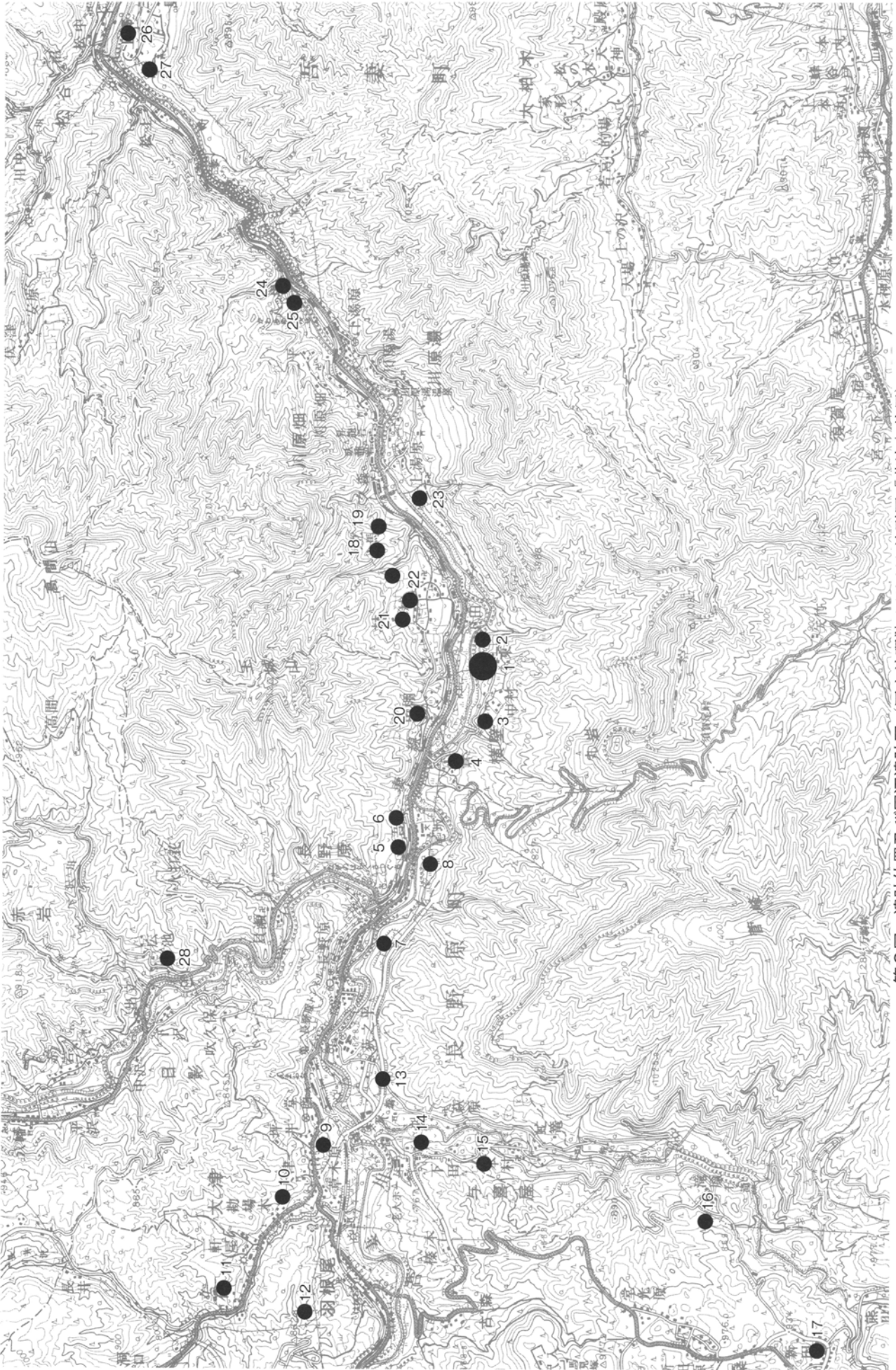
中期になると遺跡数、遺構量とも大幅に増加する。本遺跡ではこれまでのところ、最も古い勝坂式期の住居から中期末までで200軒以上の住居が確認されている。長野原一本松遺跡でも本遺跡と同様に大集落が形成されている。ただ、その始まりは本遺跡よりも若干時期が下り、中期後半の加曾利E式期になってからと思われる。この時期の特徴としては他地域との密接な交流がうかがえる点である。本遺跡の出土遺物でも、関東系の土器とともに中部高地系、特に長野県東部との関連が強く感じられる土器が多く、さらに新潟県方面から持ち込まれたと思われる土器も少なくない。これは長野原一本松遺跡でも新潟県方面から伝播したと思われる大木系の土器が出土していることや、坪井遺跡でも新潟県域で主体的な「桁倉類型」などの資料が出土していることから確認できよう。

後期になると長野原一本松遺跡の集落はやや縮小の傾向にあるが、本遺跡は加曾利B式期まで継続する。この時期の住居では、柄鏡形敷石住居の検出例が多く、本遺跡や長野原一本松遺跡の他、櫛Ⅱ遺跡(11)、向原遺跡(7)、滝原Ⅲ遺跡(16)、古屋敷遺跡(17)、上原Ⅳ遺跡(21)、林中原Ⅰ遺跡(22)、上郷岡原遺跡(26)などで確認されている。

晩期になると遺跡数は減少する傾向にあり、前述した石畑Ⅰ岩陰遺跡以外ではほとんど確認されていなかったが、最近の調査により、検出例が増加している。本遺跡でも遺物は出土していたが、平成15年度の調査で晩期終末期から弥生時代初頭と思われる埋設土器、土坑が確認された。また川原湯勝沼遺跡では、氷Ⅱ式土器による再葬墓と思われる土坑が検出された。久々戸遺跡(8)では氷式土器の鉢形土器、立馬Ⅰ遺跡でも長野県北部を主体とする女鳥羽川式土器の浅鉢が出土している。

弥生時代になると、本遺跡では中期の遺物が少量出土しているほかは、立馬Ⅰ遺跡で前期から中期の住居と中期の甕棺墓が検出されている程度で、極めて希薄な状況を呈している。





第2図 遺跡位置及び周辺遺跡図（国土地理院1/50,000地形図「草津」使用）

第2章 遺跡の環境

表1 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	遺跡の内容	文献
1	横壁中村	長野原町横壁	本遺跡	
2	横壁勝沼	長野原町横壁	中期から後期の土器片、槍先形尖頭器が出土。事業団平成6・7年度調査。	1
3	山根Ⅲ	長野原町横壁	中期後半の住居、土坑。事業団平成10・13年度調査。	2
4	西久保Ⅰ	長野原町横壁	中期末葉の敷石住居、土坑。中期の水場遺構。事業団平成6・10・12年度調査。	1
5	長野原一本松	長野原町長野原	縄文時代中期後半から後期初頭にかけての拠点集落。事業団平成6年度～調査中。	3
6	幸神	長野原町長野原	中期中葉から後半の住居。事業団平成8・9年度調査。	4
7	向原	長野原町長野原	中期後半から後期にかけての集落。敷石住居2軒。町教委平成5年度調査。	5
8	久々戸	長野原町長野原	晩期終末期（氷式期）の鉢形土器が出土。事業団平成15年度調査。	6
9	坪井	長野原町大津	前期前半、中期後半、中期末の住居。敷石住居3軒。町教委平成3・10年度調査。	7・8
10	勘場木石器時代住居	長野原町大津	中期後半の住居。昭和29年調査。	9
11	櫛Ⅱ	長野原町大津	後期前半の敷石住居4軒。町教委昭和63年度調査。	10
12	暮坪	長野原町羽根尾	前期前半の住居。町教委平成12年度調査。	11
13	長畝Ⅱ	長野原町与喜屋	前期前半、中期後半の住居。町教委平成2年度調査。	7
14	外輪原Ⅰ	長野原町与喜屋	前期後半の土器出土。町教委平成7年度試掘調査。	12
15	上ノ平	長野原町与喜屋	中期・後期の土器、石器類出土。	12
16	滝原Ⅲ	長野原町応桑	中期後半の住居、中期末の敷石住居。町教委平成8年度調査。	13
17	古屋敷	長野原町応桑	後期前半の敷石住居。昭和34年発見。	12
18	立馬Ⅰ	長野原町林	早期初頭・晩期の住居。早期から晩期にかけての土器。事業団平成13・14年度調査。	2・14
19	立馬Ⅱ	長野原町林	中期初頭から中期後半の住居。中期中葉の土器。事業団平成14年度調査。	14
20	楡木Ⅱ	長野原町林	早期初頭の集落。前期前半、前期後半、中期初頭の住居。事業団平成12・13年度調査。	2・15
21	上原Ⅳ	長野原町林	後期前半の敷石住居。晩期後半の土器。事業団平成15年度調査。	16
22	林中原Ⅰ	長野原町林	後期前半の敷石住居。町教委平成15年度調査。	17
23	川原湯勝沼	長野原町川原湯	中期後半の土坑。晩期終末期の再葬墓。事業団平成9・16年度調査。	1・18
24	石畑Ⅰ岩陰	長野原町川原湯	草創期から晩期の遺物と獣骨が出土。県教委昭和53年度調査。	9
25	石畑	長野原町川原湯	前期後半の土坑。事業団平成9・10年度調査。	1
26	上郷岡原	吾妻町三島	中期後半の住居。後期前半の敷石住居。事業団平成14年度調査。	14
27	上郷A	吾妻町三島	縄文時代のものと思われる陥穴。押形文土器片出土。事業団平成15年度調査。	6
28	広池	六合村赤岩	中期後半の住居。群馬大学昭和44年度調査。	19

参考文献

1. 「ハッ場ダム発掘調査集成」ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第2集」群埋文 2003
2. 年報21 群埋文 2002
3. 「長野原一本松遺跡」ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第1集」群埋文 2002
4. 年報17 群埋文 1998
5. 「向原遺跡」長野原町教育委員会 1996
6. 「久々戸遺跡(2)・中棚Ⅱ遺跡(2)・西ノ上遺跡・上郷A遺跡」ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第4集」群埋文2005
7. 「長畝Ⅱ遺跡・坪井遺跡」長野原町教育委員会 1992
8. 「坪井遺跡Ⅱ」長野原町教育委員会 2000
9. 「群馬県史 資料編」1 群馬県史編纂委員会 1988
10. 「櫛Ⅱ遺跡」長野原町教育委員会 1990
11. 「暮坪遺跡」長野原町教育委員会 2001
12. 「長野原町誌」上巻 長野原町 1976
13. 「滝原Ⅲ遺跡」長野原町教育委員会 1997
14. 年報22 群埋文 2003
15. 年報20 群埋文 2004
16. 年報23 群埋文 2005
17. 「町内遺跡Ⅳ」長野原町教育委員会 2004
18. 「川原湯勝沼遺跡」ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第6集」群埋文 2005
19. 「六合村誌」六合村 1973



第3图 横壁中村遗迹全体图 (1/1000)

0 40m



## 第3章 発見された遺構と遺物

### 第1節 遺跡の概要

横壁中村遺跡は、縄文時代中期後半から後期後半を中心とする集落遺跡で、平成17年までの調査で竪穴住居230軒以上が確認されており、県内でも有数の大規模集落であることが判明しつつある。

遺跡は、その中央を流下する通称「山根沢」の両側に展開しており、東側は「丸岩」の足下から流れる「東沢」までを範囲としている。北側及び西側の範囲は今後の調査に負うところとなるが、冬には午後3時で日が山に入る北向きの台地に、これほどの大規模集落が維持されたのは、間近にこれらの沢があったからであろう。

この地で人々の生活が始まるのは縄文時代早期からで、19区の山根沢沿いで燃糸文土器が少量出土している。前期では、初頭の花積下層式から諸磯c式までの土器が断続的に出土しているが、この時期の住居はまだ確認されていない。中期では、五領ヶ台式から勝坂式にかけての土器がかなり広範囲で出土しており、土坑はいくつか確認されているが、この時期も住居は未確認である。中期後半は集落が最大規模となり、その後も集落はやや規模を縮小しながら継続し、列石遺構や配石遺構、掘立柱建物等が伴う集落が後期前半まで認められる。後期後半にな

ると、山根沢の西側に配石墓群が形成される。この時期の集落の構成はまだはっきりしない。後期後半以後の様子を示す材料はまだ少ないが、晩期終末期の遺物は多量に出土しており、本地域の主要遺跡の一つとあって良いだろう。

弥生時代中期前半期の遺物も比較的多く出土しているが、県内で稲作農耕が始まる中期後半期になると、活動の痕跡は途絶えてしまう。この状況は本遺跡に限らず、西吾妻地域全体に認められる傾向であり、詳細は別稿に譲りたい。その後、本地域に集落が戻るのは約千年後の9世紀代からで、本遺跡でも平安時代の住居が数軒確認されている。

中世になると、本地域には海野一族が支配する「三原荘」が成立し、戦国時代にはその一系でもある真田氏が、甲斐武田氏の指示で本地域を掌握するようになる。本遺跡の南西には柳沢城と丸岩城があり、遺跡内では20区を中心に鍛冶場を伴う中世の館が確認されている。また、その他に中世～江戸期の墓や、天明3年の浅間山噴火に伴う泥流で埋没した島も検出されている。

以上が本遺跡の概要であるが、遺跡の内容は多岐にわたるため、今回は平成14年度までに発掘調査された縄文時代の住居のうち、18・28区で確認された中期段階の住居24軒を対象とした報告であり、資料編的な内容と捉えて頂きたい。

表2 横壁中村遺跡遺構数集計表（平成8年度～16年度）

	9区	10区	18区	19区	20区	28区	29区	30区	合計
竪穴住居	1	3	27	52	104	19	18	13	237
土坑	2	11	258	325	541	15	22	19	1193
掘立柱建物			3	2	9		1		15
埋設土器		2	23	9	24	6	1	2	67
配石遺構			42	17	28	17	53	15	172
列石遺構			7	4	5	12	4		32
集石遺構			1		4				5
柱穴列				1			1	1	3
埋没河道			1	5					6

## 第2節 基本土層（第4図）

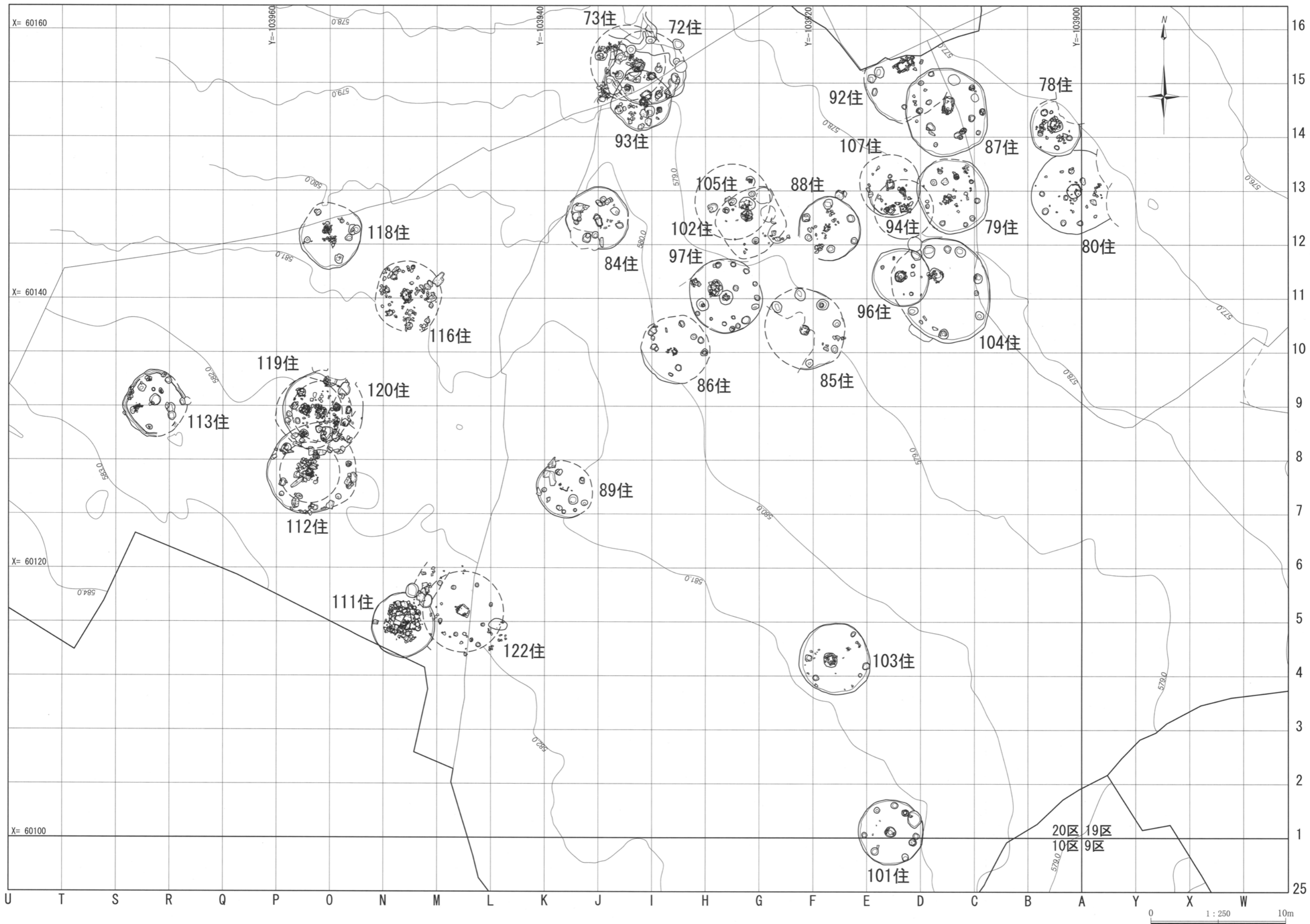
本遺跡が乗る段丘面は、岩盤の上に吾妻川が運んだ段丘礫層を基盤としており、その上に南側の岩塊を核とする山地からの崩落土と礫が繰り返し堆積して形成された、北向きに緩傾斜地に遺跡は立地している。台地上の基本土層は、図に示したⅠ～Ⅹ層ま

で確認しているが、この10層が1箇所ですべて揃う断面は今のところ認められない。また、各土層の層厚は地区によって異なっているため、敢えて記入していない。

今回の報告対象となる縄文時代中期の遺構は、土層としてはⅥ層に該当するが、第1章本文中で「地山の黄色砂質土」と呼んでいるのは、Ⅷ層に該当する。

I	Ⅰ層 表土（耕作土）
Ⅱ a	Ⅱ a層 浅間 A 泥流
Ⅱ b	Ⅱ b層 浅間 A 軽石
Ⅱ c	Ⅱ c層 浅間 A 軽石下島の耕作土
Ⅲ	Ⅲ層 淡褐色土 軟質で炭化物を含む。中世に比定される土壌で、20区1号館付近では炭化物を多量に含み、黒土化していた。
Ⅳ	Ⅳ層 灰黒褐色土 やや軟質で均質。古代に比定される土壌であるが、本遺跡では大半が混土化されて、層としてはほとんど残っていない。
Ⅴ	Ⅴ層 黄褐色土 やや軟質。縄文時代後期後半頃の土壌で、加曾利 B 式期の遺構と関連する。今のところ、山根沢周囲に認められることから、Ⅷ層ないしはローム層の2次堆積の可能性が高い。
Ⅵ	Ⅵ層 灰褐色土 締まりのある土壌で、黄色軽石や白色粒子を多く含む。縄文時代に比定される土壌で、中期から後期前半の遺構・遺物はこの土層中に含まれる。なお、下半部を中心に多量の礫（山石）を含む。
Ⅶ	Ⅶ層 西側縁辺に特有な土壌で、層位はⅧ層と同じであり、沢沿いに流れたものかもしれない。この土層の上層部には縄文時代前期前半の土器が包含され、この土層で埋没した土坑も確認されている。
Ⅷ	Ⅷ層 黄褐色粘質土 崩落したローム層の2次堆積土で、多量の礫・砂礫を含む部分が多い。本遺跡では20区の西半部でのみ確認されており、現在の山根地区集落はこの土層の高まりの上に立地していると考えられる。供給源は山根集落南側の沢上流部、つまり丸岩の北麓で、崩落時期は縄文時代早期後半頃と思われる。
Ⅸ	Ⅸ層 黒褐色粘質土 硬質で粘性が強く、黄色軽石と白色粒子を多量に含む。
Ⅹ	Ⅹ層 黄色砂礫層 吾妻川が運んだ段丘砂礫層で、本遺跡北側の崖面では15 m以上の堆積が確認できる。この下層は基盤の岩塊となる。

第4図 横壁中村遺跡基本土層



第5図 横壁中村遺跡20区住居全体図





### 第3節 縄文時代の竪穴住居

先述のとおり、ここでは20区で確認された縄文時代中期の住居30軒を対象に報告する。報告は、発掘調査時に認定した遺構名を使用しているため、調査時あるいはその後の検討で欠番になったものも多い。また、今回は中期以外の住居は扱わないため、遺構番号がとんでいる。表1に今回報告する住居の一覧を掲載したので、参照して頂きたい。

本遺跡での住居の認定は、基本的には炉の確認をもって決定した。幸い本遺跡では後期に至るまで石囲い炉が主流であったが、炉内に焼土が残っていない住居も多く、また地山のなかにも組んだような状態の礫がかなり認められるため、炉石は水洗いし、変色・劣化・剥落・亀裂・煤付着等の被熱痕跡を確認した上で決定した。そのため、たとえ完形に近い土器等が出土しても、炉が確認できない場合はグリッド扱いにした。

また、本遺跡では地山の黒褐色土を切り込んで住居が構築されており、地山と住居覆土の見分けは困難であった。そのため、大半の住居は覆土上層がグリッド扱いになっており、整理作業で接合したものはその住居に帰属させた。

なお、今回報告する地区は主に平成15・16年度の調査区であるが、一部は平成13・14年度調査区も含んでいる。この調査区は、本遺跡全体の南西部分にあたっており、山根沢西側地区に展開する中期環状集落の南側地区に相当する。東西グリッドライン10から北側はまさに環状集落南端部の住居密集地区であり、その南側は後期住居が点在する周縁部にあたる。また、この地区は後世の畑地造成等による階段状削平が著しい場所でもあり、それによって消失した遺構も多いと想定される。

以下、個別住居毎に報告するが、遺構図は想定した出入り口部を下方にして組んでいるため、方位はまちまちになっているが、ご了解頂きたい。

#### 20区72号住居

調査年度 平成13・15年度

位置 I-15グリッド

経過 現行の畑地に伴う道と石垣を取り崩しながら確認調査を実施中に、石囲い炉と貼り床の一部が確認された。炉石の上面まで後世の耕作等による攪乱が及んでおり、遺物の多くは消滅しているものと考ええる。

なお、本住居の調査は2年次にまたがっており、北西側3分の2は2001年に、残る3分の1は2003年に実施した。

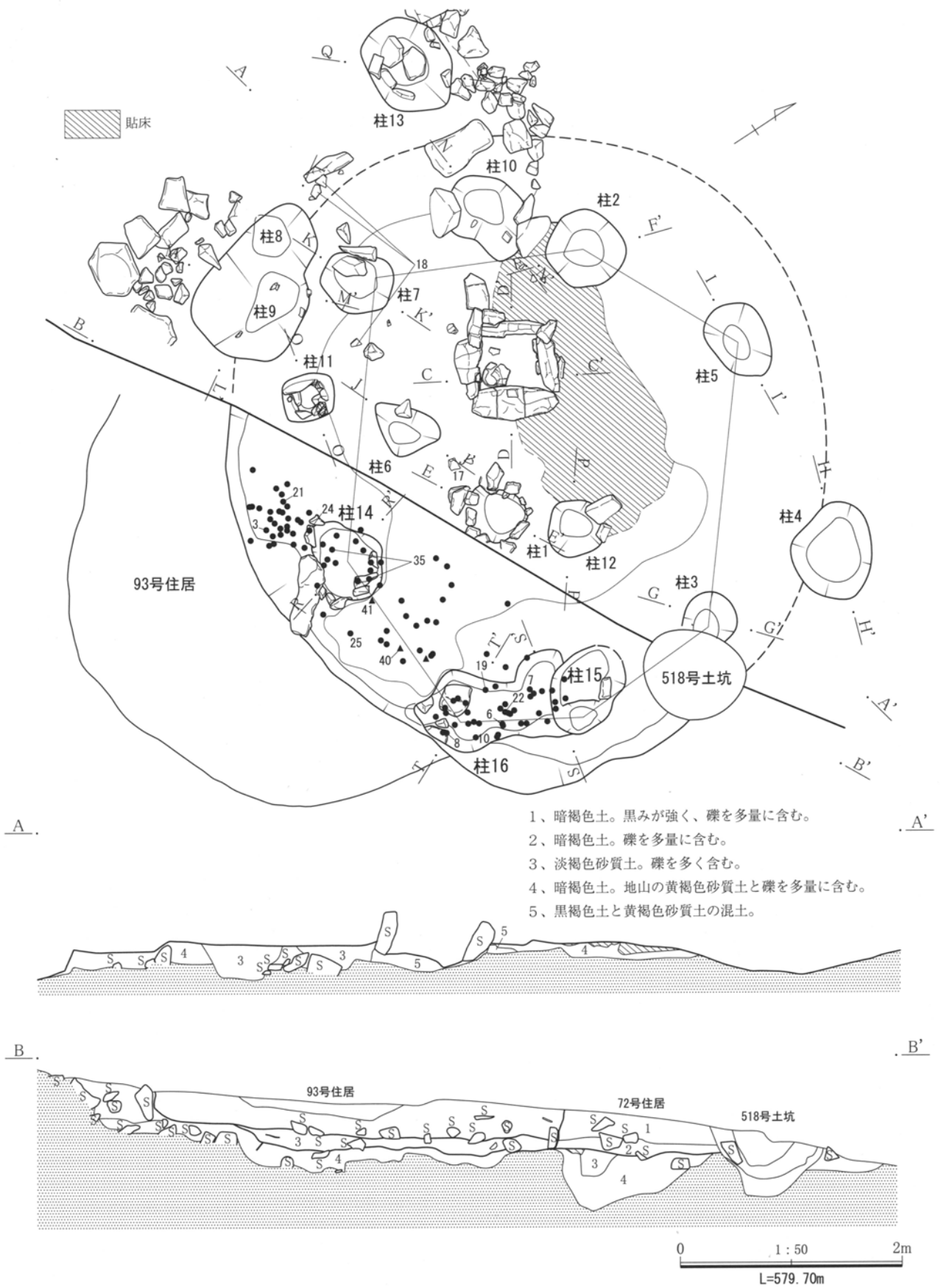
重複 北東側に重複する73号住居の炉を壊してこれを切り、南側の約半分を93号住居に切られる。また、これらの住居は西側を現在まで続く道と石垣によって壊されている。

形状 2001年の調査範囲は攪乱部分が多く、住居範囲も判然としなかったが、2003年の調査範囲でかろうじて住居の輪郭が判別できた。それと炉の位置、柱穴の配置等を勘案して、第6図のような円形の形状を推定した。

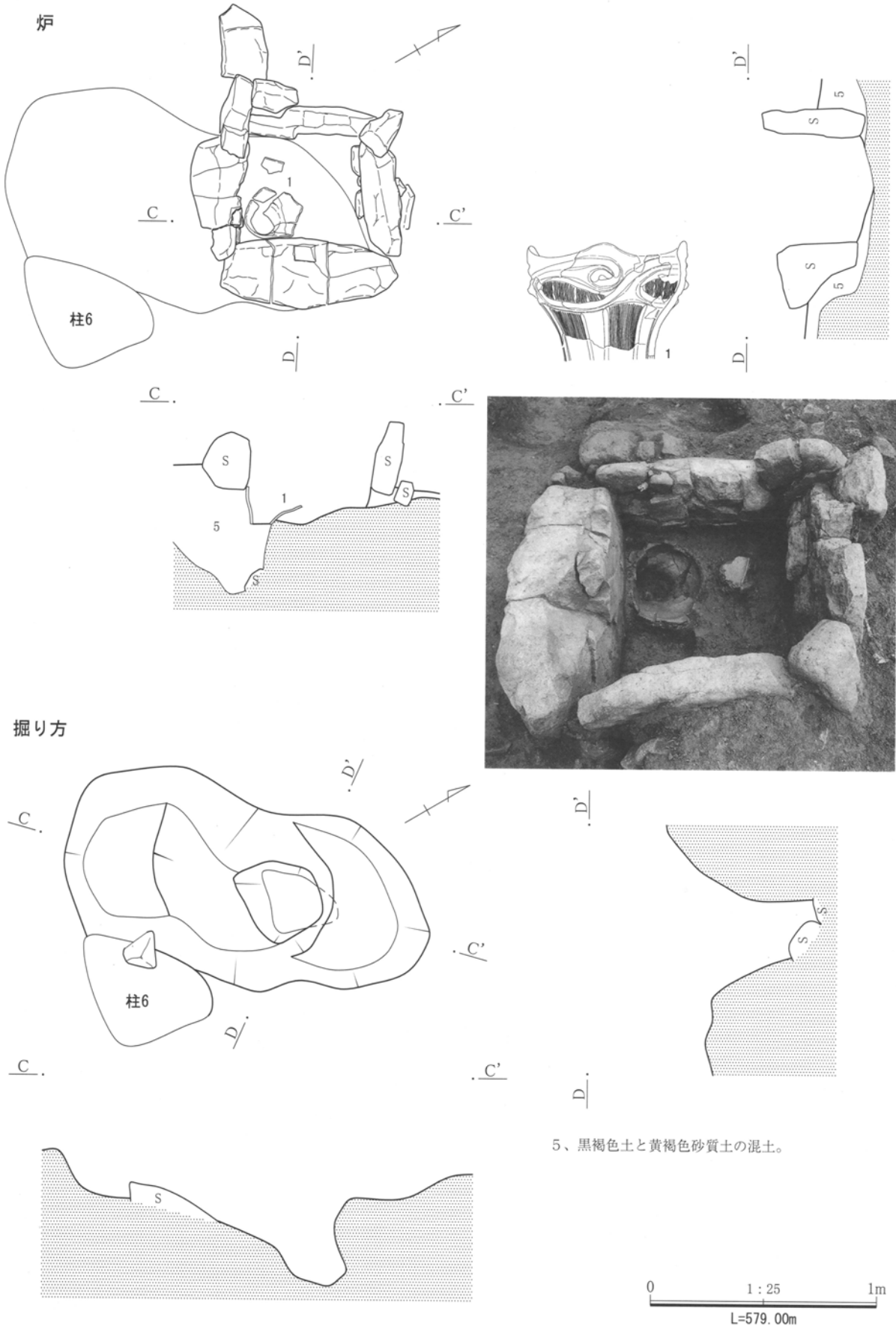
床面 炉の東側で、地山の黄色砂質土を主体とする貼り床が確認された。貼り床には焼土が多く混じり、やや硬質な平坦面が形成されていた。これとほぼ同レベルで、柱穴をつなぐ範囲にわたって硬化面が確認され、床面と判断した。

炉 大型の扁平礫4石で組んだ土器埋設方形石囲い炉で、住居中央より北西に寄った位置にある。炉石は、いずれも側縁を垂直に立てて設置しており、使用時の状況を良く留めている。南東側を出入り口に想定すると、炉は奥壁に寄せて設置していることになる。規模は一辺90cm方形で、炉石上端から使用面までの深さは40cmもある。

埋設土器は、炉内南東隅に設置されていた。使われた土器は小型の加曾利E式系深鉢(1)で、胴下半部を打ち欠き、炉の中央部に向けて大きく傾けた状態で、正位に埋設されていた。炉内に焼土はほとんど残っていないが、炉石の内側と埋設土器の口縁部には、変色・劣化・亀裂等の被熱痕跡が明瞭に認

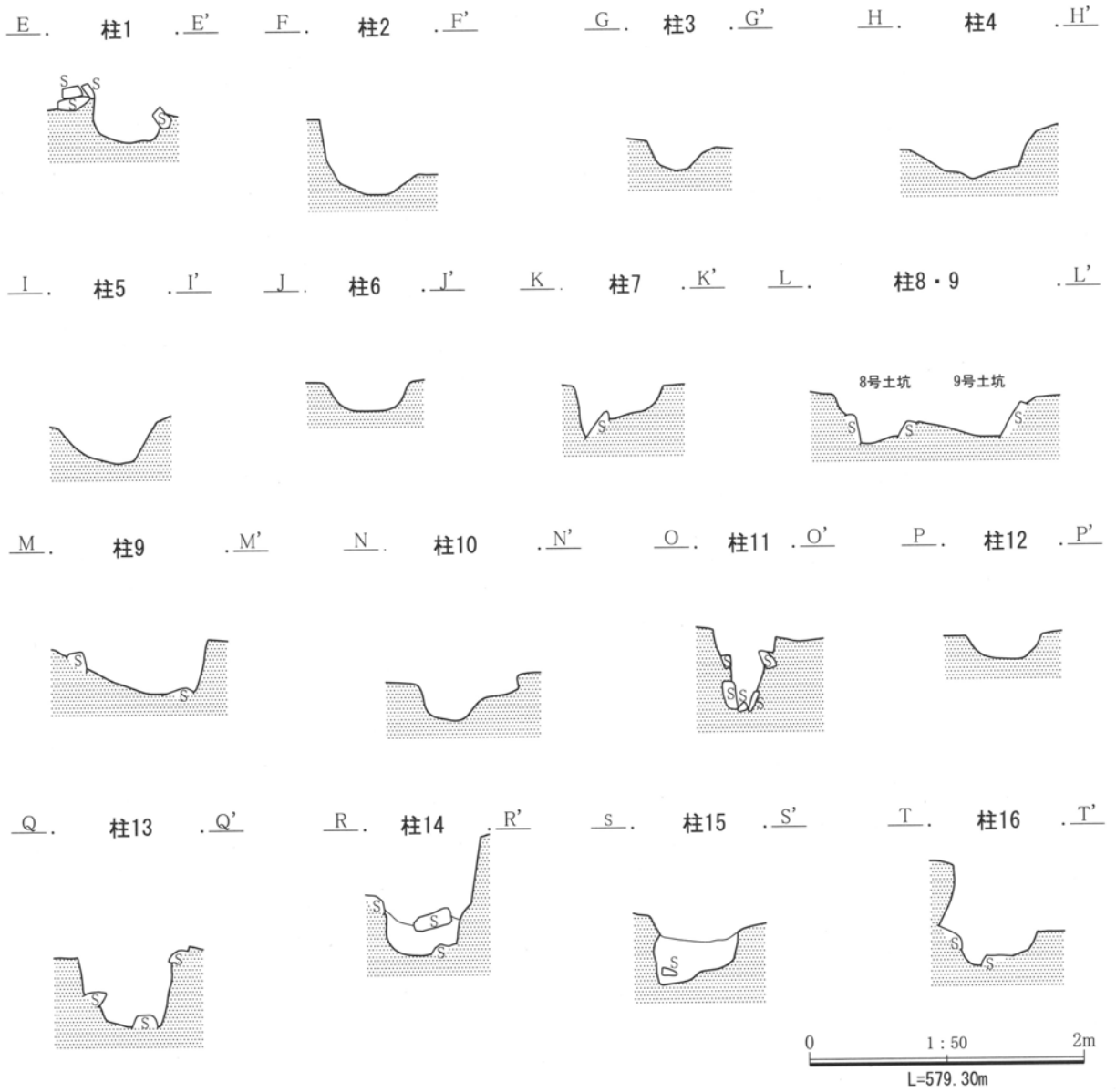


第6図 20区72号住居 (1)



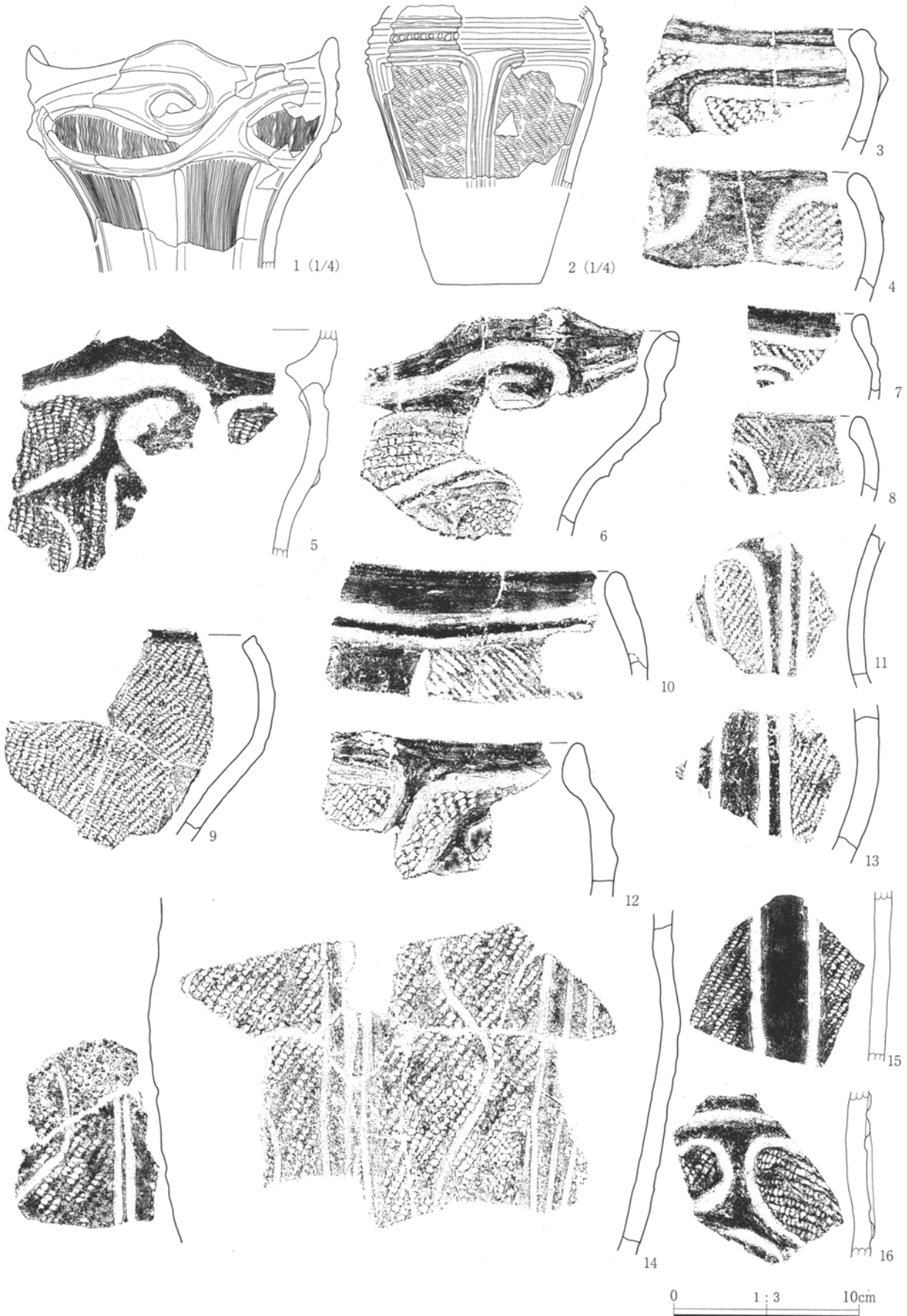
第7図 20区72号住居 (2)

第3章 発見された遺構と遺物



第8図 20区72・73号住居柱穴

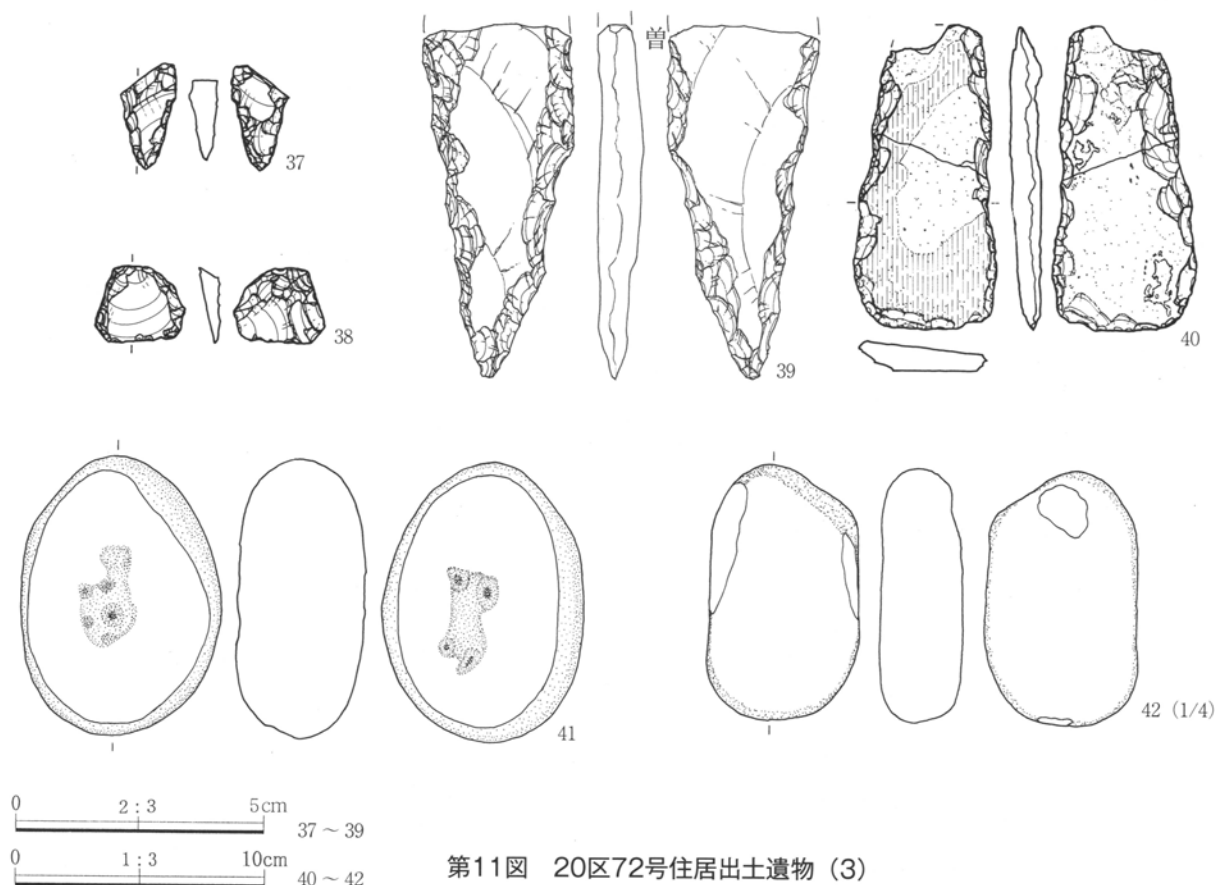
第3節 縄文時代の竪穴住居



第9図 20区72号住居出土遺物 (1)



第10図 20区72号住居出土遺物(2)



第11図 20区72号住居出土遺物 (3)

められた。

**柱 穴** 本住居に伴う調査で合計16本の柱穴が確認されたが、重複する住居や炉の位置等を検討した結果、第6図に示した7本の柱穴を当住居に伴うものと判断した。

規模（長辺×短辺×深さ）は、柱1：54×47×32、柱2：70×69×55、柱3：48×－×24、柱4：85×75×34、柱5：73×52×30、柱6：64×44×20、柱7：64×56×37、柱8：63×－×35、柱9：97×－×39、柱10：83×66×32、柱11：73×－×58、柱12：53×52×18、柱13：93×72×57、柱14：78×59×85、柱15：76×－×51、柱16：75×－×72である。

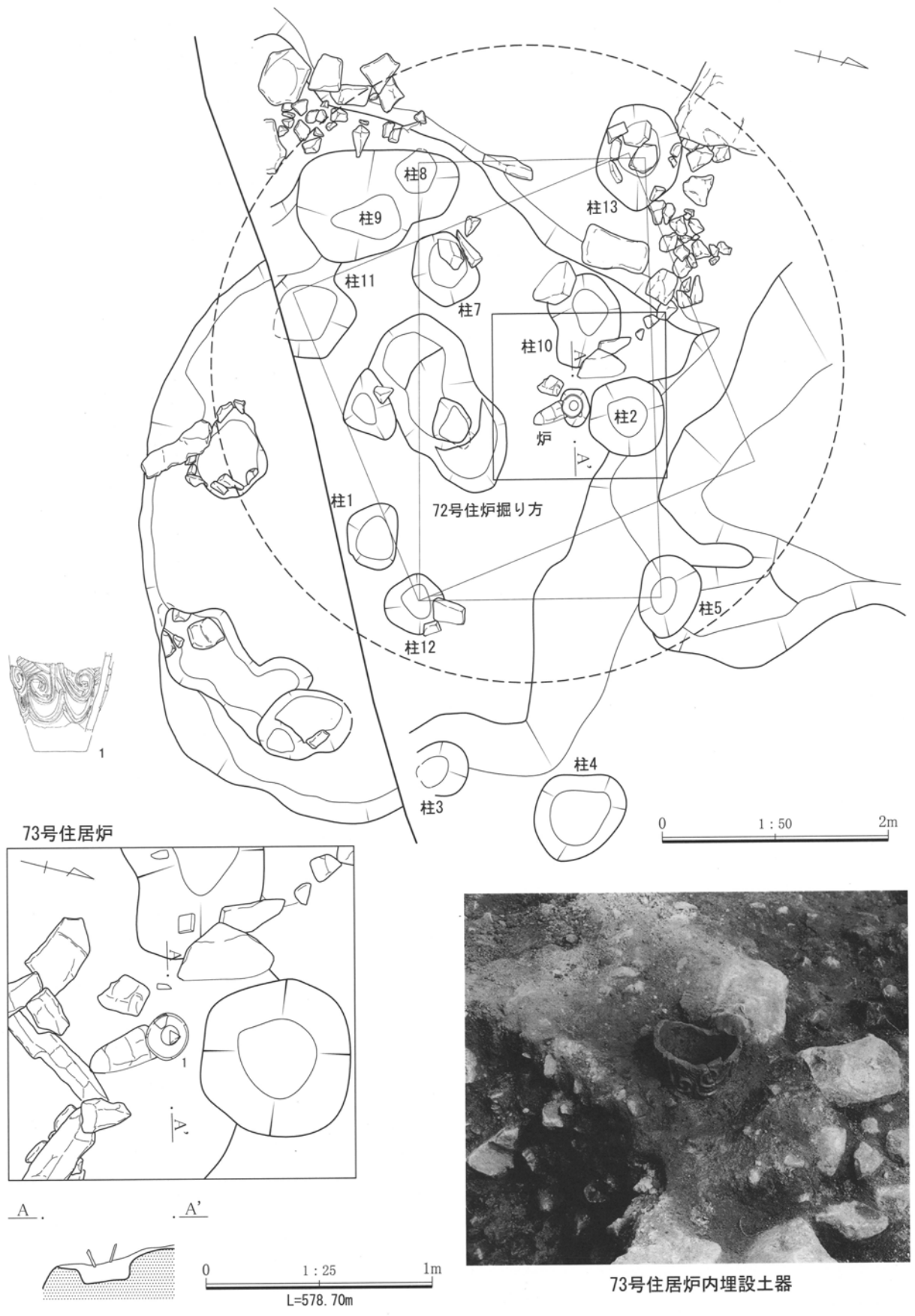
**遺 物** 床面付近から多量の礫と土器・石器が混在した状態で出土した。土器は総数925点が出土しており、主な土器は唐草文系新段階が183点、加曾利E3式が157点であり、その他に阿玉台式が11点、勝坂式が29点、焼町土器が10点、加曾利E1式が7点、加曾利E2式が18点、曾利式古段階が6点、加

利E4式が2点、後期称名寺式が27点、堀之内式が3点、その他後期土器が12点、晚期土器が4点がある。このうち、1は炉内埋設土器、6・8・10・19・22は柱16からの出土、台形土器35は柱14からの出土である。

石器は石鏃1点、石鏃未製品1点、削器2点、加工痕ある剥片5点、尖頭器1点、打製石斧4点、磨石5点のほかに、石核3点（黒曜石3点）、剥片44点（黒曜石30点）、碎片17点（黒曜石16点）が出土したが、土器の出土量に較べて石器は意外に少なかった。

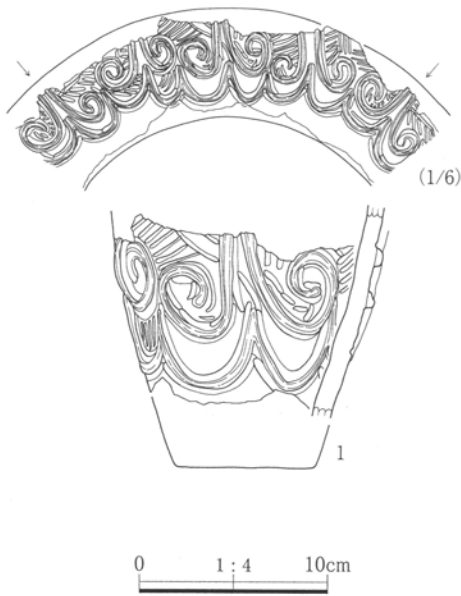
なお、本住居出土土器の主体を占める加曾利E3期の土器は、73号住居が重複する2001年度調査範囲では中段階が主体となるが、93号住居が重複する2003年度調査範囲では新段階が目立っており、重複する住居の遺物も含んでいる可能性がある。

**時 期** 炉内埋設土器および出土土器の大半が加曾利E3期中段階に比定されることから、当該期の所産と考える。



第12図 20区73号住居





第13図 20区73号住居出土遺物

#### 20区73号住居

調査年度 平成13・15年度

位置 I-15グリッド

経過 72号住居の床面を剥がし、地山付近まで掘削した段階で、72号住居炉の北側1mのところ、炉石の一部と炉内埋設土器が確認された。確認当初は、72号住居の建て替え以前の旧炉ではないかと想定したが、掘り方調査でこの炉とセットをなすと見られる一群の柱穴も確認されたことから、独立した住居と認定した。

なお、73号住居の名称は調査時に欠番となったもので、今回の整理段階で新たに振り替えたことを明記しておく。

重複 南東側を大きく72号住居と重複し、これに切られる。

形状 想定の域をでないが、炉を中心とする柱穴の配置から、直径5.5m前後の隅丸方形の住居が想定できる。

床面 炉埋設土器が原位置を保持していることから、72号住居の床面と同等か、やや高いレベルにあったことが想定される。

炉 炉内埋設土器以外に残されたものはないが、周囲に被熱痕のある炉石と思われる礫が認めら

れることから、本来は土器埋設石囲い炉であったことが想定される。埋設土器は、口縁部と底部を打ち欠いた小型の唐草文系深鉢(1)で、外面の上方と内面が被熱で著しく劣化しており、炉内に埋設されて使用されたことは間違いない。

柱穴 72号住居の掘り方調査で多数の柱穴が確認されたが、そのうち1・5・8・9・11・12・13の7本が当住居に該当する可能性が高いと想定した。その場合、柱穴5は72号住居と、柱穴11は93号住居と共用することになる。

炉は必ずしも中心に位置するわけではないが、試しに炉埋設土器を中心に半径2.3mの円を描くと、いずれの柱穴もほぼ接する位置にある。このうち、柱穴5・1・9・13はほぼ等距離にあり、北側にもう1本を想定すると、5本柱の主柱を想定することもできる。住居北側は後世の攪乱が著しく、柱穴は確認できなかったが、72号住居とは異なる炉を中心とする配置が想定できる。

規模(長辺×短辺×深さ)は、柱5:73×52×30、柱8:63×-×35、柱11:73×-×58、柱12:53×52×18、柱13:93×72×57である。

遺物 本住居に伴う遺物は、炉に埋設されていた土器(1)が唯一である。

時期 炉内埋設土器は加曾利E3式中段階に比定されることから、当該期の所産と考える。

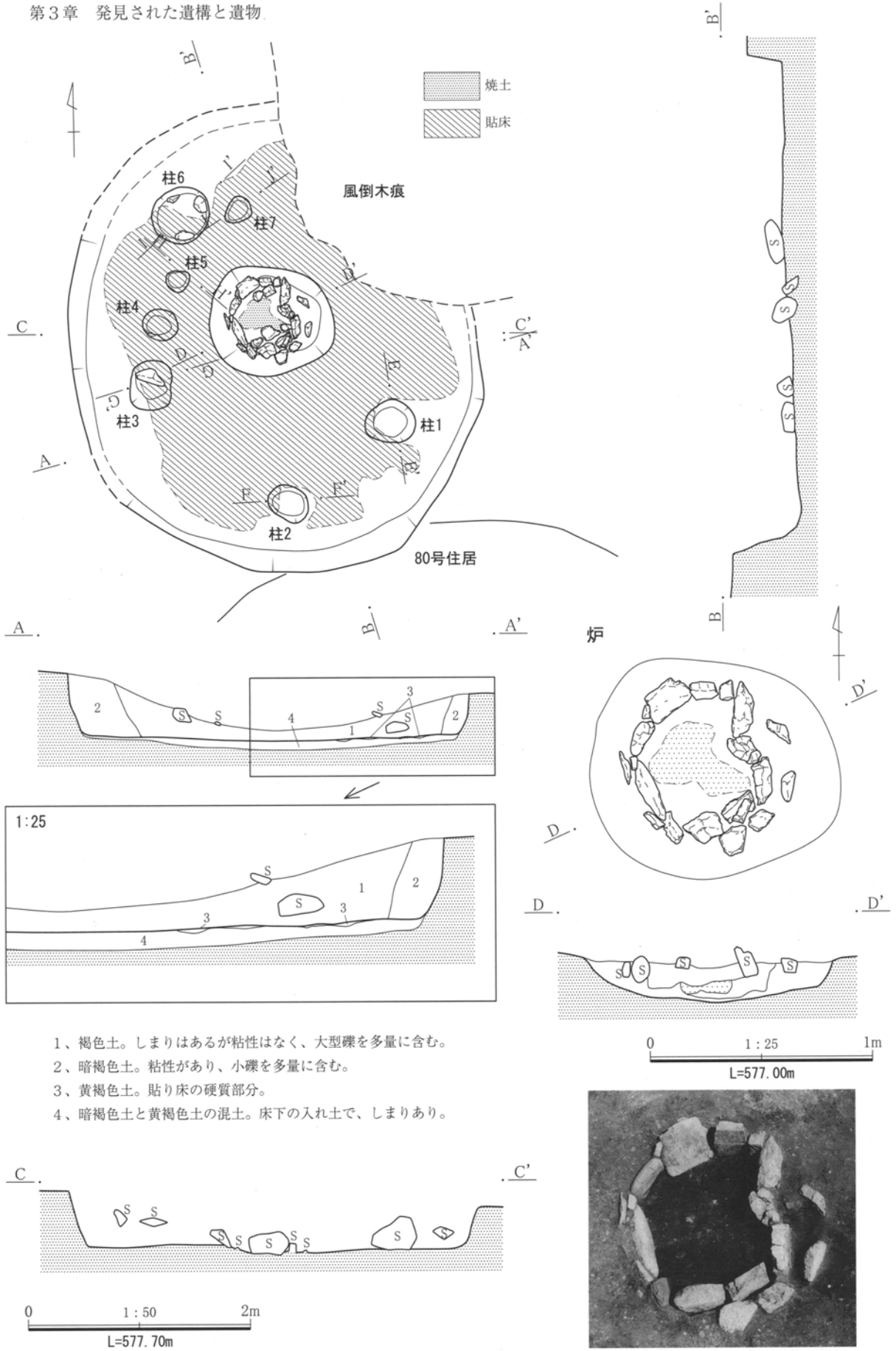
#### 20区78号住居

調査年度 平成14・15年度

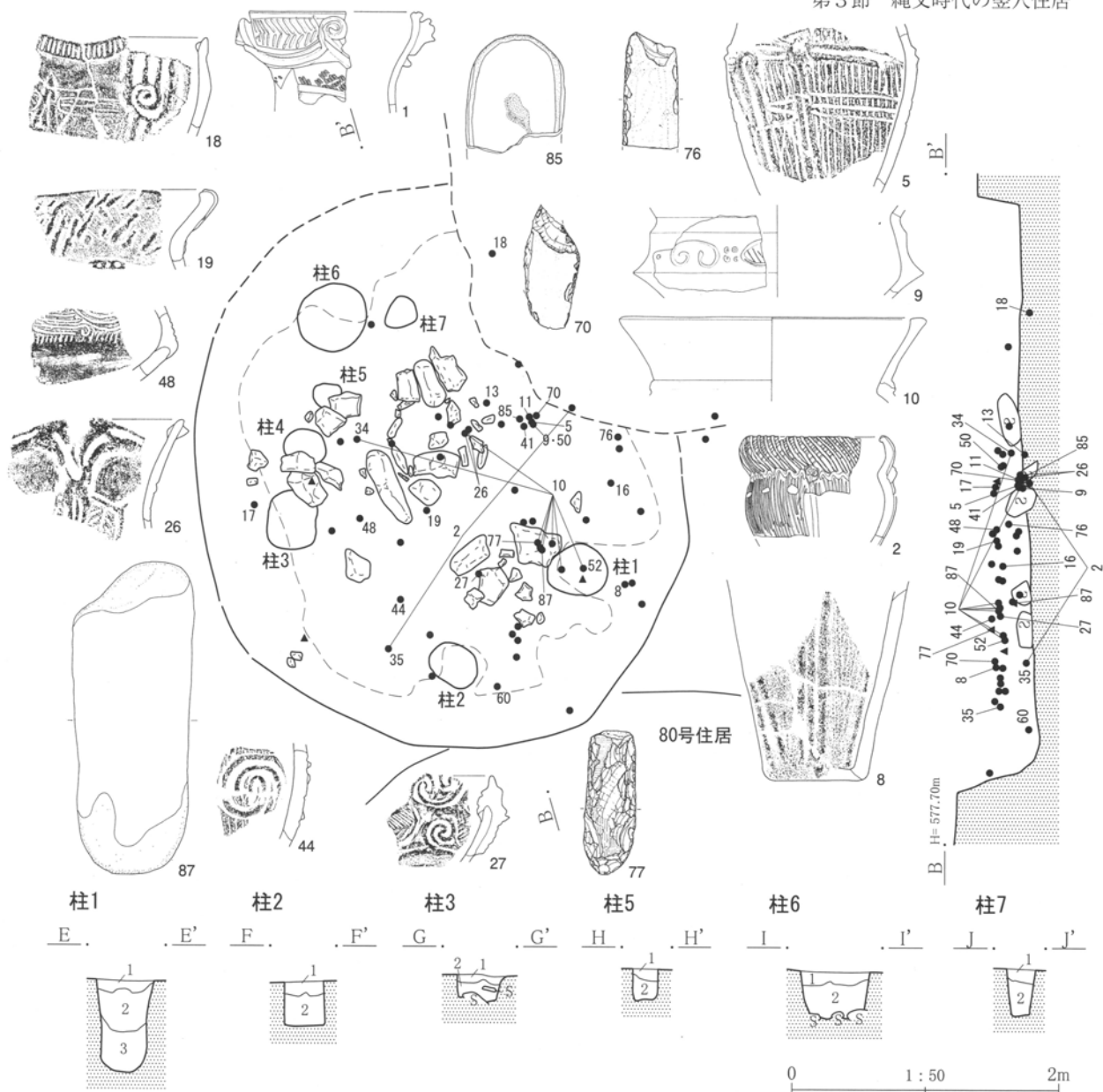
位置 A-14グリッド

経過 表土掘削後の遺構確認作業で、土器片を伴って大量の礫がぎっしり詰まった状態で確認された。礫は凹地状に堆積した埋設土の上面をぎっしり覆うように堆積しており、自然の風雨で集積した結果とは思えない。

重複 北東部で287号土坑、南側で517号土坑及び80号住居とそれぞれ重複し、両土坑を切り、80号住居に切られる。なお、北東部を287号土坑と重なる風倒木痕によって壊されている。



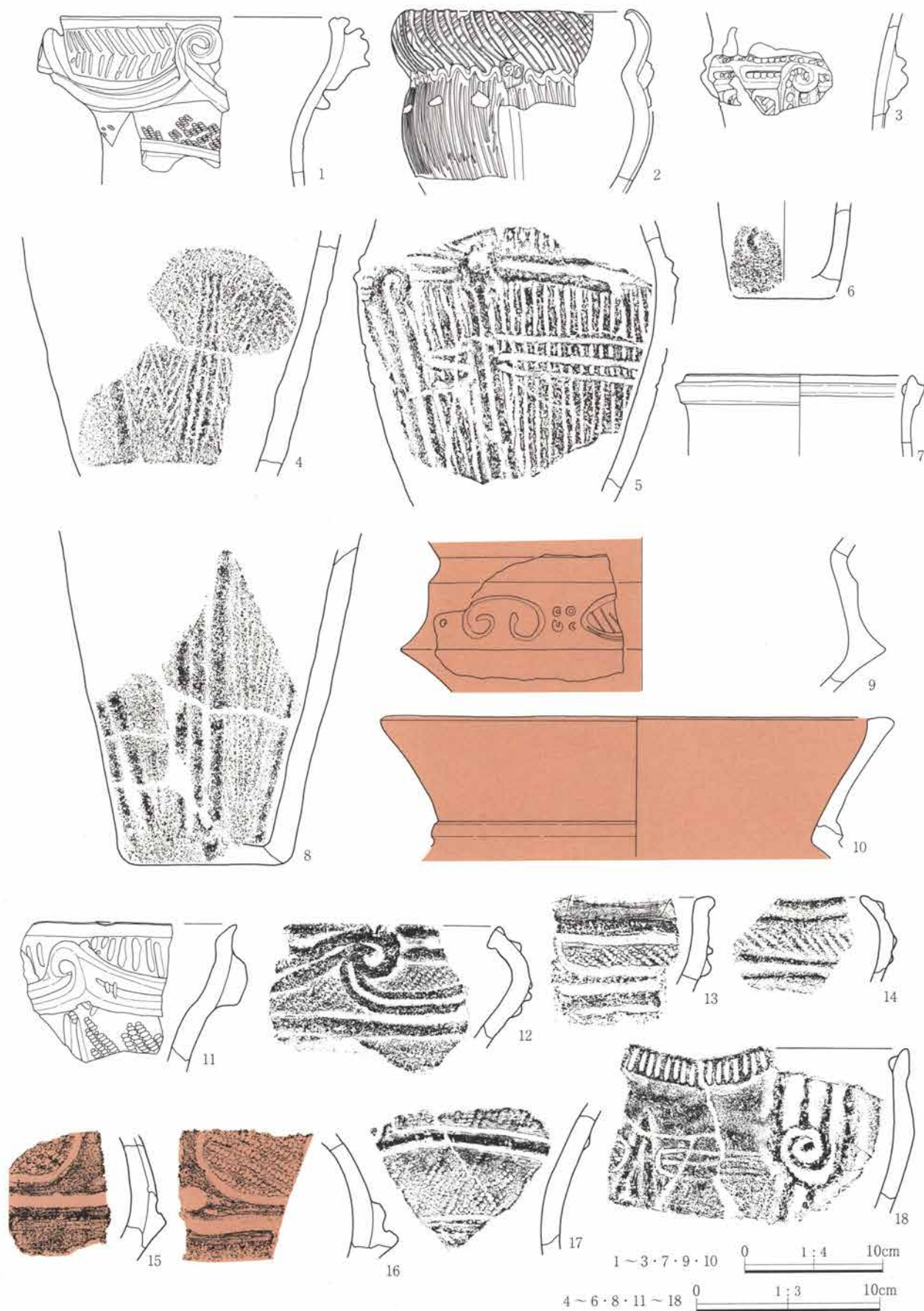
第14図 20区78号住居 (1)



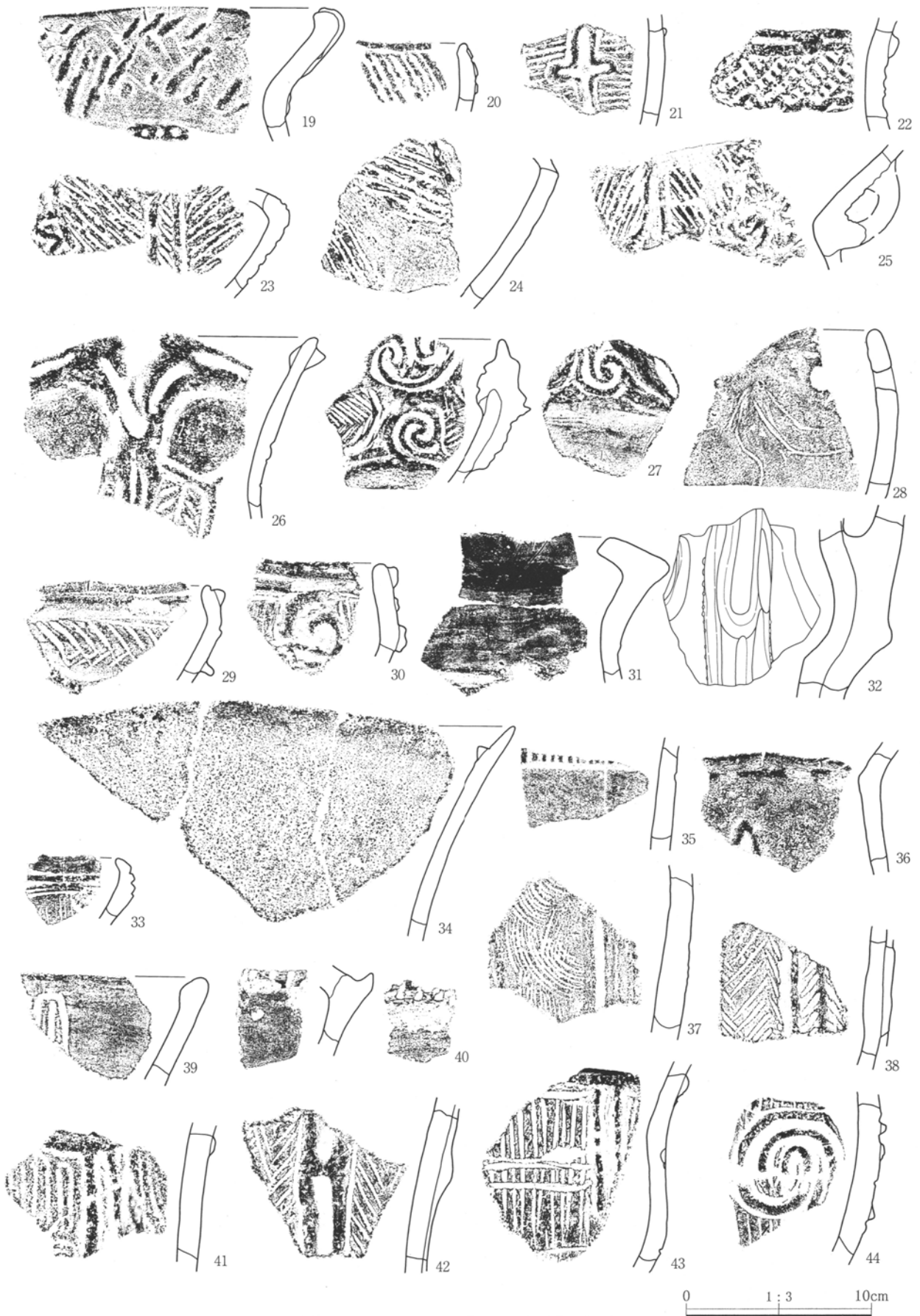
- 1、褐色土。しまりあり。
- 2、黒褐色土。粘性あり。
- 3、黒褐色土。地山土を含む。

第15図 20区78号住居 (2)

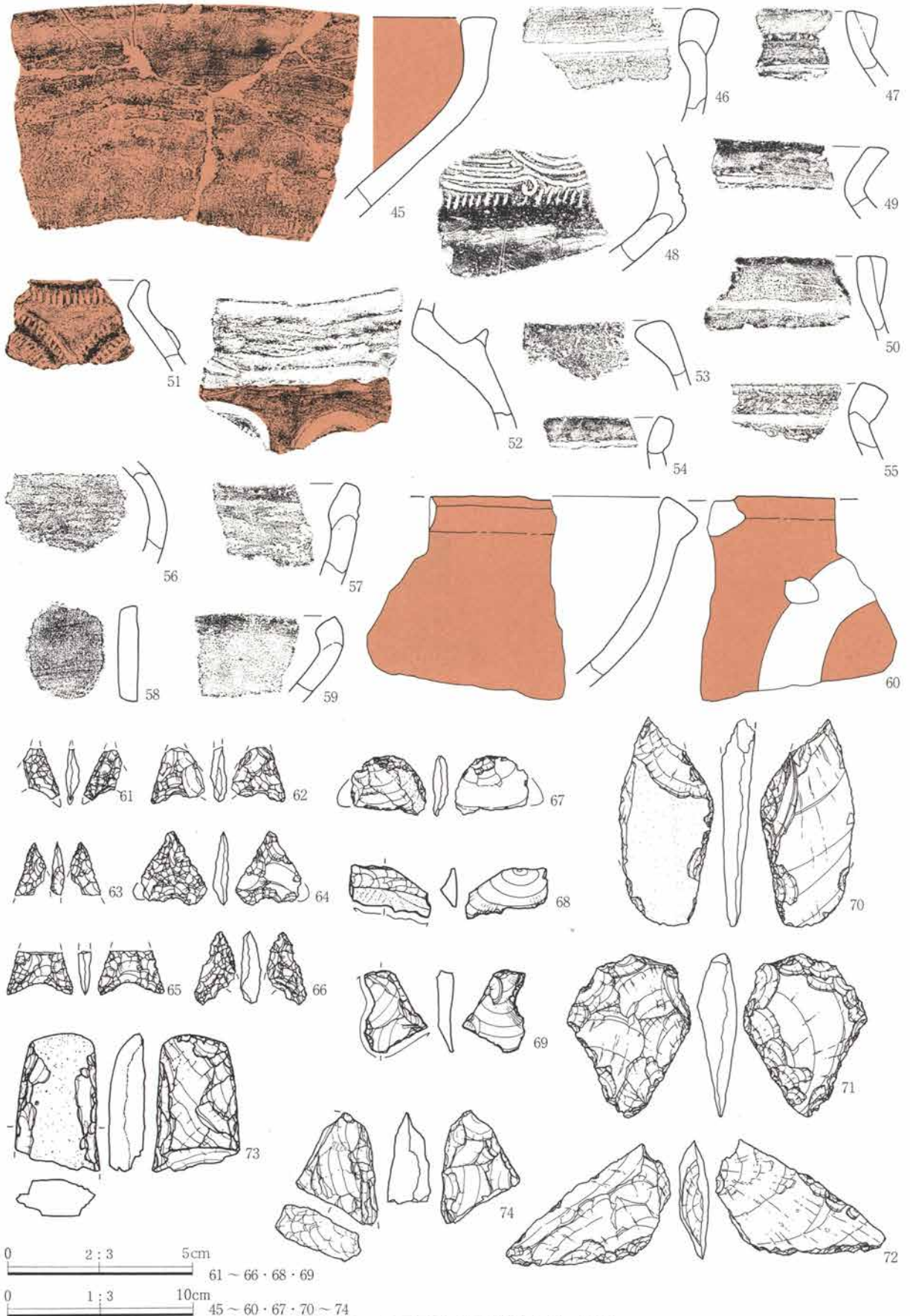
第3章 発見された遺構と遺物



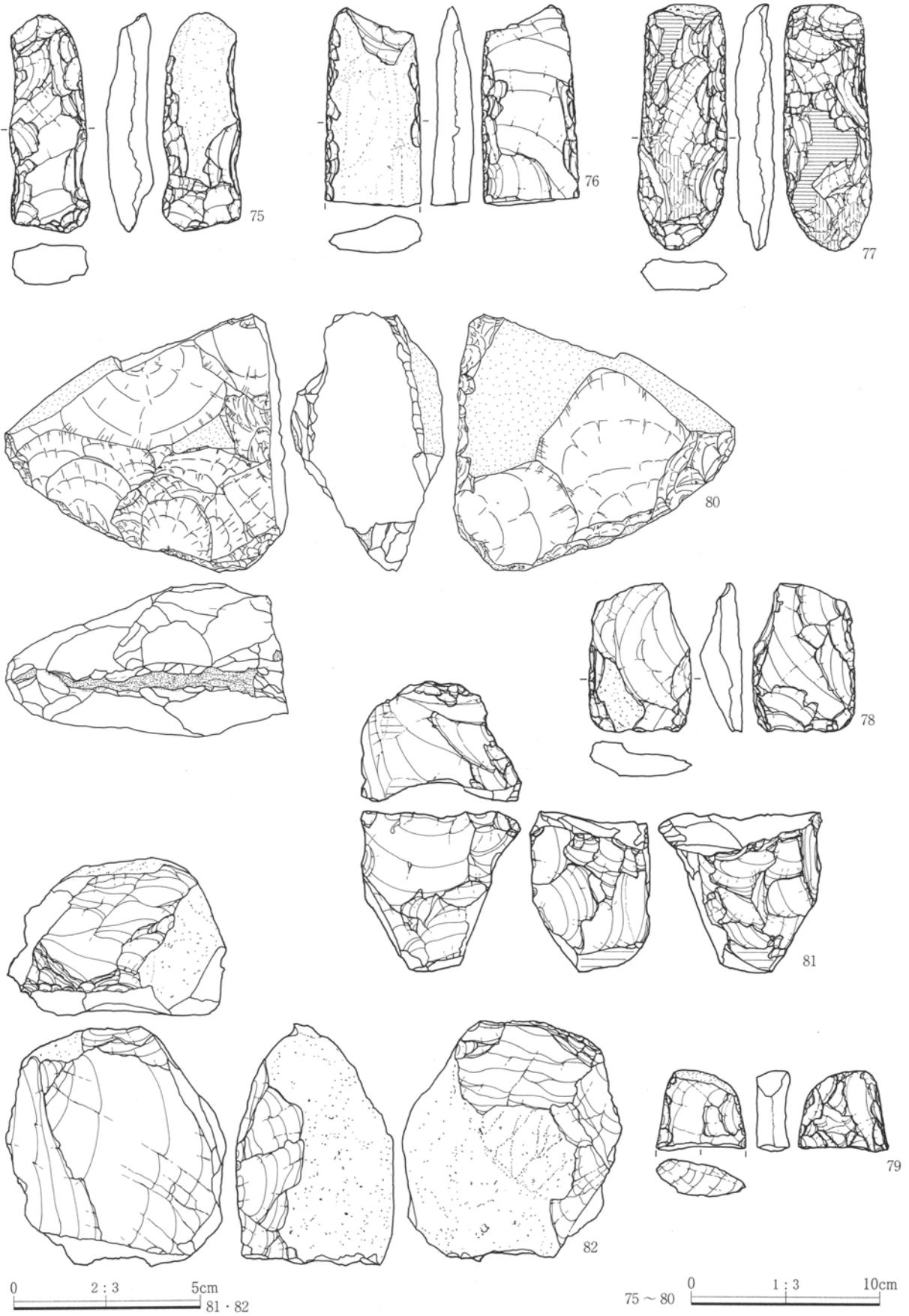
第16図 20区78号住居出土遺物(1)



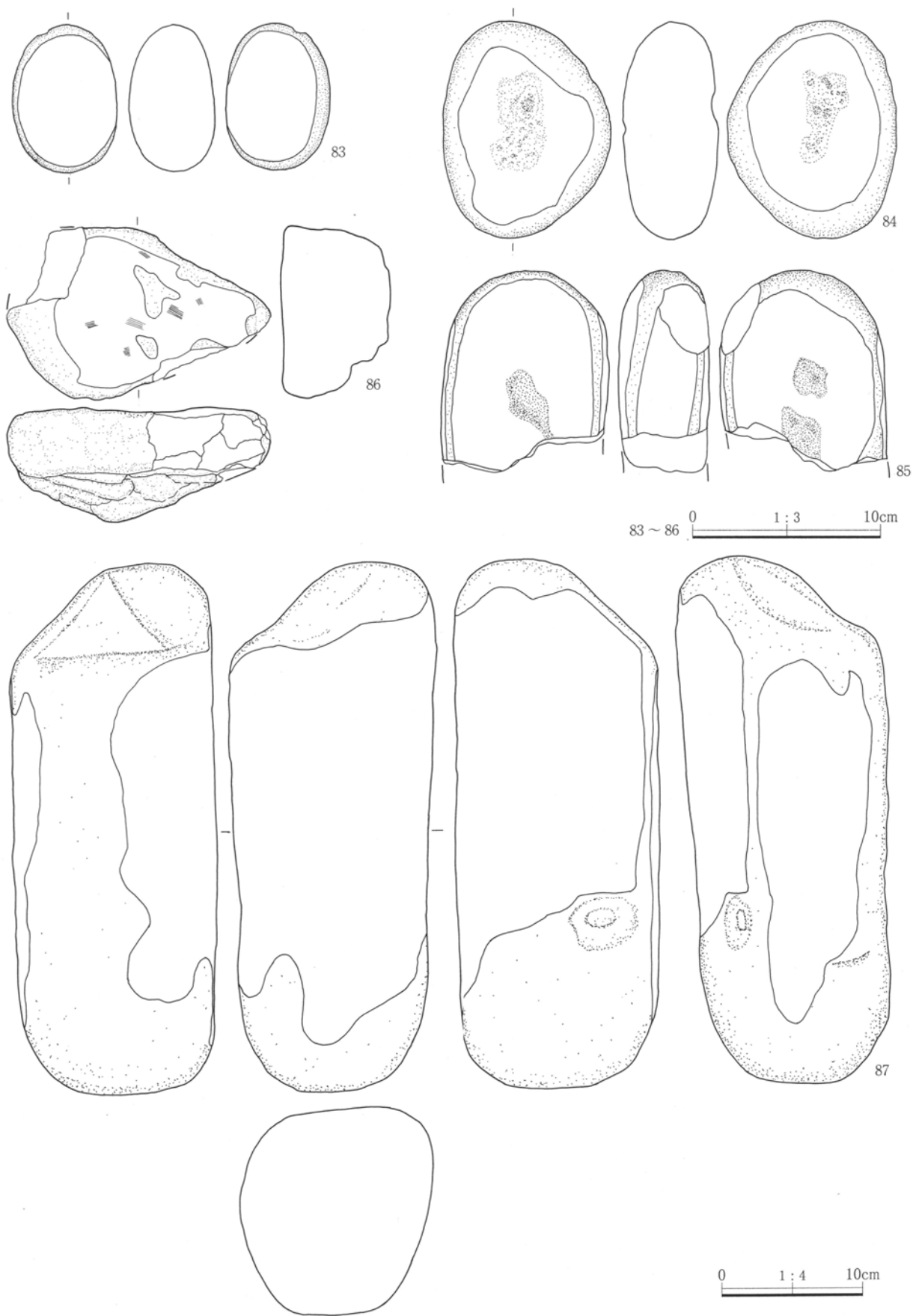
第17図 20区78号住居出土遺物(2)



第18図 20区78号住居出土遺物(3)



第19図 20区78号住居出土遺物(4)



第20図 20区78号住居出土遺物(5)



**形状** 南北方向にやや長い楕円形を呈し、規模は長辺4.3m、短辺3.67m、深さは山側で57cmである。覆土上面に集積した礫のため、本遺跡ではいち早く確認できた希な事例であるが、床面が地山黄色砂質土まで達していないため、北側では壁面の確定が難しかった。壁面は全周にわたってほぼ垂直に立ち上がり、生活時に近い形状を保っていると思われる。

**床面** 掘り方に黄色ローム質土混じりの土を10cmほどの厚さで敷きならし、ほぼ水平な貼り床を施している。貼り床はほぼ全面にわたって硬化しているが、炉の東側に黄色ローム質土が多く使われており、この場所が出入り口部に該当する可能性が高い。

**炉** 小振りな板状礫や扁平円礫の側縁を立てて、直径80cmほどの円形状に並べた石囲い炉で、住居のほぼ中央に設置されている。本遺跡では数少ない事例であるが、南側を一部重複する80号住居でも近似した炉が使われており、その関係が興味深い。炉内には明瞭な焼土が残り、炉石も被熱痕跡を留めたものが多い。大型礫の投入で潰れた部分も多少あるが、使用時の状況を良く留めている。

**柱穴** 7本が確認されたが、主柱は規模の大きな4本が該当するであろう。その配置から想定すると、北東部を壊す風倒木痕にもう2本の柱穴があったものと見られ、本来は6本柱であったと思われる。

規模(長辺×短辺×深さ)は、柱1：46×40×70、柱2：38×29×32、柱3：44×37×20、柱4：32×28×16、柱5：21×21×24、柱6：53×49×35、柱7：27×22×36である。

**遺物** 覆土上層の礫にも少量混じっていたが、その直下からの出土が目立った。土器は総数1,028点が出土しており、主な土器は唐草文系古段階が203点、曽利式古段階が89点、勝坂3式が44点、加曾利E1式が27点、加曾利E2式が26点などがある。その他に、前期関山式1点、中期五領ヶ台式12点、阿玉台式20点などが認められた。図の2・9・13・26は床面からの出土である。また、浅鉢60は内面に赤

色塗彩で文様が描かれている。

石器は石鏃6点、削器4点、使用痕ある剥片2点、打製石斧19点、礫器1点、磨石3点、砥石2点のほかに、石核4点、剥片139点(黒曜石86点、珪質変質岩類20点)、碎片80点(黒曜石72点)が認められた。なかでも打製石斧19点は今回報告の住居では最多であり、石鏃も含めて打製類型の出土が目につく。また、砥石が2点出土しているが、87は大型のいわゆる「置砥」で、よく使い込んである。磨製石斧あるいは石棒の研磨用と思われる、本遺跡内でも製作・調整・再加工を行っていたものと考えられる。

**時期** 出土土器は加曾利E2式新段階を主体としており、本住居は当該期に比定されよう。

### 20区79号住居

**調査年度** 平成14・15年度

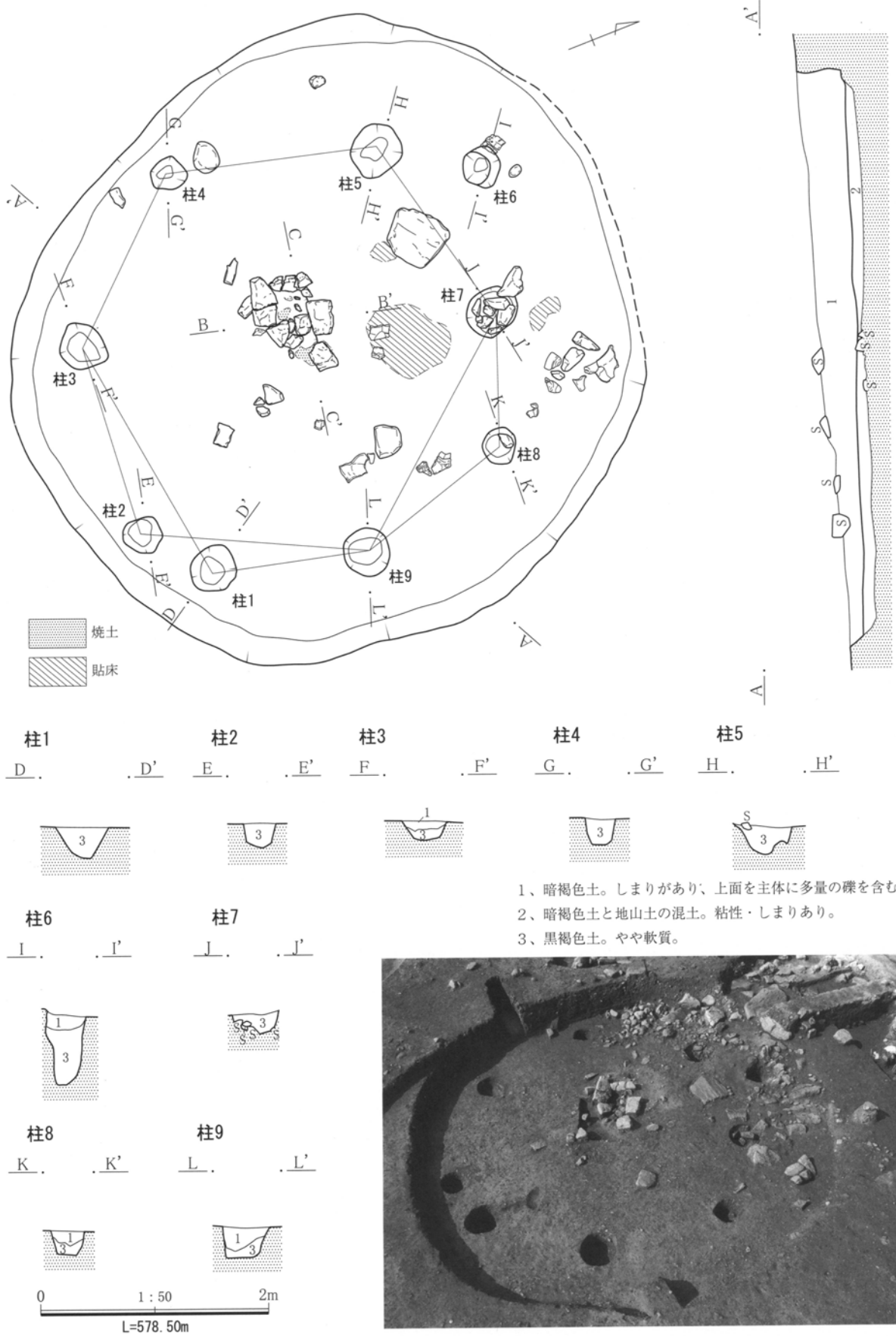
**位置** C-12グリッド

**経過** 表土掘削後の遺構確認作業で、土器片を伴う礫の集積が確認され、住居を想定した。覆土上層の礫は小振りなものが主体で、山側にあたる住居南西部から住居中央部にかけて、床面付近までぎっしりと詰まっていた。床面付近の礫は大型なものが多く、住居周縁に分布する傾向が認められた。

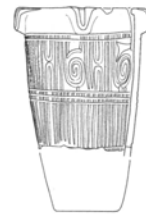
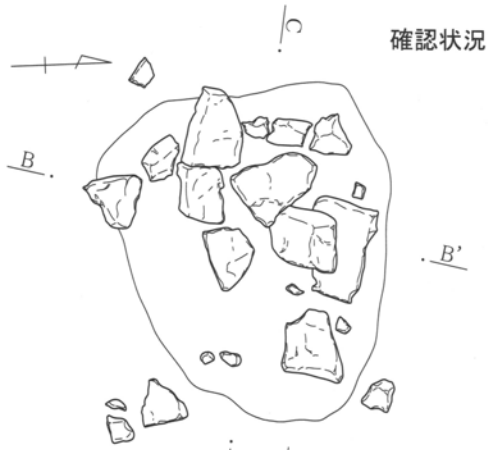
**重複** 明瞭な重複関係はないが、北側の87号住居、西側の94号・107号住居、南側の104号住居などが1m以内に近接する。

**形状** 南北方向にやや長い楕円形で、規模は長軸方向5.70m、短軸方向5.13m、確認面からの深さは山側で68cmである。壁面は、ほぼ垂直に立ち上がるものと想定したが、地山と覆土の見分けが難しく、明瞭な壁を検出するには至っていない。なお、地山礫が高い北西側の壁は、やや掘りすぎているものと判断される。

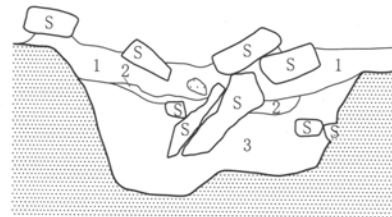
**床面** 地山礫が高い北西側の一部は地山まで切り込んでいるが、大半は黒褐色土中に床面がある。床は地山の傾斜に合わせてやや傾斜しながらもほぼ平坦に構築しているが、北西側では地山に大型の礫が多数含まれており、一部は床面に表れていたかもし



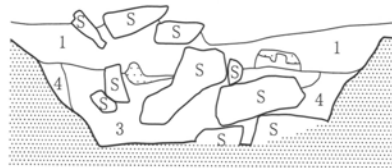
第21図 20区79号住居 (1)



B. 1 (炉内出土) B'



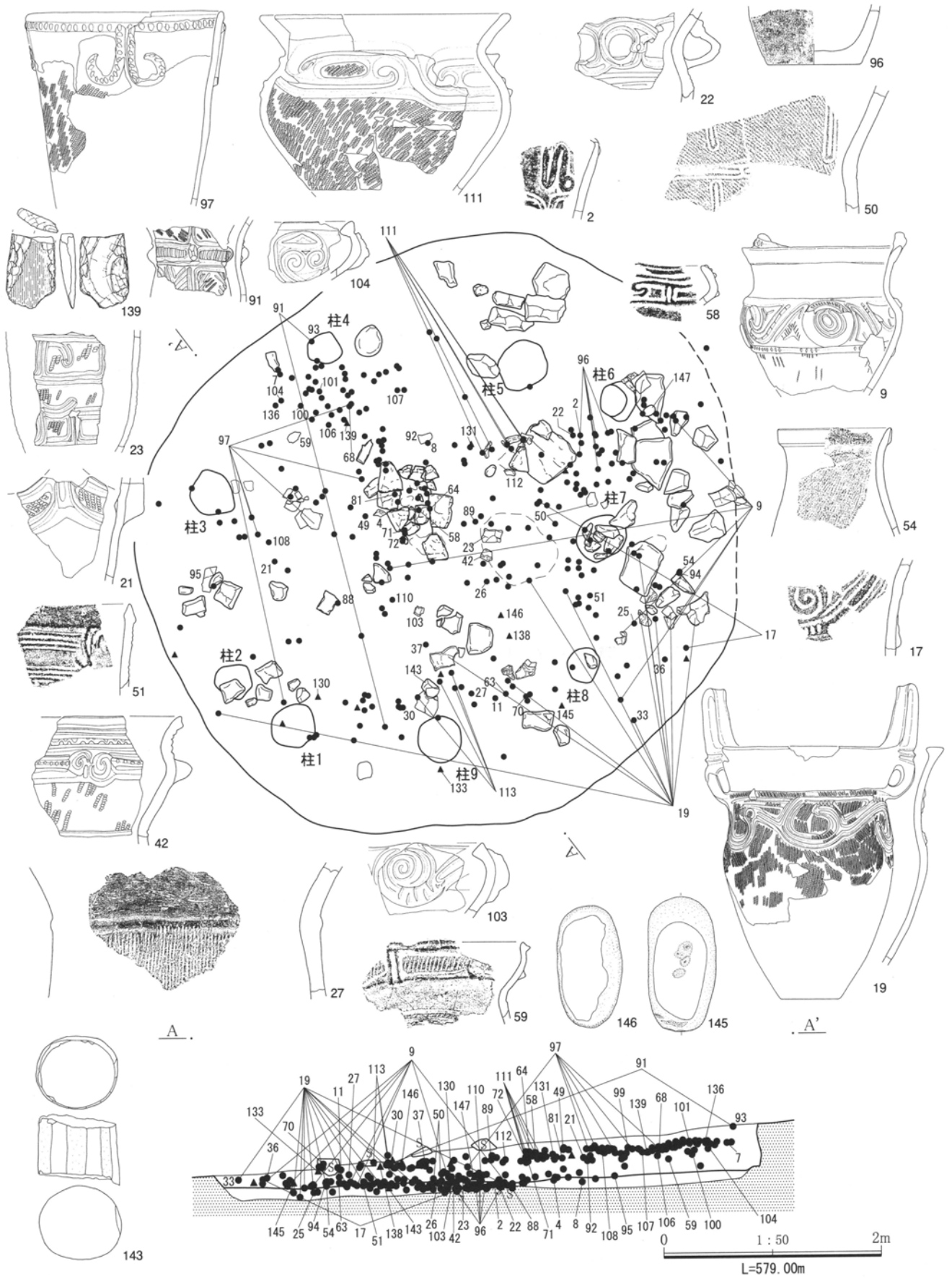
C. C'



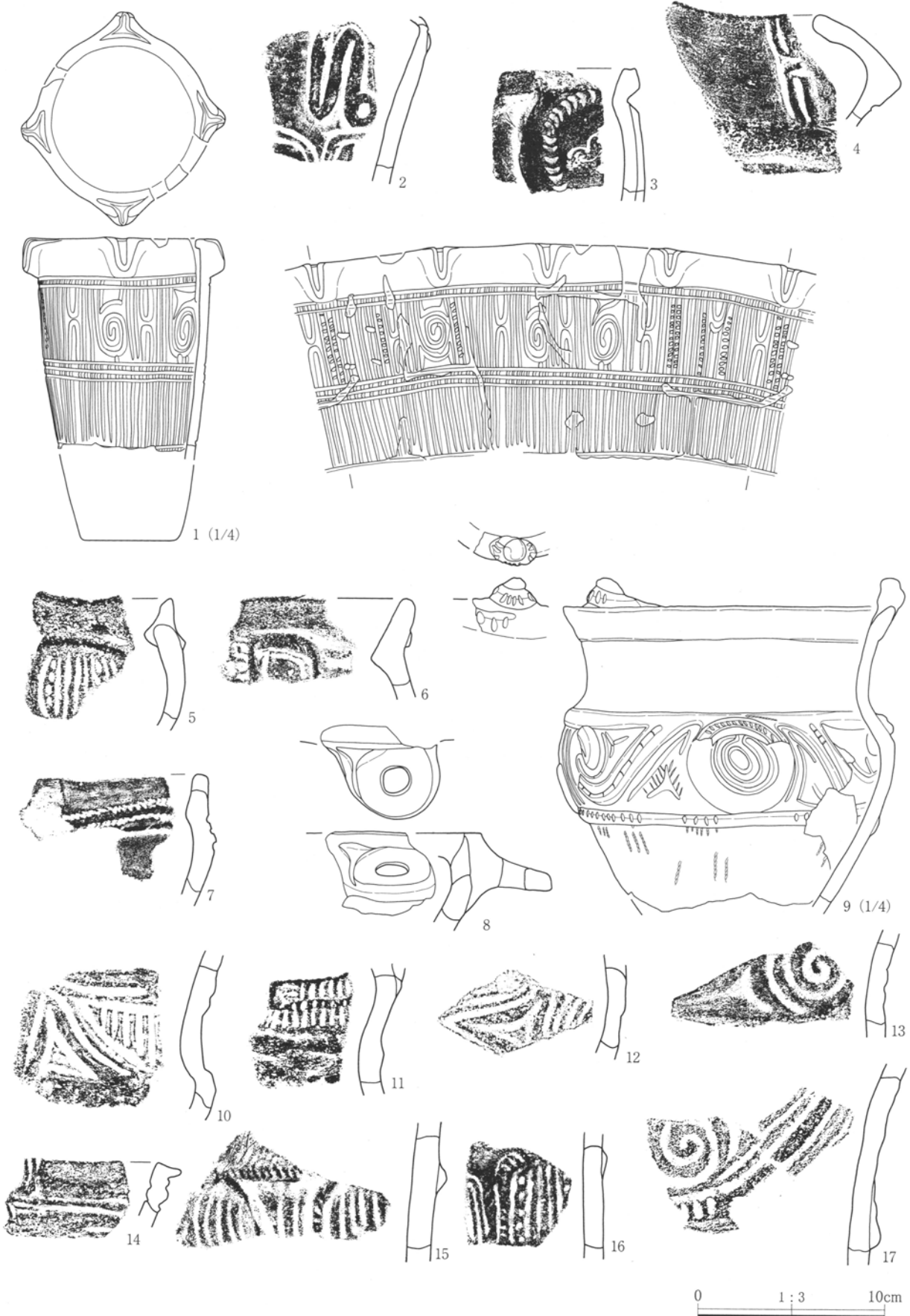
焼土 0 1:25 1m  
L=578.00m

- 1、暗褐色土。しまりがあり。焼土を少量含む。
- 2、暗褐色土。1より黒みが強く、焼土・炭化物を含む。
- 3、暗褐色土。やや軟質。

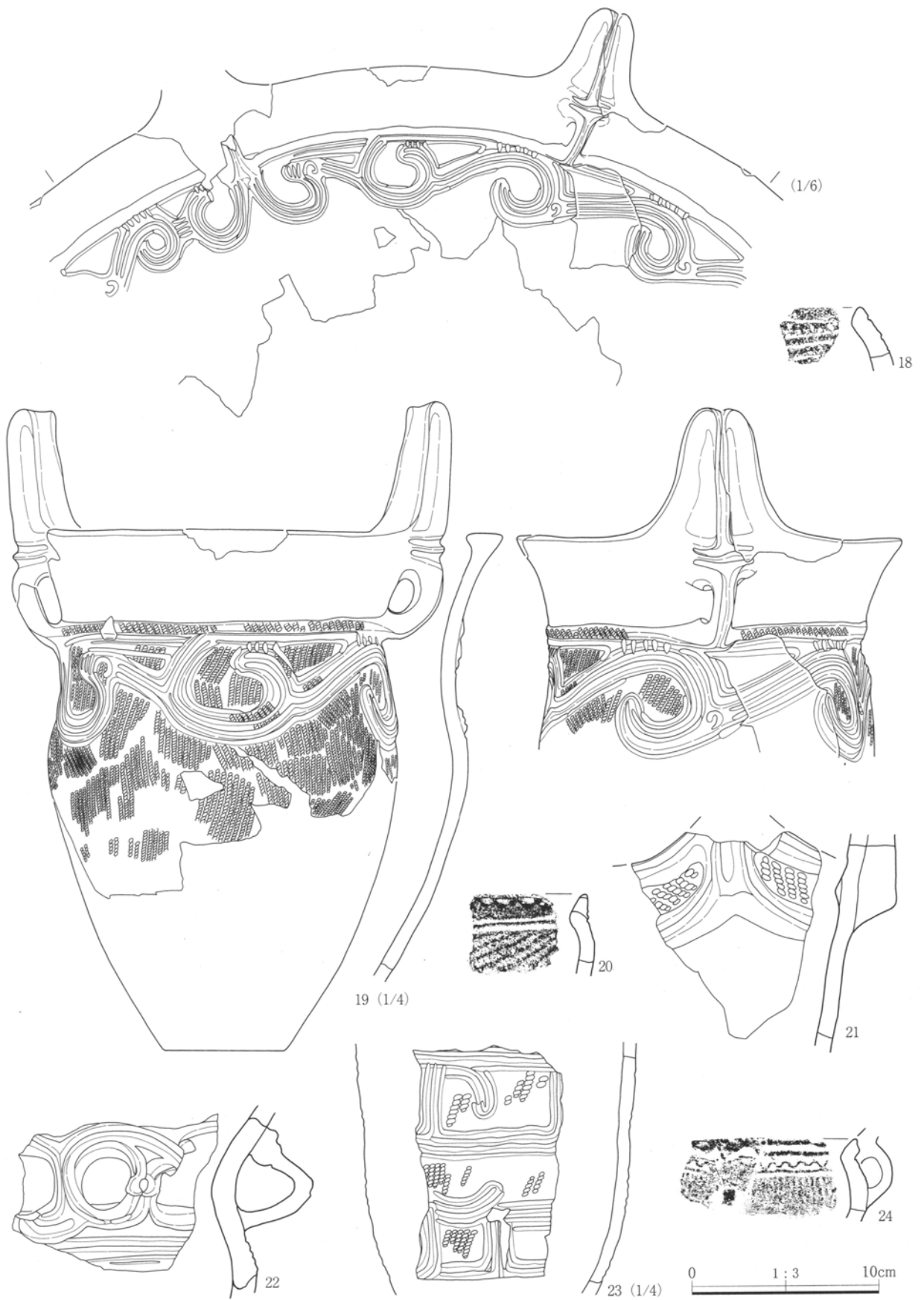
第22図 20区79号住居(2) 炉



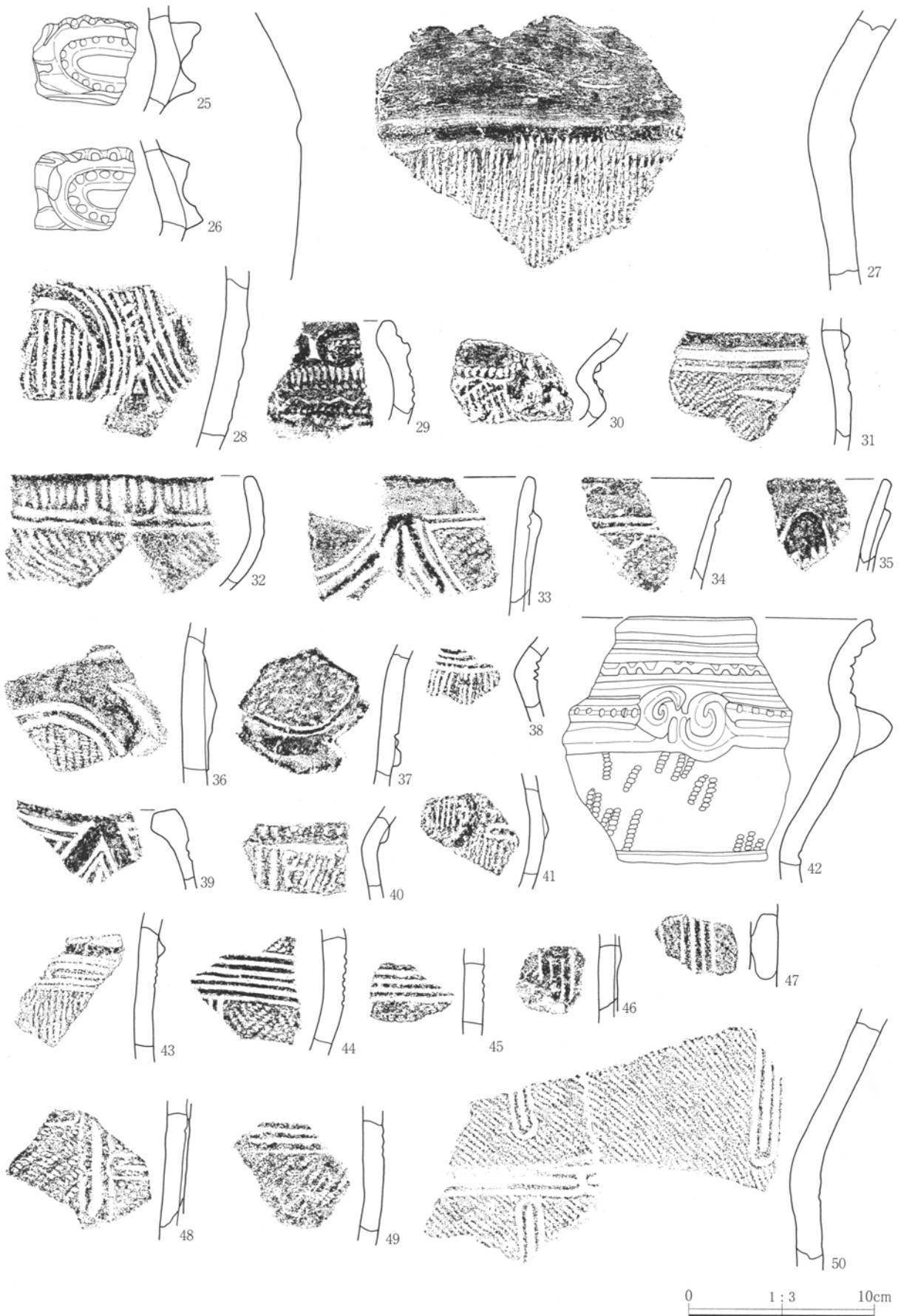
第23図 20区79号住居 (3)



第24図 20区79号住居出土遺物(1)



第25図 20区79号住居出土遺物(2)

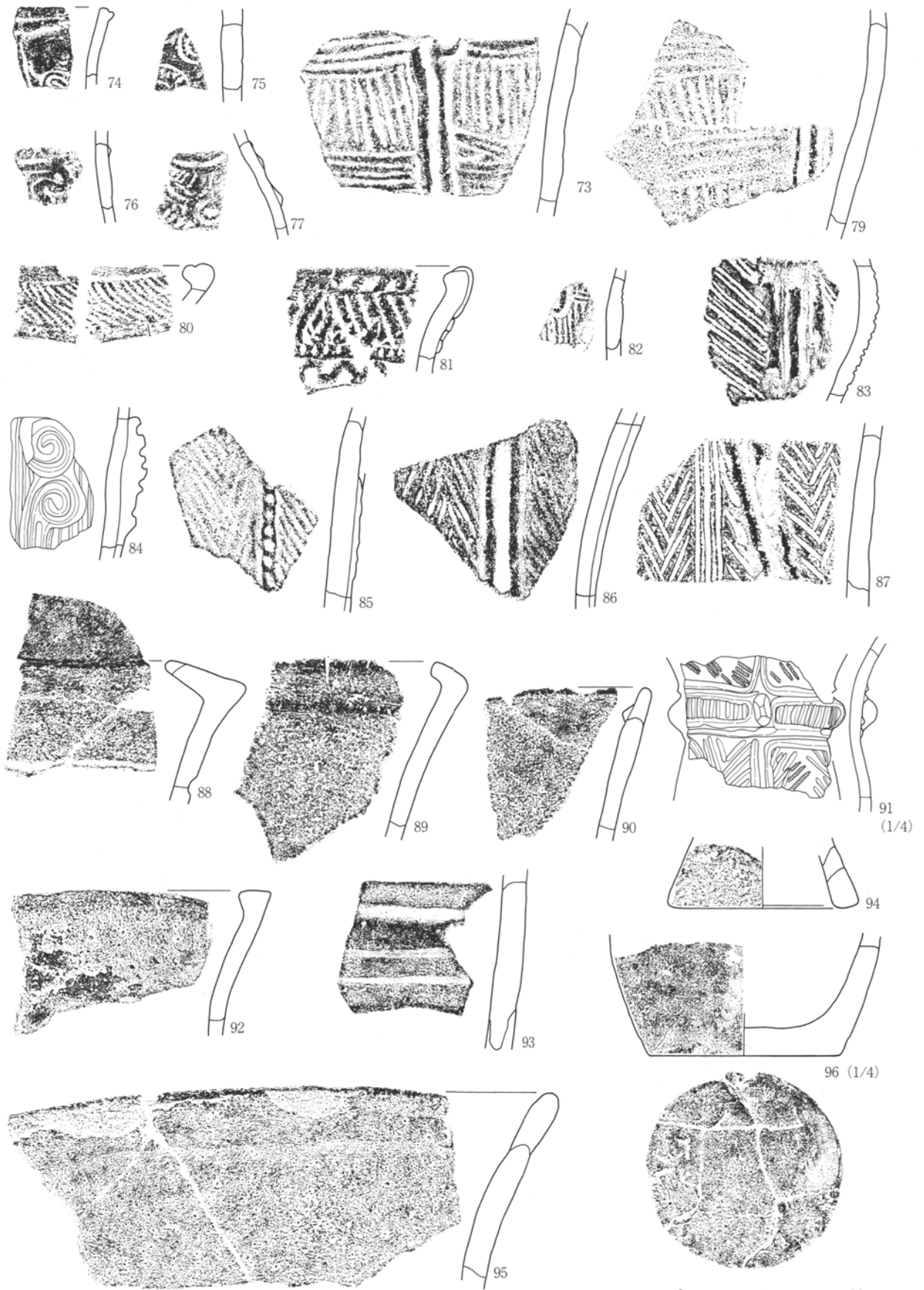


第26図 20区79号住居出土遺物(3)



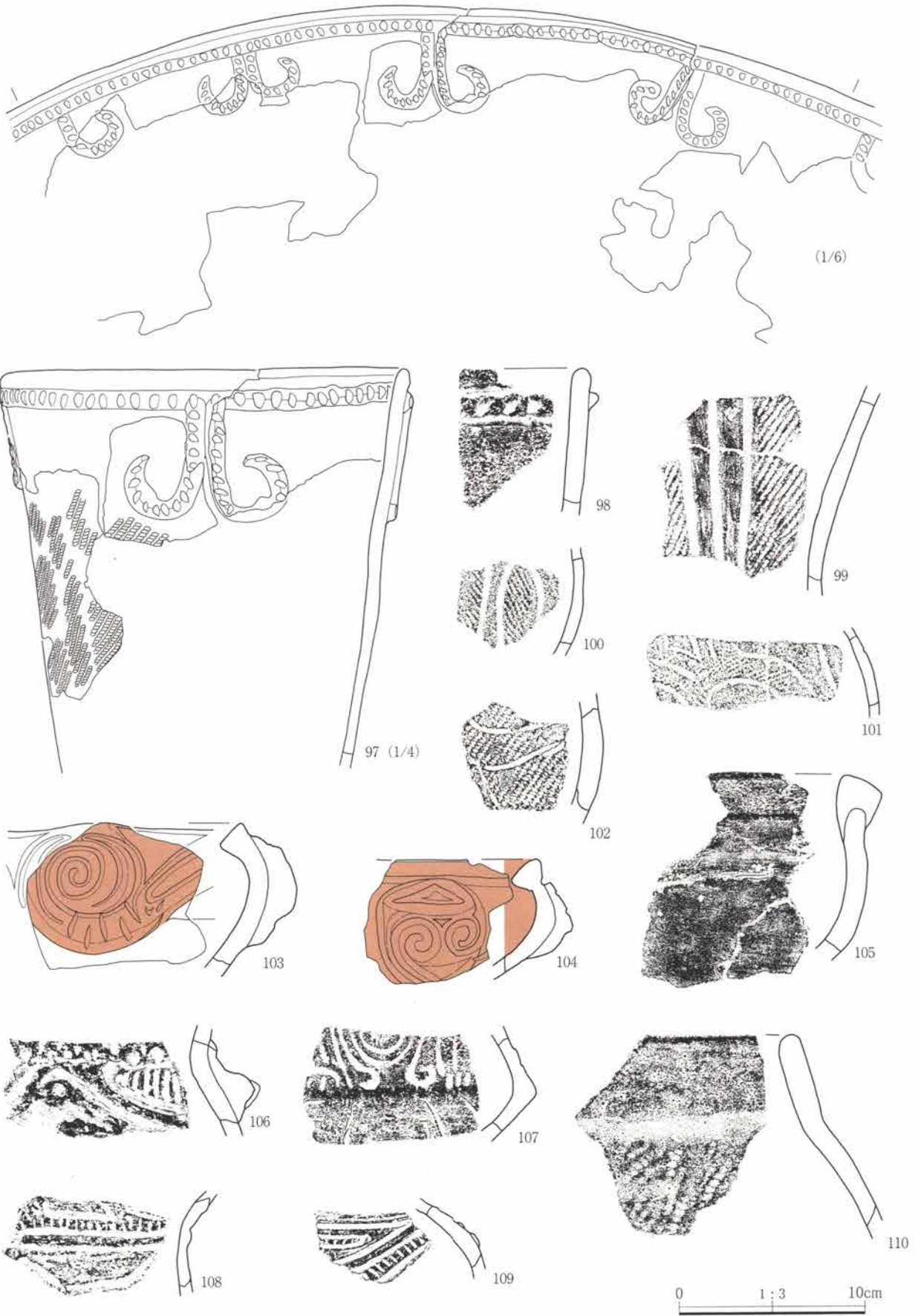
第27図 20区79号住居出土遺物(4)



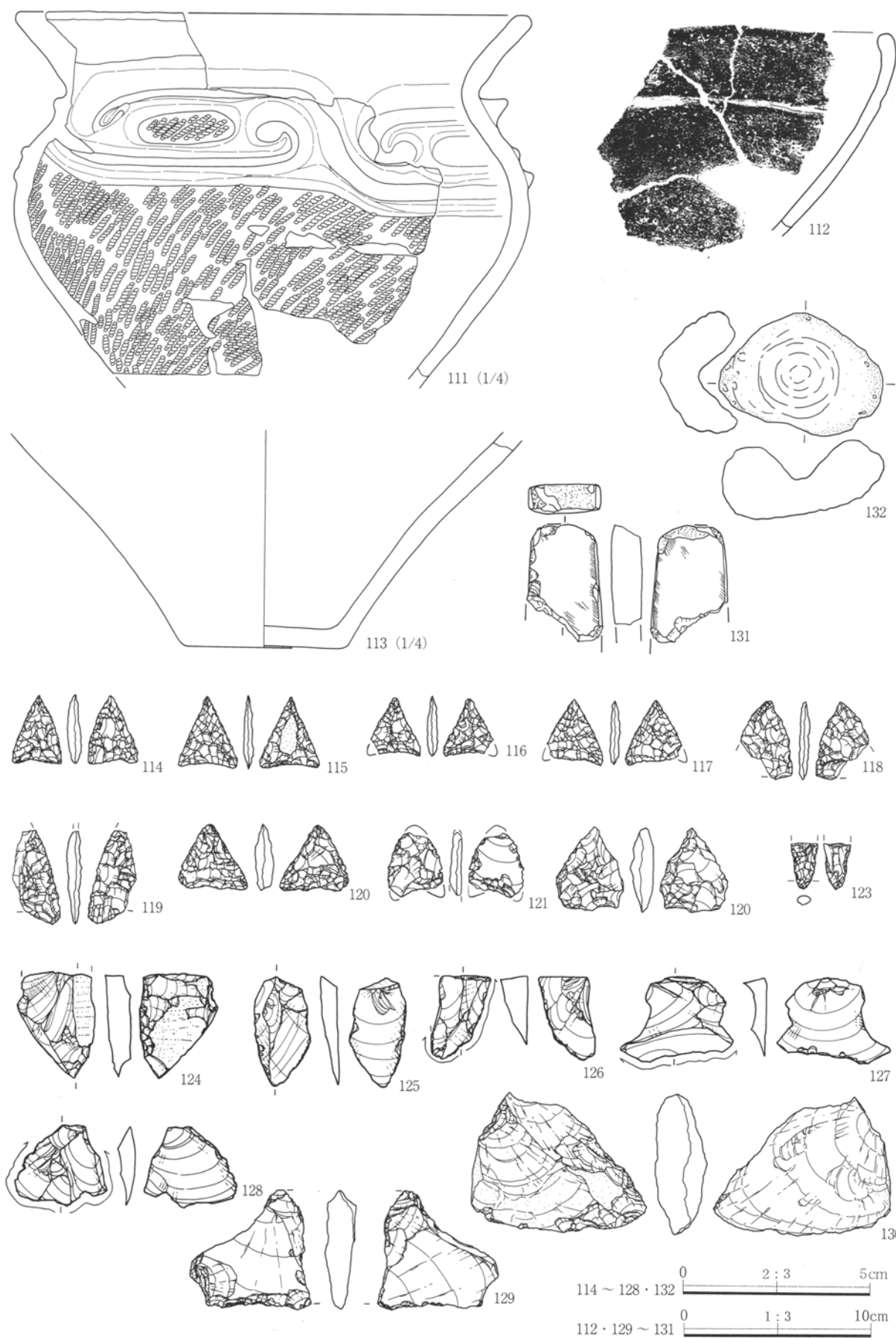


0 1:3 10cm

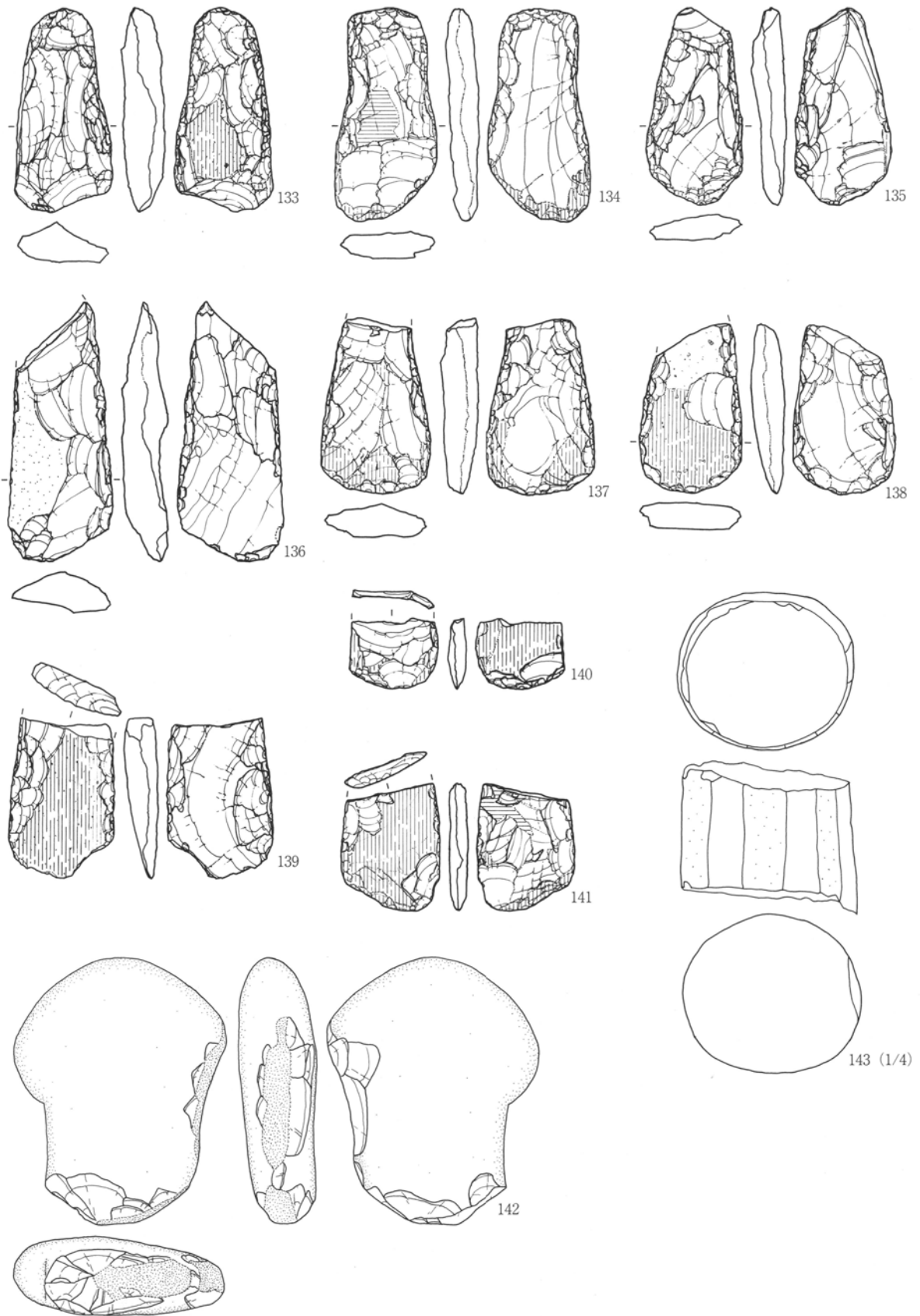
第28図 20区79号住居出土遺物(5)



第29図 20区79号住居出土遺物(6)



第30図 20区79号住居出土遺物(7)



0 1:3 10cm

第31図 20区79号住居出土遺物(8)



第32図 20区79号住居出土遺物(9)

れない。炉の北側に、大小3箇所の円形状を呈するローム質土の貼り床が認められ、床面のレベルを明示している。

**炉** 大形の板状礫で組んだ方形の石囲い炉であったと思われるが、炉石は意図的に抜き取られ、炉内に投棄されていた。炉石はいずれも変色・劣化等の被熱痕跡が明瞭で、ひび割れが著しい。

炉の確認状況から掘り方に至るまでの調査経過を図に示した。確認面及び上面には被熱痕跡が明瞭な炉石と焼土塊があったが、その下面には炉石以外の礫も含めて多量の礫が投げ込まれ、生活時の使用面は残っていなかった。

なお、炉内から土器1が出土している。円筒形をした勝坂式系の小型深鉢で、胴下半部を打ち欠いてあり、器面は被熱で劣化している。図面等の記録は

残されなかったが、完存状態で検出されており、炉内埋設土器に使用されていたと考えてよいだろう。

**柱 穴** 9本の柱穴を調査したが、掘り込みの浅いものが多く、主柱とするには心許ない。

規模(長辺×短辺×深さ)は、柱1：44×38×27、柱2：35×32×22、柱3：44×39×17、柱4：32×29×23、柱5：44×42×27、柱6：36×33×66、柱7：46×41×20、柱8：32×29×22、柱9：42×40×28である。

**遺 物** 覆土上層の礫にも混じっていたが、その下層の覆土中からの出土が多く、遺物出土量は今回扱った住居では最多である。

土器は総数2,179点が出土している。主な土器は加曾利E1式が439点で圧倒的に多く、ほかに曾利式古段階が35点、焼町土器が31点、勝坂式が19点、

### 第3章 発見された遺構と遺物

阿玉台式18点、唐草文系古段階16点、加曾利E 2式8点、加曾利E 3式5点、後期土器3点などがある。

このうち、勝坂式系の1は炉内からの出土、9や19は床面付近からの出土、時期が新しい97や111は覆土上層からの出土である。なお、浅鉢103と104は赤色塗彩がよく残っており、当時の面影を彷彿とさせる。

石器は石鏃8点、石鏃未製品13点、石錐1点、削器5点、加工痕2点、使用痕剥片8点、打製石斧18点、磨製石斧1点、敲石2点、磨石5点、石棒1点、軽石製品1点のほかに、碎片44点（黒曜石44点）、剥片267点（黒曜石192点）が認められた。

剥片の多くは黒曜石で、石鏃を中心に遺跡内で作製していたことが想定される。また、打製石斧も18点と数多く出土しているが、そのうち15点は欠損品、1点は未製品である。

石棒は長さ8cmほどの体部破片で、破損部の片側端部に調整痕が認められた。側面には幅3cmほどの研磨面がスリット状にはいっており、まだ仕上げの段階だったのかもしれない。なお、被熱痕跡は認められない。

軽石製品は石皿状の小さな完存品である。その性格等はまだ判明していないが、本地域の特色を示す遺物の一つでもある。

**時期** 覆土上層から加曾利E 3式期等の土器も出土しているが、覆土下層の出土土器は加曾利E 1式期古段階を主体としており、本住居は当該期に比定されよう。

#### 20区80号住居

**調査年度** 平成14・15年度

**位置** A-12グリッド

**経過** 本住居は周囲の住居に比べて床面レベルが高いため、表土掘削後の確認作業で炉の一部が確認され、住居と認定した。床面付近には礫と土器が比較的広い範囲にわたって散布しており、当初より大型の住居を想定した。遺構確認は平成14年度に実施

したが、掘削調査は平成15年度である。

**重複** 北側の一部を78号住居と、東側の一部を19区33号・34号住居とそれぞれ重複するが、調査時に切り合い関係はつかめていない。なお、周囲には多数の土抗が隣接する。

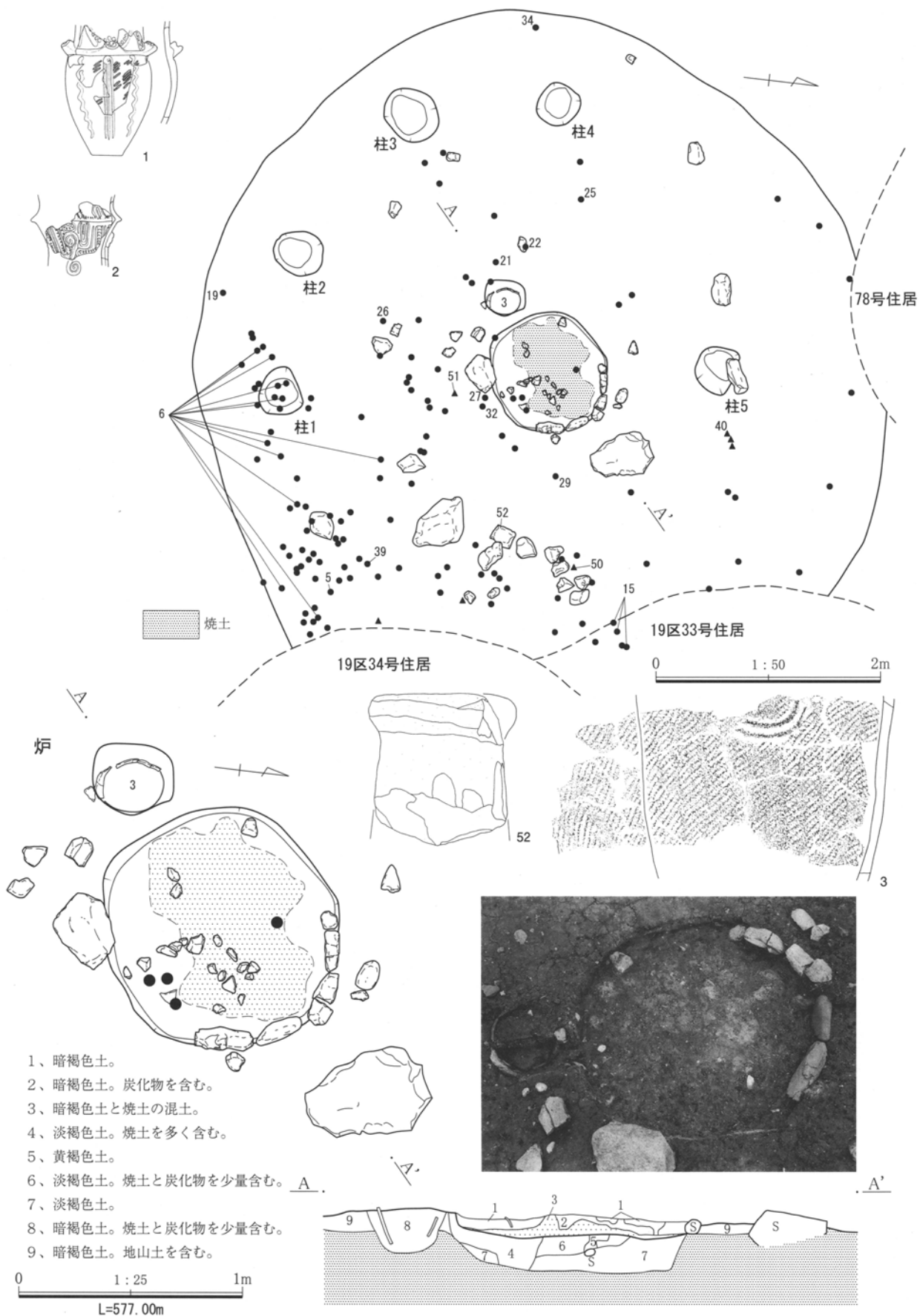
**形状** 明確な壁は確認できていないが、礫と遺物の出土状況、及び床面の状況等から、地山の傾斜に長軸を合わせた楕円形状の輪郭を想定した。規模は長軸6.3m前後、短軸6.08mである。

**床面** 山側から谷側に向かって緩やかに傾斜するが、ほぼ平坦な床面が構築されている。床面のレベルは、炉と遺物の出土レベルを考慮して判断した。床は暗褐色土面に構築されており、特に硬化した面は確認されていないが、床面下には炭化物の混入がなく、また色調が明るい点を判断材料にした。

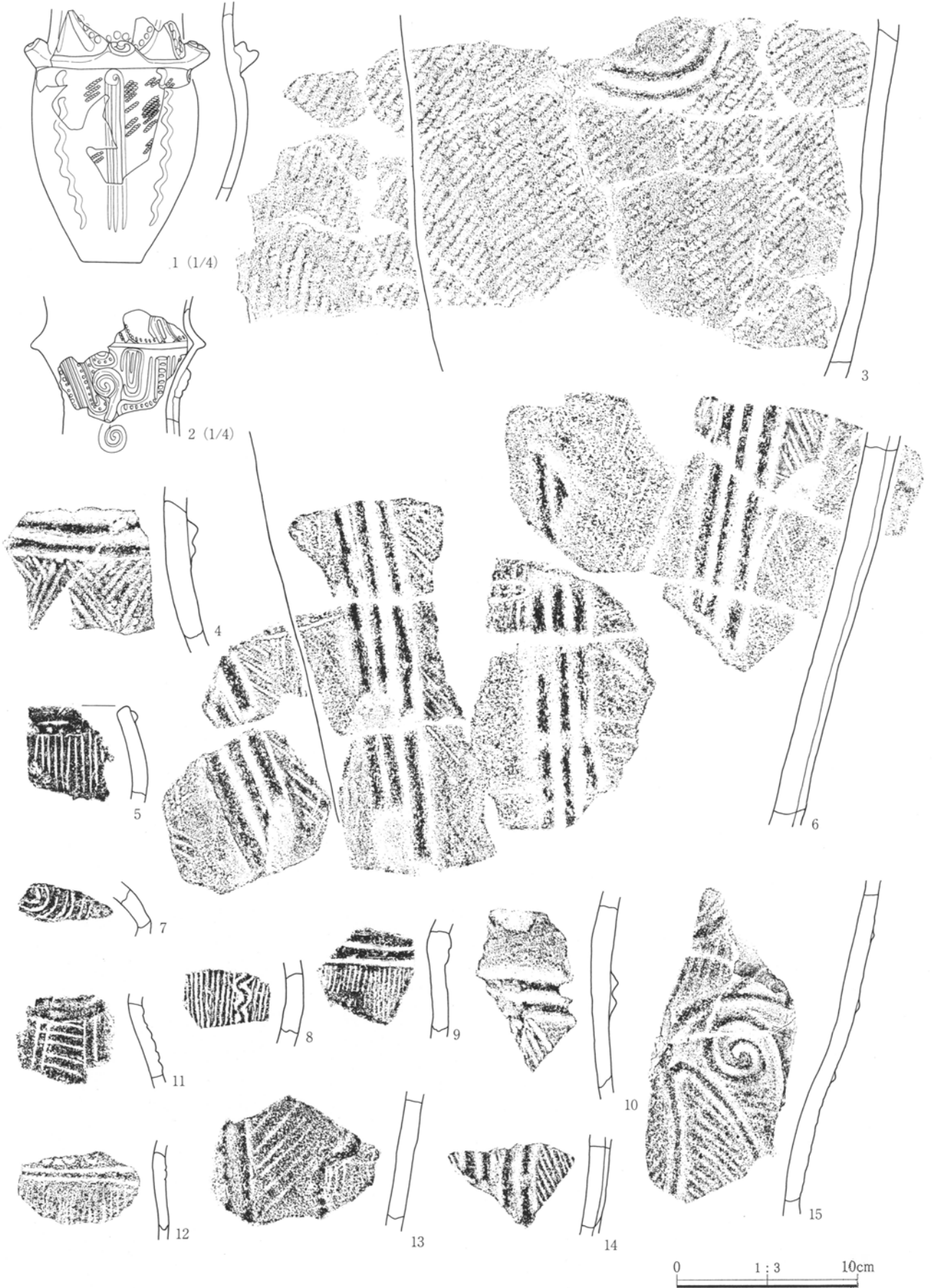
**炉** 長さ20cmほどの棒状あるいは板状の礫を、隅丸形状に並べた石囲い炉であったと思われる。炉石の60%は失われていたが、底面には焼土が残っており、規模は一辺1mほどであったと見られる。炉石上端からの深さは5cmほどである。炉の掘り込みはいたって浅く、床面からの深さは5cm前後である。この形態の炉は本遺跡では数少ないが、北側の一部を切り合う78号住居の炉と近似している。

なお、炉の南西に接して埋設土器(3)が確認された。使用された土器は、口縁部と胴下半部を打ち欠いた深鉢で、上端部に被熱痕跡が認められることから、炉内に埋設されていたものと見られる。この土器は上端部が床面に接しており、その一部の破片が周囲の床面下からも確認できたので、現存の炉が新しいと考えてよい。おそらく、現存する炉に先行する旧炉の可能性が高いと考えられるが、その場合炉石はさらに高いレベルにあったことになる。つまり、床面のレベルに高低差があったとすれば、本住居に先行する住居に伴う可能性も否定できない。

**柱穴** 5本が確認されており、このうち柱穴1～4はほぼ等間隔の配置を示している。柱穴5はやや内側にずれるが、旧炉とした埋設土器を中心とする半径2mの円をえがくと、5本の柱穴はほぼ接する

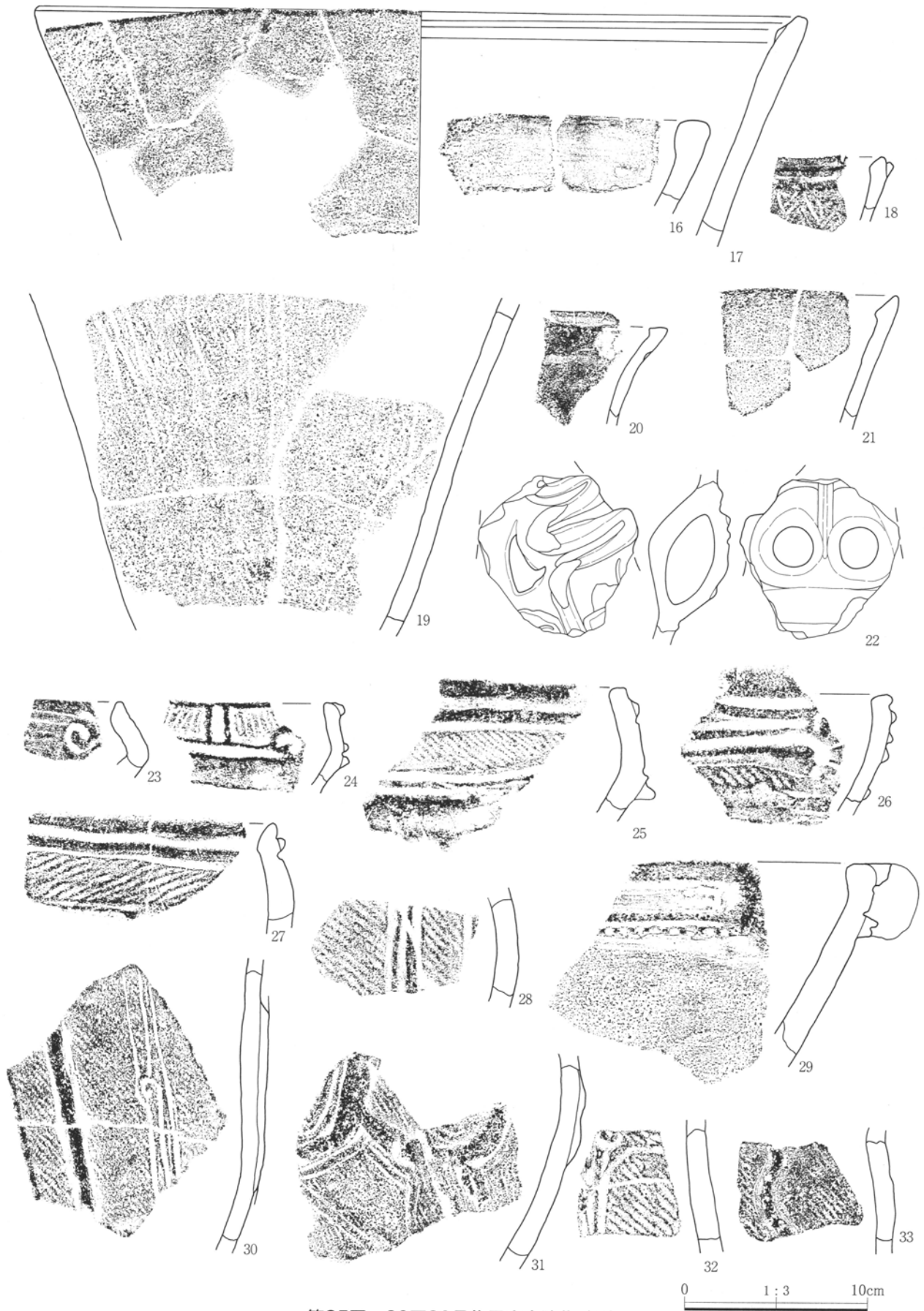


第33図 20区80号住居

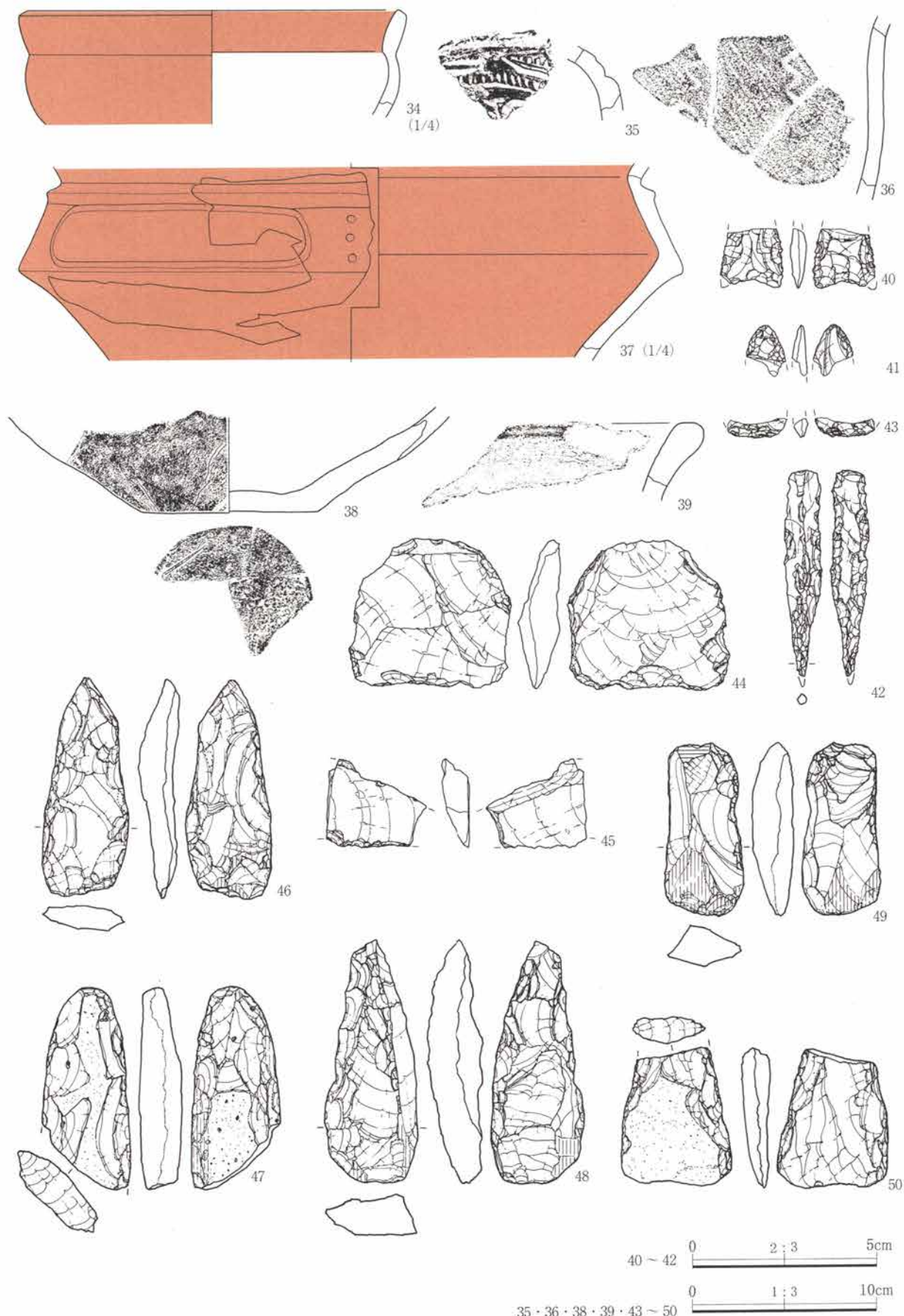


第34図 20区80号住居出土遺物(1)

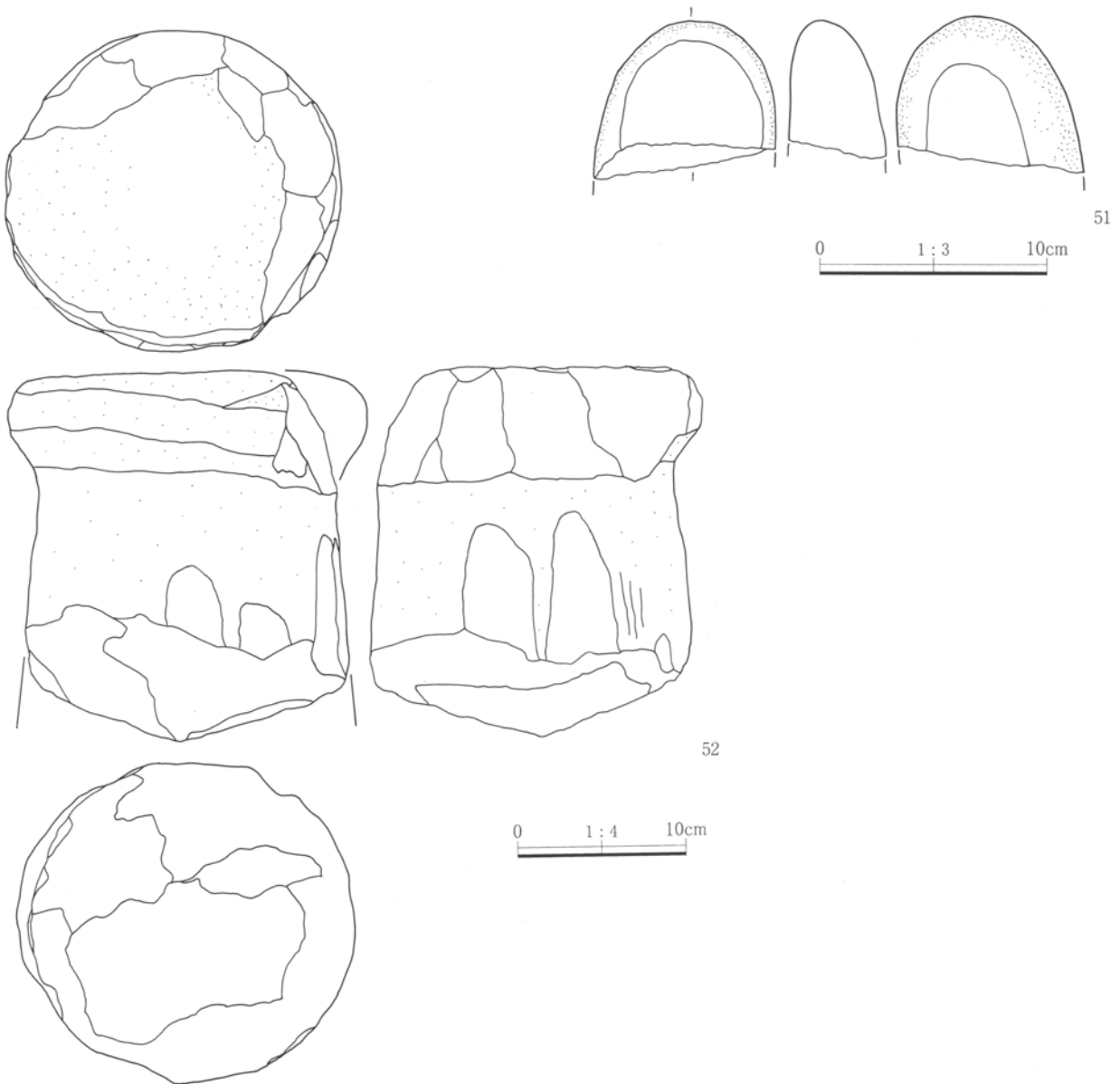




第35図 20区80号住居出土遺物(2)



第36図 20区80号住居出土遺物(3)



第37図 20区80号住居出土遺物(4)

位置になる。

規模(長辺×短辺×深さ)は、柱1：42×40×50、柱2：45×39×46、柱3：52×44×47、柱4：42×38×46、柱5：42×35×31である。

**遺物** 土器は総数733点が出土しており、主な土器は唐草文系古段階が142点、加曾利E1式が100点、曾利式古段階が56点、加曾利E2式が22点、焼町土器20点のほかに、前期二ツ木式1点、阿玉台式3点、勝坂式1点などがある。このうち、大型の深鉢6は住居南東隅の一定範囲からまとめて出土し

た。この土器は本住居のなかでは時期が新しく、この地点だけ床面が不明瞭だったことから、土坑が重複していた可能性もある。

石器は石鏃1点、石鏃未製品1点、石錐1点、削器3点、加工痕のある剥片6点、使用痕のある剥片3点、打製石斧7点、磨石1点のほか、石棒1点、剥片103点(黒曜石69点、珪質変質岩類8点)、碎片61点(黒曜石55点)が認められた。

石棒は、炉の東側1mの床面から横転の状態出土した。体部直径19cmの大型品で、扁平な頭部の約

### 第3章 発見された遺構と遺物

半分は突出部が打ち欠かれ、頭部から20cmのところ  
で体部側も打ち欠き、欠損面を敲打調整している。  
また、体部には5箇所の研磨面（断面が凹面）があ  
り、体部打ち欠き以前には砥石として転用されてい  
たものと考えられる。打ち欠き後の用途については  
判然としない。なお、石棒に被熱痕跡は認められな  
い。

**時期** 出土土器は加曾利E1式期新段階を主体と  
しており、本住居は当該期に比定されよう。

#### 20区84号住居

**調査年度** 平成15年度

**位置** I-19グリッド

**経過** この地区は畑地造成に伴う切り土が特に  
厚い地区で、さらに調査直前まで植木の植林が行わ  
れたため、その移植に伴って大半が攪乱されて  
しまった。本住居は、かろうじて攪乱を免れたもの  
で、覆土の大半を失っていた。表土除去の時点で地  
山の黄褐色砂質土が露呈し、黒褐色土の覆土が円形  
に残り、中央部には多量の礫が集積していた。

**重複** 周囲に土坑が隣接するが、重複する遺構は  
ない。

**形状** 南半部は円形状となっているが、本来は円  
形に近い隅丸方形状を呈するものと思われる。南西  
部の一部を攪乱されているが、ほぼ原形を留めてお  
り、規模は東西4.67m、南北4.58mで、確認面から  
の深さは最深部で15cmほどである。

**床面** 地山の高い西側から東へわずかに傾斜する  
が、平坦な床面が構築されている。床下や壁面外に  
は大小の礫が露呈しているが、それらを取り去って  
床土を入れ、整地した状況がよくわかる。

なお、住居南側縁辺の床面に接して、長さ75cmほ  
どの扁平な大型礫が据えられていた。何らかの作業  
に伴う台石の可能性もあるが、明確な使用痕は認め  
られなかった。

**炉** 長さ20cmほどの細長い礫11石を長楕円形に  
組んだ石囲い炉で、住居の中央に設置している。炉  
石は側縁を垂直に立てて設置しており、使用時の状

況をよく留めている。規模は長軸1m、短軸50cm、  
炉石上端からの深さは7cmほどである。

炉はほぼ南北方向に合わせて長軸をとり、炉内の  
長軸線上北寄りに埋設土器1個を設置している。使  
われた土器は焼町土器の小形深鉢で、胴上半と底  
部を打ち欠いて、それを正位に埋設していた。炉内  
に焼土はほとんど残っていなかったが、炉石には変  
色・劣化・ひび割れ等の被熱痕跡が明瞭で、炉内埋  
設土器の上端部も被熱による劣化が認められた。

土器埋設長方形石囲い炉の使用時の現況をよく留  
めた事例である。

**柱穴** 合計12本の柱穴が確認された。これらの大  
半は特定の場所に集中しており、北東寄りに柱6・  
7・8・9・10の5本が、北西寄りに柱1・2・5  
の3本が、南西寄りに柱3・4の2本がそれぞれ隣  
接あるいは重複している。これに単独の柱11を加え  
ると、長方形4本柱の主柱配置が想定される。この  
地区は地山に礫が多いため、何度か掘り返しをした  
のかもしれない。

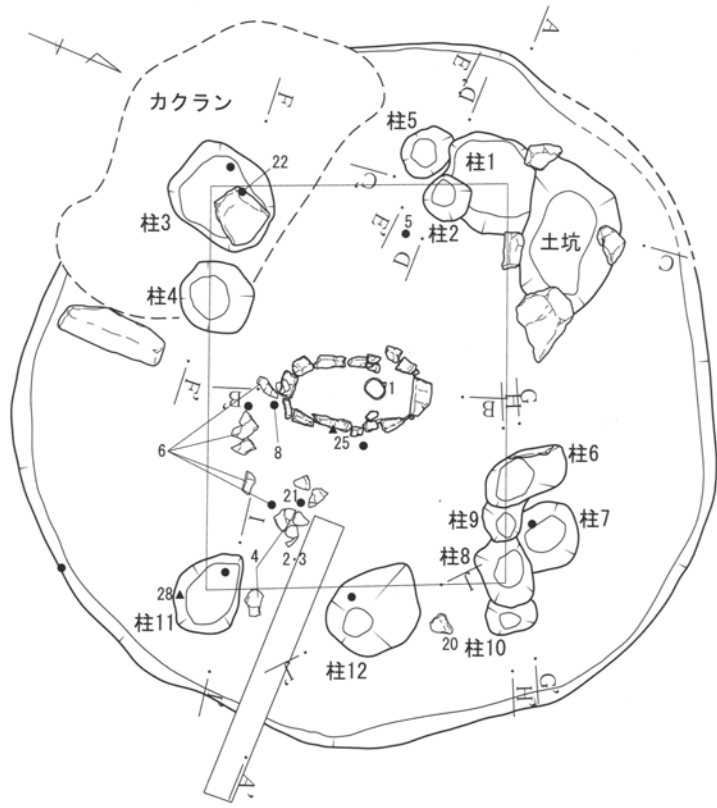
柱12は、柱8と11の中間にあり、棟を支える支柱  
とも見られるが、この方角が出入り口にあたと仮  
定すれば、それに伴う施設の可能性もある。なお、  
遺物等の出土は認められなかった。

規模(長辺×短辺×深さ)は、柱1：65×－×20、  
柱2：30×29×26、柱3：71×59×22、柱4：51×  
47×36、柱5：37×30×29、柱6：60×31×35、柱  
7：44×－×22、柱8：46×33×34、柱9：26×  
－×28、柱10：34×－×22、柱11：61×46×5、柱  
12：68×6×40である。

**遺物** 土器は総数233点が出土しており、主な土  
器は加曾利E1式が26点、唐草文系古段階が21点、  
曾利式古段階が8点、焼町土器が17点、阿玉台式が  
13点、勝坂式9点があり、他に前期二ツ木式1点が  
出土している。1は炉内埋設土器で、2・3・4は  
その口縁部かもしれない。

石器は石錐1点、打製石斧2点、磨石1点、ス  
トーンリタチャー1点と少なく、ほかに石核1  
点、剥片11点(黒曜石7点)、碎片8点(黒曜石8

第3節 縄文時代の竪穴住居



C. 柱1・2 C'



D. 柱1・2 D' E. 柱5 E'



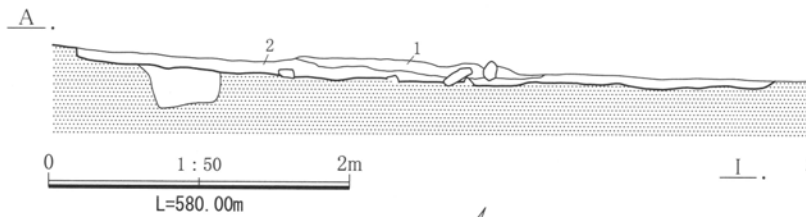
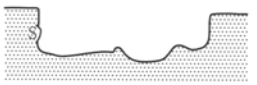
F. 柱3・4 F'



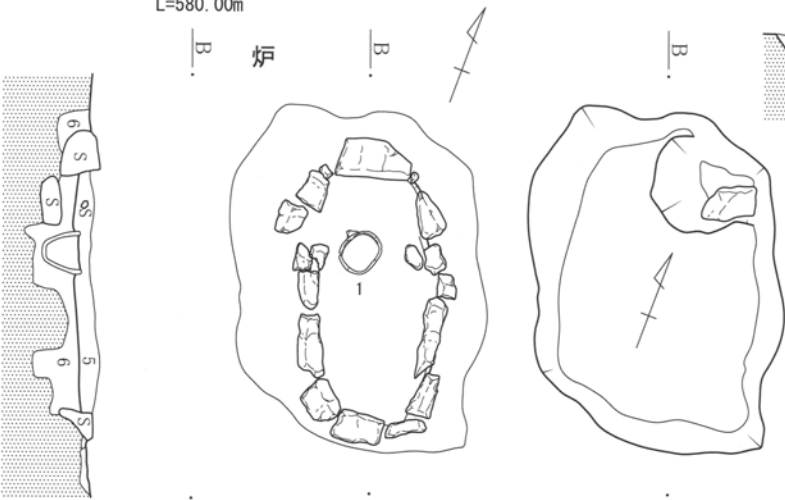
G. 柱6・7 G'



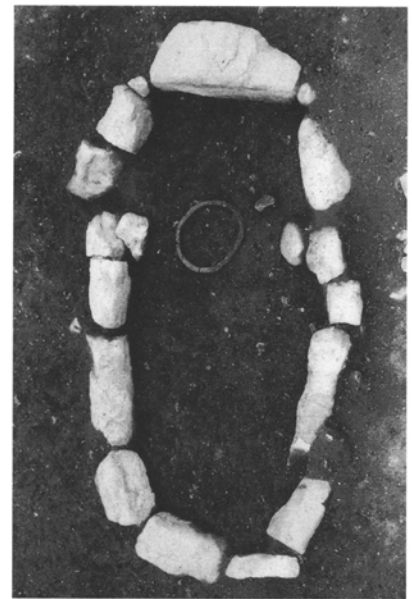
H. 柱8・9・10 H'



I. 柱11 I' J. 柱12 J'



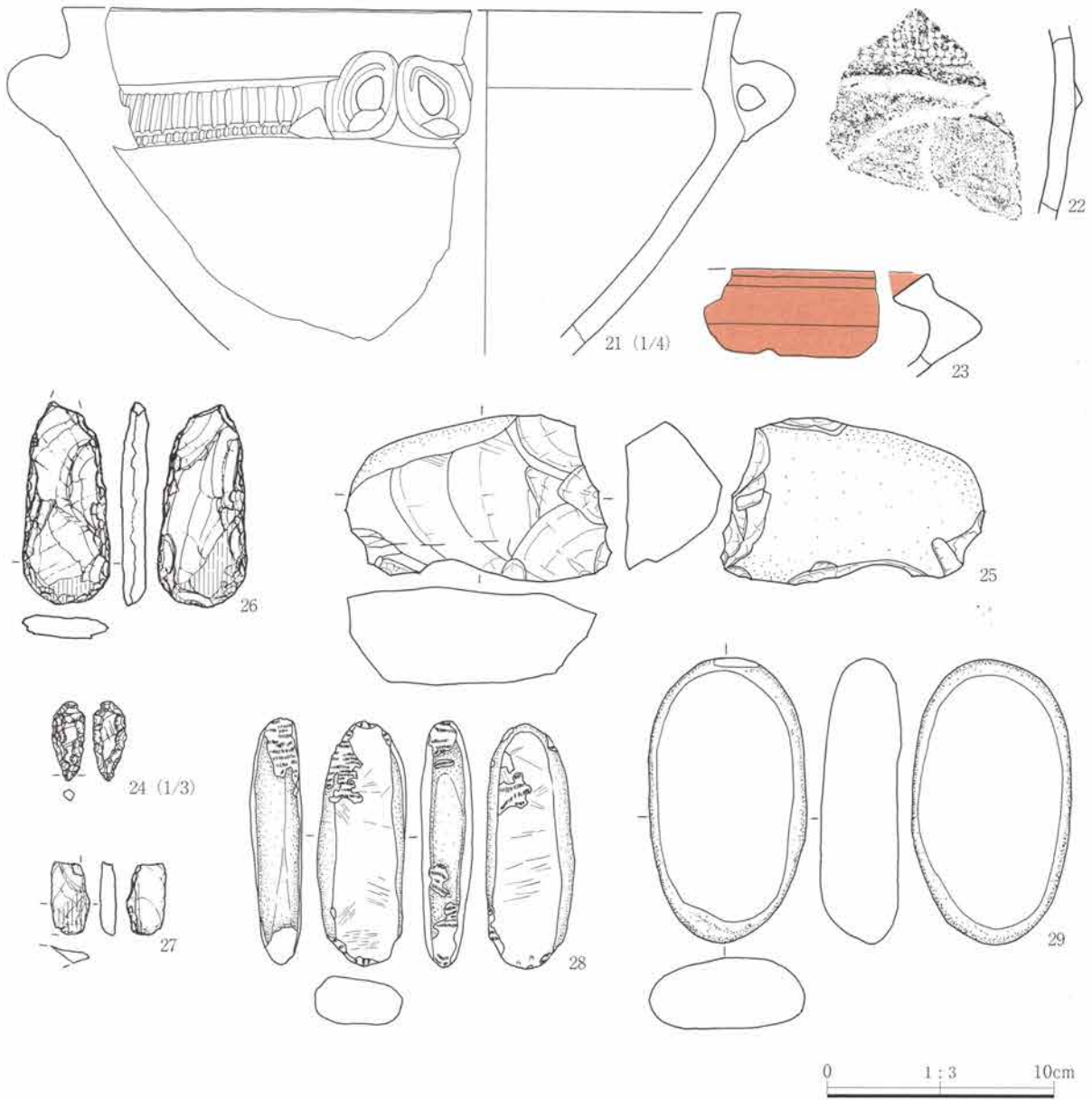
- 1、暗褐色土。黒みが強く、硬質。
- 2、暗褐色土。炭化物を少量含み、やや軟質。
- 3、暗褐色土。やや軟質。
- 4、暗褐色土。地山土を含み、やや硬質。
- 5、暗褐色土。焼土と炭化物を少量含む。
- 6、黒褐色土。



第38図 20区84号住居



第39図 20区84号住居出土遺物(1)



第40図 20区84号住居出土遺物(2)

点)が認められた。

**時期** 炉内埋設土器および床面出土土器は加曾利E1式期古段階に該当することから、本住居は当該期に比定されよう。

**20区85号住居**

**調査年度** 平成15年度

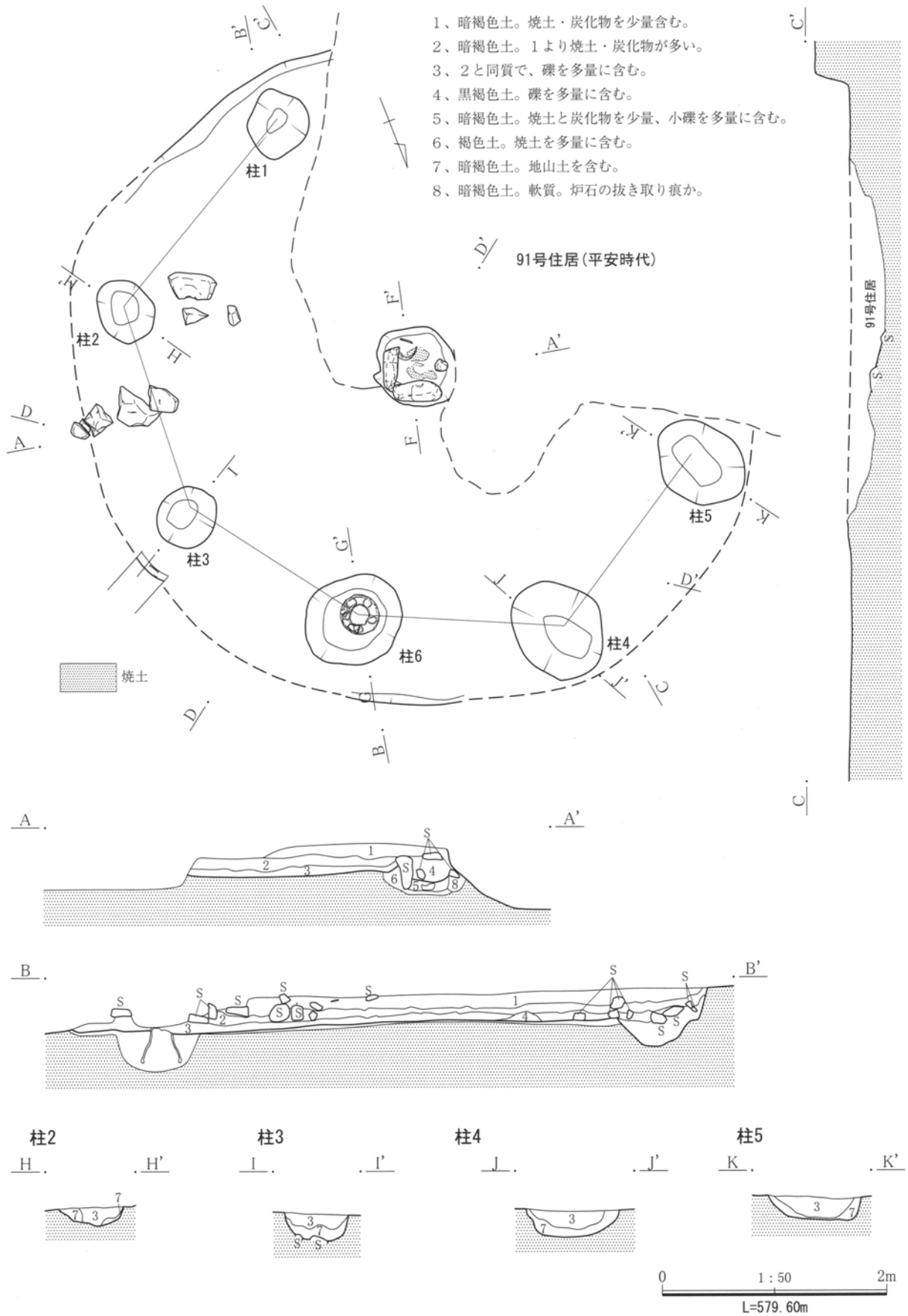
**位置** E-10グリッド

**経過** 平安時代の91号住居の竈袖に石囲い炉がかかっていることが判明し、住居と認定した。炉の北

側には、2m四方の範囲に多量に礫が集積しており、その下から埋設土器が確認された。

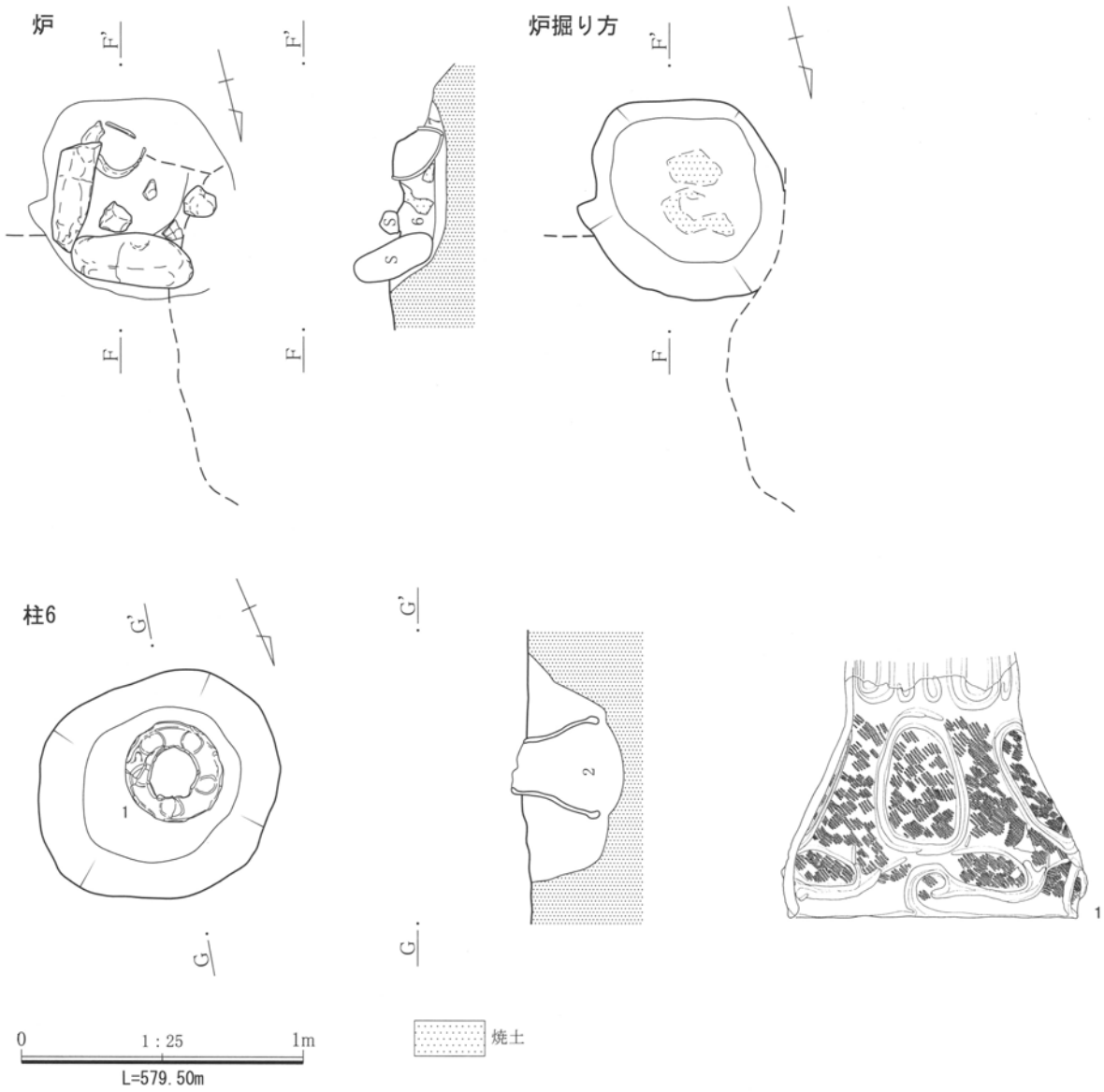
**重複** 南西部を大きく91号住居(平安時代)と重複し、これに切られる。西側には縄文時代後期の97号住居が隣接する。

**形状** 山側にあたる南側の一部を除いて明確な壁は確認できなかったが、柱穴の配置と僅かな覆土の存在、および遺物出土状況から、円形の輪郭を想定した。規模は東西が6.1m前後、確認面からの深さは山側で25cmほどである。



第41図 20区85号住居(1)



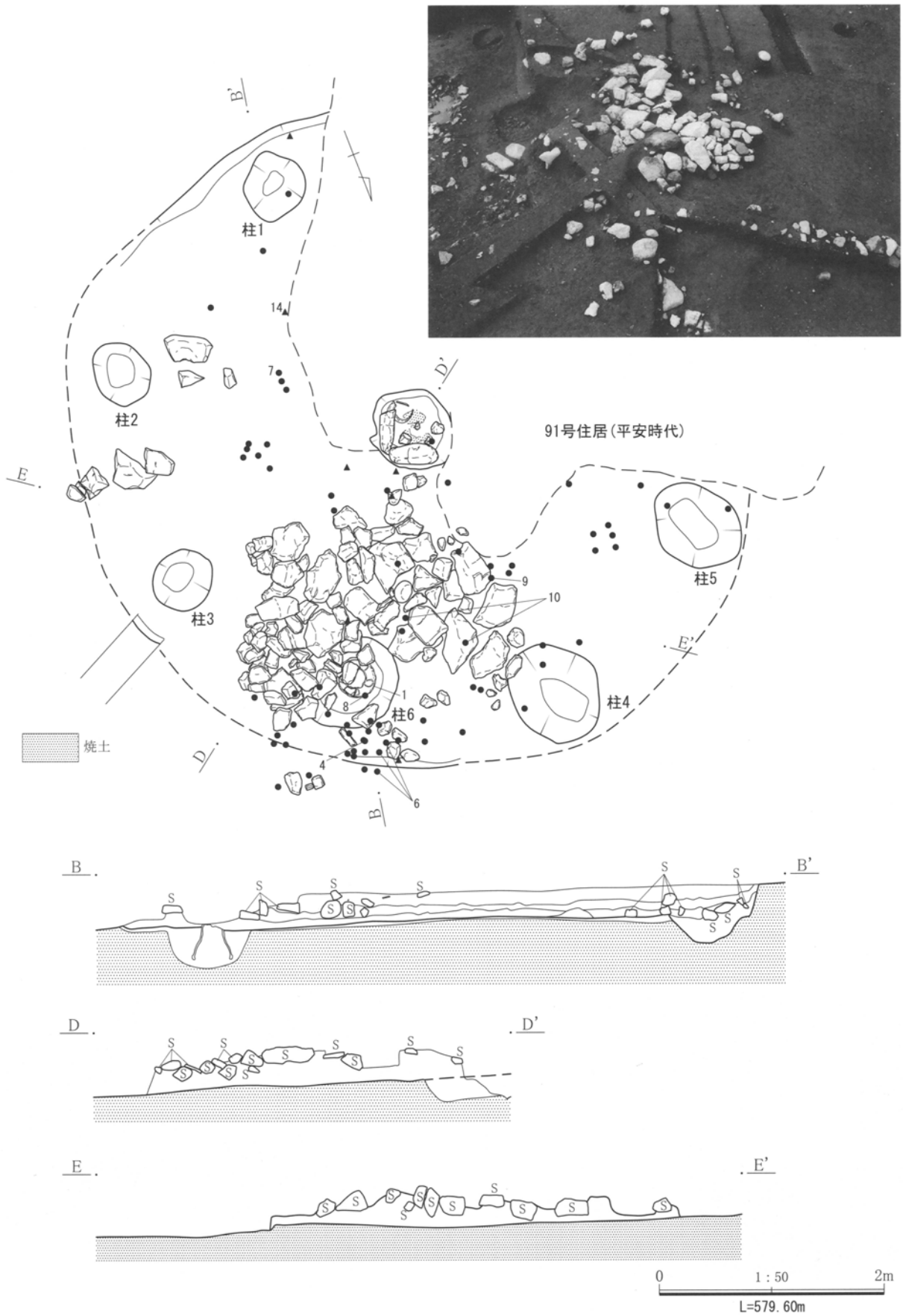


炉

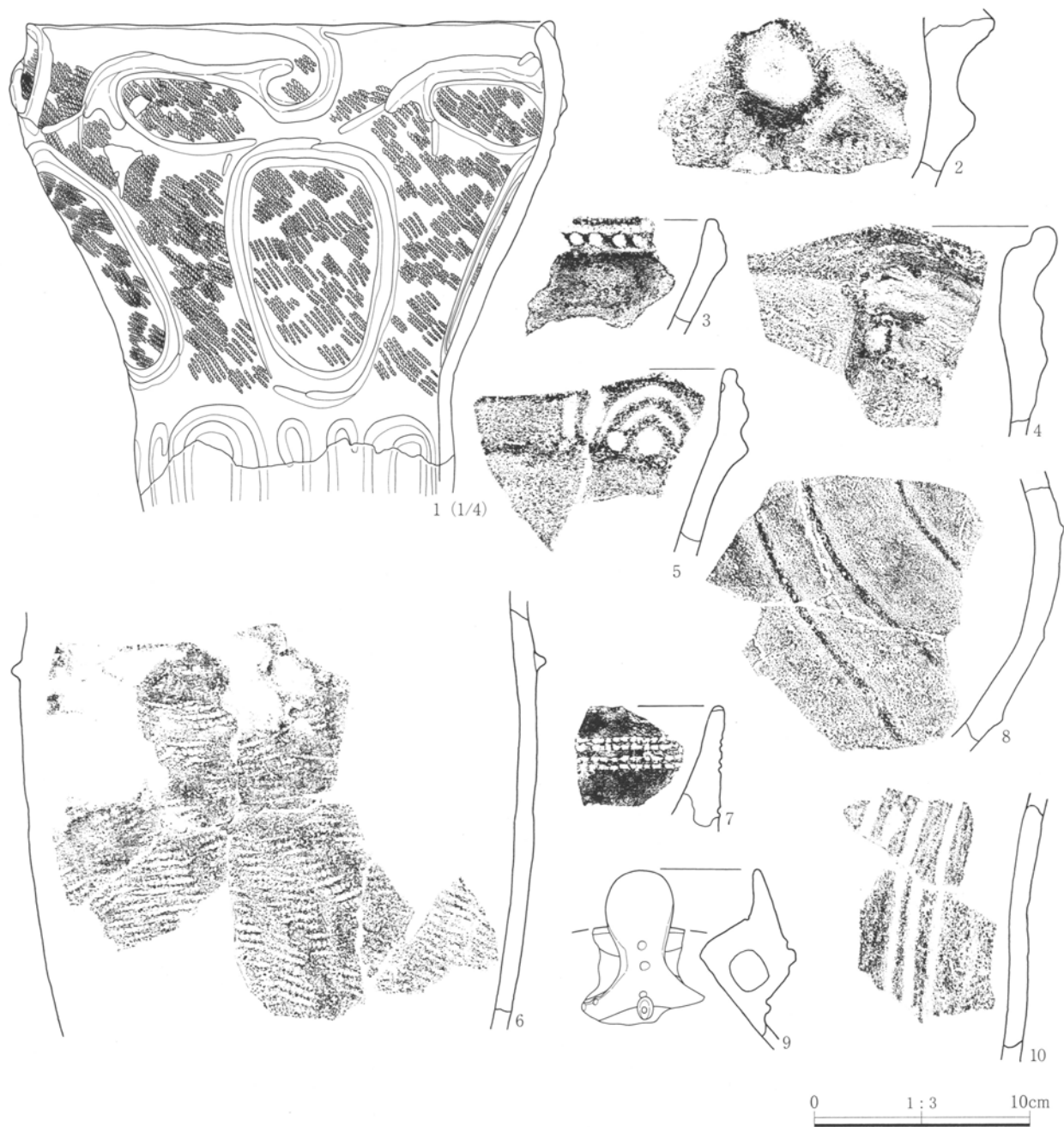


柱6

第42図 20区85号住居 (2)



第43図 20区85号住居(3)



第44図 20区85号住居出土遺物(1)

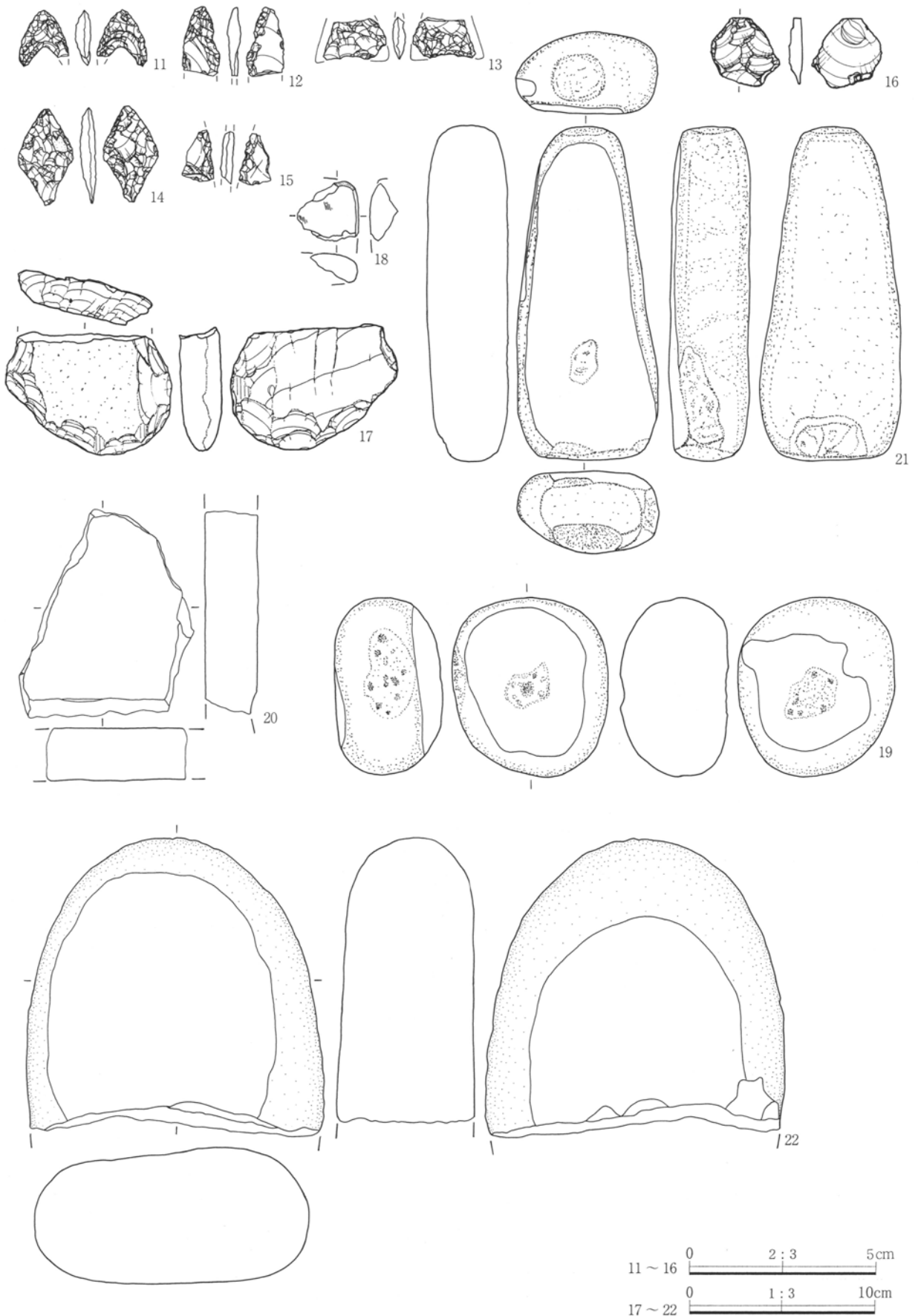
**床 面** 硬化面は確認できないが、平坦な床面が構築されている。床下には多量の小礫が集積した部分があり、南側の床面直下ではそれが露出している。

**炉** 大型の扁平礫4石で組んだ土器埋設方形石囲い炉で、住居の中央に設置している。規模は一辺60cm、炉石上端からの深さは15cmほどである。炉石は西側と南側の2石を失うが、炉の底面には焼土が残り、炉石には変色・劣化・ひび割れ等の被熱痕跡が認められた。炉内埋設土器は、胴下半部を打ち欠

いた小形の深鉢で、炉の南東隅に口縁部を内側に傾けた状態で設置している。口縁部は被熱による劣化が著しい。なお、埋設土器は、加曽利E3式新段階に比定される加曽利E式系の土器だが、全体の劣化が著しく復元すらもできない状態のため、掲載から除外した。

**柱 穴** ほぼ等間隔にめぐる6本の柱穴が確認された。柱6としたものは逆位の埋設土器を伴うもので、調査時には「埋甕」として扱ったが、その規模

第3章 発見された遺構と遺物



第45図 20区85号住居出土遺物(2)

や配置は他の柱穴と合致しており、ここでは柱穴に変更して扱いたい。

柱6に伴う埋設土器は、大型の加曽利E3式土器の胴部下半を打ち欠き、柱6の中央に逆位で設置してあった。ほかに共伴する遺物等はない。このような事例は本遺跡では初めてだが、対岸の長野原一本松遺跡では、縄文時代中期後半の大型掘建柱建物の柱穴に、ほぼ完形の土器を埋設した事例が存在する。

なお、柱6の上位には、それを覆い隠すように多量の礫がびっしりと集積されていた。礫は床面から10~15cmほど浮いた状態で、直径2mの円形状の範囲に認められた。当初は埋設土器と関連する遺構と考えたが、礫集積中には加曽利E3式土器のほかに後期の土器もかなり含まれており、本住居あるいは柱6に伴う埋設土器とは関連しない、単独の遺構となる可能性が高い。

柱穴の規模(長辺×短辺×深さ)は、柱1:58×52×19、柱2:57×48×19、柱3:58×52×26、柱4:93×78×28、柱5:89×66×22、柱6:92×79×33である。

**遺物** 土器は総数379点が出土している。主な土器は加曽利E3式が46点で、ほかに唐草文系新段階が7点、加曽利E1式が4点、加曽利E2式が3点、後期堀之内式が29点、称名寺式が9点、晩期6点が認められた。図の1は、柱6に伴う埋設土器である。

この地区は後期や晩期の遺物が濃厚に分布する範囲に含まれており、それが混在しているものと思われる。なお、先述のとおり、後期の土器は大半が炉の北側床上に集積された礫と共に出土している。

石器は石鏃5点、石鏃未製品2点、加工痕ある剥片7点、使用痕ある剥片8点、打製石斧1点、磨製石斧1点、敲石1点、磨石1点、丸石1点、砥石2点があり、ほかに剥片184点(黒曜石71点、珪質変質岩類82点)、碎片78点(黒曜石71点)が認められた。本住居も黒曜石の剥片・碎片が多い住居の一つである。

**時期** 炉内埋設土器と柱6に伴う埋設土器、およ

び覆土中の土器は加曽利E3式新段階を主体としており、本住居は当該期に比定されよう。

## 20区86号住居

**調査年度** 平成15年度

**位置** H-10グリッド

**経過** 84号住居と同様に削平を免れた住居の一つで、礫を伴う地山が高まった部分に住居の一部がかかったことから、南側の壁の一部と炉がかろうじて残存していた。覆土もその部分のみであり、出土遺物もわずかである。

**重複** 重複する遺構はないが、北東側に後期の97号住居が隣接する。東側の85号住居との距離は5m、北西の84号住居までは7.5mである。

**形状** 山側の南西部を除いて壁は確認できなかったが、柱穴の配置や床面の状況から、円形状の輪郭を想定した。規模は直径5m前後と想定する。

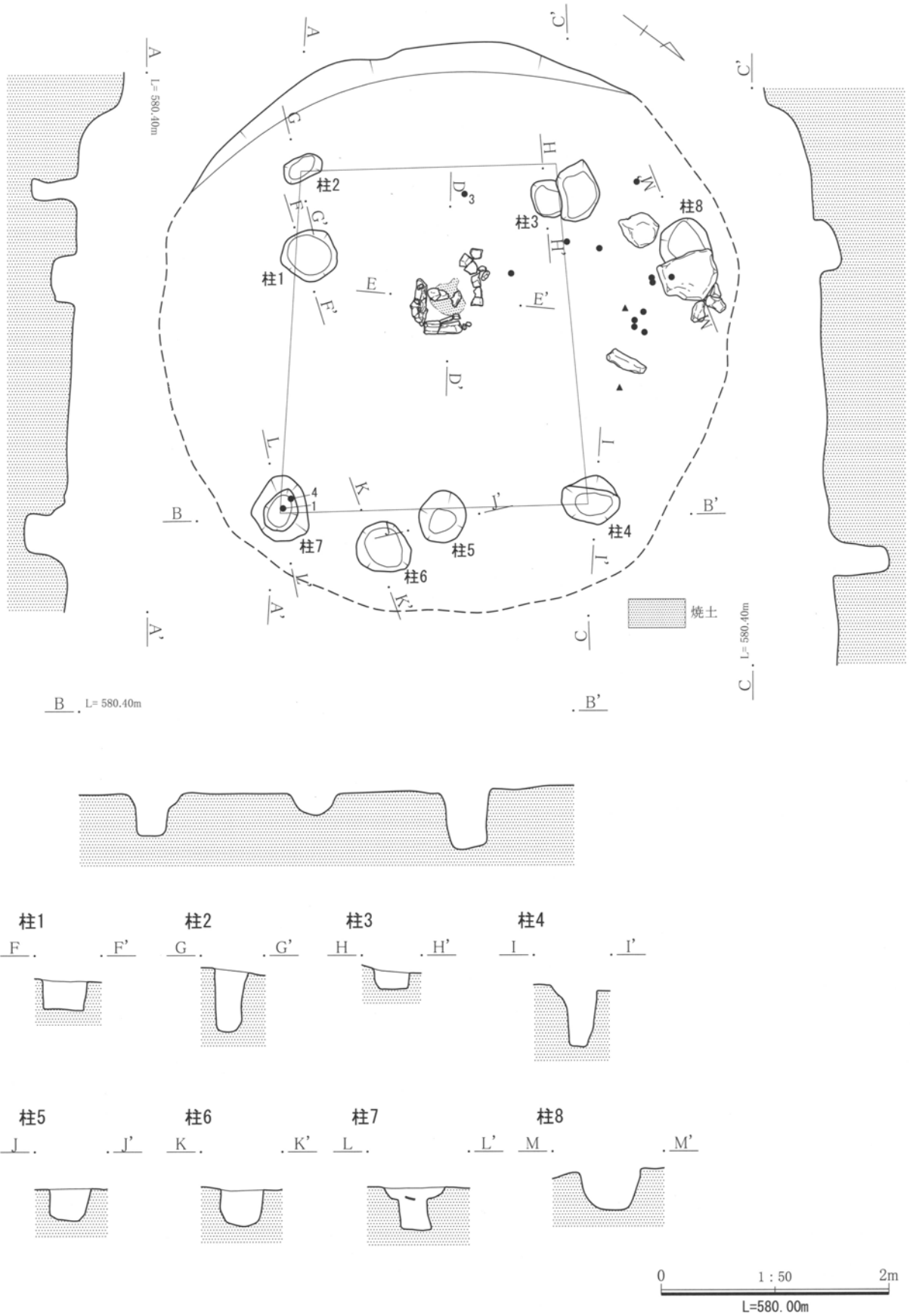
**床面** 炉石と出土遺物のレベルを基準に、地山との関係を考慮して床面を推定した。貼り床や硬化面は認められない。

**炉** 扁平な大型礫4石で組んだ方形石囲い炉と考えられる。規模は一辺60cmほどで、床面からの深さは10cmほどである。炉石の半数はすでに抜き取られていたが、炉内には焼土が残り、炉石にも変色・劣化・ひび割れ等の被熱痕跡が明瞭に認められた。

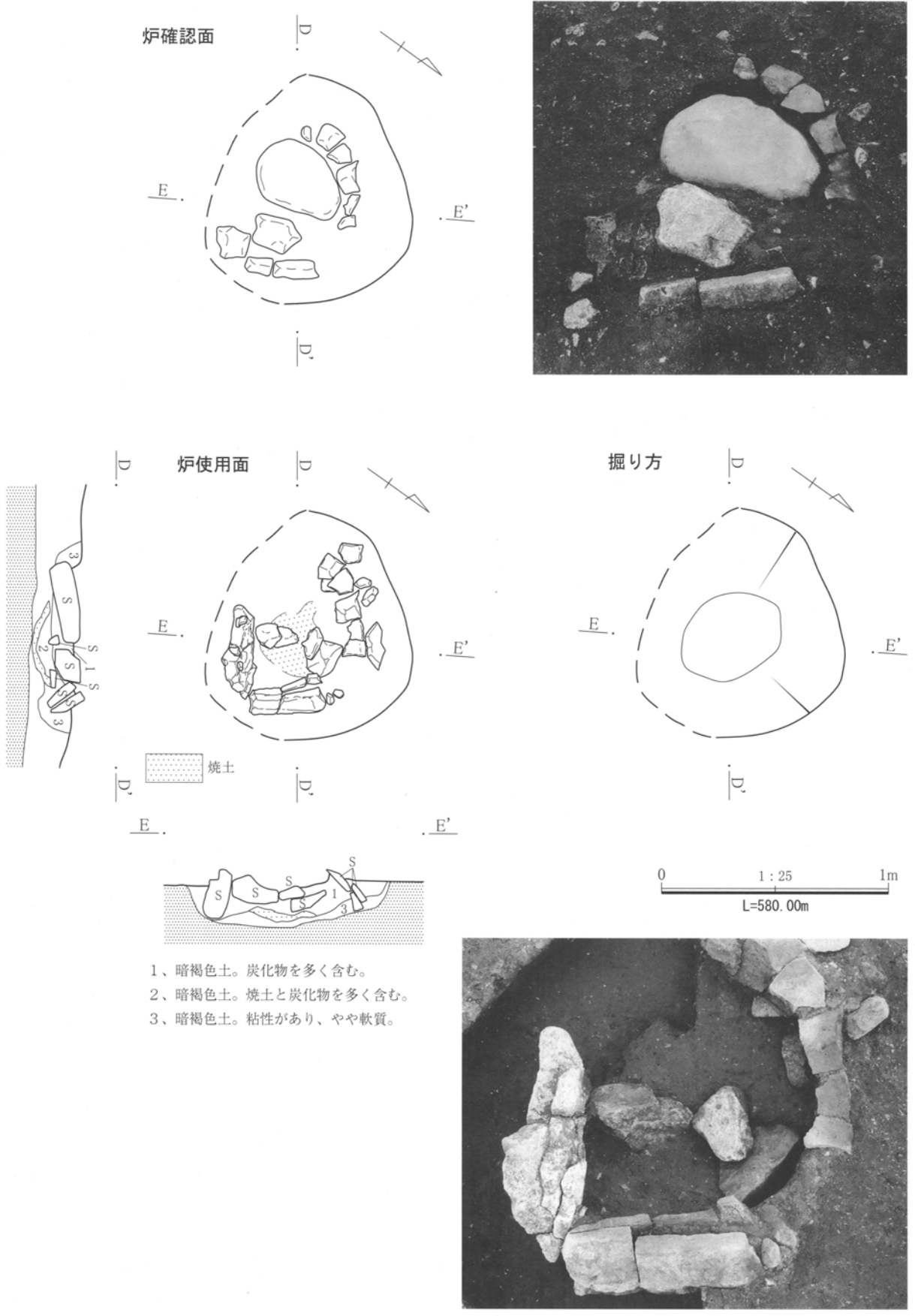
確認時は、大型の扁平円礫をはじめ数個の礫が、炉内に蓋をしたような状態で置かれていた。これらの礫の大半も明瞭な被熱痕跡が認められたことから、炉石の一部だった可能性が高い。

炉は住居中央部に設置されているが、柱穴配置との関係を考慮すれば、やや山側(南西)に寄っていると考えられる。

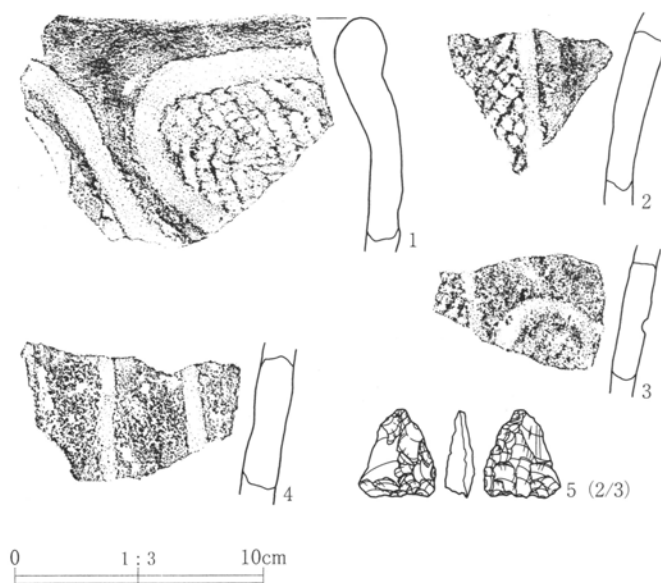
**柱穴** 合計9本確認されたが、このうち柱7・2・3・4の4本が主柱と考えられる。柱3は他に比べて浅く、やや内側に寄っていることから、その外側にずれる可能性が高い。また、柱5は主柱7・4のちょうど中間にあり、炉の軸線にもあたることから、軒を支える支柱あるいは出入りに伴う柱の



第46図 20区86号住居(1)



第47図 20区86号住居 (2)



第48図 20区86号住居出土遺物

可能性がある。

規模(長辺×短辺×深さ)は、柱1：49×45×27、柱2：35×20×55、柱3：22×－×18、柱4：50×41×54、柱5：45×41×27、柱6：50×45×32、柱7：57×49×37、柱8：52×44×36である。

**遺物** 土器は総数39点のみの出土であり、このうち時期が判明したのは加曾利E3式3点、晩期8点のみである。なお、加曾利E3式土器3点のうち、2点が柱7の覆土中から出土、1点は炉の北側床面からの出土であった。石器も石鏃未製品1点、剥片4点(黒曜石4点)のみに止まった。

**時期** 出土遺物はいたって少ないが、確実な資料は加曾利E3式土器3点のみであり、炉の形態等からも当該期に比定しておきたい。

#### 20区87号住居

**調査年度** 平成14・15年度

**位置** C-14グリッド

**経過** 平成14年度に東半部の表土掘削を実施した段階で遺物と礫の集積が認められたため、トレンチを打って炉を確認し、住居と認定した。また、住居内には山側を中心に多量の大型礫が集積していた。

**重複** 北側を大きく92号住居および後期の98号住居と重複し、これらに切られる。また、南側に79号

住居が近接し、住居内北側縁辺に529号・530号土坑が重複する。

**形状** 重複はあるものの、壁が全周した本遺跡では希な住居である。平面形は南北に長軸をとる楕円形で、規模は長軸6.63m、短軸6.06mである。壁は一部に崩落が認められるものの、ほぼ垂直に立ち上がる。確認面からの深さは山側で74cm、谷側で20cmであった。

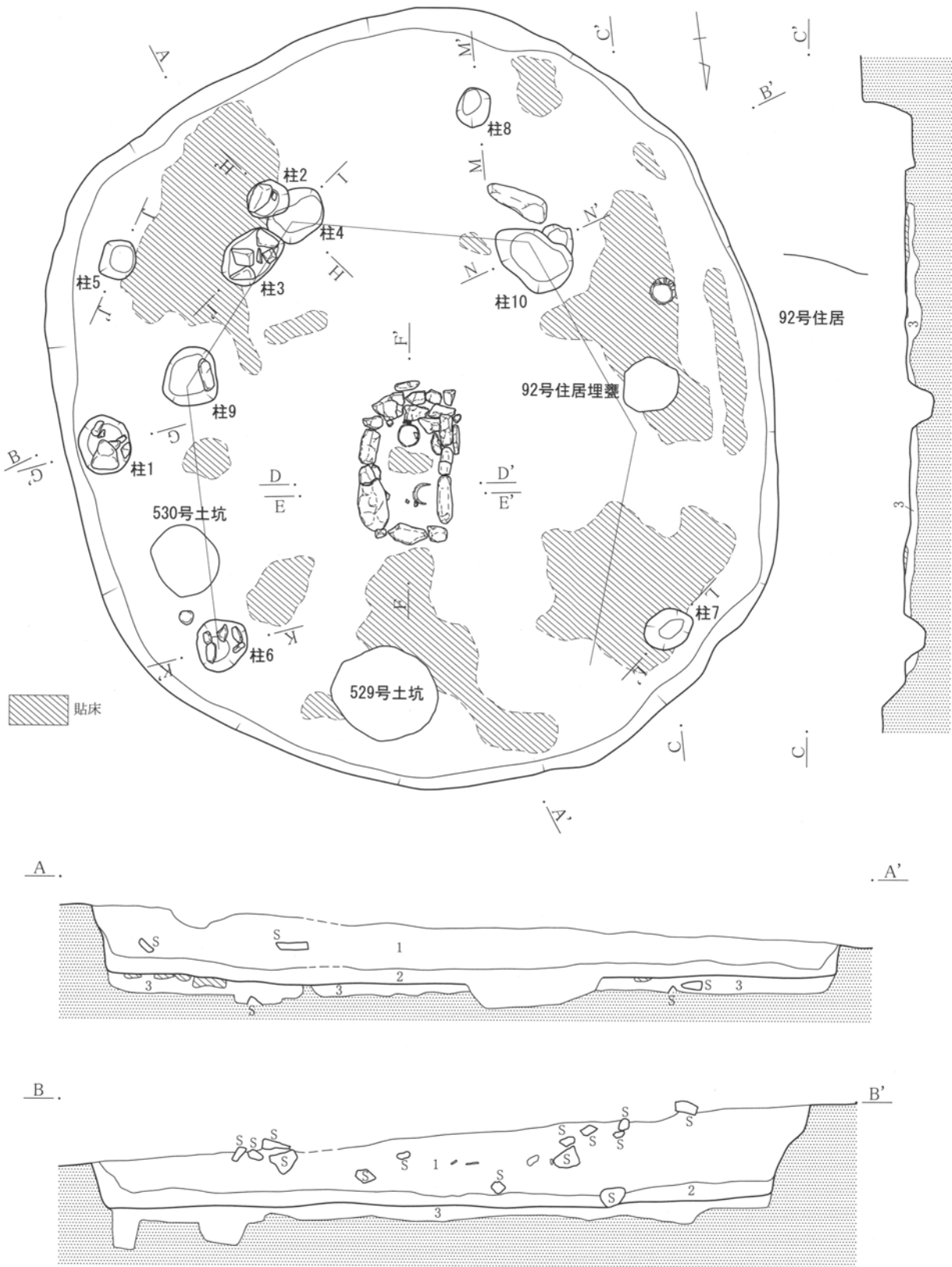
**床面** 黄色ローム質土を薄く引きならした貼り床が住居内各所に島状に施されているが、特に出入口口部と想定した炉の北側は明瞭に硬化していた。また、黄色ローム質土がない場所も床面が硬化している部分が多く見うけられた。床はほぼ水平に構築されており、丁寧な作りである。周溝は確認されていない。

なお、口縁部と胴下半部を打ち欠いた深鉢(20)が、柱10の西側の貼り床上に正位に置いた状態で確認された。土器は器面の劣化が著しく、被熱痕跡の有無ははっきりしないが、いずれかの石囲い炉に伴う埋設土器であったと見て間違いはない。

**炉** 長さ30～50cmほどの扁平な円礫と板状礫で組んだ土器埋設長方形石囲い炉で、住居長軸線上の中央よりやや北寄りに設置する。炉石は土圧のためかやや歪んではいるが、側縁を垂直に立てて設置しており、使用時の状況をよく留めている。規模は長辺125cm、短辺80cmで、炉石上端からの深さは20cmほどである。なお、炉石はいずれも変色・劣化・ひび割れ等の被熱痕跡を明瞭に留めていた。

炉内埋設土器は2つ設置されていた。1号埋設土器(1)は南側の長軸線中央に設置したもので、その周囲には小さな板状礫が敷き込まれていた。なお、埋設土器のすぐ南側に焼土化した部分があるが、この焼土は使用面一枚下の土層が焼土化したもので、住居廃絶時以前に一度炉改修しているものと判断した。1号埋設土器に使用されたのは越後系小形深鉢(1)で、胴下半部を打ち欠き、正位に設置されていた。口縁部の被熱痕跡は僅かであり、使用は短期であったと思われる。なお、この土器は器



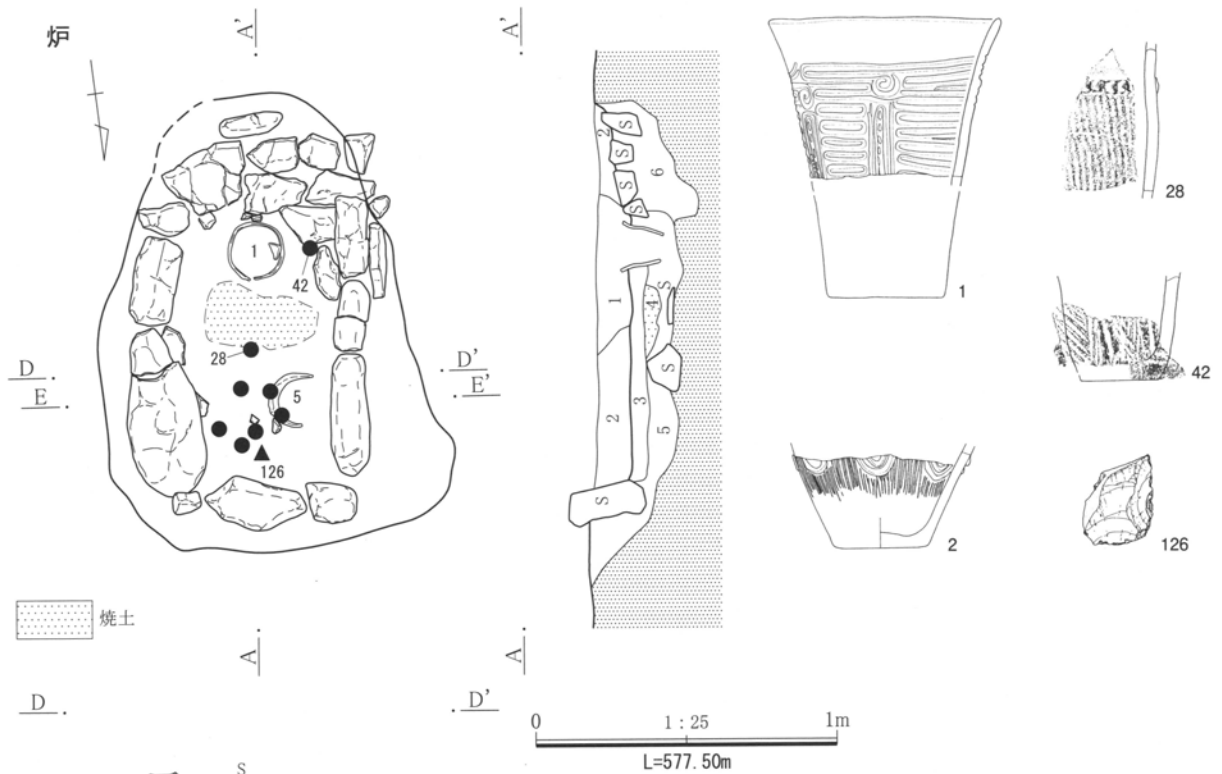


- 1、暗褐色土。炭化物と礫を多量に含む。
- 2、黒褐色土。炭化物を少量含む。やや粘性あり。
- 3、黒褐色土。硬質で貼り床の黄褐色土を含む。

0 1:50 2m  
L=578.10m

第49図 20区87号住居 (1)

第3章 発見された遺構と遺物



焼土

D.

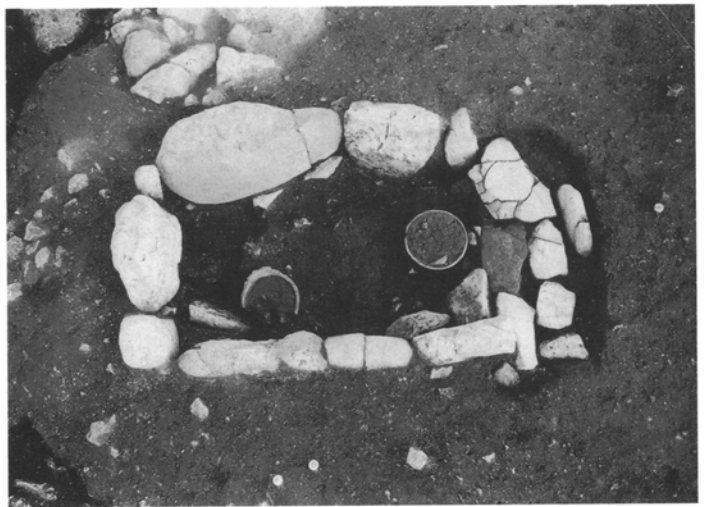
D'

0 1:25 1m  
L=577.50m

E.

E'

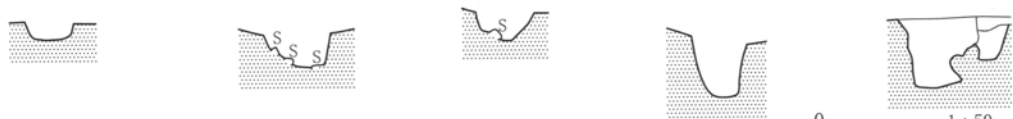
- 1、黒褐色土。焼土と炭化物を少量含む。
- 2、褐色土。焼土と炭化物を多く含む。
- 3、黒褐色土。焼土と炭化物を多量に含む。
- 4、焼土。
- 5、黒褐色土。粘性があり、礫を多く含む。
- 6、黒褐色土と地山土の混土。



G. 柱1 .G' H. 柱2・4 .H' I. 柱3・4 .I'

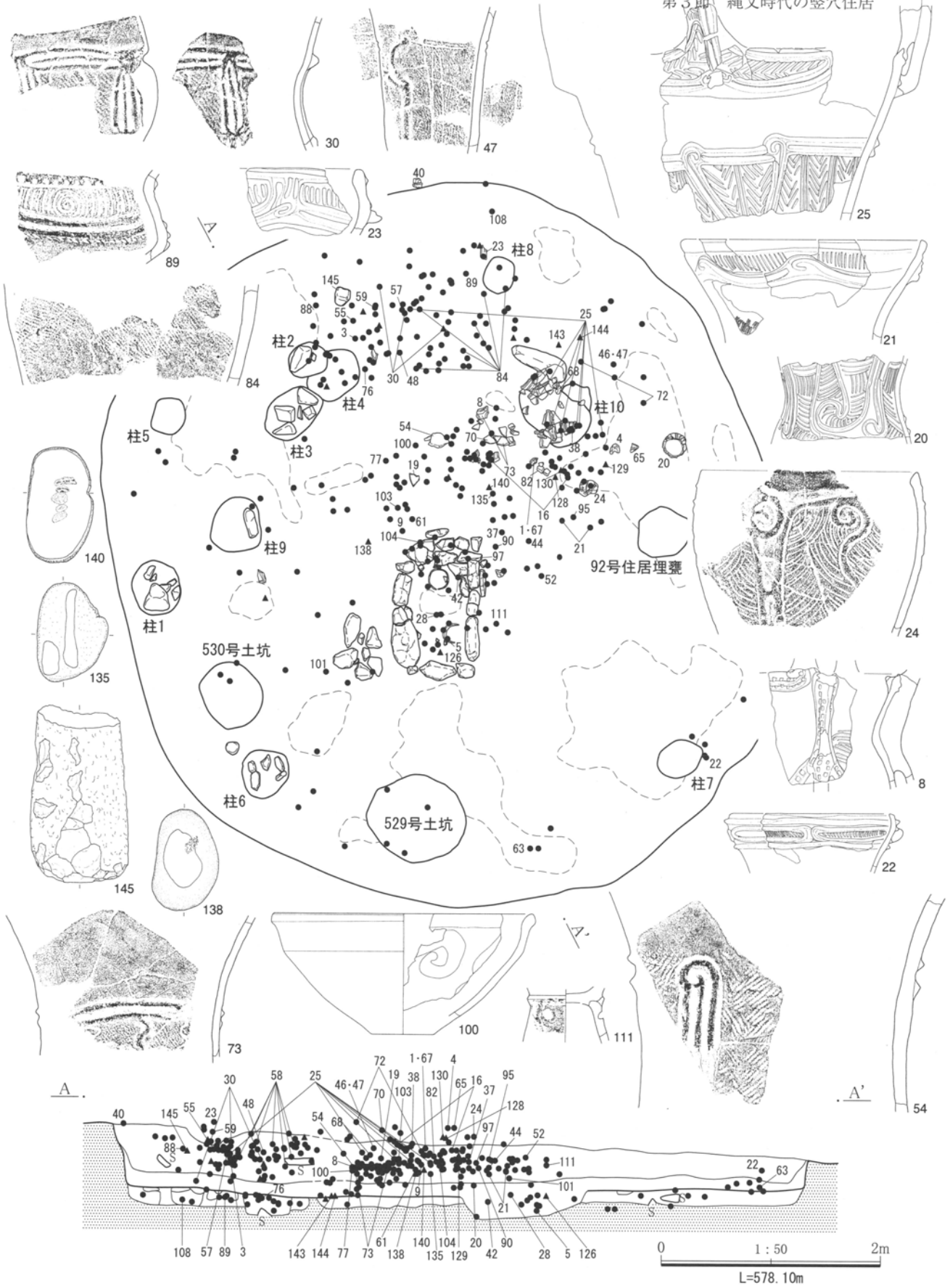


J. 柱5 .J' K. 柱6 .K' L. 柱7 .L' M. 柱8 .M' N. 柱10 .N'

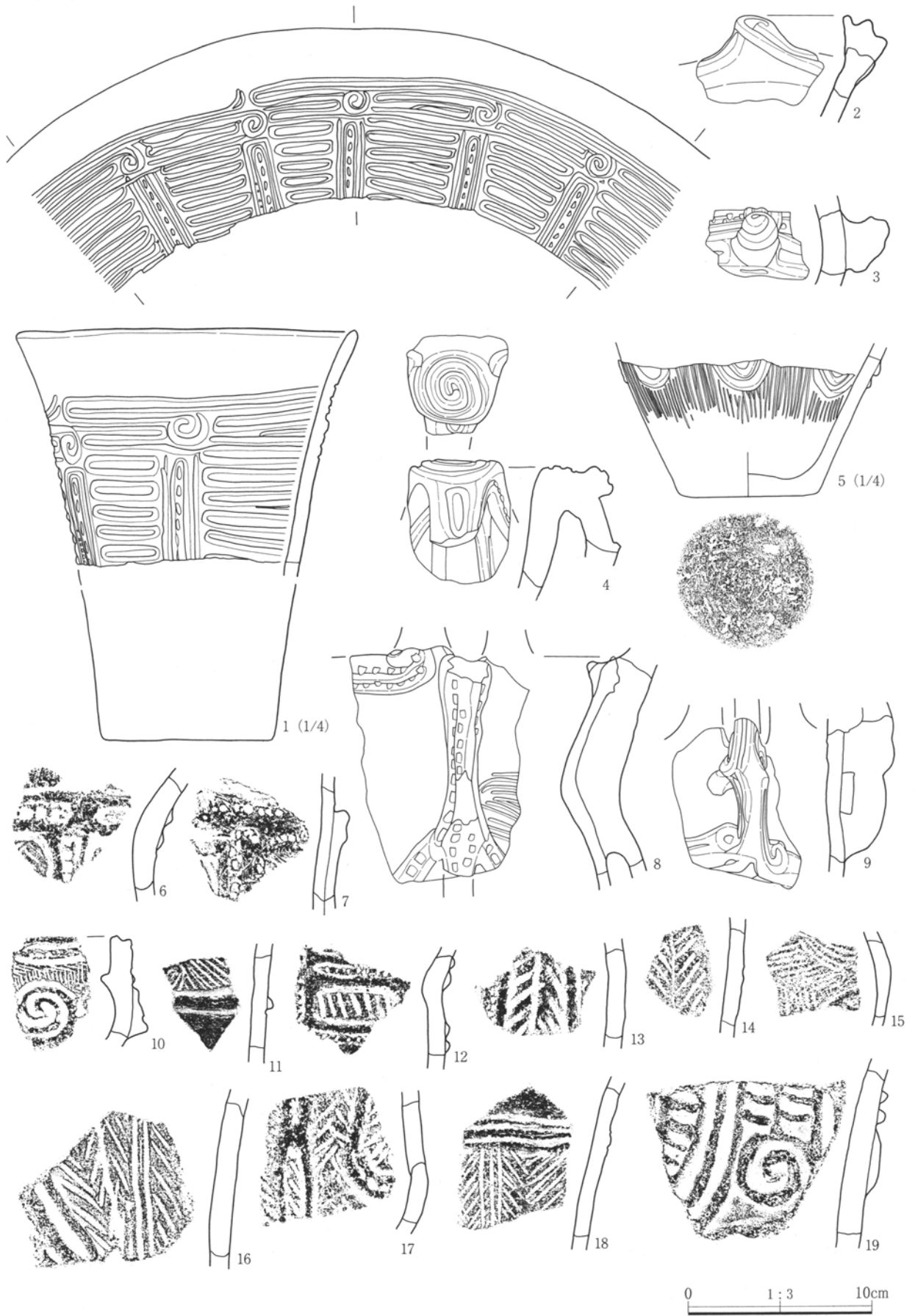


0 1:50 2m  
L=577.50m

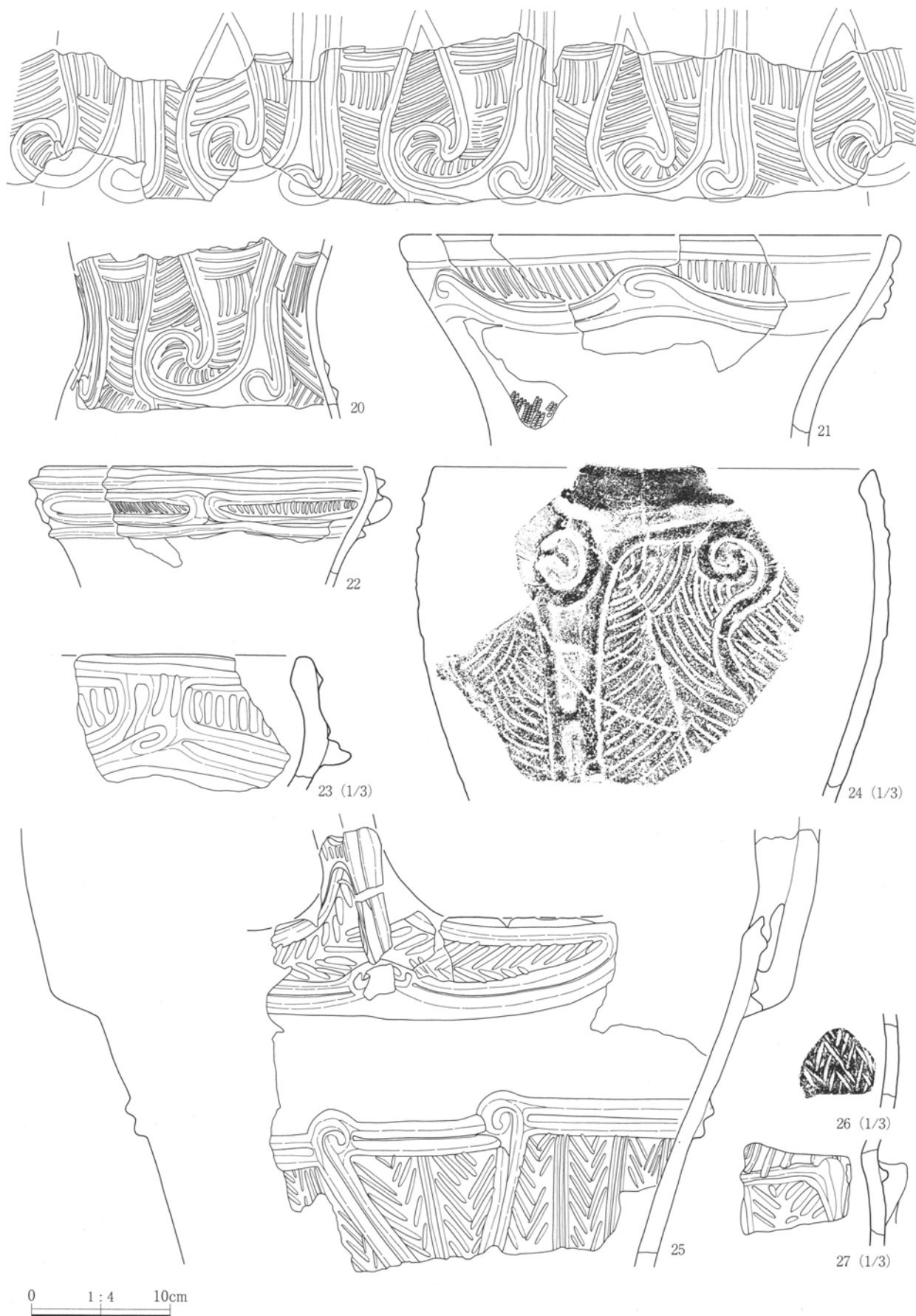
第50図 20区87号住居 (2)



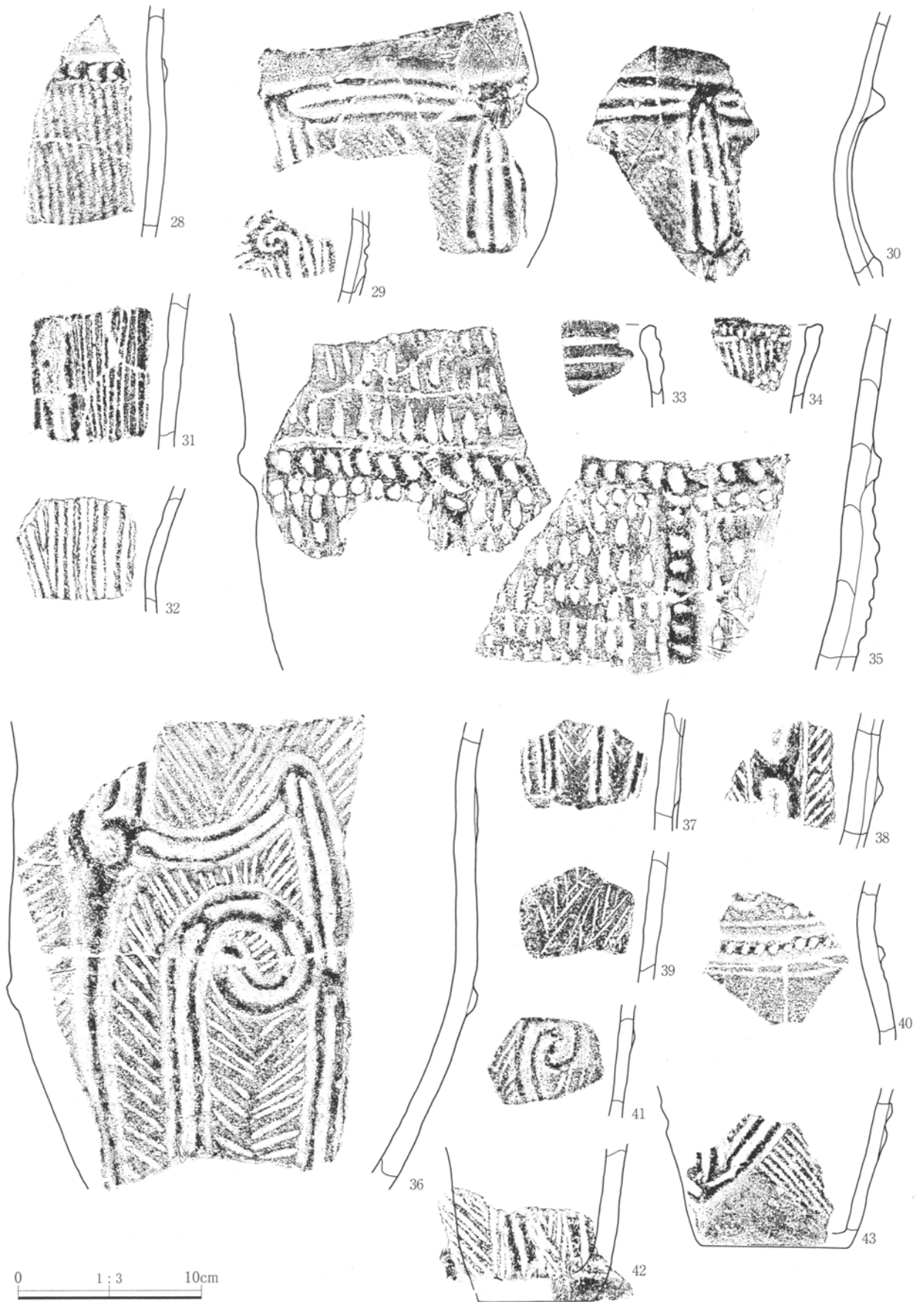
第51図 20区87号住居 (3)



第52図 20区87号住居出土遺物(1)



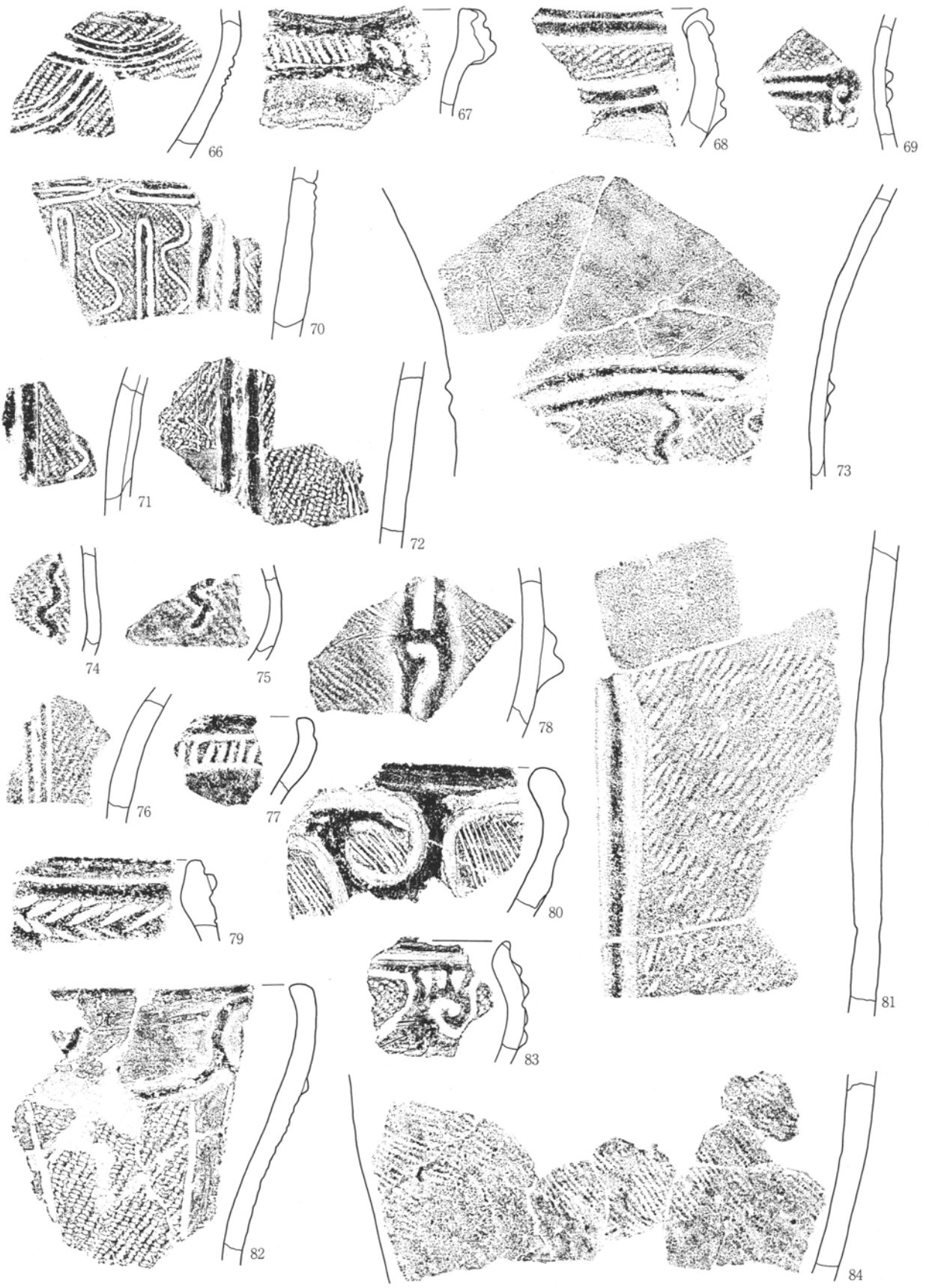
第53図 20区87号住居出土遺物(2)



第54図 20区87号住居出土遺物(3)



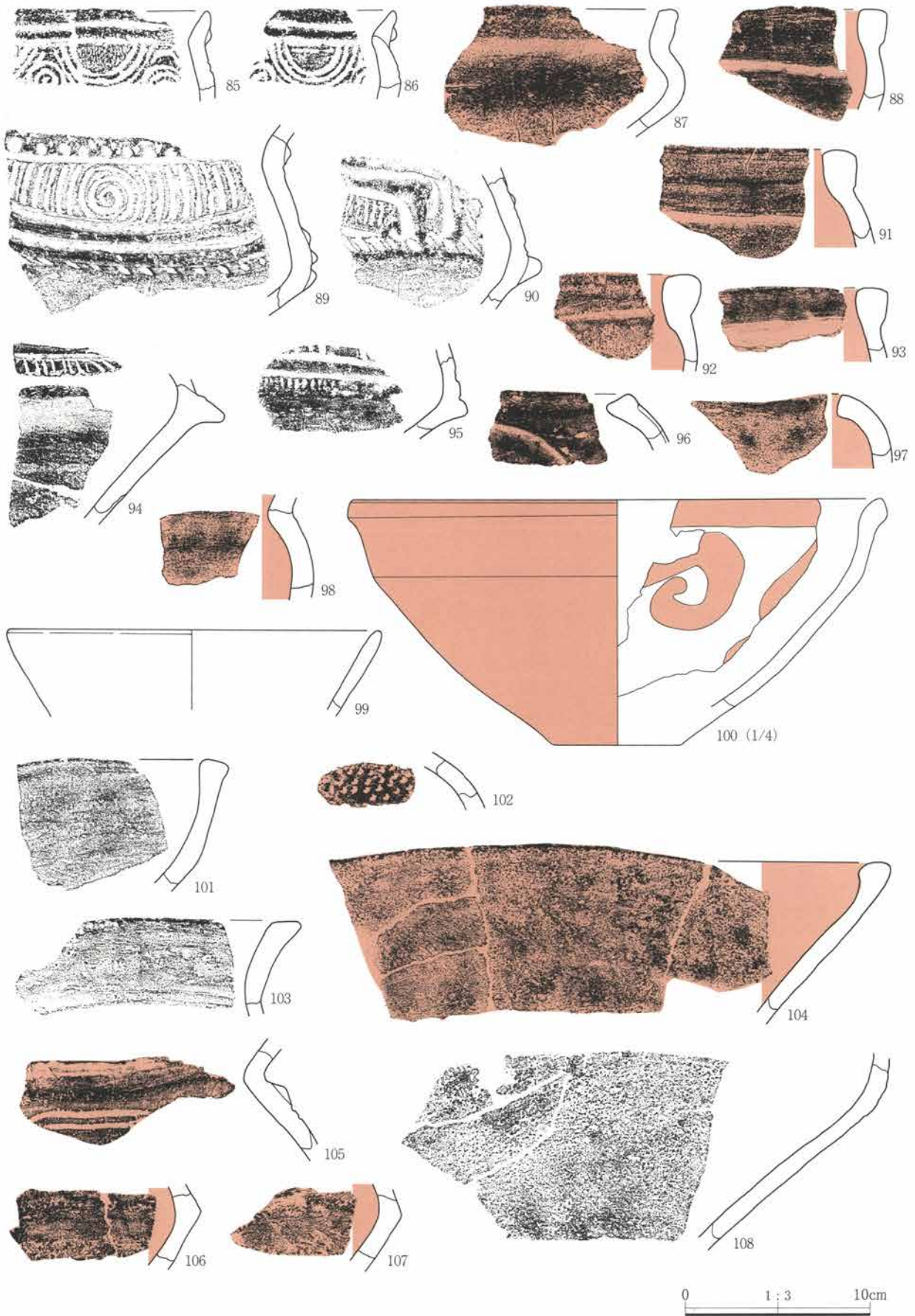
第55図 20区87号住居出土遺物(4)



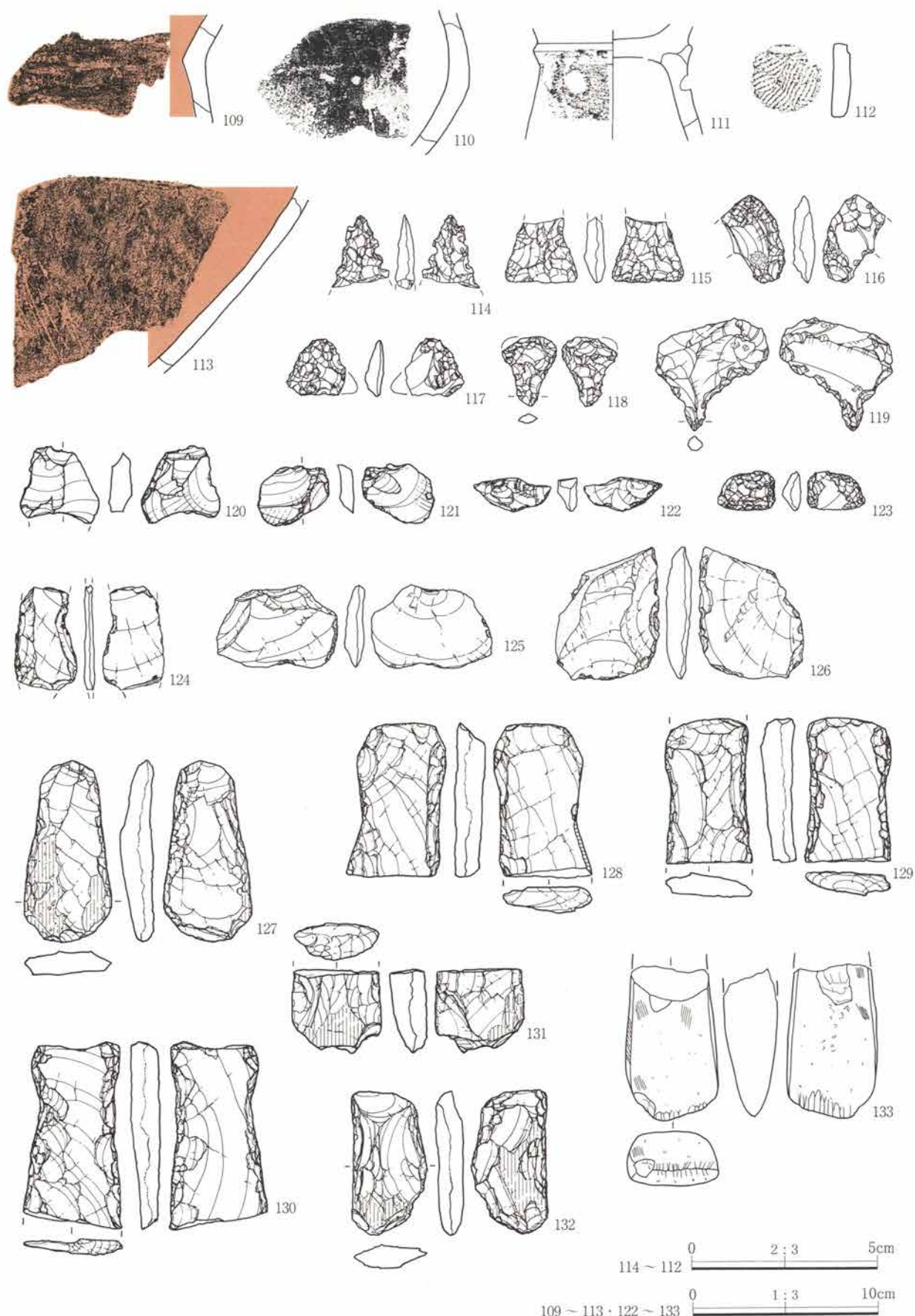
0 1:3 10cm

第56図 20区87号住居出土遺物(5)





第57図 20区87号住居出土遺物(6)

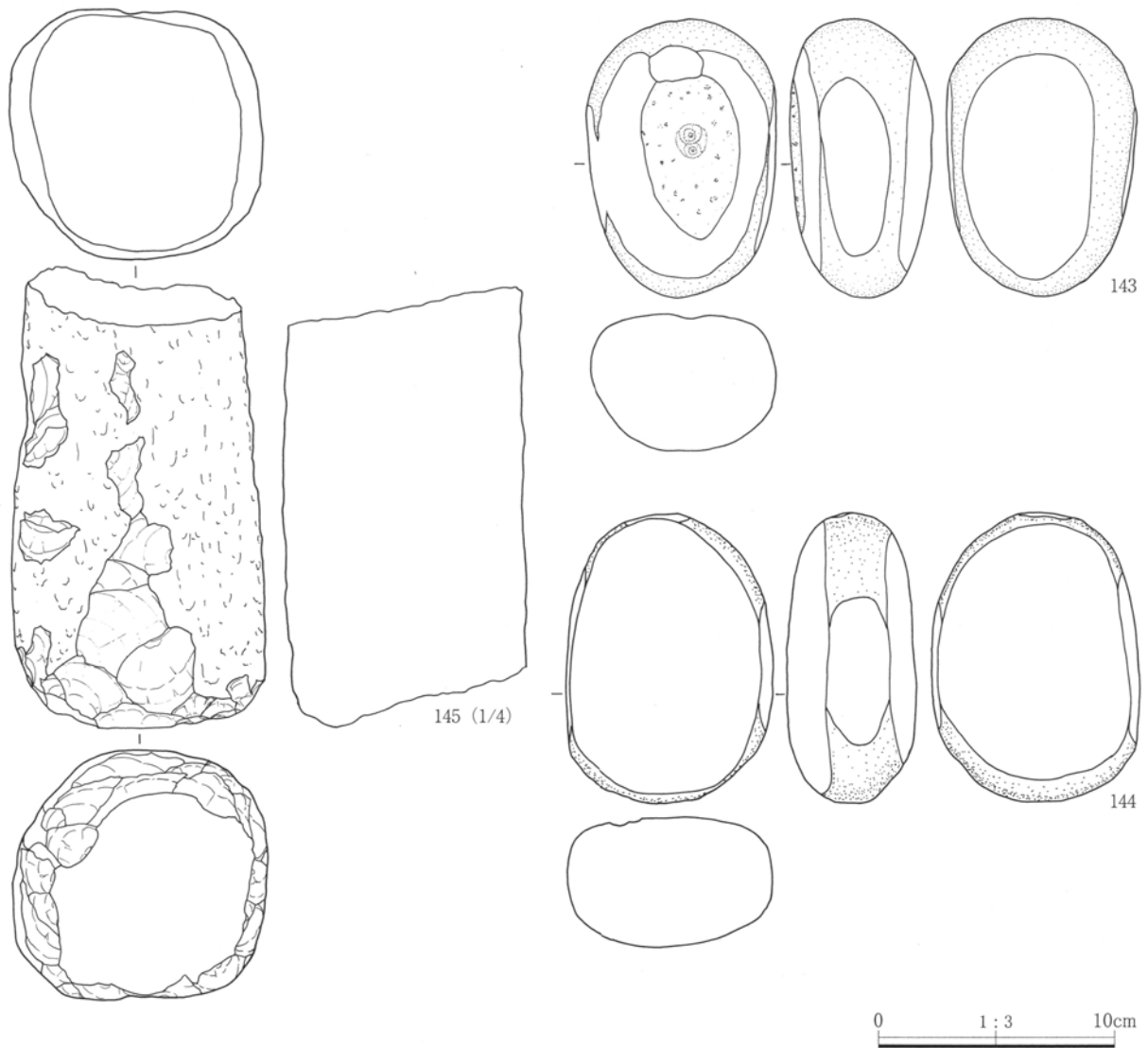


第58図 20区87号住居出土遺物(7)



0 1 : 3 10cm

第59図 20区87号住居出土遺物(8)



第60図 20区87号住居出土遺物(9)

形・文様のみならず、薄手のつくりと白色系の焼成においても本遺跡では異質な土器であり、搬入品の可能性がある。

2号埋設土器(5)は北側の中央より西側にずれて設置したもので、西側の炉石に寄りかかるように傾いた状態で検出された。使用された土器は信州系大型深鉢の胴下半部で、正位に設置されていた。露出していた上端部や内面に被熱痕跡は確認できない。炉内埋設土器を炉石に寄せて設置する場合、内側に傾けて設置するのが普通だが、本事例は炉石側に傾いており、被熱痕跡も認められないことから、疑念をもって写真・図面記録を精査したが、使用面

と判断した3層中に埋没しており、露出する土器上端部のレベルも1号と大差がないことから、炉内埋設土器と認定した。3層が埋没土であれば、2号埋設土器は覆土中の遺物となる。

柱 穴 合計10本の柱穴が認められた。これらは壁際に位置する柱6・1・5・8・7の5本と、内側に位置する柱9・3・2・4・10の5本に別けられる。いずれも全ての柱穴が確認できてはいないが、これらは改築を伴う2段階の柱穴に相当するであろう。

規模(長辺×短辺×深さ)は、柱1：50×43×36、柱2：34×34×24、柱3：58×40×20、柱4：51×

一×43、柱5：34×30×11、柱6：43×42×2、柱7：43×33×29、柱8：32×27×40、柱9：49×47×19、柱10：70×47×46である。

**遺物** 遺物の多くは覆土中の礫群と共に出土している。土器は総数1,168点が出土しており、主な土器は加曾利E2式が157点、加曾利E1式と勝坂式がともに50点、曾利式古段階が29点、加曾利E3式が26点、焼町土器が24点、阿玉台式が7点のほかに、前期土器が18点、晩期土器が7点である。

図の1と5は炉内埋設土器で、1が1号、5が2号である。26・42は炉内出土である。20は唐草文系の深鉢で、柱10の西側にある貼り床面に置いた状態で出土した。口縁部と胴下半部を打ち欠いてあり、器面は被熱で劣化している。おそらく炉内埋設土器として使用されていたものであろう。この地点は92号住居と重複する場所でもあり、北側70cmに92号住居の出入り口部埋甕が接近している。判断が難しい。なお、浅鉢100は内面に赤色塗彩で渦巻き文様が描かれている。

石器は石鏃2点、石鏃未製品11点、石錐2点、削器5点、加工痕ある剥片7点、打製石斧10点、磨製石斧1点、磨石7点、台石1点、砥石4点、石棒1点のほかに、石核3点（桂質変質岩類3点）、剥片188点（黒曜石109点、桂質変質岩類33点）碎片442点（黒曜石438点）が認められた。

本住居も、黒曜石の剥片・碎片が多量に出土している。石棒143は長さ23cm、直径12cmほどの欠損品で、荒割り後の全面敲打による成形段階で断念している。本遺跡内で石棒が製作されていたことを示す資料となる。なお、石棒に被熱等の痕跡は認められない。

**時期** 炉内埋設土器の位置付けはむずかしいが、出土土器は加曾利E2式期新段階を主体としており、本住居は当該期に比定しておきたい。

## 20区88号住居

**調査年度** 平成15年度

**位置** E-12グリッド

**経過** 攪乱深度の深い地区であり、覆土の大半を攪乱されて出土遺物も僅かだが、かろうじて石囲い炉が残っていたことで、住居と認定できた。

**重複** 周囲に住居・土坑が隣接するが、切り合う遺構は確認されていない。

**形状** テストトレンチで破壊した部分以外は、壁が全周する。平面形状は円形で、規模は直径4.5m、確認面からの深さは山側で15cmほどである。

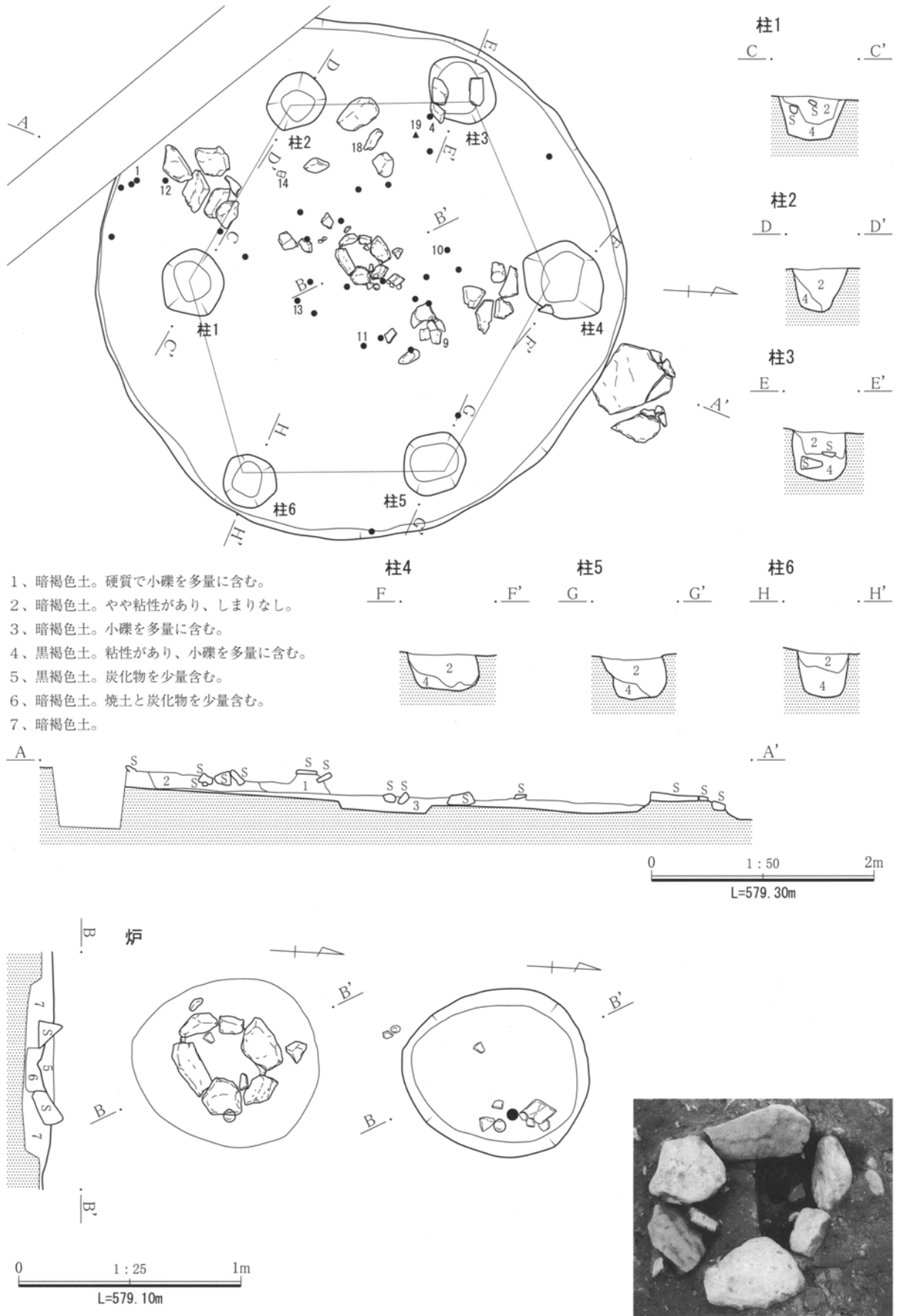
**床面** ほぼ平坦な床面が構築されており、貼り床はないが、柱穴より内側ではやや硬化した床が認められた。

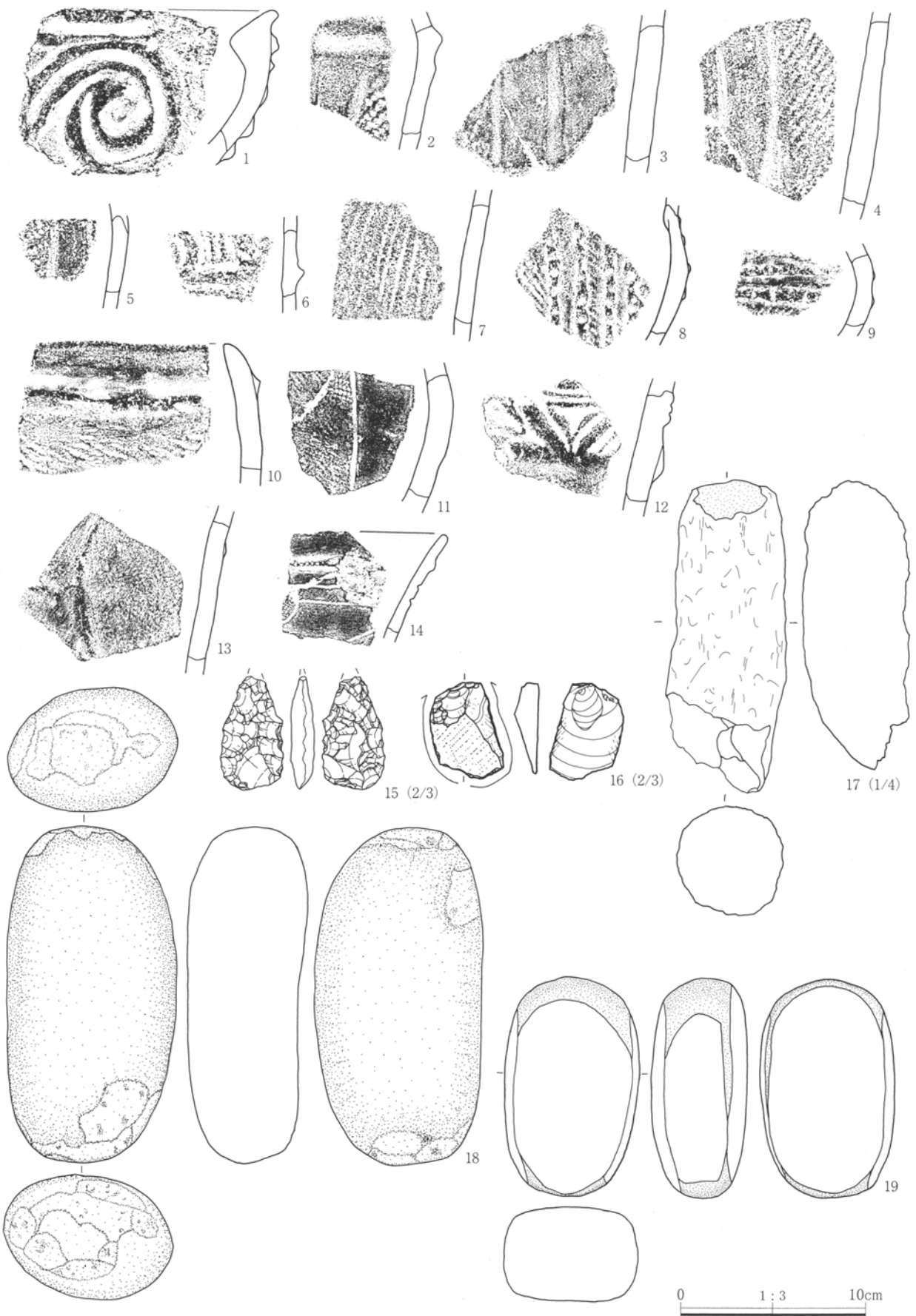
**炉** 不定形な扁平礫6枚で組んだ方形の石囲い炉で、住居のほぼ中央に設置している。炉石は斜めに傾斜しており、そのうちのいくつかは上方から押されて倒れているものもある。規模は、現状で48cm、短辺43cmほど、炉石上端からの深さは15cmほどである。炉内の埋土には焼土と炭化物の混入が僅かに認められたが、使用面に焼土はなく、炉石の被熱痕跡も不明瞭である。

**柱穴** 6本の柱穴が亀甲形に配置された状態で確認された。規模(長辺×短辺×深さ)は、柱1：58×55×39、柱2：53×47×38、柱3：66×58×44、柱4：82×62×34、柱5：56×53×37、柱6：48×46×41である。

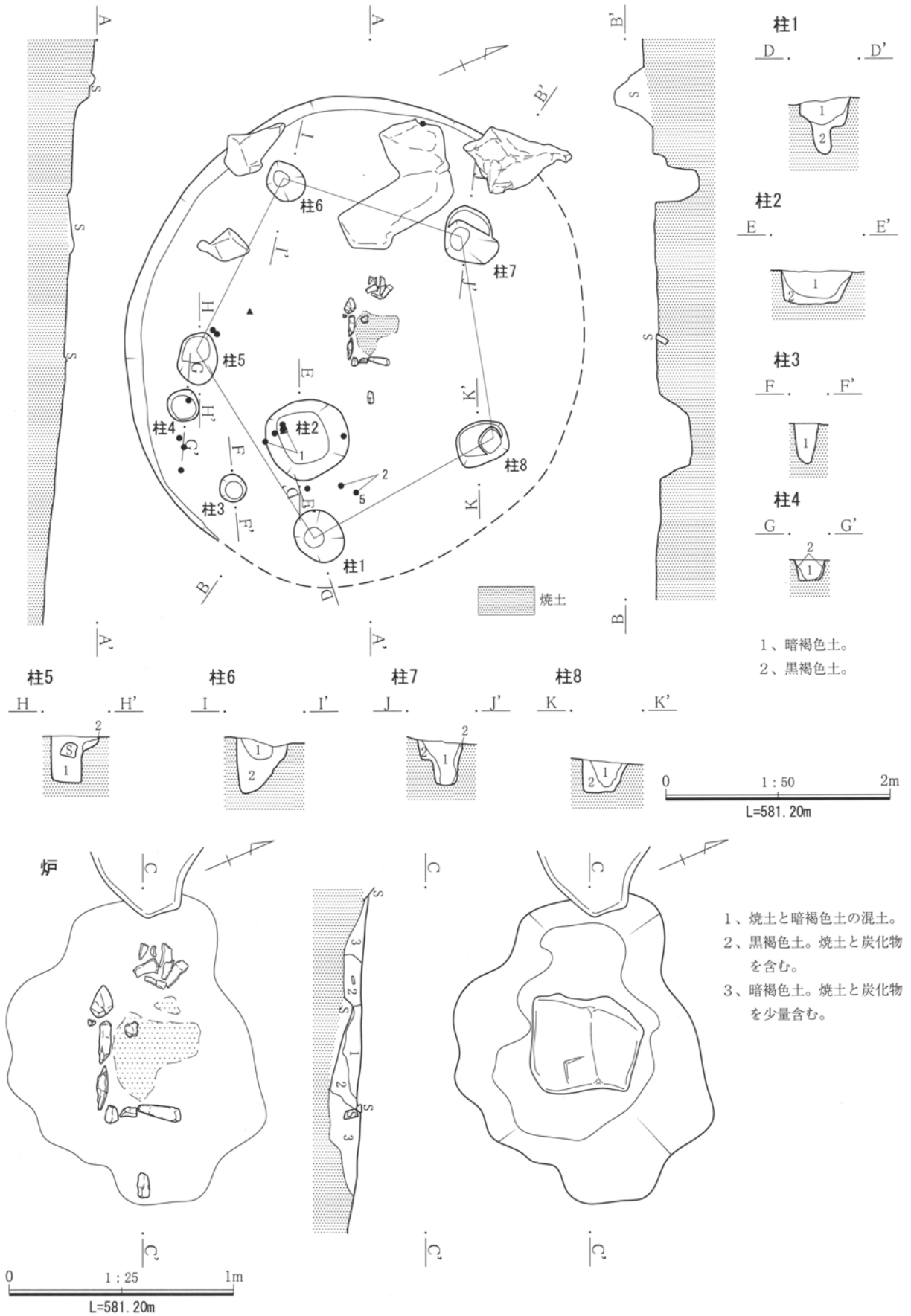
**遺物** 床面からやや浮いた状態で、礫と少量の遺物が出土した。土器は総数148点と少なく、主な土器は加曾利E3式が8点、唐草文系新段階が5点、勝坂式が4点、加曾利E4式が2点、加曾利E1式が1点のほかに、後期堀之内式9点、晩期1点がある。

石器は石鏃1点、石鏃未製品1点、使用痕ある剥片2点、敲石1点、磨石1点、石棒1点のほか、石核1点、剥片10点（黒曜石9点）、碎片18点（黒曜石18点）がある。石棒は緑泥片岩製の未製品で、端部の一方に自然面が残り、もう一方は欠損している。大きさは長さ22cm、直径8cmほどで、荒割り後の荒い敲打の段階で中断している。被熱痕跡等は認められない。





第62図 20区88号住居出土遺物



第63図 20区89号住居





第64図 20区89号住居出土遺物

**時期** 本住居では、住居内および壁外に散在する板石が多く認められた。板石は柄鏡形敷石住居でよく使われる礫で、本住居の北側壁外にも1枚の板石が敷かれた状態で認められた。この板石は、床面から10cmほど高いレベルに水平に敷かれており、しかも柄鏡形住居の柄の方向と一致する。また、本住居は時期認定の決め手となるような遺物を欠いており、覆土中からは加曽利E4式土器や後期堀之内式土器が出土している。しかし、当遺跡の中期末～後期の柄鏡形（敷石）住居の炉は、全て扁平礫を立てて方形にきっちり組んだ石囲い炉を持っており、本住居の炉とは形態が明らかに異なっている。この理由により、本住居は加曽利E3式期新段階に比定する。

#### 20区89号住居

**調査年度** 平成15年度

**位置** J-7グリッド

**経過** 地山が高く、攪乱深度が深い地区であり、覆土の大半を削平されていたが、炉がかろうじて残っていたことから、住居と認定できた。西側の地山中には大きな礫が含まれており、その一部は床や

壁から露出していたと想定した。

**重複** 重複する遺構は見当たらない。

**形状** 谷側にあたる北東側の壁は削平されていたが、山側の壁は半周しており、平面形は円形であったと考えてよい。規模は直径4.3mほどで、確認面からの深さは山側で15cmほどである。

**床面** 山側から緩やかに傾斜するが、ほぼ平坦な床面を構築している。硬化面は認められないが、炉辺を中心に炭化材の小片や炭化物の散布が認められた。

**炉** 長さ10～20cmの扁平礫の側縁を立てて方形状に組んだ石囲い炉で、住居のほぼ中央に設置する。炉石は半分強を失っていたが、幸い焼土が明瞭に残っており、その状況から平面形状は東西にやや長い長方形であったと想定される。なお、炉の焼土面直上から、小型の深鉢（2）が纏まって出土している。

**柱穴** 合計8本が確認されたが、主柱は柱1・5・6・7・8の5本か、あるいは柱2・6・7・8の4本であろう。前者は不正五角形であるが、北側から見ると整った配置になる。後者は柱6と7が不均等だが、地山の大型礫を避けた結果だとすれ

### 第3章 発見された遺構と遺物

ば、炉の形状に合致した配置だと言えよう。

規模(長辺×短辺×深さ)は、柱1：49×41×50、柱2：72×69×30、柱3：25×24×35、柱4：28×27×18、柱5：46×35×41、柱6：35×32×48、柱7：50×48×40、柱8：46×36×29である。

**遺物** 覆土下層から少量の遺物が出土している。土器は総数31点と少なく、主なものは曽利式古段階が7点、加曽利E1式が5点であった。石器は石鏃1点、石鏃未製品が1点、石錐が1点のほかに、剥片6点(黒曜石3点)、碎片4点(黒曜石4点)である。

**時期** 炉直上出土の土器をはじめ、出土土器は加曽利E1式期新段階主体としており、本住居は当該期に比定されよう。

#### 20区92号住居

**調査年度** 平成15年度

**位置** D-14グリッド

**経過** 重複する87号住居の確認調査に伴って、その西側にも多量の礫と遺物が集中する地点があることが判明した。調査を進める中で、この地点の土器が87号住居の土器より新しいこと、出土範囲が1軒の住居としては大きすぎるなどから、2軒重複を念頭に進めることになった。最終的には、それぞれの住居に伴う炉の確認をもって92号住居と認定された。また、87号住居の範囲で埋甕が確認された。本遺跡のこれまでの事例では、埋甕は東側に位置するものが多く躊躇したが、使われていた土器の時期と確認面のレベルから、当住居に伴うものと判断した。

なお、北側は平成14年度調査区にかかるが、その時点では住居の存在が不明だったため、記録は残っていない。

**重複** 南東側を大きく87号住居と重複し、これを切る。

**形状** 山側にあたる南西部で、壁と思われる立ち上がりを部分的に確認したが、その他の地点では確認できなかった。埋甕の位置を考慮すれば、かなり

大型の形状を考えてもよいだろう。ちなみに、炉の中央から埋甕までの距離は3.5mであり、直径7～8mの住居が想定される。

**床面** 炉の周囲では平坦に構築された床が確認され、一部で黄色土を敷いた貼り床も認められた。周縁部では明瞭な床面は確認できなかったが、ほぼ水平な造りであったと思われる。

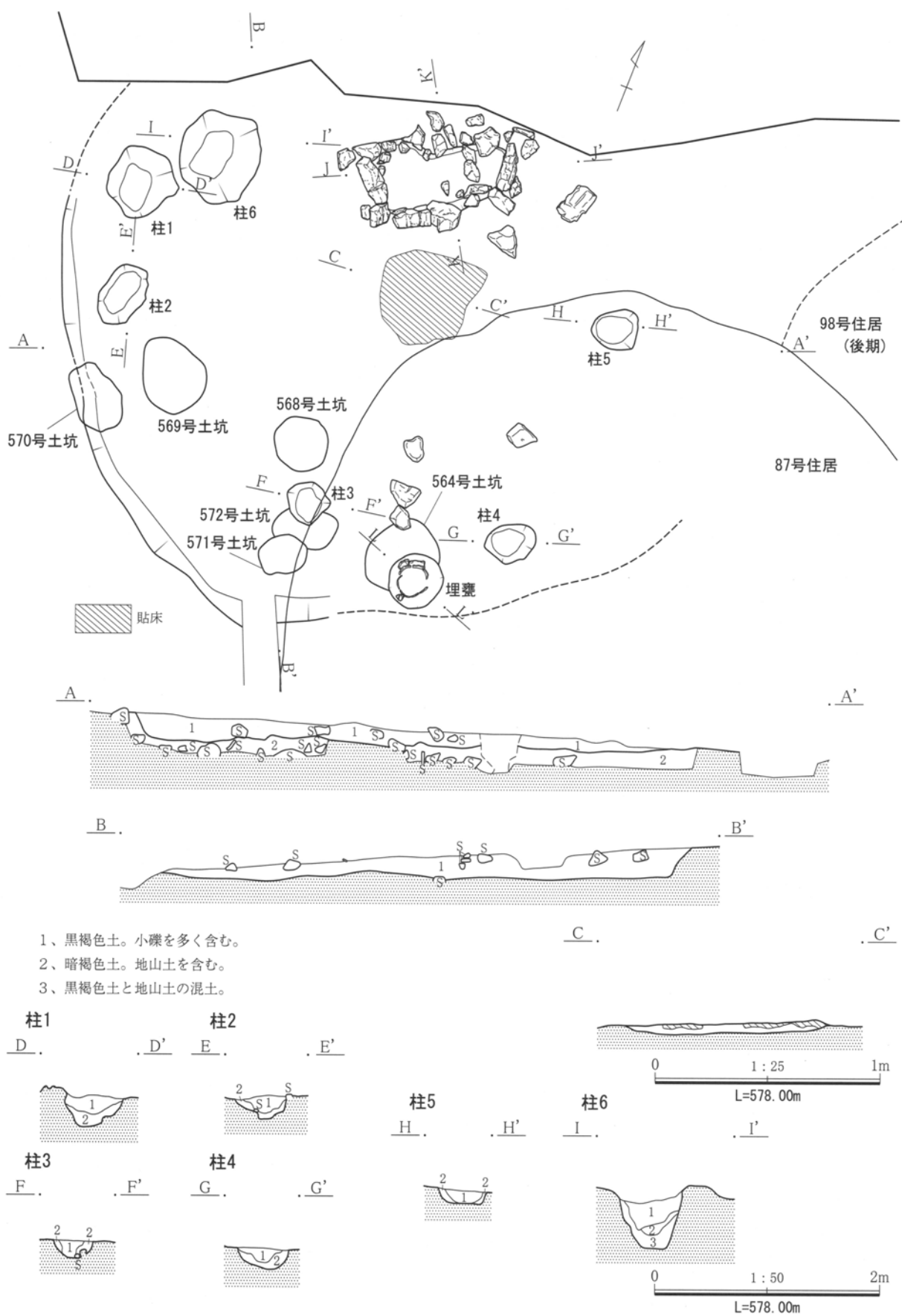
**柱穴** 6本の柱穴と、その後の最終確認で6基の土坑が確認された。土坑についてはまだ十分な吟味を加えていないが、規模その他からみて柱穴の可能性が高いと言えよう。柱穴の配置は判然としないが、炉からの距離が共通するものもあり、立て替えの可能性も考えられる。

規模(長辺×短辺×深さ)は、柱1：62×60×36、柱2：56×39×11、柱3：39×37×12、柱4：40×37×20、柱5：41×37×16、柱6：80×72×57である。

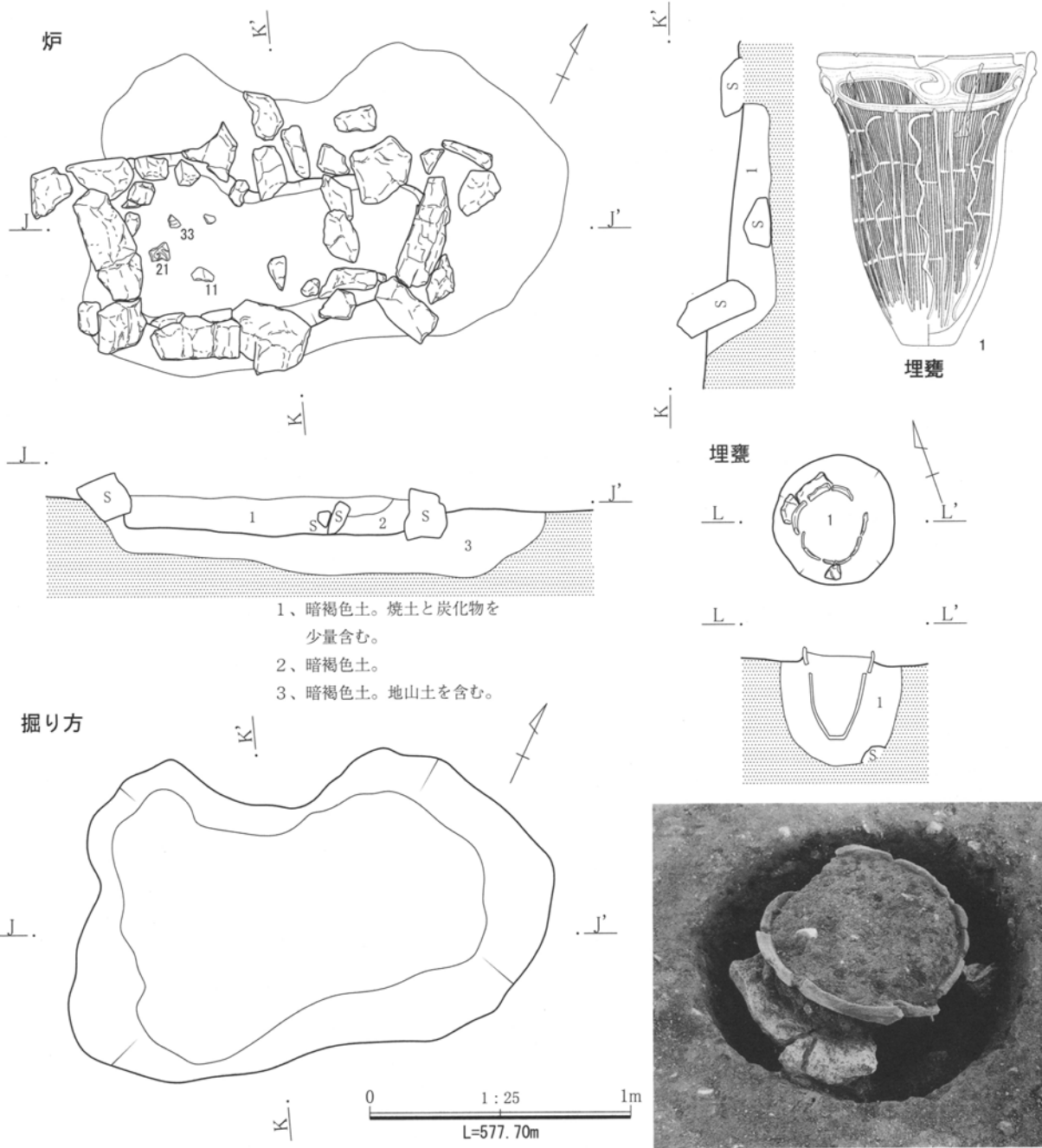
**炉** 大型の扁平礫4石で組んだ方形石囲い炉であろうと思われる。この地区は地山に多量の礫を含んでおり、大型の礫は床面に露出するものもある。炉の周囲にも礫が多く、組んだ炉石と地山礫が混在していた。そのため、調査時の記録は明確な区別なく、長方形の大きな石囲い炉に見えるが、検討の結果、東側半分の大型礫は地山の礫も含んでおり、西側の半分が組んだ炉石と判断した。貼り床は、炉の南側に位置することになる。

**埋甕** 炉の南側3.5mのところ確認された。この地点は87号住居のなかにあるが、確認された面は炉辺の床面レベルと一致している。使用された土器は、口縁部から底部まで完存する加曽利E1式系の中型深鉢(1)で、正位に埋設されていた。埋甕内および掘り方から特に共伴と思われる遺物等は確認できなかったが、埋設時に頸部付近に扁平礫が一つあてがわれていた。

なお、当遺跡の事例では、出入り口部の埋甕は東側か南側に位置するものが多いが、今回報告の20区107号住居も山側にあたる南側に位置している。ちなみに、当住居の埋甕は石囲い炉の主軸線上からや



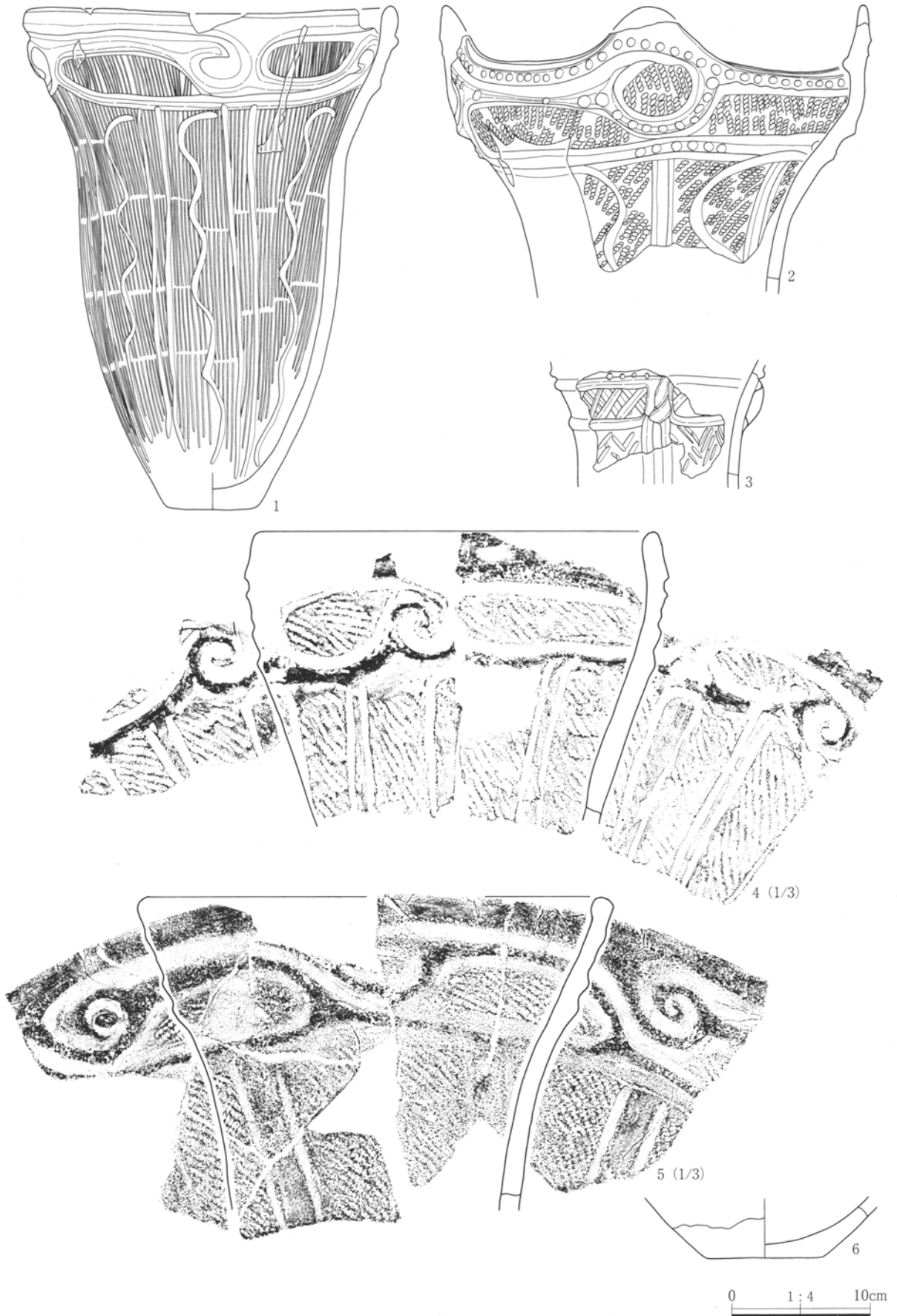
第65図 20区92号住居 (1)



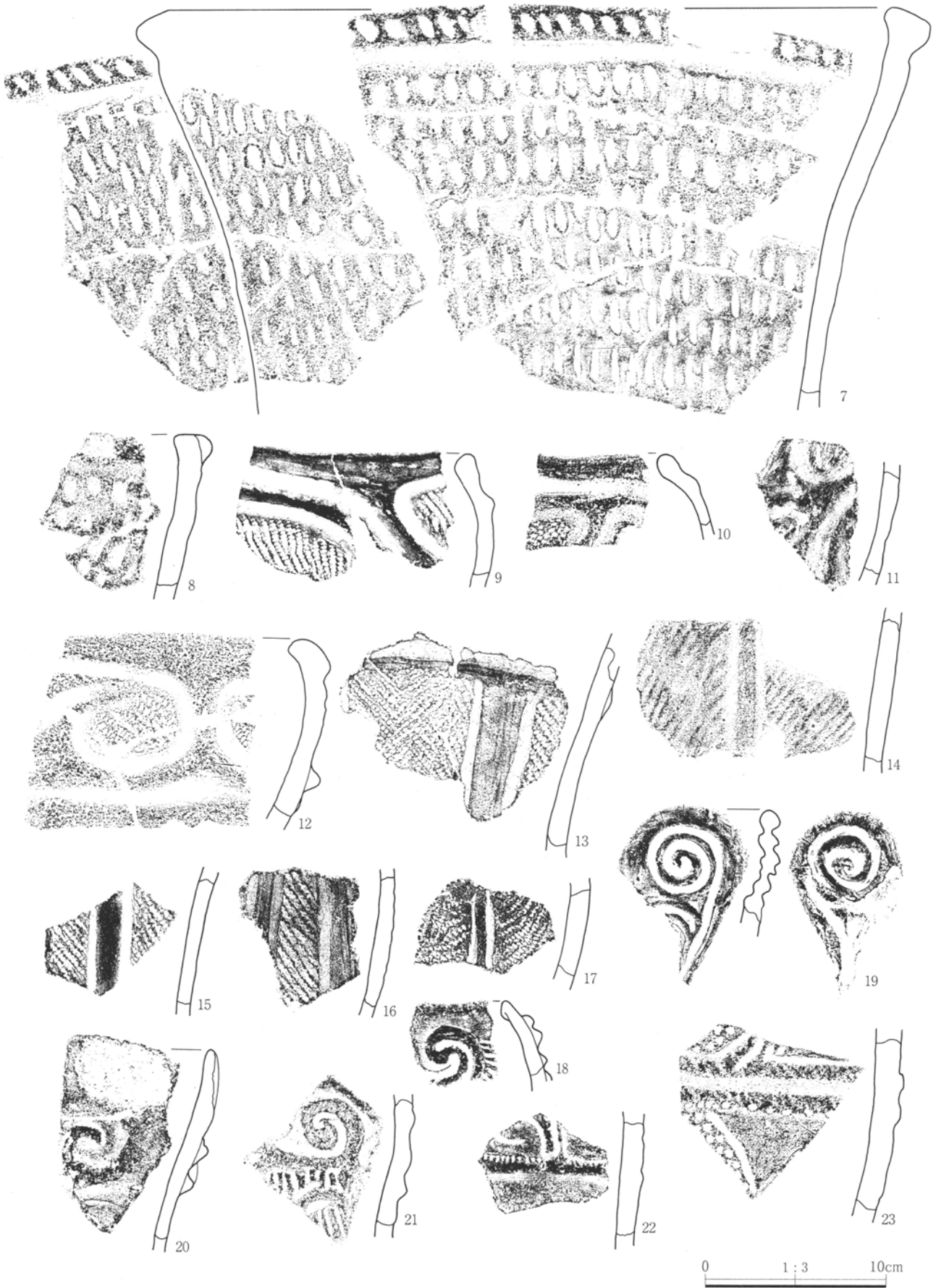
第66図 20区92号住居 (2)



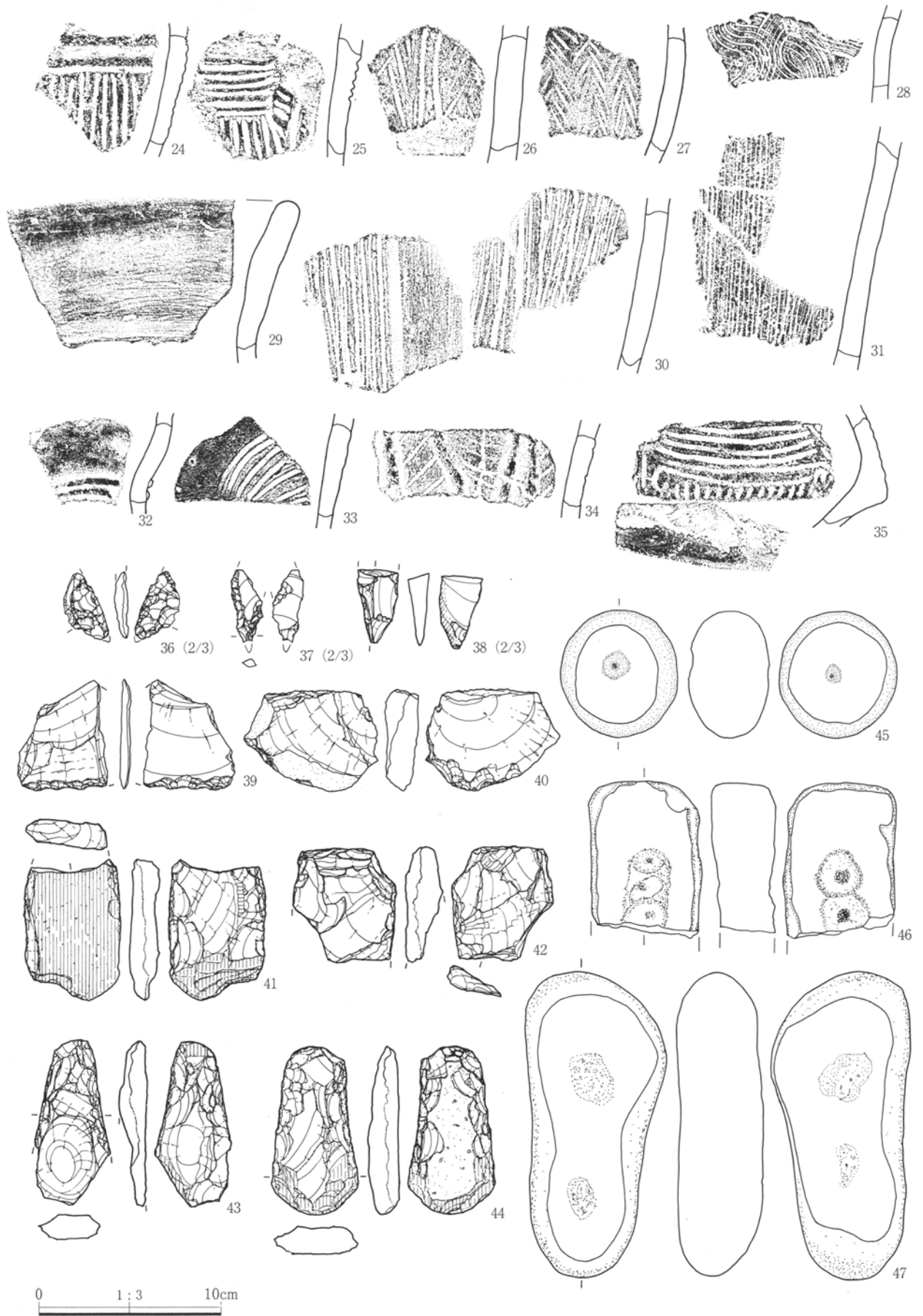
第67図 20区92号住居 (3)



第68図 20区92号住居出土遺物(1)



第69図 20区92号住居出土遺物(2)



第70図 20区92号住居出土遺物(3)



や西側にずれているが、炉と貼り床の主軸上に位置することになる。

**遺物** 出土遺物の大半は、炉の南西側覆土中から多量の礫とともに出土した。土器は総数277点が出土している。主な土器は加曽利E3式が78点、唐草文系新段階が66点で、ほかに曾利式古段階が5点、加曽利E2式が3点などがある。なお、主要土器の2・3・4・5・7はいずれも覆土中から多量の礫とともに出土したもので、同時に廃棄されたものであろう。

石器は石鏃未製品が2点、削器が2点、加工痕ある剥片が3点、打製石斧が4点、磨石が3点があり、他に石核1点（珪質変質岩類1点）、剥片36点（黒曜石33点）、碎片58点（黒曜石56点）がある。

**時期** 埋甕と主要土器は加曽利E3式中段階に比定される土器であり、本住居も当該期に比定されよう。

## 20区93号住居

**調査年度** 平成15年度

**位置** I-14グリッド

**経過** 平成13年度に発掘調査した72号住居の南半部を確認中に、新たに石囲い炉が発見され、住居と認定された。

**重複** 北側の大半を72号住居と重複し、これを切る。

**形状** 山側にあたる南半部で、円形状にめぐり立ち上がりが確認された。地山が大きな礫を含んで乱れており、明確な壁面は検出できていないが、炉の位置との関係からみても、この立ち上がりを壁と考えてよいだろう。北半部は平成13年度の調査部分になるが、当住居の立ち上がりは未確認である。

**床面** 炉のレベルを基準に床面を精査したが、地山の大型礫が露出する部分が多く、明瞭な床は確認できなかった。

**炉** 大きな板石と扁平な円礫4石と根詰め石で組んだ方形石囲い炉で、住居の中央に位置するものと思われる。規模は長辺50cm、短辺45cmで、炉石上

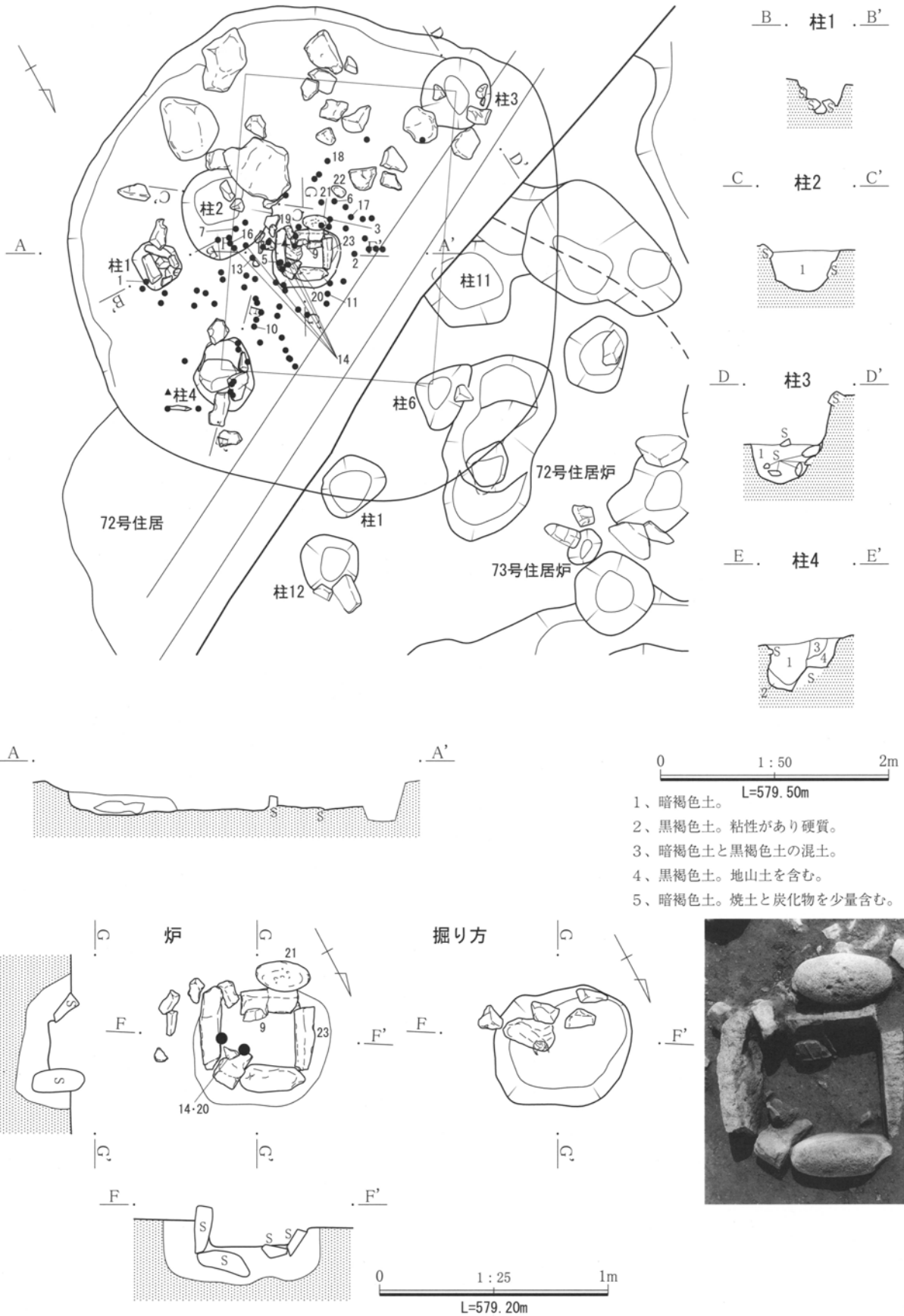
端からの深さは15cmである。炉内に焼土は残っていないが、炉石には煤が付着し、変色・劣化等の被熱痕跡が明瞭に残る。炉石は、厚手の2石は側縁を垂直に立てて設置し、薄手の2石はやや傾けて設置している。使用時の状況をよく留めている。なお、南西側の炉石に接して、紡錘形の円礫を利用した多孔石(21)が置いた状態で出土している。

**柱穴** 平成15年度調査範囲で4本の柱穴を確認した。平成13年度調査範囲も含めて検討した結果、1本は未検出だが、図のように柱1・3・6をつなぐ長方形配置を想定した。

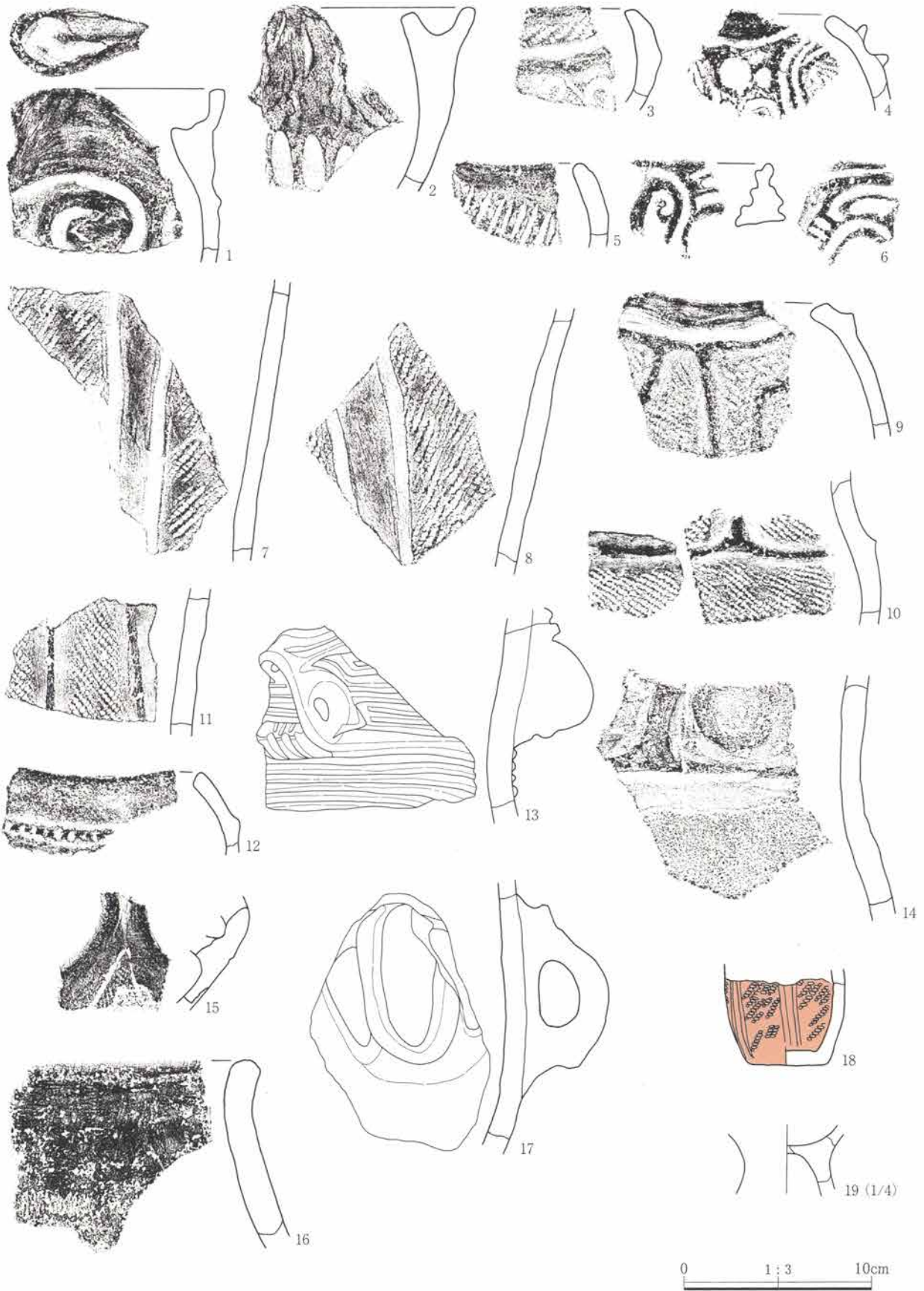
規模(長辺×短辺×深さ)は、柱1：41×37×28、柱2：80×79×39、柱3：66×58×76、柱4：62×52×46、柱6：64×44×20、柱11：73×-×58である。

**遺物** 覆土中を中心に少量の遺物が出土した。土器は総数127点が出土しており、主な土器は加曽利E3式が37点、唐草文系新段階が8点であり、ほかに焼町土器が4点、加曽利E1式が2点ある。石器は打製石斧1点、磨石1点、丸石1点、砥石1点、多孔石1点のほかに、剥片5点（黒曜石4点）、碎片4点（黒曜石4点）が認められた。このうち、多孔石(21)は炉石に接して出土している。

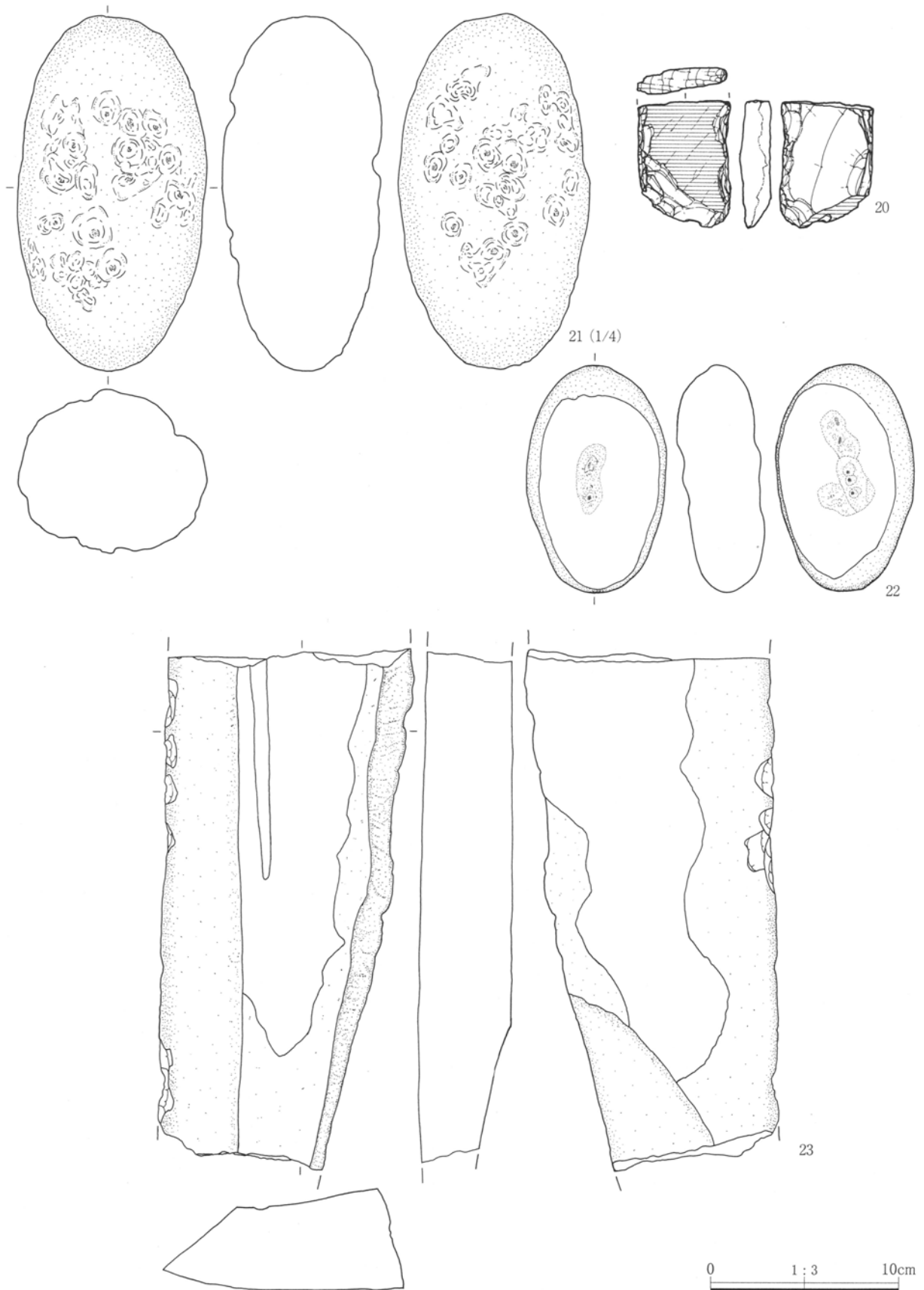
**時期** 出土時は加曽利E3式期中段階を主体としており、本住居は当該期に比定されよう。



第71図 20区93号住居



第72図 20区93号住居出土遺物(1)



第73図 20区93号住居出土遺物 (2)

## 20区94号住居

調査年度 平成15年度

位置 D-12グリッド

**経過** 表土掘削後の遺構確認中に、やや小振りな板石を方形に組んだ石組遺構が検出された。炉としてはやや小さく、石の組み方もやや異なるが、表面にわずかな被熱痕跡も認められることから、この石組遺構を中心に住居候補地としての調査がはじまった。この遺構の周囲には出土遺物もほとんどなかったが、その南側に遺物が集中する地点があり、その下から石囲いが確認された。確認レベルは、石囲いのほうが僅かに低い。そこで、石組遺構を炉1、石囲いを炉2と仮称して調査を進めたが、壁や柱穴などの住居輪郭を示す材料は得られなかった。

なお、本住居の掘り方調査で多量の土器が出土し、調査時には99号住居として扱ったが、単独の住居としての根拠が得られなかったため、最終的にはその下層で確認された107号住居の覆土と解釈した。本住居には99号住居の遺物は含まれていない。

**重複** 東側を79号住居、北側を大きく107号住居と重複し、これらを切る。

**形状** 形状を示す材料は得られなかった。ここでは出土遺物の分布を目安に、炉を中心に直径4.4mの円を描いてみた。

**床面** 石囲い炉から床面のレベルを想定して床面を精査したが、明瞭な床は確認できなかった。本住居の構築面は、東側を重複する79号住居の床より50cm以上も高く、また北半部を107号住居と重複しているため、覆土と地山の区別が困難であった。

**炉** 大形の板状礫4石で組んだ方形石囲い炉で、規模は一辺50cm、炉石上端からの深さは12cmほどである。炉石は側縁を垂直に立てて組んでおり、その後の土圧等によるものか、少し歪んでいる。

この炉は、調査時に炉2とされたもので、炉内に焼土はほとんど残っていないが、炉石には被熱による変色とひび割れが認められる。また、炉の上面からは多量の遺物が出土しており、その一部は炉内にも及んでいた。

なお、確認時に炉1とした石組遺構は、炉の北側1.3mに位置する。長さ20cm前後の扁平な礫を斜めに使って方形に組み、周囲に小さな礫を配している。先述のとおり、組石上面の一部に煤の付着等のわずかな被熱痕跡があり、ここで火を焚いた可能性が認められるが、炉として機能していたとは考えられない。本遺跡では、柱穴の根本を礫で方形に組んだ事例がいくつかの住居で確認されている。この遺構と炉との距離は、柱1との距離と一致しており、同様の施設と考えるのが最も妥当だが、この遺構は礫を斜めに使っており、しかも囲い方が嚴重な点が異なっているため、ここでは別の用途も考慮して組石遺構としておく。

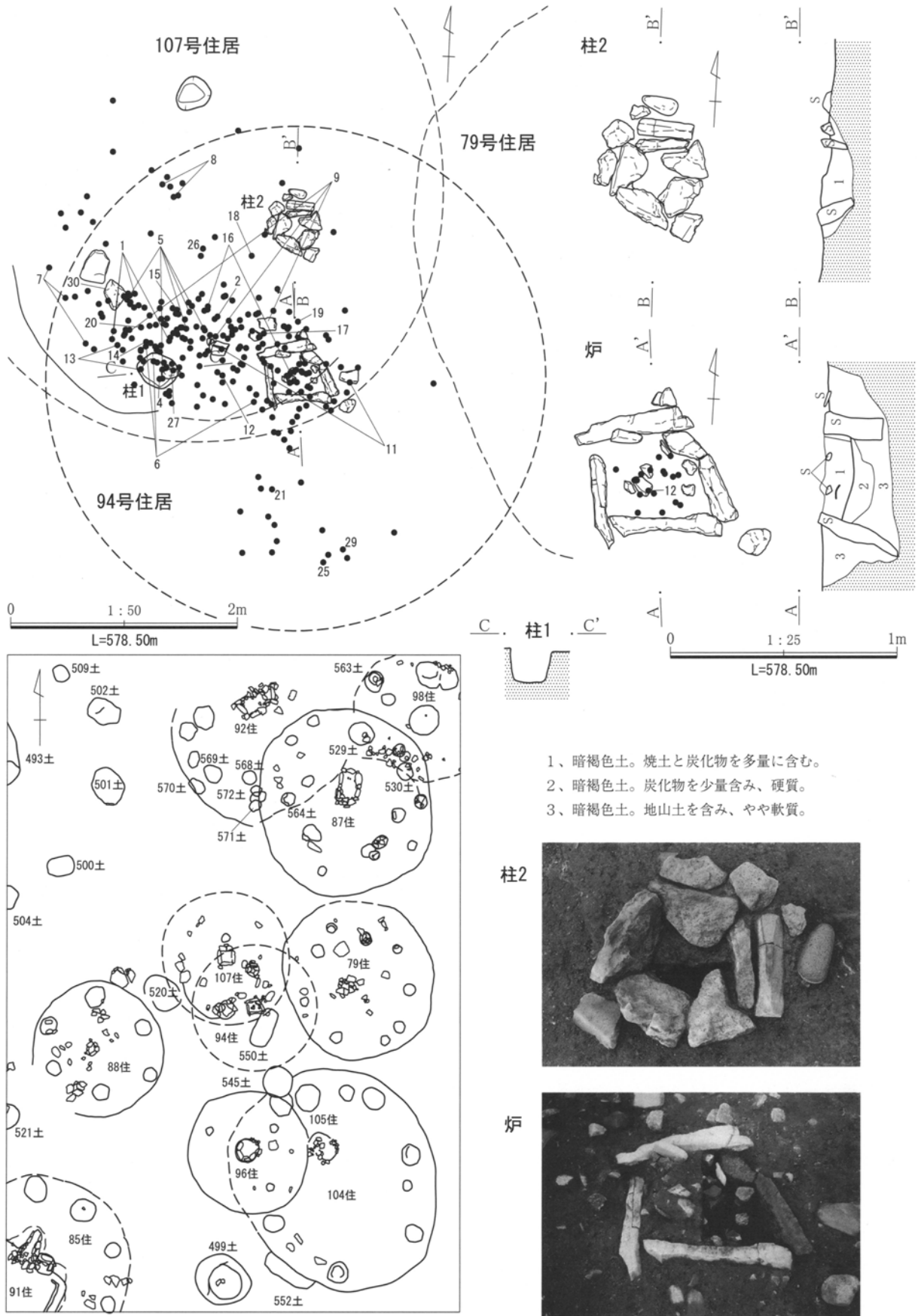
**柱穴** 確認された柱穴は、炉の西側にある柱1のみである。規模は直径30cm、深さ28cmであった。

**遺物** 炉の上面から西側にわたって礫と遺物が集中して出土した。このうち、土器9と11は床面からの出土である。

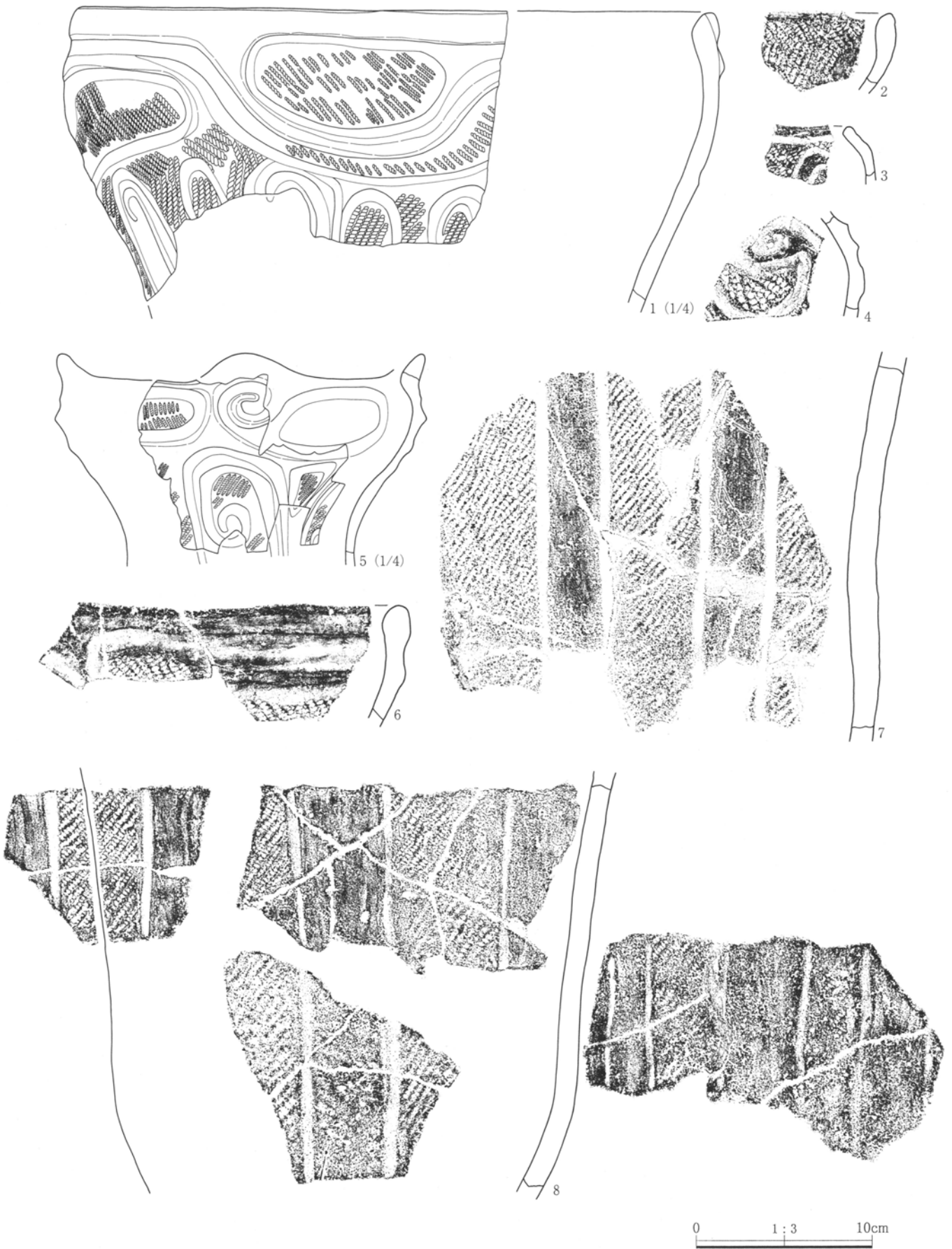
土器は総数546点が出土しており、主な土器は加曾利E3式が297点、唐草文系新段階が25点があり、ほかに勝坂式が5点、阿玉台式が3点、焼町土器が1点、加曾利E1式が1点、および土製円盤が1点が出土している。

石器は、石錐1点、削器1点、加工痕ある剥片3点、打製石斧1点、磨石2点、台石1点、砥石1点、多孔石1点のほかに、剥片24点（黒曜石22点）、碎片18点（黒曜石18点）がある。このうち、多孔石30は炉の北西1.5mから出土している。

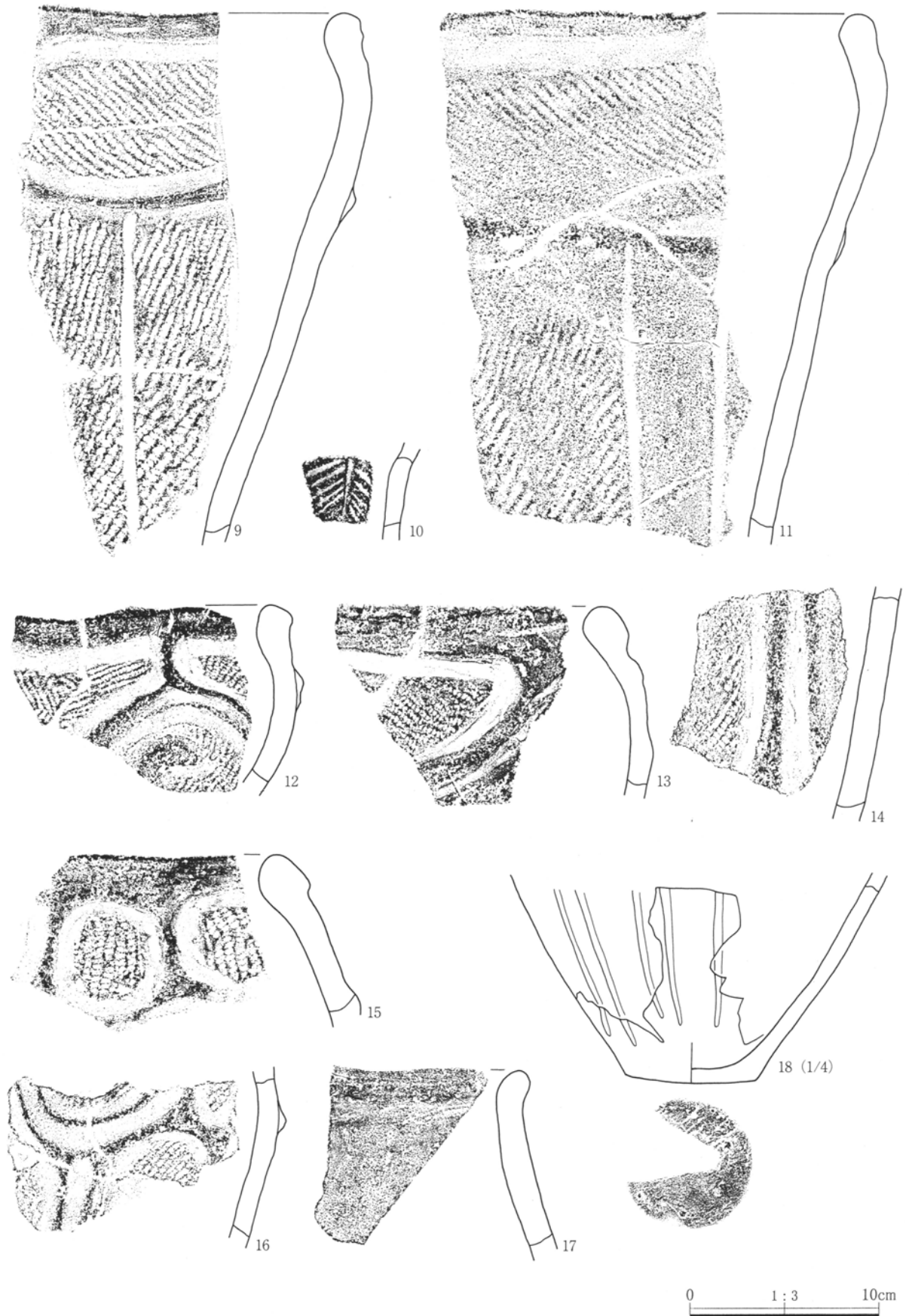
**時期** 出土土器は加曾利E3式期新段階を主体としており、本住居は当該期に比定されよう。



第74図 20区94号住居



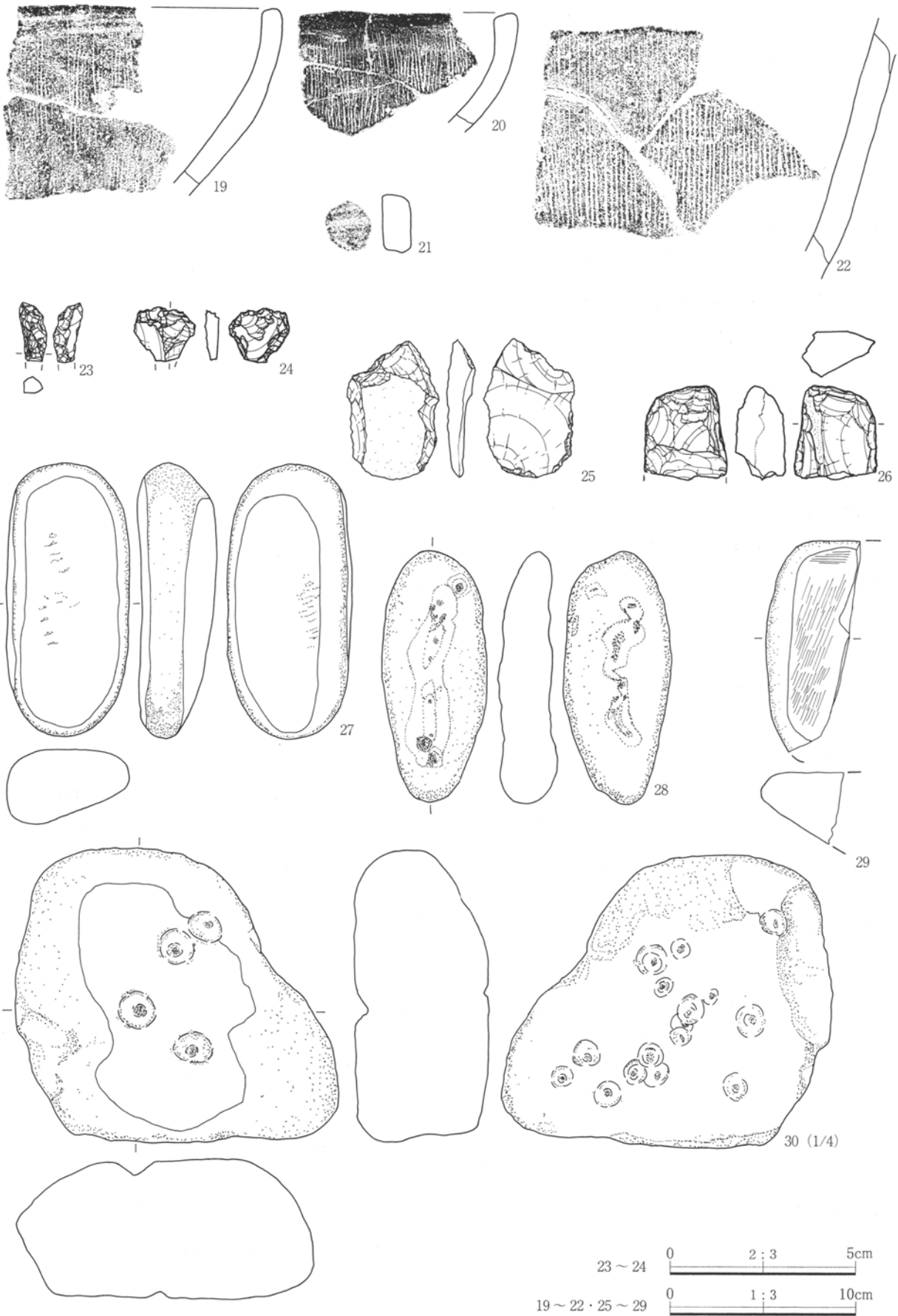
第75図 20区94号住居出土遺物(1)



第76図 20区94号住居出土遺物(2)



第3節 縄文時代の竪穴住居



第77図 20区94号住居出土遺物(3)

20区96号住居

調査年度 平成15年度

位置 D-11グリッド

経過 遺構確認作業で礫と多量の遺物の集中箇所を確認し、住居候補地となった。調査が進むにつれて、覆土中層から下層にかけてぎっしりと詰め込んだような状態で礫が確認され、その一部は炉内にまで達していた。このように、覆土中に多量の礫を詰め込んだような状態は、地山に礫が多い本遺跡特有の現象でもある。最終的には炉の検出をもって住居と認定した。

重複 東側を大きく104号住居と重複し、これを切る。

形状 直径4.3mの円形を呈する。覆土上層に多量の礫と遺物の集中があったために、確認面は高い位置だったが、地山と覆土の区別が困難だったことから、壁面は床から10cmほどしか確認できなかった。当初の確認面からの深さは、山側で60cmほどであった。

床面 山側の一部は地山の黄色土まで達しているが、大半は暗褐色土中に構築されている。床面はほぼ平坦だが、硬化した面は認められなかった。

炉 土器埋設円形石囲い炉で、住居の中央に設置されている。炉石は、厚手の大きな扁平礫7~8石を使い、側面を立てて円形状に組んだ造りであるが、そのうち4石は使用時の現況を留めていたが、その他は抜き取られていた。埋設土器は、加曾利E式系の小型の深鉢(1)で、胴下半部を打ち欠いて、炉の底面中央に正位に埋設している。炉内に焼土はほとんど残っていないが、炉石は変色・ひび割れ等の被熱痕跡を明瞭に留めており、埋設土器の口縁部も被熱による劣化が認められた。規模は、直径80cmで、炉石上端からの深さは30cmほどである。

なお、本住居の炉は、重複する104号住居の柱穴(柱8)の上にちょうどのっており、埋設土器は柱穴中にあるため、その後やや沈下しているかもしれない。

柱穴 3本の柱穴が確認されたが、いずれも規模

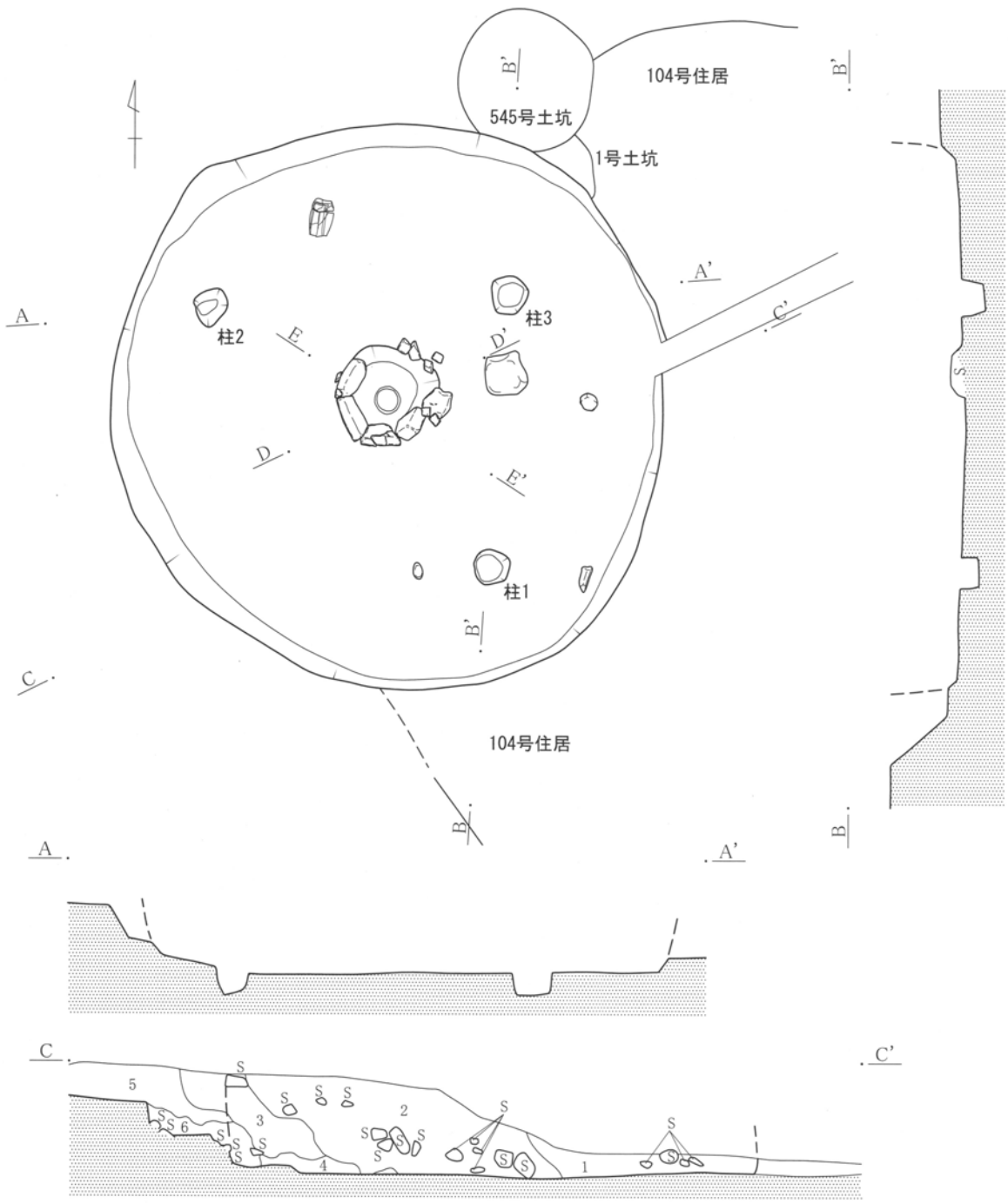
が小さく、心許ない。規模(長辺×短辺×深さ)は、柱1:27×27×15、柱2:26×25×22、柱3:29×28×18である。

遺物 主要土器のほとんどは住居の中央から西側の覆土中に詰め込まれた多量の礫と共に出土した。床面付近の遺物は少なかったが、土器6や磨石66・67などが出土している。また、住居東壁の床面上に、黒曜石の剥片・碎片が50cm四方の範囲に集積した状態で認められた。本住居内で黒曜石の石器製作が行われていた可能性が高いが、調査時に検証が行われていないため、判断は難しい。

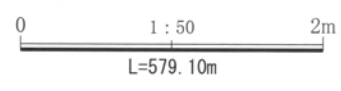
土器は総数1,172点が出土している。主な土器は唐草文系新段階が385点、加曾利E3式が160点あり、ほかに焼町土器が19点、勝坂式が18点、加曾利E1式が12点、曾利式古段階が7点、阿玉台式が6点、後期土器6点、土製円盤2点などがある。このうち、文様を伴う大型の台形土器(43)は、102号住居に同個体の破片1点があり、本住居のものに合わせて復元した。また、劣化が著しいが、両面にベンガラを塗った土器37と38は同個体と思われる、台付き鉢となる可能性が高い。土器1は炉内埋設土器である。

石器は石鏃1点、石鏃未製品が9点、削器1点、加工痕ある剥片4点、使用痕ある剥片4点、打製石斧4点、磨製石斧3点、磨石6点、台石1点、砥石2点のほかに、石核3点、剥片119点(黒曜石91点、珪質変質岩類11点)、碎片104点(黒曜石104点)がある。先述のように、黒曜石の剥片・碎片が床面付近から纏まって出土している。石鏃未製品をはじめとする小型の石器類はほとんど黒曜石製であり、本住居で製作していた可能性が高いと考えるが、残念ながら詳細な検証が実施されていない。なお、磨製石斧63は、片面に2本の摺り切り痕を残す。

時期 炉内埋設土器および覆土出土土器は加曾利E3式中段階を主体としており、本住居は加曾利E3式中段階に比定されよう。

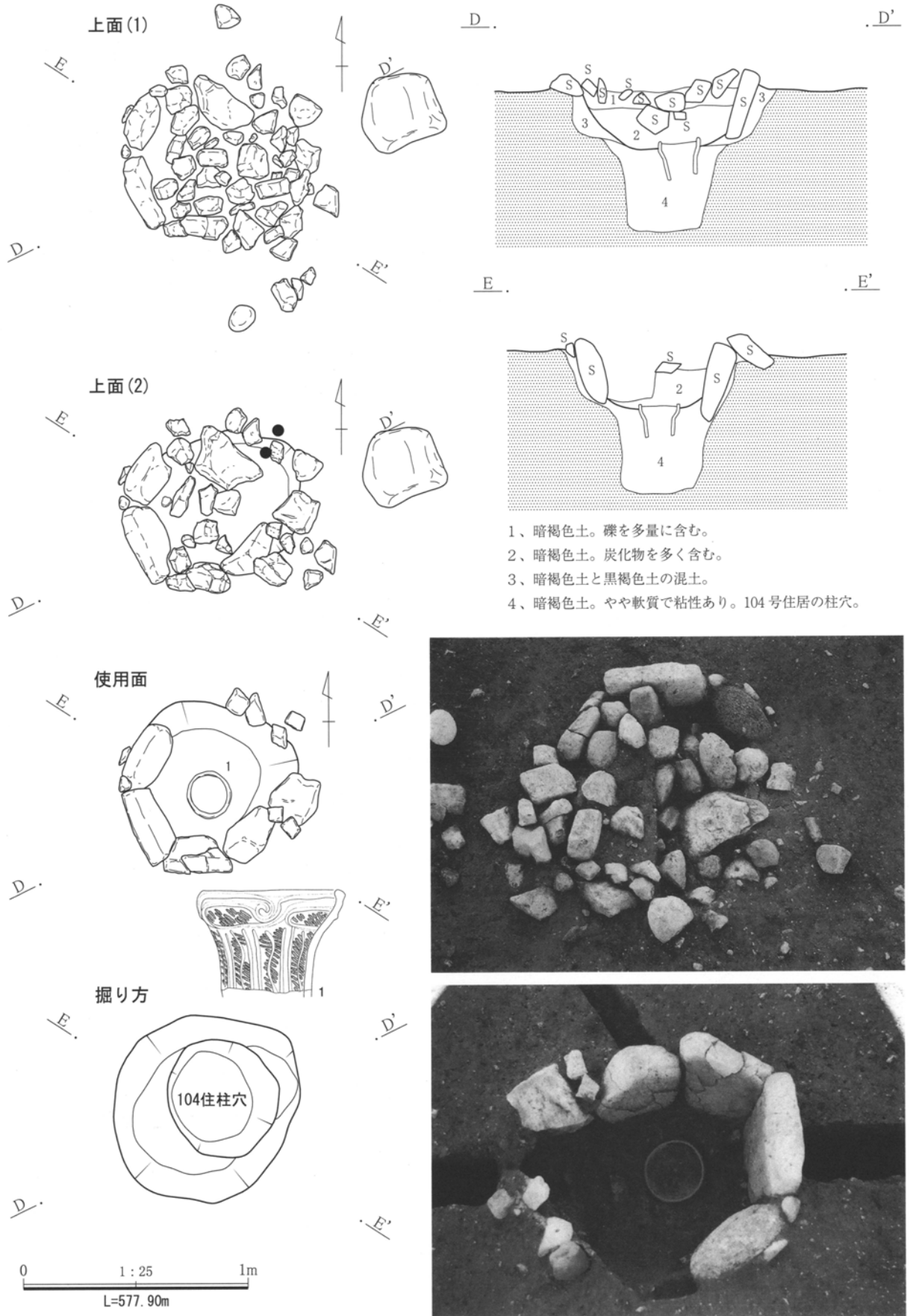


- 1、暗褐色土。黄色土を少量含む。
- 2、暗褐色土。1より明色。
- 3、褐色土。
- 4、褐色土と黒褐色土の混土。
- 5、明褐色土。
- 6、黒褐色土。地山土を含む。

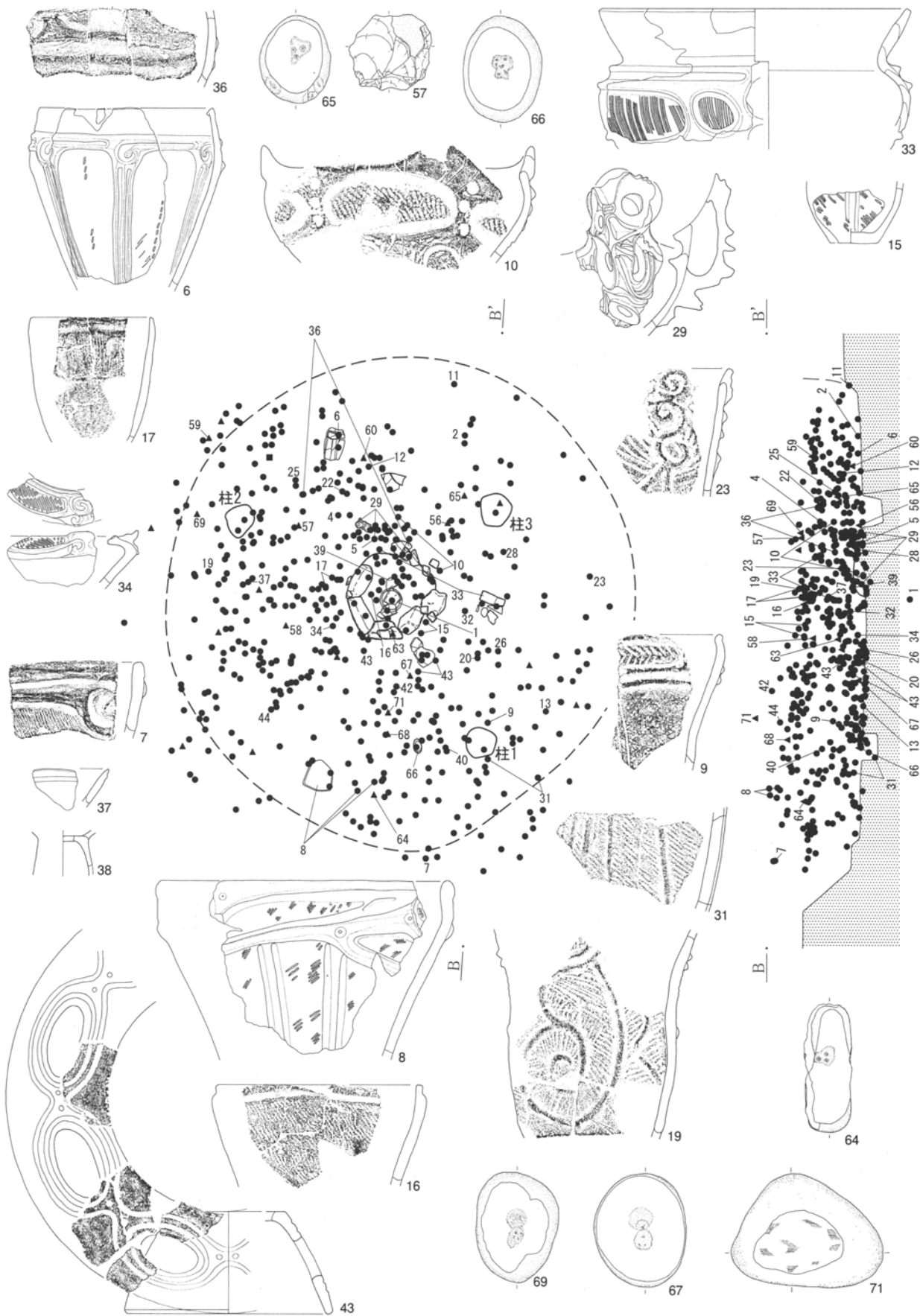


第78図 20区96号住居 (1)

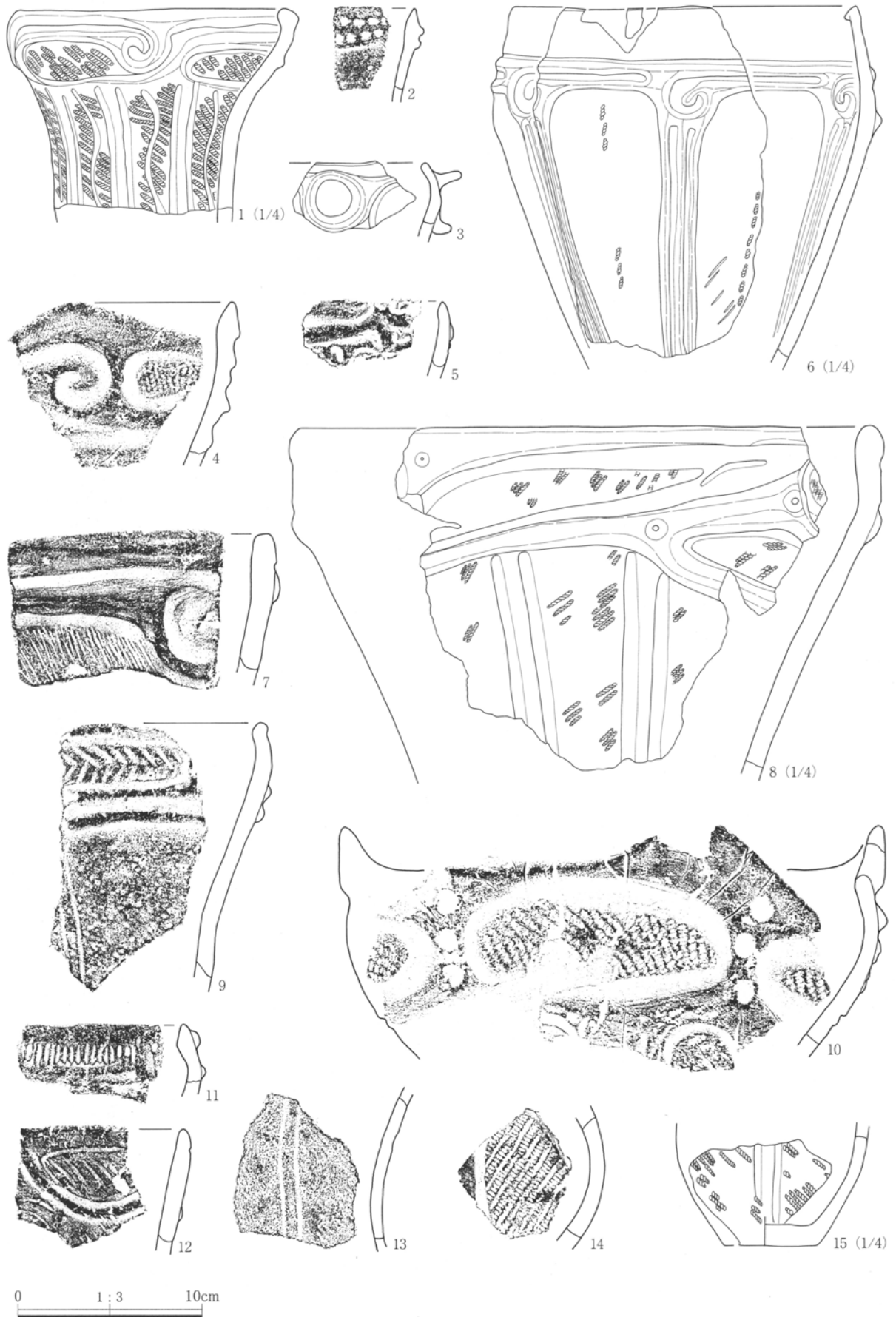
第3章 発見された遺構と遺物



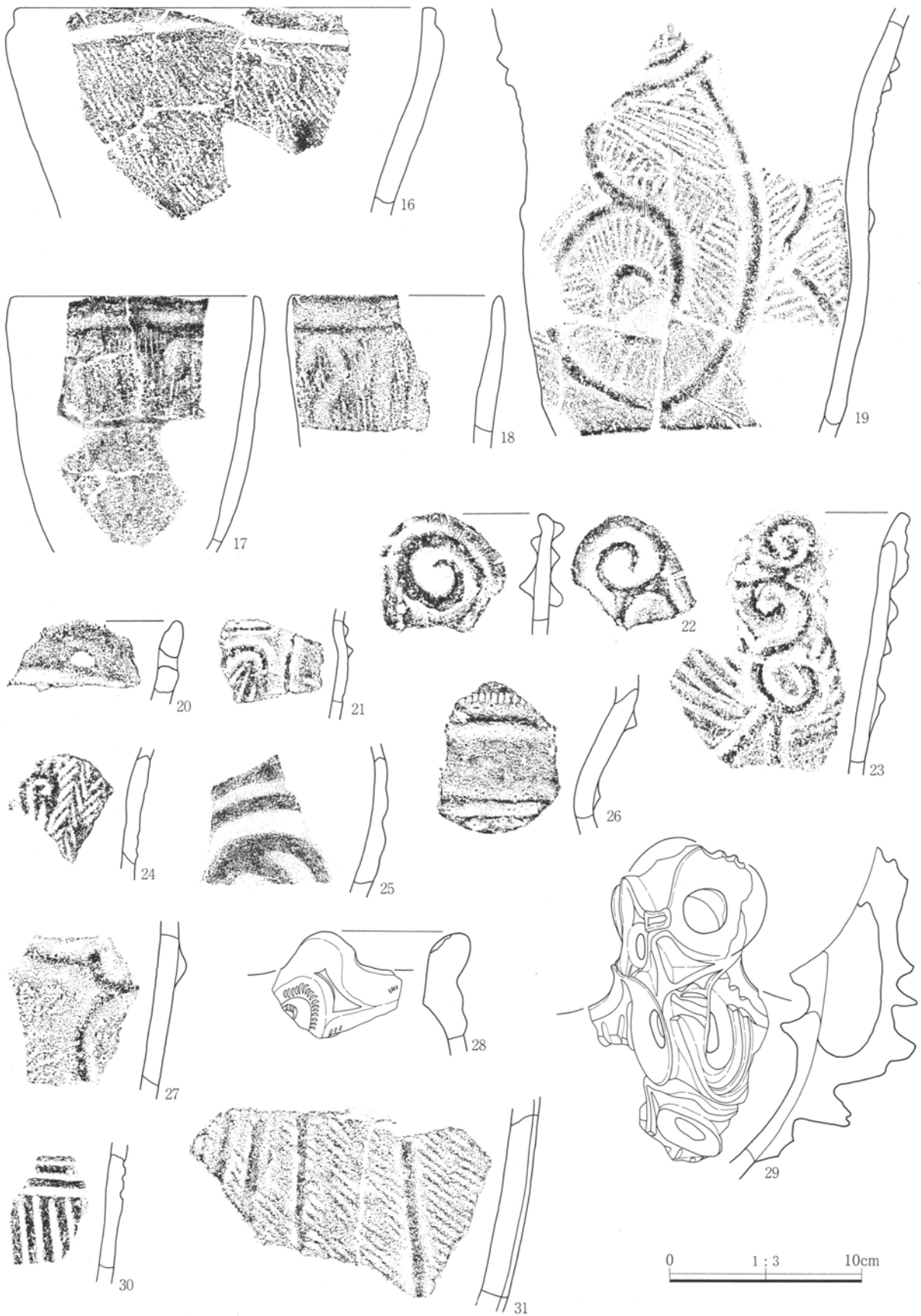
第79図 20区96号住居 (2)



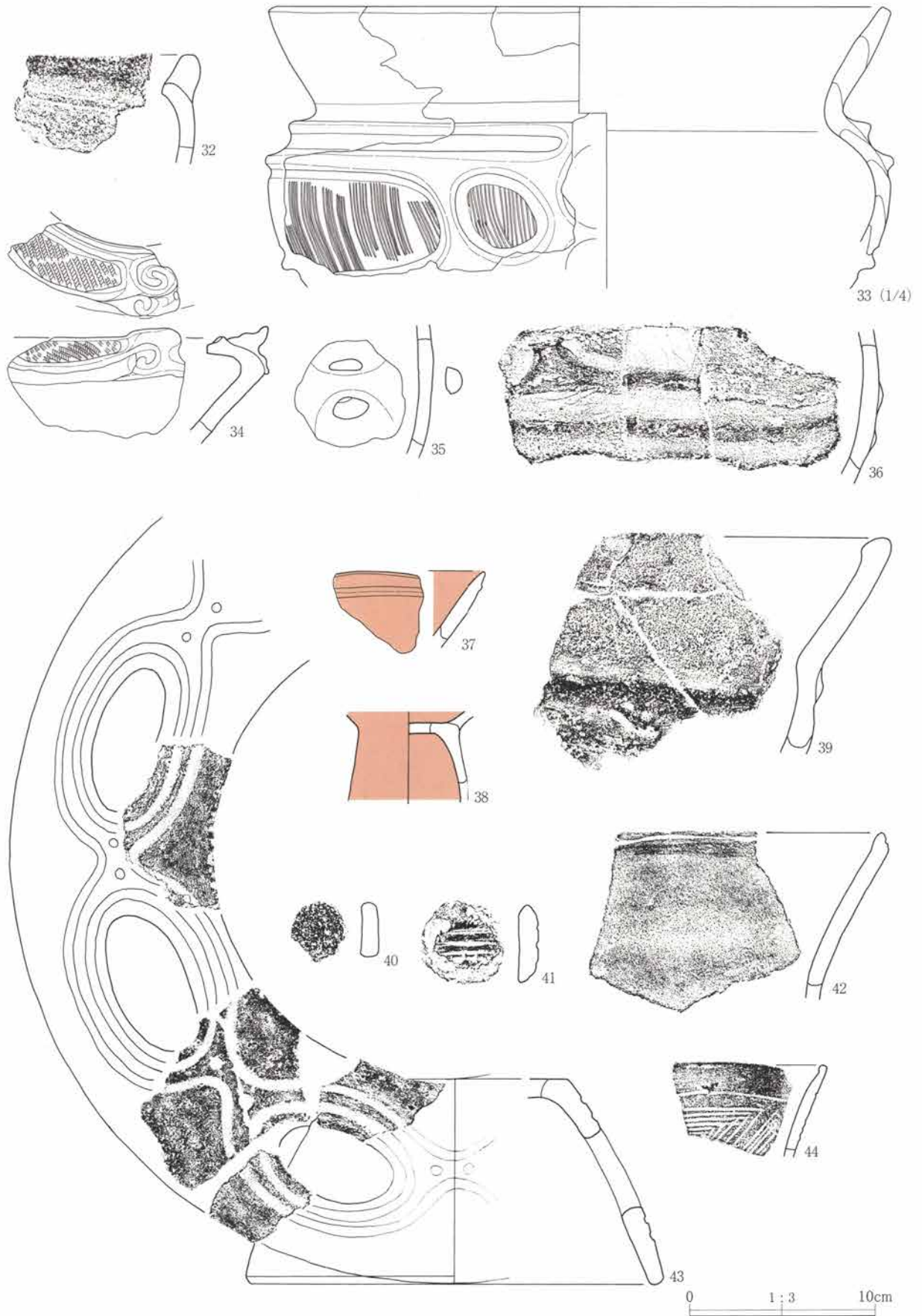
第80図 20区96号住居 (3)



第81図 20区96号住居出土遺物(1)

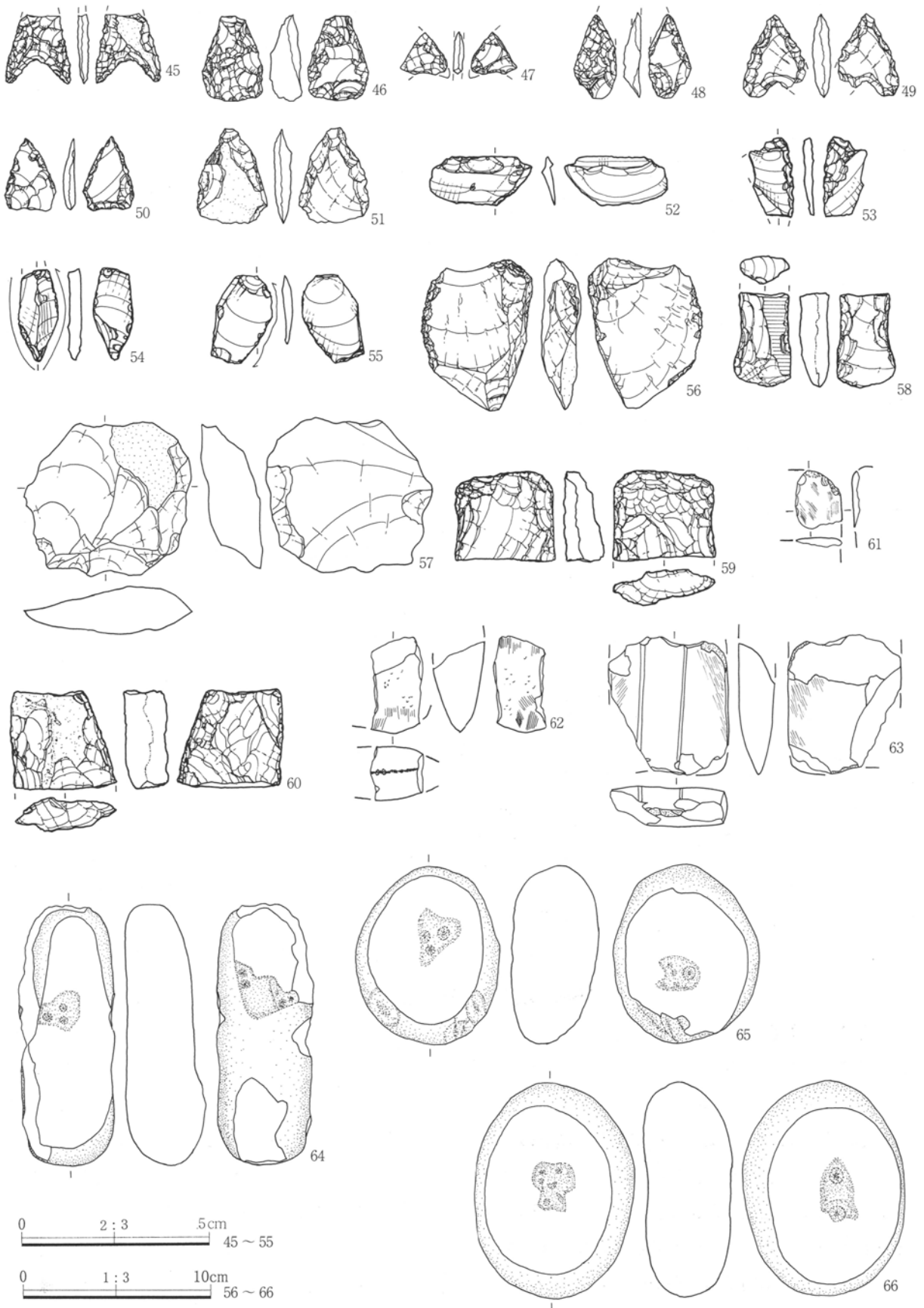


第82図 20区96号住居出土遺物(2)

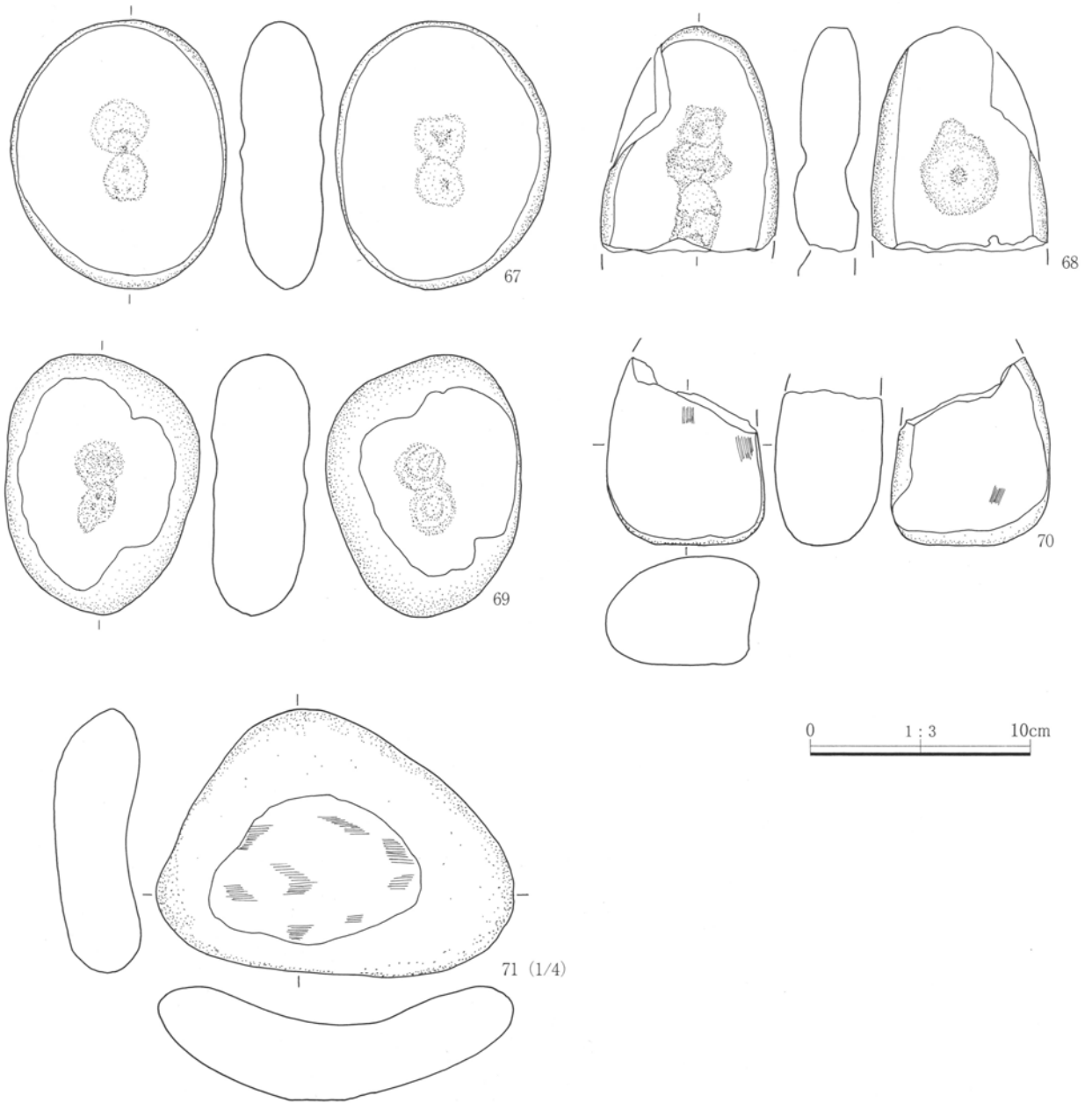


第83図 20区96号住居出土遺物 (3)





第84図 20区96号住居出土遺物(4)



第85図 20区96号住居出土遺物(5)

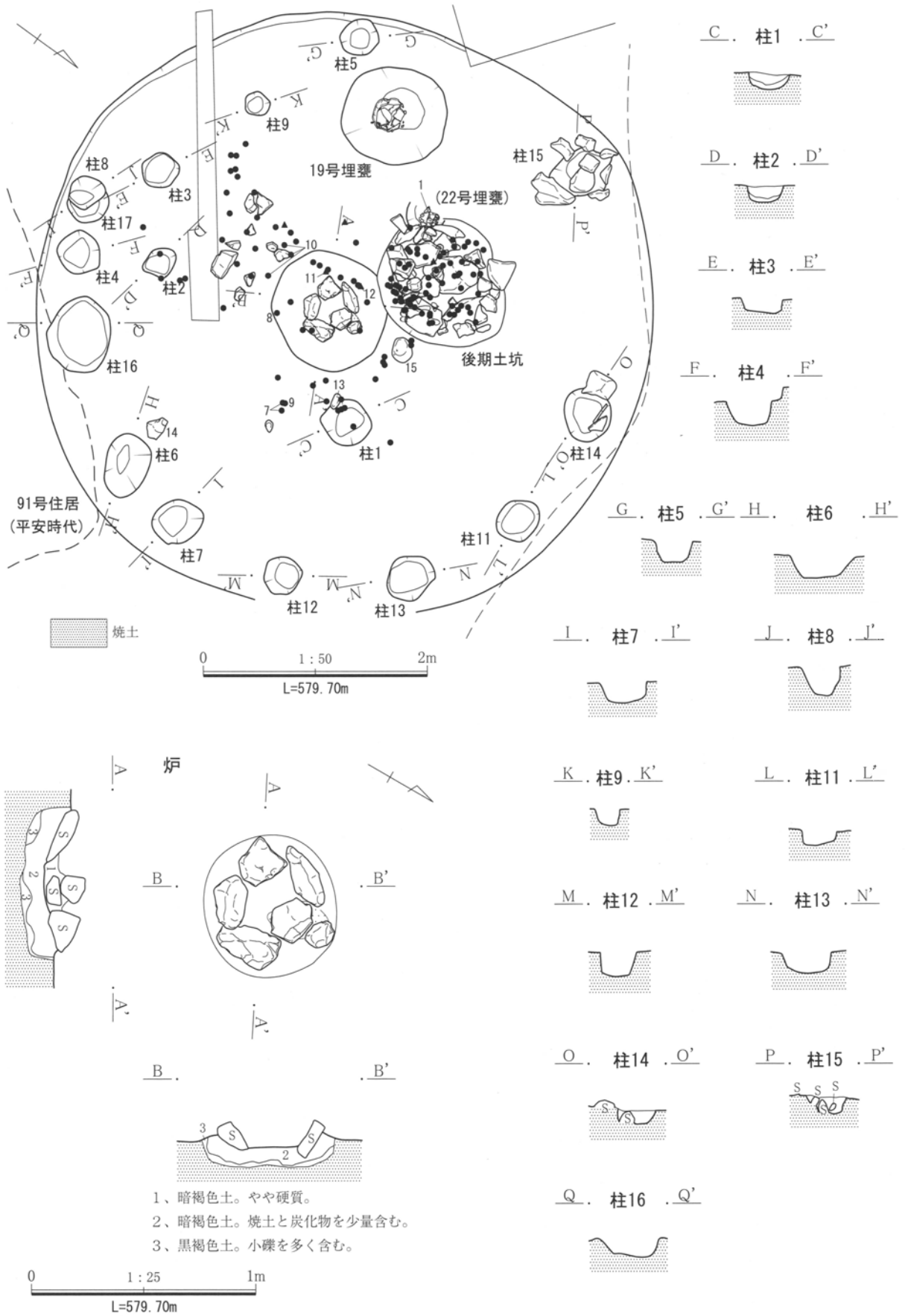
20区97号住居

調査年度 平成15年度

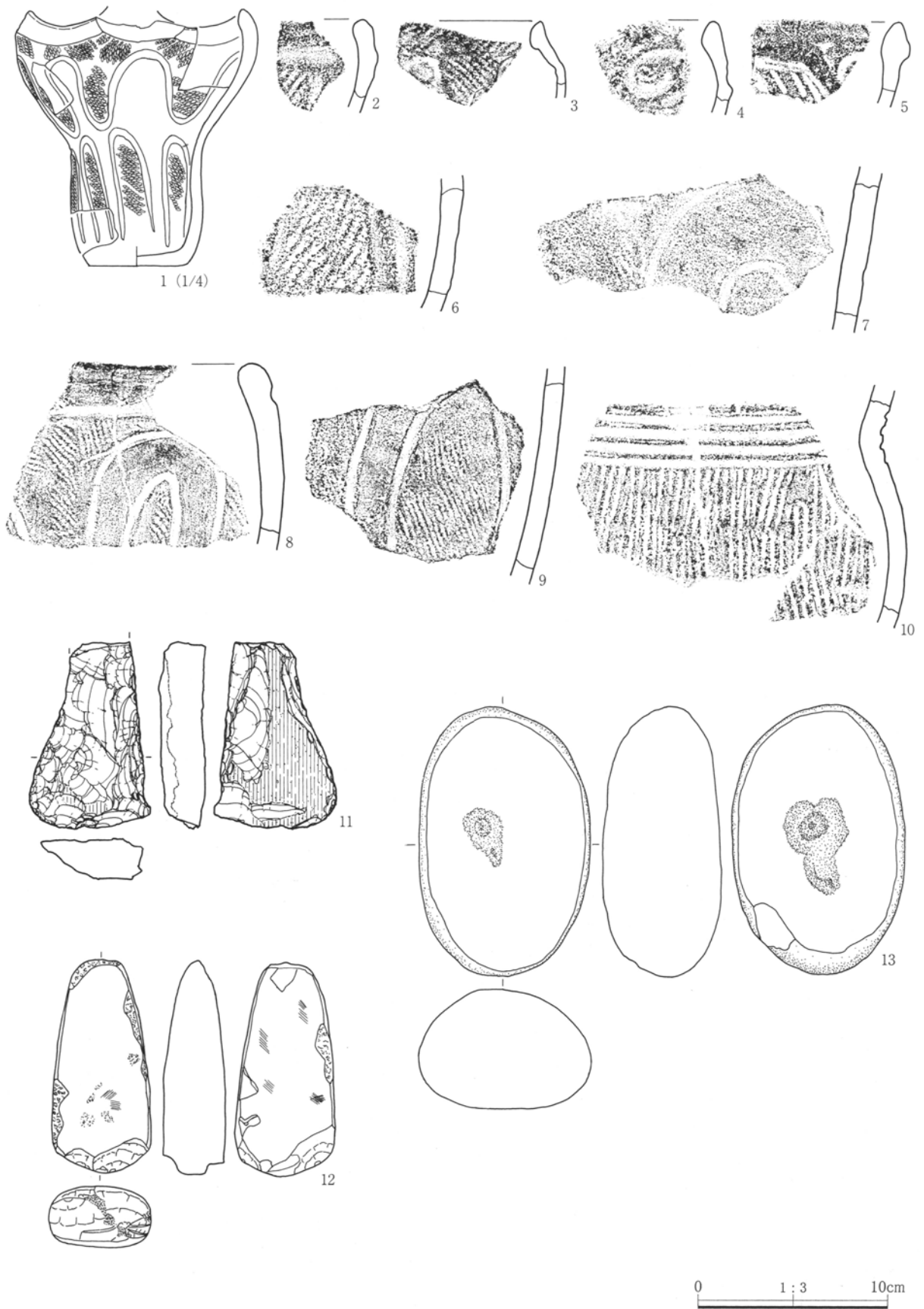
位置 G-11グリッド

経過 攪乱の深度が深い地区であり、覆土の大半を失っていたが、表土除去後の最終確認で少量の礫と遺物が集まった地点があり、その下から石囲い炉が確認された。炉を基準にその他の施設・要素を確認したところ、山側でわずかな壁の立ち上がりの一部と、炉を中心にめぐる柱穴を検出できた。

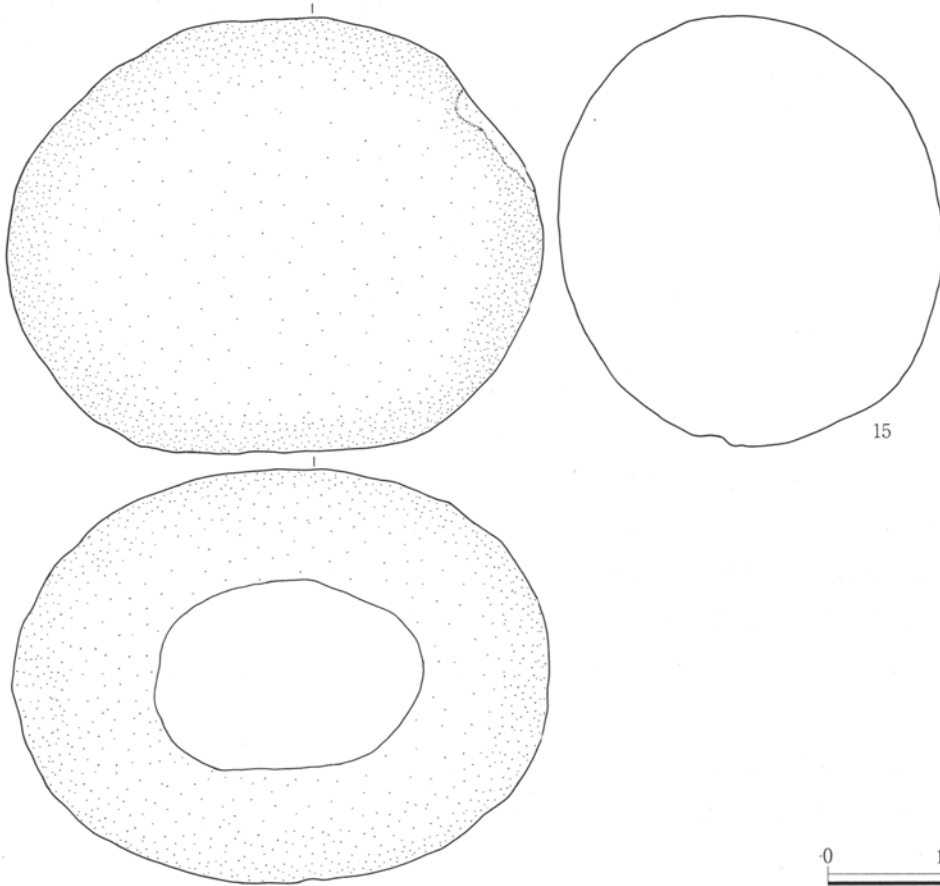
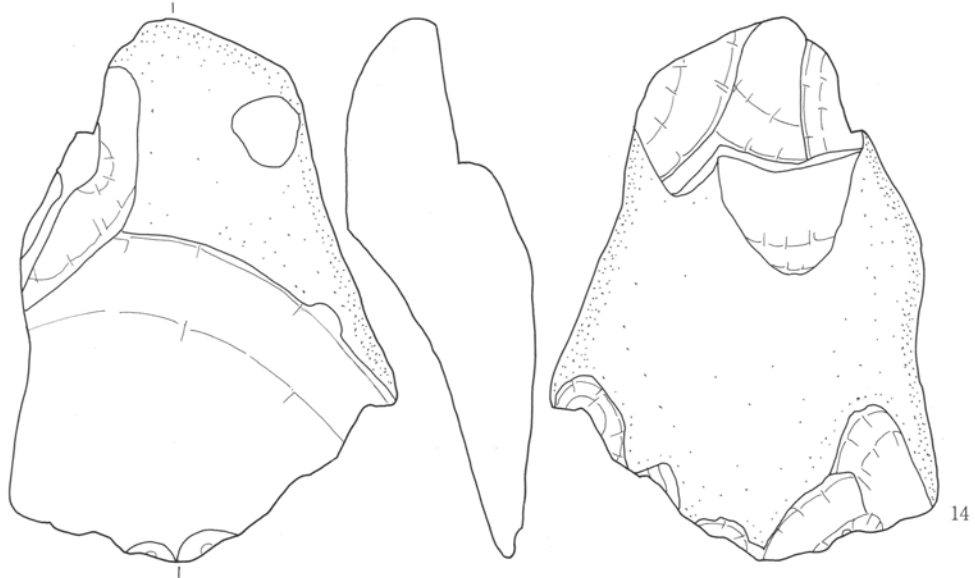
なお、本住居の確認に先立ってほぼ完存の小型深鉢が確認され、20区22号埋甕と命名された。この土器は横転状態での出土であり、時期および本住居の床面レベルと一致することから、本住居の遺物に変更した。また、炉の北西に後期の土坑が重複しており、調査時には「住居内土坑」として扱われた。当初は、その周囲から出土する後期の遺物も含めて本住居を捉えていたが、主要な出土遺物は記録を残して点上げされていたため、整理段階での遺物の帰



第86図 20区97号住居



第87図 20区97号住居出土遺物(1)



0 1:3 10cm

第88図 20区97号住居出土遺物(2)

### 第3章 発見された遺構と遺物

属は分類が可能であった。

**重複** 東側の一部を平安時代の91号住居と重複し、これに切られる。また、3方に85号・86号・102号住居が接近する。なお、炉の北西の一部を後期の土坑が、また炉の南西1mに後期の19号埋設土器が重複し、これらに切られる。

**形状** 確認できた壁は山側にあたる南西部の一部のみだが、柱穴の配置等を考慮すると、直径5.4m前後の円形を呈するものと推定される。

**床面** 炉を基準に精査したが、硬化面は確認できなかった。

**炉** 長さ20～25cmの不定型な扁平礫6石で円形状に組んだ石囲い炉で、住居の中央に位置する。規模は直径50cm前後と小さく、炉石上端からの深さは10cmほどである。炉石はかなり斜めに設置されており、そのうち2石は動かされているものと判断する。その他の炉石が使用時の状況を留めているかどうか、判然としない。現状で使用面にあたる箇所には焼土は残っていなかったが、炉石には変色・ひび割れ等の被熱痕跡が認められ、炉石下の土層にはわずかに焼土と炭化物が混入していた。

**柱穴** 合計17本を確認したが、浅いものが多く、柱穴とするには躊躇するものもある。炉を中心に等距離に位置するものが多く、その円周を7等分すると、柱7・16・5・15・14・13の6本がほぼ等間隔の配置となり、さらにその間を2等分して14等分すると、さらに柱11・12・17も等間隔の配置に該当することになる。

規模(長辺×短辺×深さ)は、柱1:41×40×16、柱2:32×26×16、柱3:32×30×15、柱4:37×36×34、柱5:34×31×21、柱6:57×39×21、柱7:47×38×20、柱8:34×28×17、柱9:22×21×15、柱11:41×34×15、柱12:34×33×23、柱13:45×39×21、柱14:48×41×16、柱15:59×40×17、柱16:65×56×18、柱17:36×-×13である。

**遺物** 覆土中から少量の遺物が出土している。土器は総数202点が出土しており、主な土器は加曾利

E3式が25点、唐草文系新段階が9点、加曾利E4式が6点あり、ほかに焼町土器が4点、勝坂式が2点である。図の1が先述の22号埋甕として取り上げられた土器である。

石器は、打製石斧1点、敲石1点、磨石4点のほかに、丸石1点、砥石1点、石核1点(黒曜石1点)、剥片14点(黒曜石2点)、碎片3点(黒曜石2点)がある。丸石は長軸が21cmの楕円形状を呈するもので、底面の平坦面にだけ加工を加えて、設置できるようにしてある。これと同じ形態の丸石が104号住居からも2点出土している。

**時期** 時期の判明する出土土器はごく僅かであるが、土器1をはじめ、加曾利E4式期古段階に比定されるものがあることから、本住居は当該期に比定しておきたい。

#### 20区101号住居

**調査年度** 平成15年度

**位置** D-1グリッド

**経過** 表土掘削の段階で覆土の大半を失っており、石囲い炉と2つの埋甕がほぼ同時に確認された。炉の南東側にあるのが1号埋甕、北東側にあるのが2号埋甕とした。2号埋甕の東側には焼土の散布があり、当初はこれを炉とする2軒の住居が重複していると思っていたが、その後の調査で焼土は後期の土坑(あるいは後期住居の炉)で、本住居とは時期が異なることが判明した。埋甕が2つあることから、最終段階まで重複住居の可能性を念頭に調査を進めたが、結果は1軒の住居として集結した。

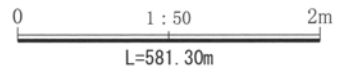
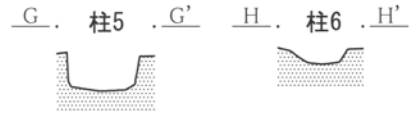
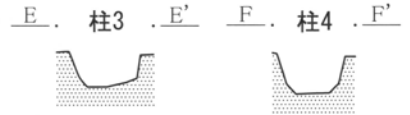
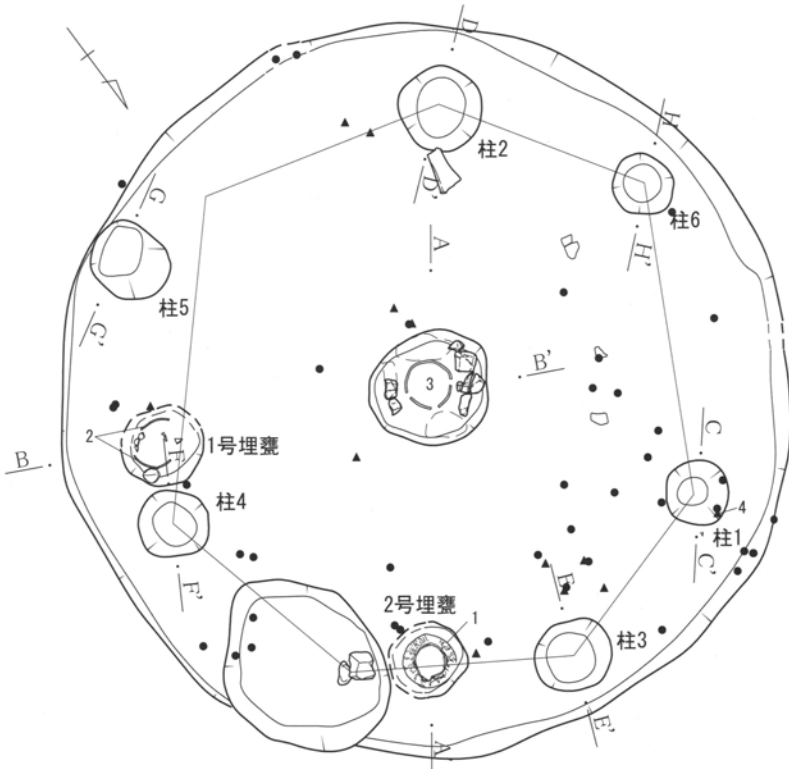
**重複** 周囲に後期住居が6軒隣接するが、重複するものはない。

**形状** 直径4.86mの円形を呈する。立ち上がりの高低差は僅かだが、壁は全周する。確認面からの深さは、山側で10cmほどであった。

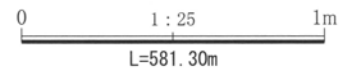
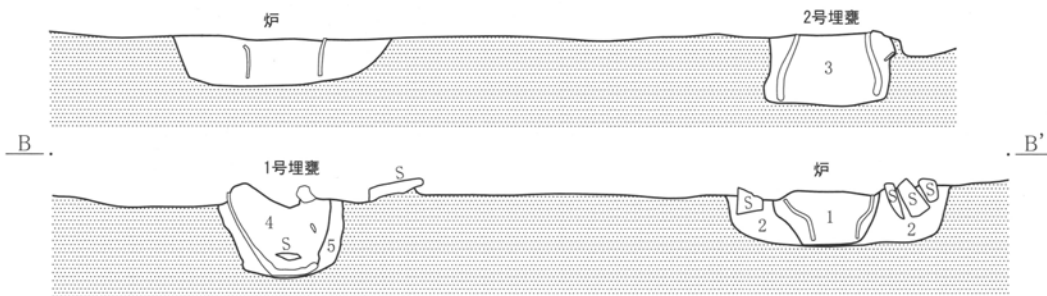
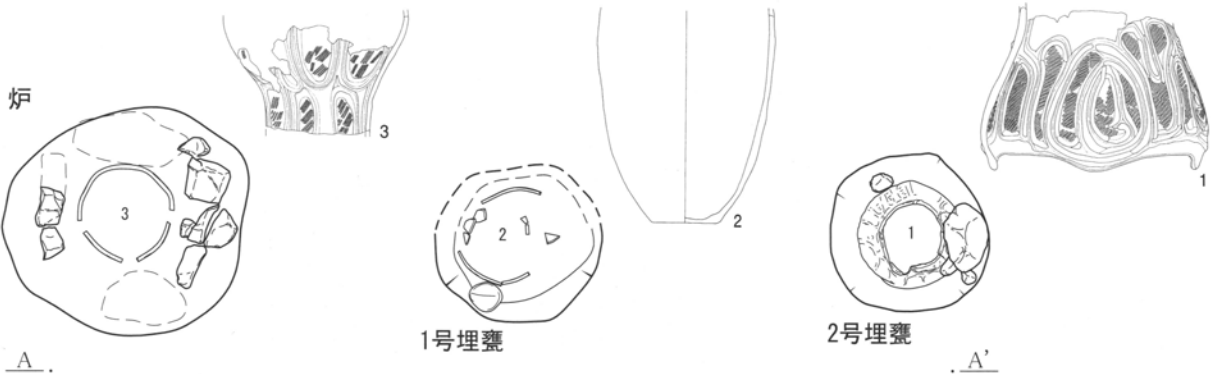
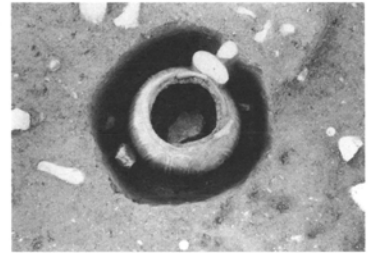
**床面** 全体に平坦な床面が構築されており、炉の周囲を中心に硬化面が確認された。

**炉** 土器埋設方形石囲い炉で、住居の中央に位置する。炉石は、大きな厚手の扁平礫4石で組んで

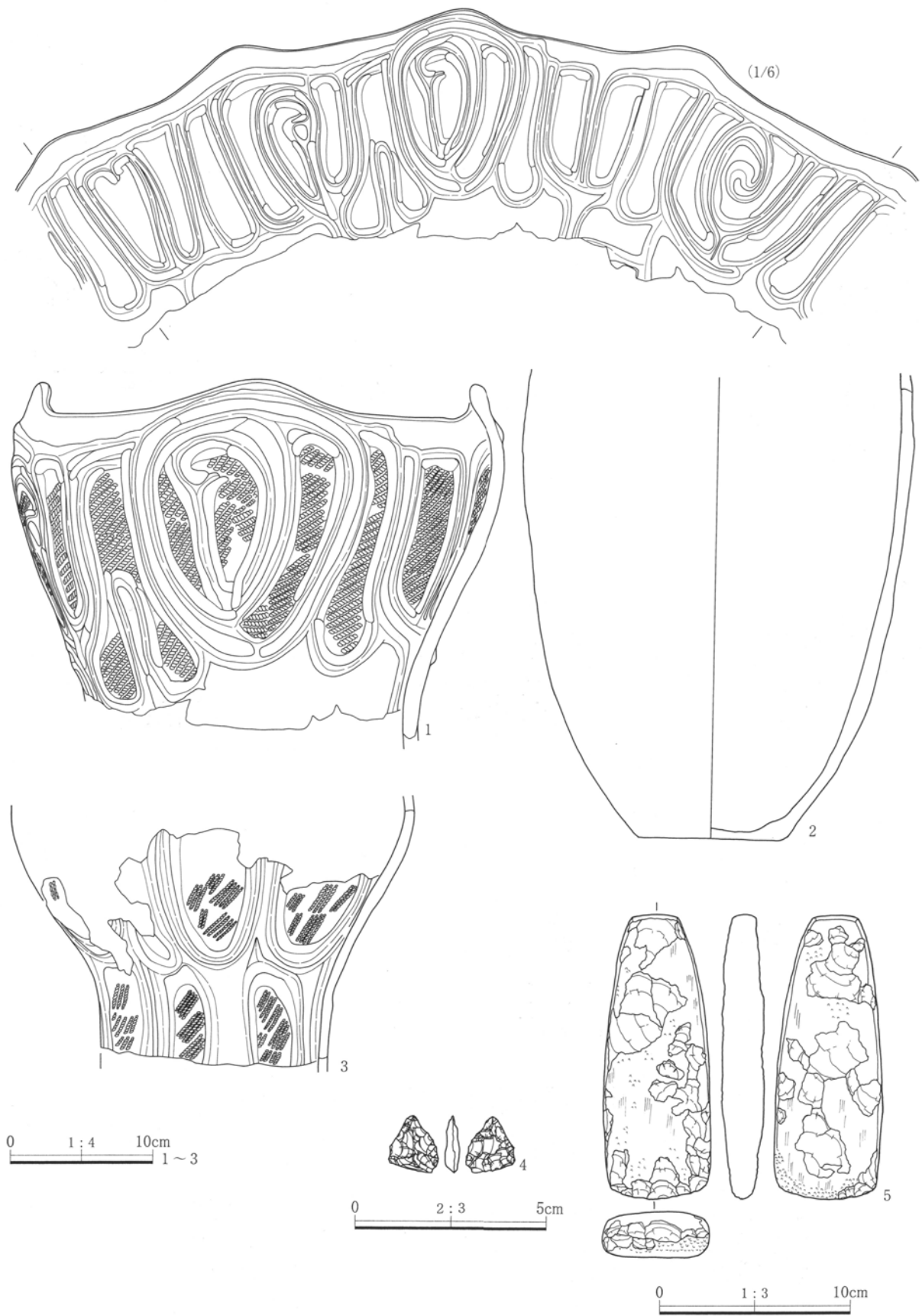
第3節 縄文時代の竪穴住居



- 1、黒褐色土。炭化物を多く含む。
- 2、暗褐色土。
- 3、黒褐色土。硬質。
- 4、黒褐色土。やや粘性があり、炭化物を多く含む。
- 5、黒褐色土。やや硬質で、炭化物を少量含む。



第89図 20区101号住居



第90図 20区101号住居出土遺物



いたと思われるが、対向する2石は抜き取られていた。確認面で抜き取った痕が明瞭に認められることから、後世の削平時に撤去されたのであろう。埋設土器は、中型の加曾利E式系深鉢(3)を使用しており、口縁部と胴下半部を打ち欠いて、正位に埋設している。土器が大きいので、炉石との間隔はほとんどない。炉内に焼土は残っていなかったが、炉石と埋設土器の上端部には、劣化・変色・ひび割れ等の被熱痕跡が明瞭に認められた。

**柱 穴** 合計6本を確認した。主柱に該当するのは柱4・2・6・1・3の5本と考えられ、他に1号埋甕の南東に柱3に対応する柱穴、柱5の西側に柱6に対応する柱穴があり、7本柱であったものと想定する。

規模(長辺×短辺×深さ)は、柱1:44×43×23、柱2:55×54×25、柱3:53×47×23、柱4:48×47×28、柱5:54×47×26、柱6:42×40×11である。

**埋 甕** 1号埋甕は、炉の南東側の柱4に接近して設置されている。使われていた土器は、大型の無紋深鉢で、胴上半部を打ち欠いて、正位に埋設されていた。数個の小さな礫は認められたが、共伴と考えられる遺物等は認められなかった。土器の上端部がどのような状態だったのかははっきりしないため、単独の埋設土器の可能性もあるが、設置されている位置が2号埋甕と同様に柱穴に隣接しており、炉との距離も共通することから、本住居に伴う埋甕と判断した。

2号埋甕は炉の北東側にあり、柱2と対向する位置に設置されている。使われていた土器は、大型の加曾利E式系深鉢(1)で、胴下半部を打ち欠いて、逆位に埋設されていた。これも共伴と考えられる遺物等は認められなかったが、土器の上位横にやや大きな不定型の礫を置いたような状態で認められた。

両埋甕の新旧関係については、確定できる材料が得られていないため、土器型式で判定せざるを得ないが、1号は無紋で時期の確定は難しい。

**遺 物** 床面付近から少量の遺物が出土している

が、覆土一括で取り上げたものは後期が主体である。炉内埋設土器(3)と2号埋甕(1)は、体部上半になぞりを伴う隆線で大柄の渦巻き文を構成する、同タイプの加曾利E3式期新段階に比定される土器である。1号埋設土器(2)は、胴部が円筒状を呈する薄手の土器で、後期に属す可能性もある。なお、磨製石斧の未製品を転用した敲石(5)は、掘り方からの出土である。

**時 期** 炉内埋設土器および2号埋甕は加曾利E3式期新段階に比定されることから、本住居は当該期に比定されよう。

## 20区 102号住居

**調査年度** 平成15年度度

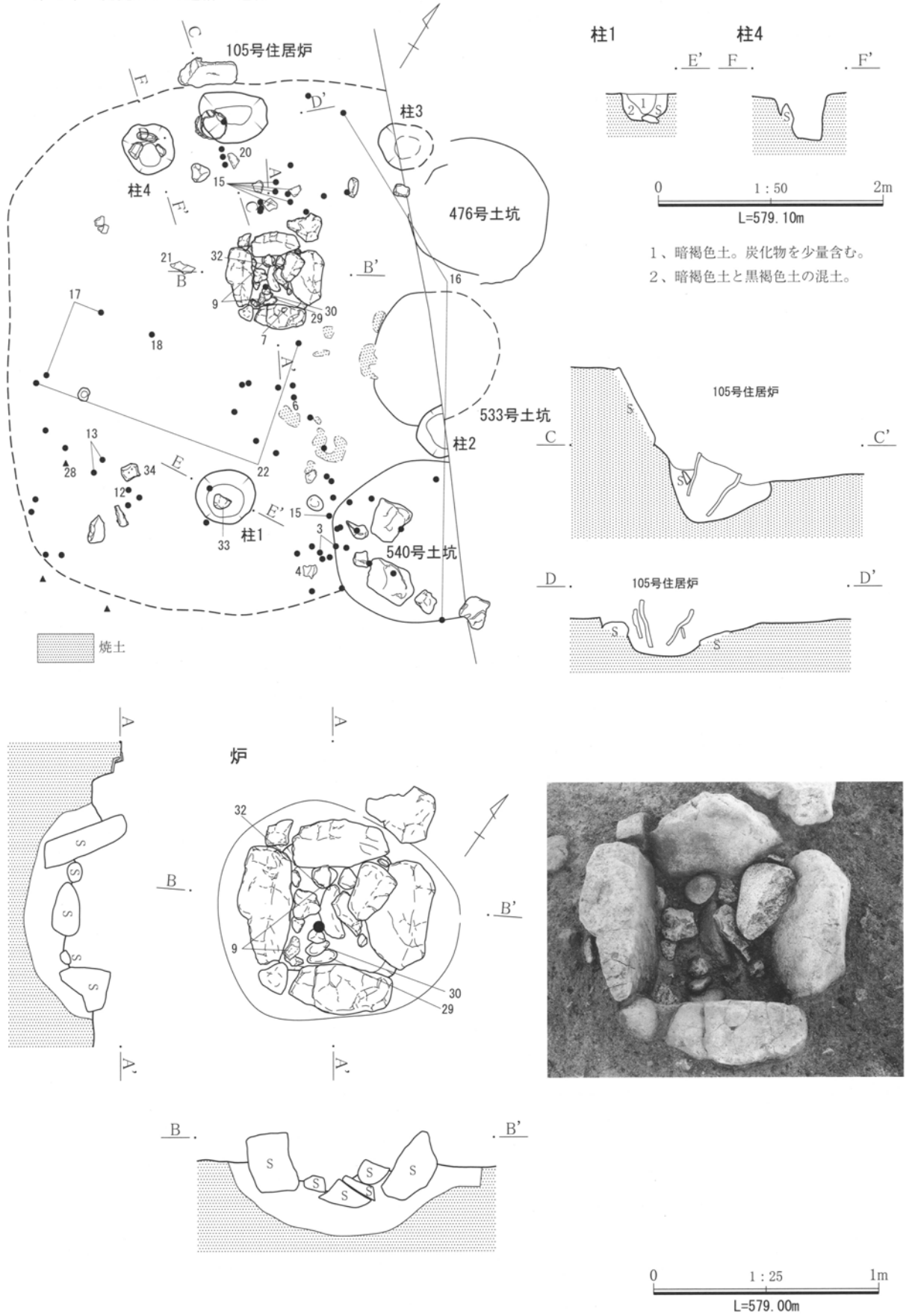
**位 置** G-12グリッド

**経 過** 地山に大きな礫が多く、遺物の出土量も少ないことから、なかなか遺構の認定が難しい地区である。本住居も石囲い炉と埋甕の確認をもって住居と認定された。本住居の周囲には土坑や単独に埋設土器が多く、住居の範囲や付属施設を把握することは困難を極めた。調査段階では、最終的に4本の柱穴と炉の北側1.5mにある埋甕を本住居に伴う施設と判断したが、整理段階では様々な検討の結果、埋甕は別の住居(20区105号住居)の炉に伴う埋設土器であると考えに至った。詳細は105号住居で述べる。

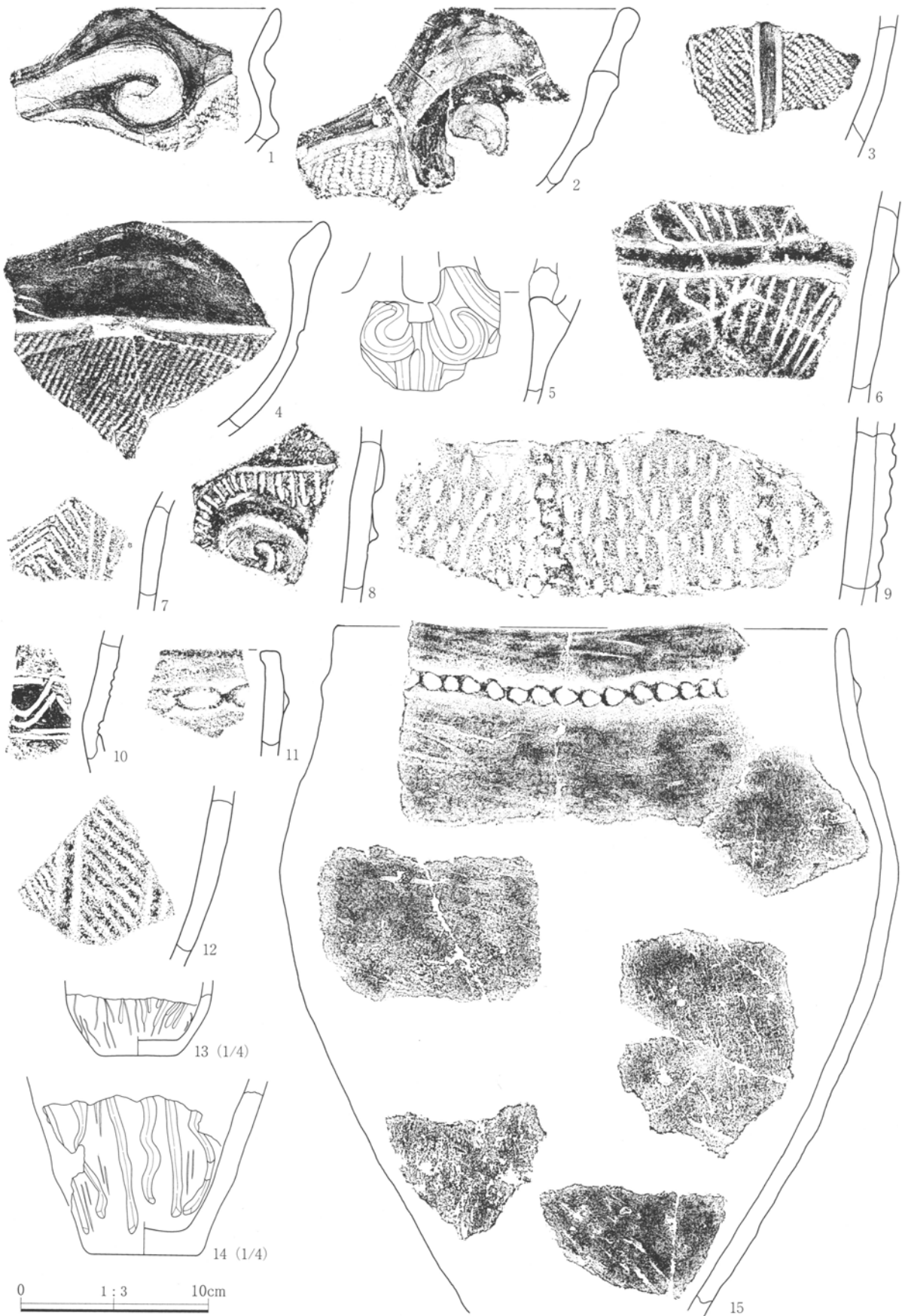
**重 複** 北西部を大きく105号住居と重複し、これに切られる。また、東側で476号・533号・540号土坑と重複し、これらに切られる。なお、北西側に18号埋設土器(後期)と23号埋設土器(住居炉の可能性あり)が近接する。

**形 状** 明瞭な壁は確認できなかったが、柱穴の配置、礫の少ない床面の範囲と遺物の出土状況、周囲の地山礫の状況などから、一辺4.5mほどの隅丸方形を呈するものと想定される。

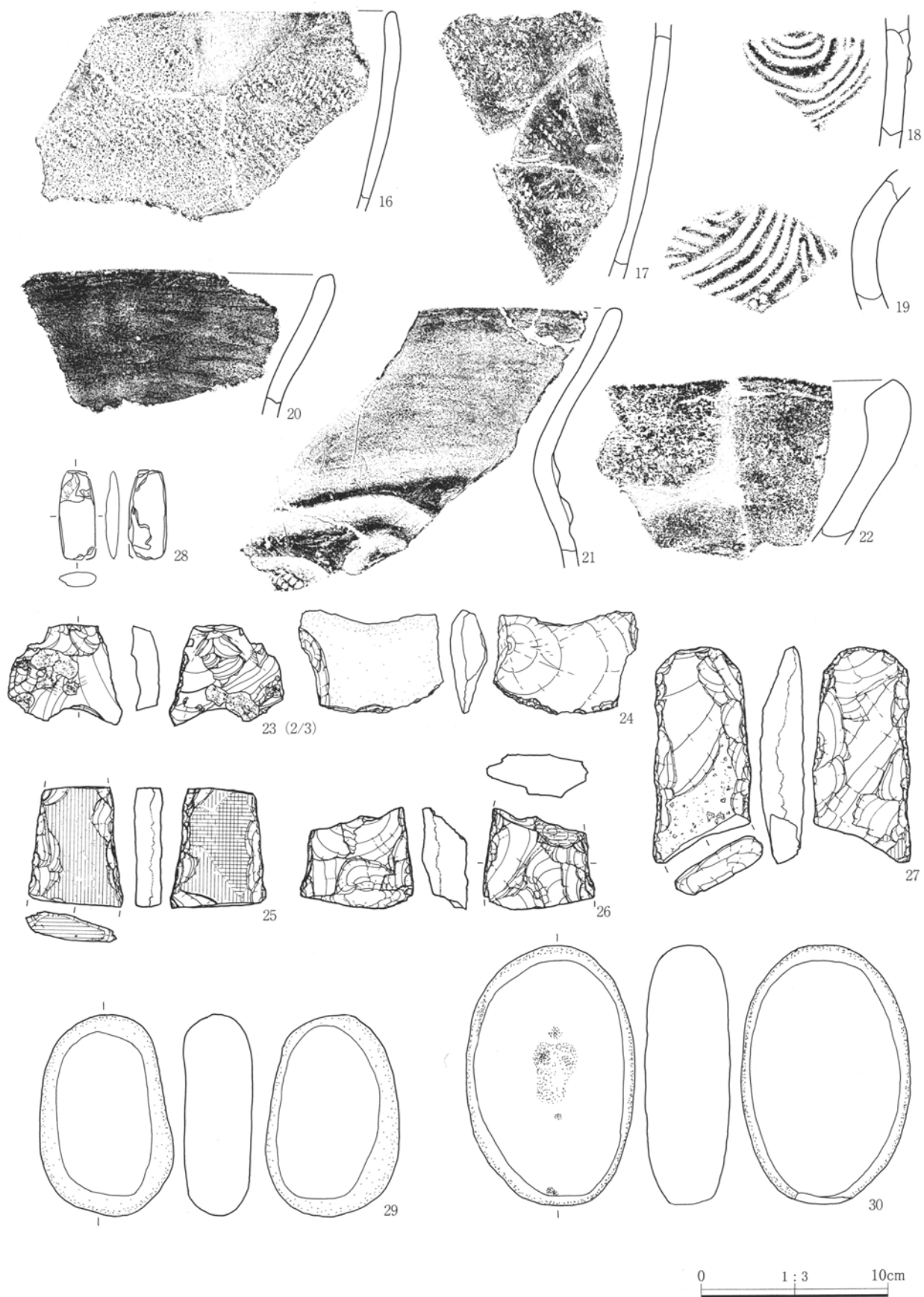
**床 面** 地山礫を片付けた平坦な床面が構築されており、炉の周囲には焼土と黄色土が混じる部分や硬化面が認められた。



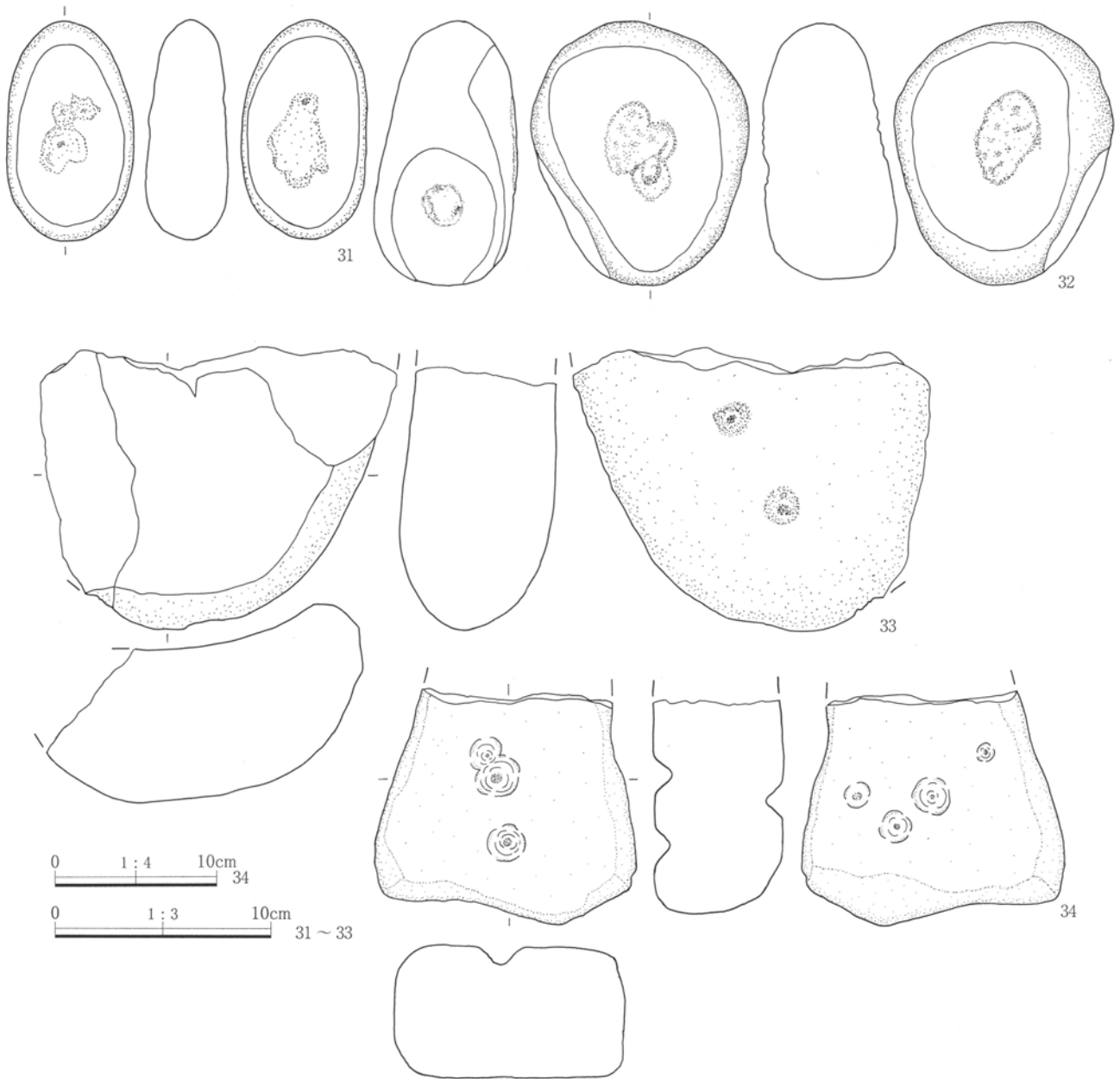
第91図 20区102号住居



第92図 20区102号住居出土遺物(1)



第93図 20区102号住居出土遺物(2)



第94図 20区102号住居出土遺物(3)

**炉** 厚手の大きな扁平礫4石で組んだ方形石  
 囲い炉で、規模は一辺86cmである。炉石は側縁を  
 立てて設置されており、南と西の炉石はほぼ垂直  
 に設置するが、北と東の炉石はやや斜めに使ってい  
 る。また、北西と南西の隅に小さな礫を根詰めして  
 いる。炉内に焼土はほとんど残っていなかったが、  
 炉石は変色・劣化・ひび割れ等の被熱痕跡が明瞭に  
 認められた。

**柱 穴** 確認できたのは4本である。炉から推定さ

れる主軸との関係では、柱3・4の2本は主柱とみ  
 てよいが、残る2本はかなりずれている。規模(長  
 辺×短辺×深さ)は、柱1:52×50×24、柱2:  
 45×-×23、柱3:39×-×33、柱4:48×45  
 ×43である。

**遺物** 覆土中から少量に遺物が出土している。土  
 器は総数311点が出土しており、主な土器は加曾利  
 E3式が66点、唐草文系新段階が37点で、ほかに  
 勝坂式が4点、焼町土器が2点、加曾利E4式が

### 第3章 発見された遺構と遺物

1点、称名寺式が4点、後期が14点、晩期が1点がある。9・15は越後系のもので、本遺跡でも出土例の少ない土器である。

石器は削器1点、加工痕ある剥片2点、打製石斧3点、磨製石斧1点、磨石4点、丸石1点、石皿1点があり、ほかに多孔石1点、石核1点(珪質変質岩類1点)、剥片30点(黒曜石18点、珪質変質岩類8点)、碎片14点(黒曜石14点)がある。

これらのうち、7・9・29・30・32は炉内からの出土である。

**時期** 出土土器は少ないが、炉内及び覆土中出土の土器は加曾利E3式期中段階を主体としており、本住居も当該期に比定されよう。

#### 20区103号住居

**調査年度** 平成15年度

**位置** E-4グリッド

**経過** 表土掘削後の遺構確認作業で、一定の範囲から土器がまとまった状態で出土し、住居候補としての調査方法に切り替えられた。覆土下層には礫が多く、土器の出土は少なかったが、やがて調査範囲のほぼ中央で石囲い炉が確認された。炉と遺物のレベルをもとに床面を精査し、柱穴の確認作業を進めたが、地山と覆土との区別が難しく、確信のもてる柱穴は見つけることができなかった。最終で掘り方調査を実施したが、追加すべき成果はほとんど得られていない。

**重複** 重複する遺構はない。本住居がある地区は、後期の住居数軒が集まった地区で、中期の住居は南側8mにある101号住居のみである。また、本住居の西側は、遺構がない空白地区になっている。

**形状** 直径5.3mほどのやや不定型な円形を呈する。壁は全周するが、地山と覆土の区別が難しいため、山側の壁高の深いところでは掘りすぎのきらいがあり、立ち上がりは斜めになっている。確認面からの高さは、山側で45cmほどである。

**床面** ほぼ水平の平坦な床面が構築されており、炉の周辺では部分的に硬化面が確認できた。

**炉** 大きな扁平礫4石で組んだ土器埋設方形石囲い炉で、住居の中央よりやや西側にずらした位置に設置されている。炉石は側縁をやや外側に傾けて組んでいるが、西側の炉石は内側に傾いており、土圧その他の理由でその後に動いてしまったと考える。埋設土器(14)は、内外面に研磨を施す無文の鉢あるいは深鉢で、口縁部と胴下半部を打ち欠いて、炉内の北西隅に正位に埋設していた。ちなみに、本住居では図のように東側を出入り口に想定しているが、その場合、炉は奥壁に寄っていることになり、炉内埋設土器も奥壁側に設置されていることになる。

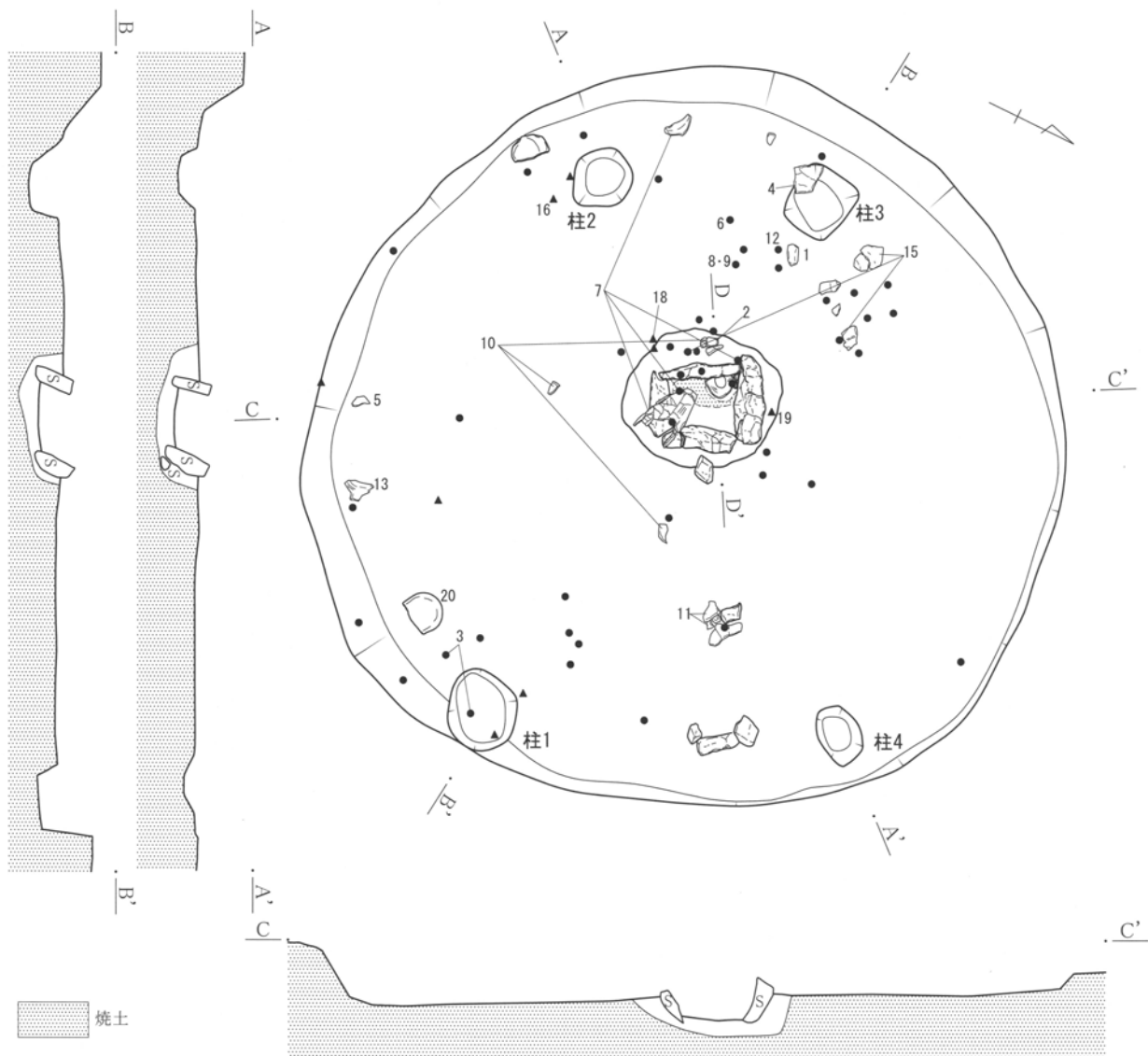
炉内には、埋設土器がある西側半分に焼土が厚く残っており、炉石と埋設土器の上半部には、変色・劣化・ひび割れ等の被熱痕跡が明瞭に認められた。

**柱穴** 4本が確認されたが、いずれも深さが浅く、主柱とするには心許ない。規模(長辺×短辺×深さ)は、柱1:58×50×13、柱2:46×42×13、柱3:47×43×22、柱4:41×30×9である。

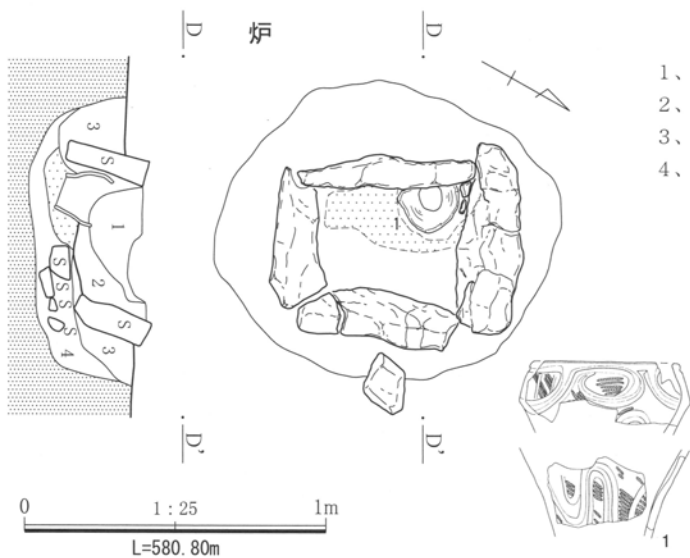
**遺物** 本住居の主要土器の大半は、覆土上層からまとまって出土している。土器は総数116点が出土しており、主要なものは加曾利E3式が18点、唐草文系新段階が10点で、ほかに勝坂式が1点、焼町土器が2点、加曾利E1式が1点、加曾利E2式が1点、加曾利E4式が1点、後期称名寺式1点がある。このうち、土器3は床面からの出土である。

石器は、石鏃1点、石鏃未製品1点、石錐3点、使用痕ある剥片1点、石皿1点が出土しており、ほかに石核2点(黒曜石1点)、剥片10点(黒曜石7点)がある。石皿(20)は、住居内北東部縁辺の柱1に近い床面から出土した。裏面の両側に一部自然面を残す以外は、ほぼ全面に丁寧な調整加工を施した精緻なつくりのもので、裏面には多孔石と同様の凹み穴が付けられている。また、掻き出し口が付く手前半分を欠損し、さらに転用を意図したものか、表面の縁の高まりを細かく打ち欠いている。

**時期** 出土土器は加曾利E3式期新段階を主体としており、本住居も当該期に比定されよう。



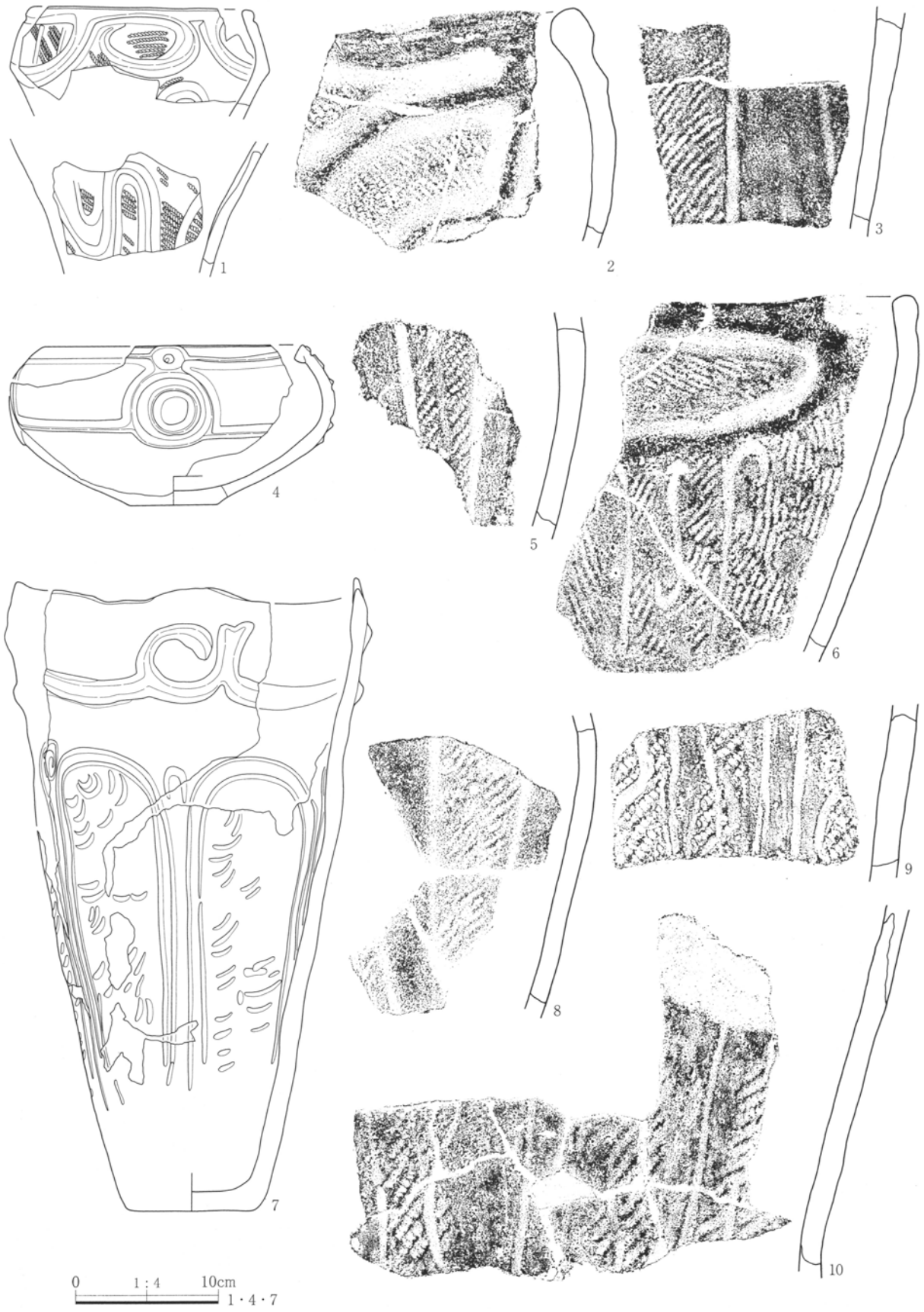
0 1:50 2m  
L=581.00m



- 1、暗褐色土。硬質で炭化物を少量含む。
- 2、暗褐色土。やや明るい色調で、硬質。焼土と炭化物を少量含む。
- 3、暗褐色土。地山土を含む。
- 4、暗褐色土と黒褐色土の混土。焼土と炭化物を少量含む。

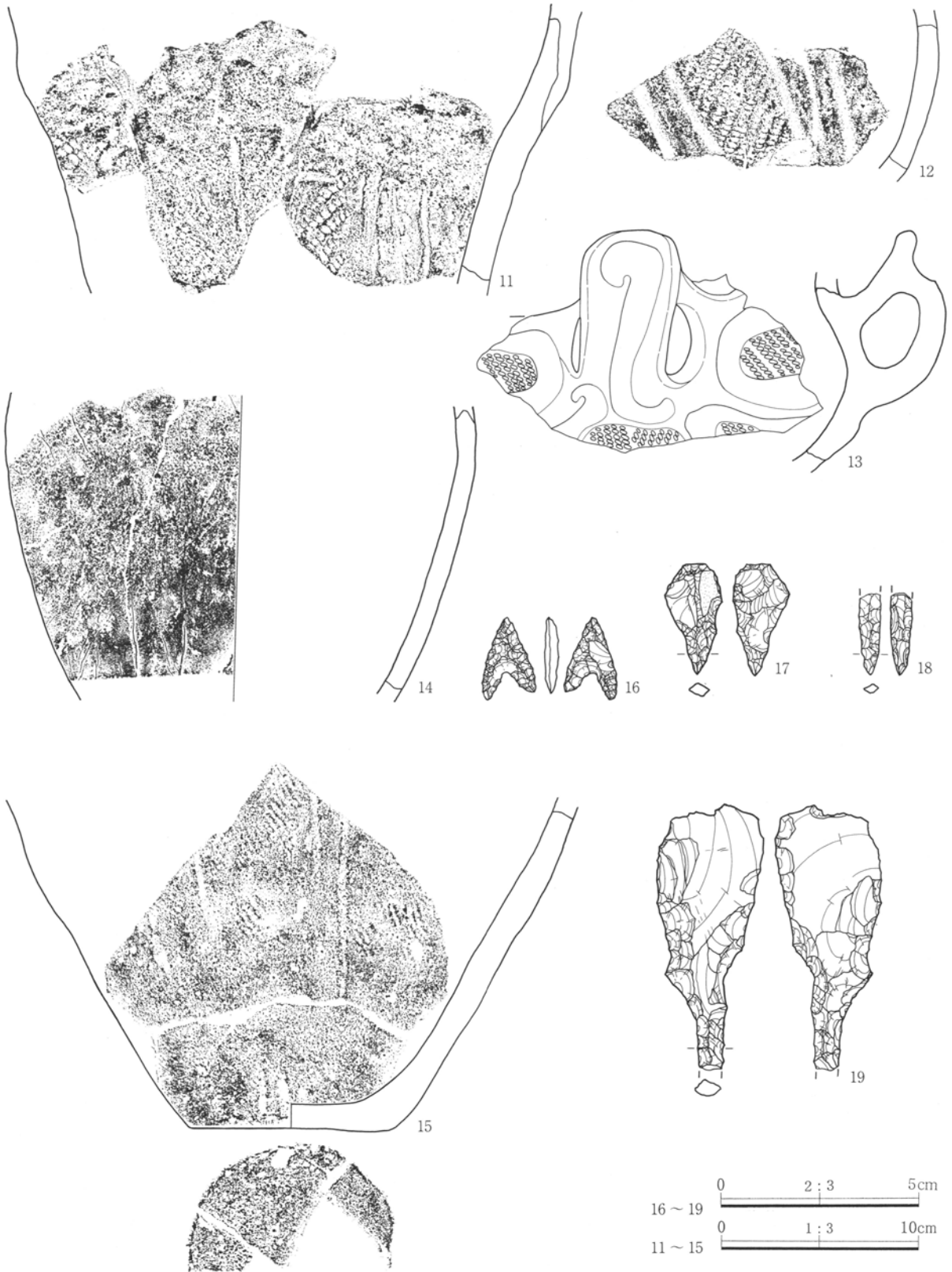


第95図 20区103号住居

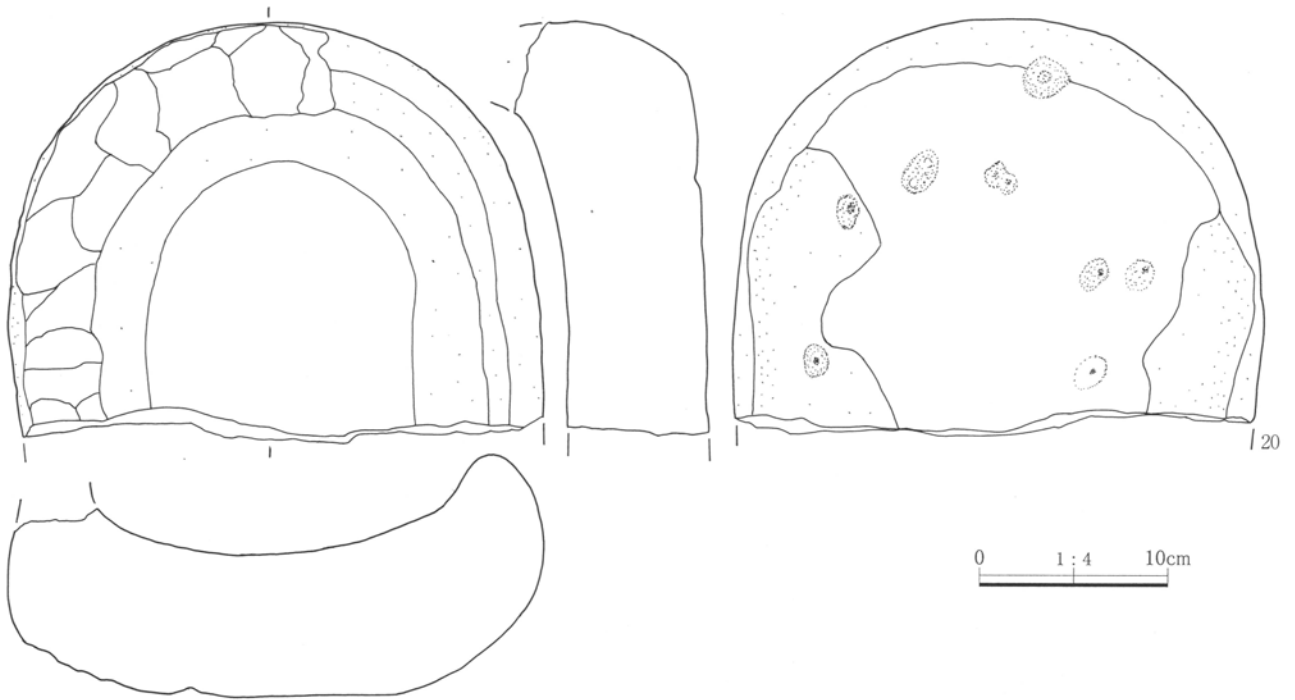


第96図 20区103号住居出土遺物(1)





第97図 20区103号住居出土遺物(2)



第98図 20区103号住居出土遺物(3)

20区 104号住居

調査年度 平成15年度

位置 C-11グリッド

経過 79号住居の南側に、大量の礫と遺物が広範囲にわたって集積しており、複数の住居の重複が想定された。調査はまずグリッドのベルトを残して掘り下げ、遺構の輪郭をつかんだ時点で個別の遺構に対応することとなった。結果は96号住居と本住居の2軒の重複と判断し、個別の対応となった。

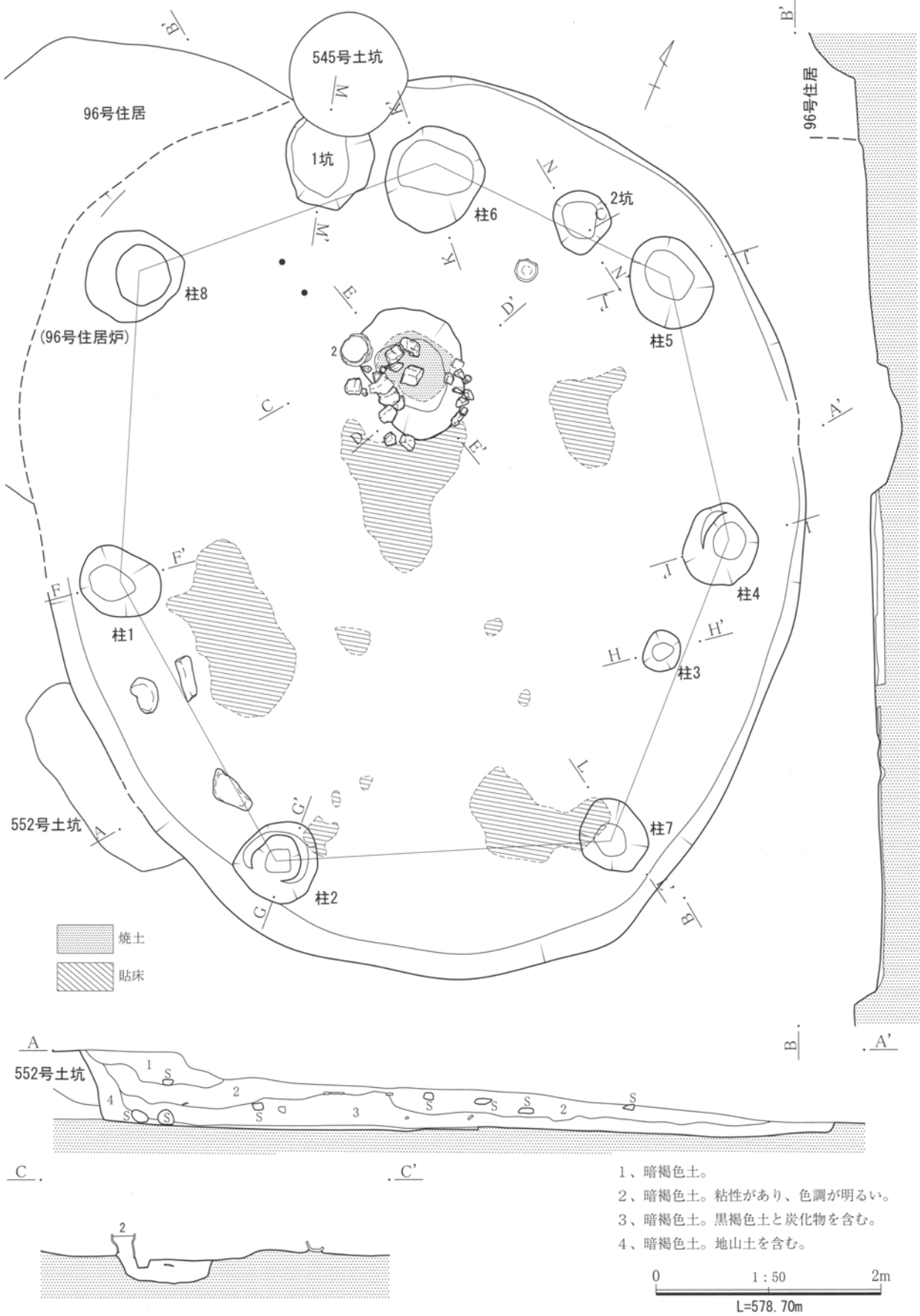
104号住居では、遺物は覆土上層から下層にわたって認められ、大型の礫も数多く出土した。床面は、貼り床が施されていたので容易に検出できたが、炉の北側床面に土器(深鉢の底部で、その後所在不明)が正位に置いた状態で出土した。調査時にはこれを炉に伴う埋設土器と判断し、この炉を中心とする一定範囲を105号住居と命名して、調査は平行して進められた。105号住居の認定には、104号住居が大型であることと、谷側にあたる北側の壁が僅かしか確認されず、オープンな状態であったことにも

一因があるが、その後の調査で105号住居の存在を判定できる成果は得られなかった。

整理段階でも105号住居の扱いが問題となり、検討の結果、その起因となった土器(深鉢底部)は、104号住居の貼り床面に正位に置かれていること、同一面にある104号住居の炉にも同じ状態の土器(2)があること。起因となった土器(深鉢底部)が埋設土器なら、床面レベルはさらに上に存在することになるが、それを支持する調査結果は得られておらず、また付帯施設等も見当たらないことなどから、105号住居は一旦欠番とし、104号住居に含めて扱うこととした。

重複 西側を20区96号住居と重複し、これに切られる。また、北側に79号・94号・107号が近接する。なお、本住居周縁に545号・552号土坑が重複するが、切り合い関係は不明である。

ちなみに、96号住居の炉は本住居の柱8の上面に重なっており、炉内埋設土器は柱8の真ん中に設置されていた。



第99図 20区104号住居 (1)

### 第3章 発見された遺構と遺物

**形状** 南北に長い卵形を呈し、規模は長軸8m、短軸6.92mで、確認面からの深さは山側で68cmである。

**床面** ほぼ水平で平坦な床面を構築している。炉の周囲をはじめ、所々に黄色ローム質土を薄く敷いた貼り床が施されており、その他の所も柱穴の内側では硬化面が認められた。

その他では、柱1と2の間で長さ30～40cmの細長い円礫3個が、床面に置いたような状態で確認された。調査時の写真記録で確認したところ、南東部分に同じ大きさの礫がもう1つあって、長方形に置かれていたことが判明した。つまり、この礫は2つの柱穴をつなぐラインに沿って長方形に配置されたもので、南東部の1つは気づかずに外されてしまったのであろう。

同様の事例は、本調査区の北西で調査された20区34号住居(平成16年度刊行「横壁中村遺跡(2)」に収録)でも確認されており、本住居に付随する施設の一部と考えてよいだろう。ちなみに、20区34号住居ではこの方形状の配石が2箇所あり、そのうち1箇所には伏せ甕が伴っていた。

**炉** 住居長軸線上の北側寄りに設置されている。南南東を出入りに想定すると、かなり奥に位置することになる。確認段階で、炉の上面には多量の礫が集積され、その傍らに胴下半部を打ち欠いた深鉢(2)が正位に置かれていた。礫は被熱痕跡のあるものが多く、炉内にも数多くの礫が充填されていた。集積された礫の下に炉の石囲いはなく、床面下30cmほどの掘り込みの底面に、隅丸方形状の範囲で焼土が残っていた。傍らに置かれた土器(2)は口縁部の突起が潰れ、やはり被熱痕跡が認められる。

以上のことから、使用時には土器埋設方石囲い炉であったと考えられ、住居の廃絶に伴って炉を取り壊し、使用していた炉石と埋設土器をその上に集積して、片付けたものと思われる。

掘り方の規模は長軸1.2m、短軸90cm、床面からの深さは最深部で55cmで、焼土面の範囲は東西

幅が64cm、南北幅が55cm、床面からの深さは30cmである。なお、炉内から石鏃56と土器6の一部が出土している。

**柱穴** 合計8本が検出されており、そのうち柱3を除く7本が主柱となる。このうち、柱4・5・6の柱間の距離は2.35m、柱1・8・6の間は2.75m、柱1・2・7・4の間は2.9mで、それぞれに統一されている。

柱3は細いが、深さは主柱と比べても遜色ない。主柱の配置から、出入り口は柱2と7の間を想定しているが、この場所は山側にかかるため、高低差があるばかりでなく、雨水の流れ等もあり、出入りには適さないとも考えられる。柱3と4の間が出入り口となる可能性もある。

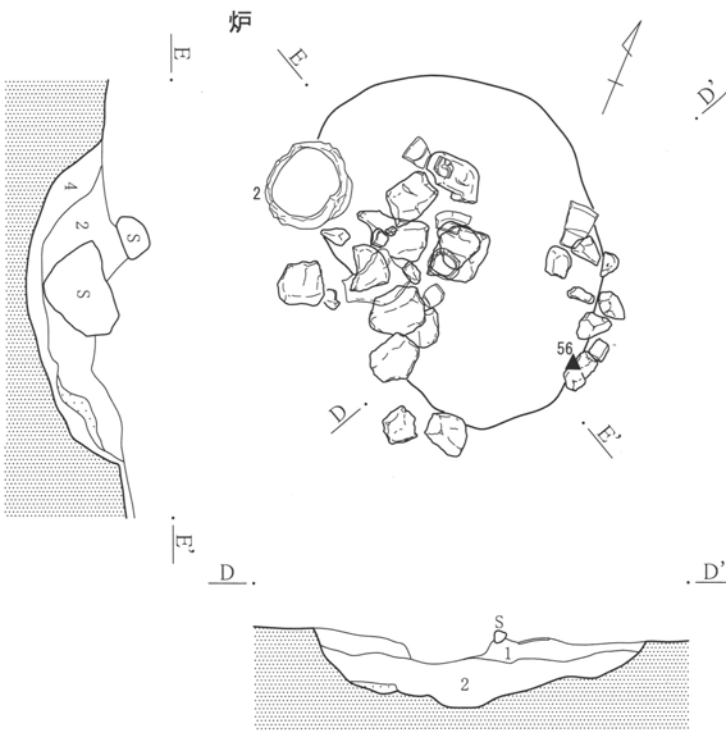
なお、柱6の両側に1号・2号土坑がある。柱穴に比べて浅いため、調査時に住居内土坑とされた。本住居に伴うものかどうか、覆土の所見は判然としない。土器13は1号土坑から出土している。

規模(長辺×短辺×深さ)は、柱1:74×58×50、柱2:75×70×60、柱3:37×21×55、柱4:71×68×60、柱5:84×69×55、柱6:94×85×55、柱7:62×58×49、柱8:67×48×43である。

**遺物** 覆土の上層から下層にわたって、多量の礫と遺物が出土している。土器は総数842点が出土した。主な土器は唐草文系新段階が234点と圧倒的で、その他に加曾利E3式が44点、加曾利E1式が34点、勝坂式が34点、焼町土器が25点、曾利式古段階が19点、加曾利E2式が14点である。このうち、51・52は大木系の土器で、越後地方から北信にかけて分布することが知られている。

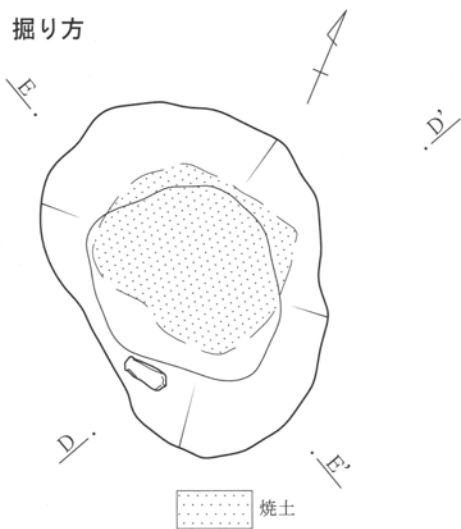
石器は石鏃3点、石鏃未製品10点、石錐1点、削器1点、加工痕ある剥片2点、使用痕ある剥片1点、打製石斧5点、磨石1点、丸石2点が出土しており、ほかに剥片131点(黒曜石118点、珪質変質岩類2点)、碎片130点(黒曜石128点、珪質変質岩類2点)がある。

このうち、丸石63と64は床面から出土しており、



- 1、暗褐色土。
- 2、暗褐色土。焼土と炭化物を含む。
- 3、焼土。
- 4、黒褐色土。粘性があり、上面に焼土を多量に含む。

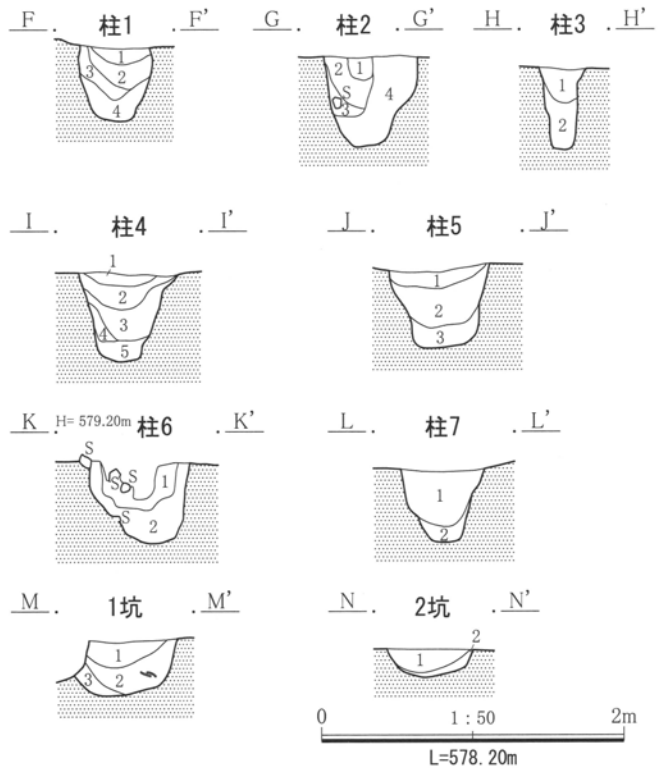
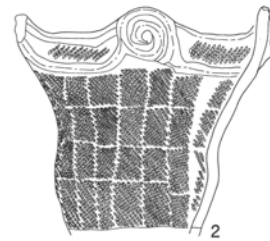
掘り方



焼土

0 1 : 25 1m  
L=578.20m

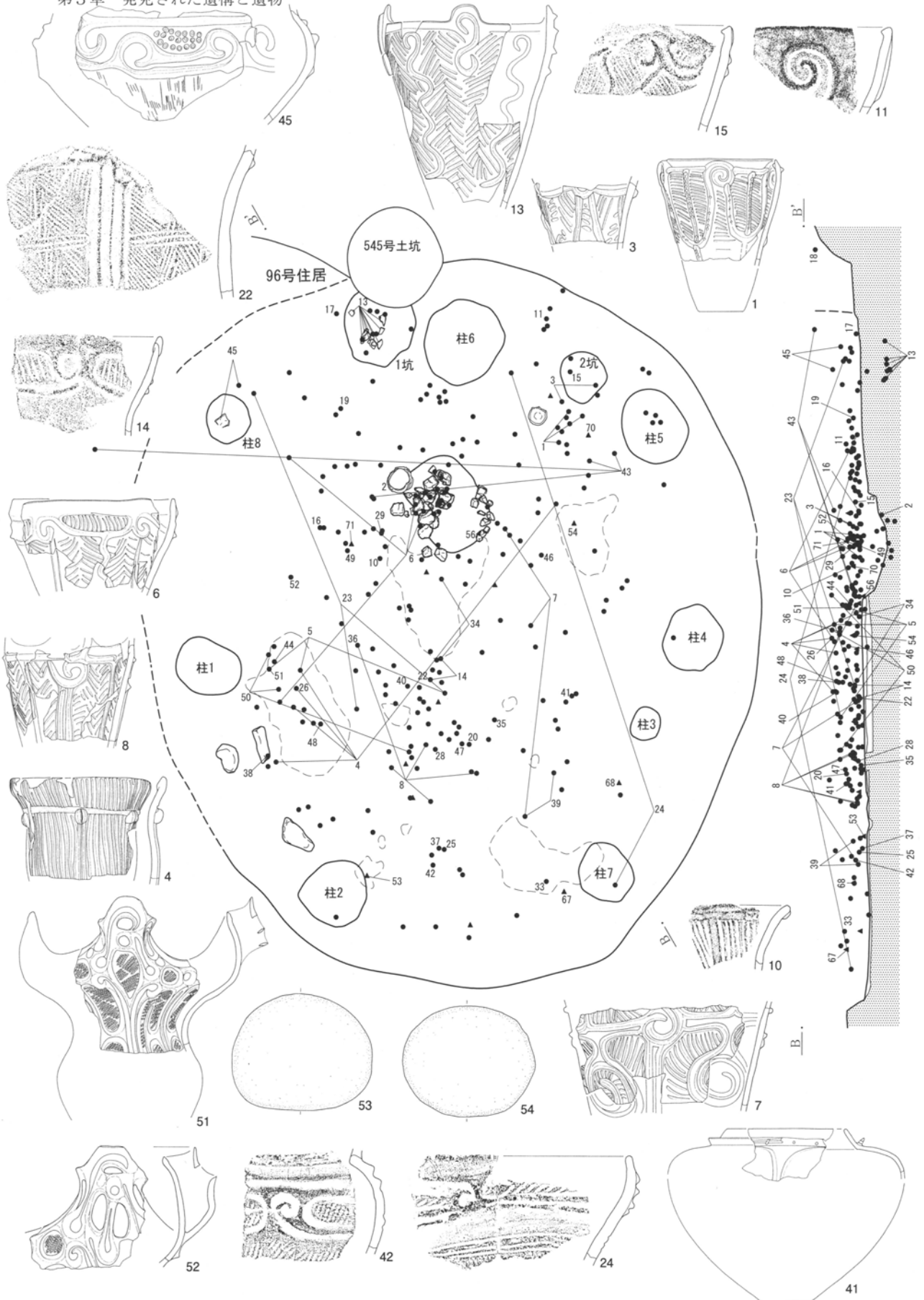
- 1、暗褐色土。粘性あり。
- 2、暗褐色土。粘性があり、黒褐色土を含む。
- 3、暗褐色土と黒褐色土の混土。
- 4、3と同質で、黒褐色土が多い。
- 5、暗褐色土。粘性あり。



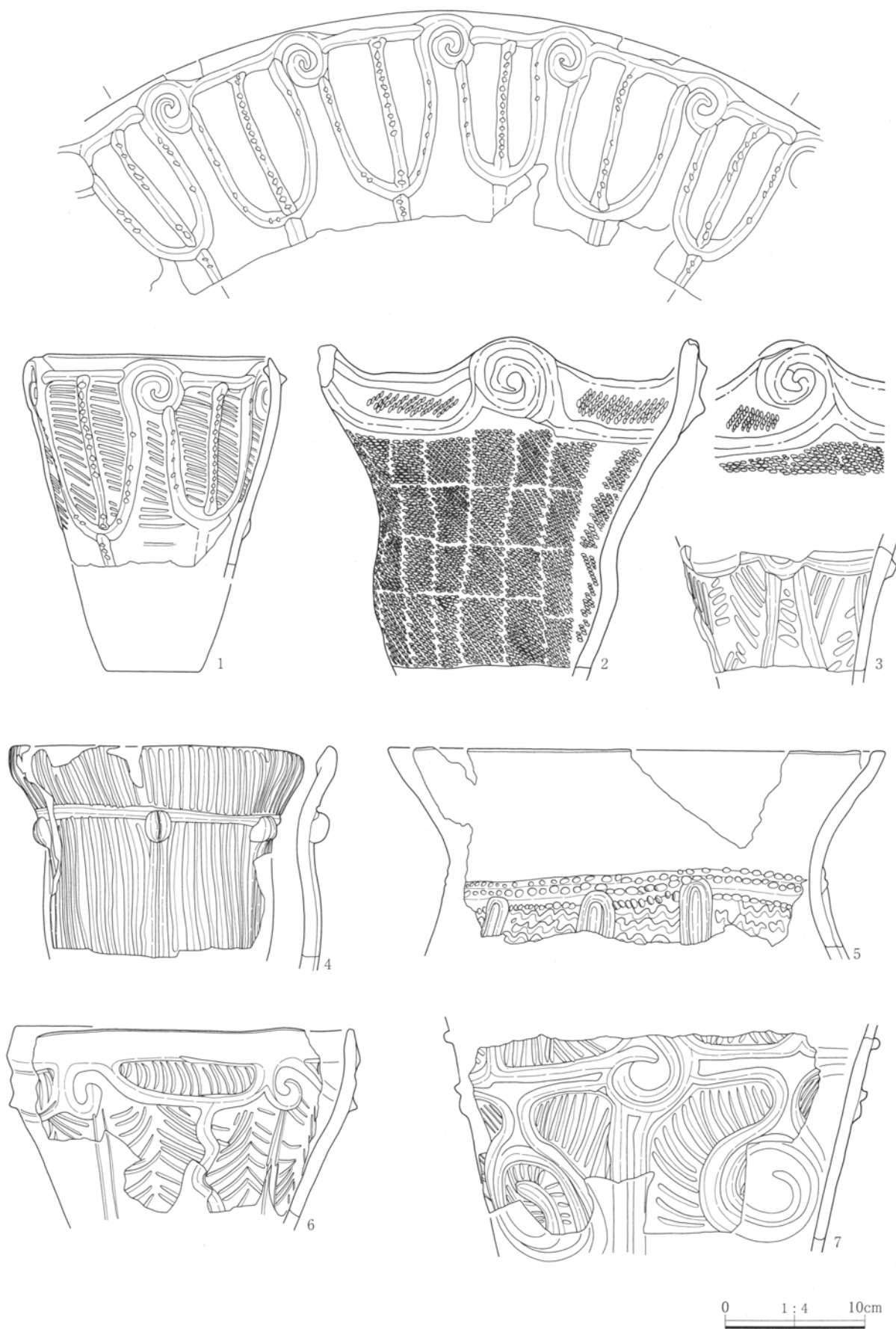
0 1 : 50 2m  
L=578.20m

第100図 20区104号住居 (2)

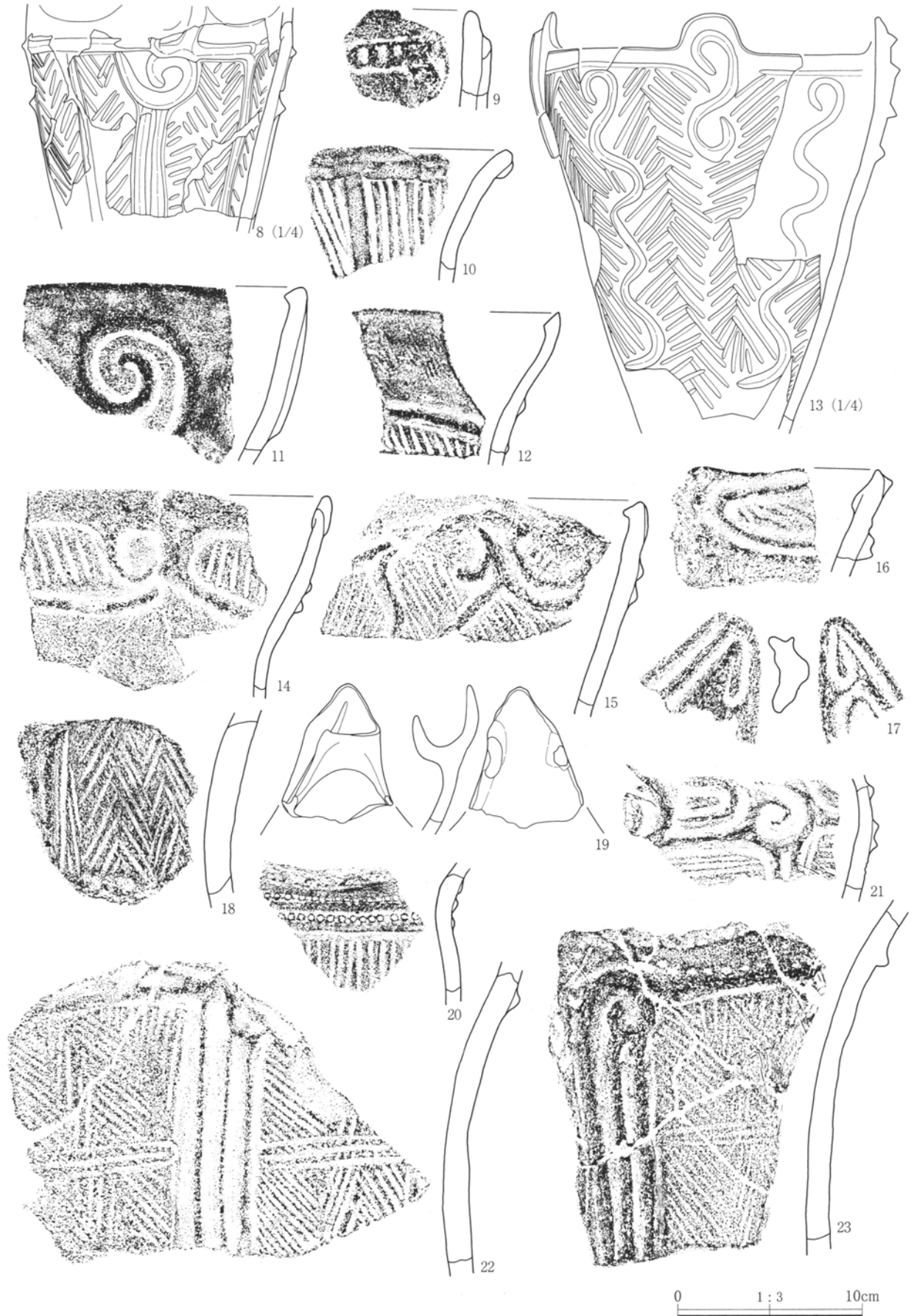
第3章 発見された遺構と遺物



第101図 20区104号住居 (3)



第102図 20区104号住居出土遺物(1)

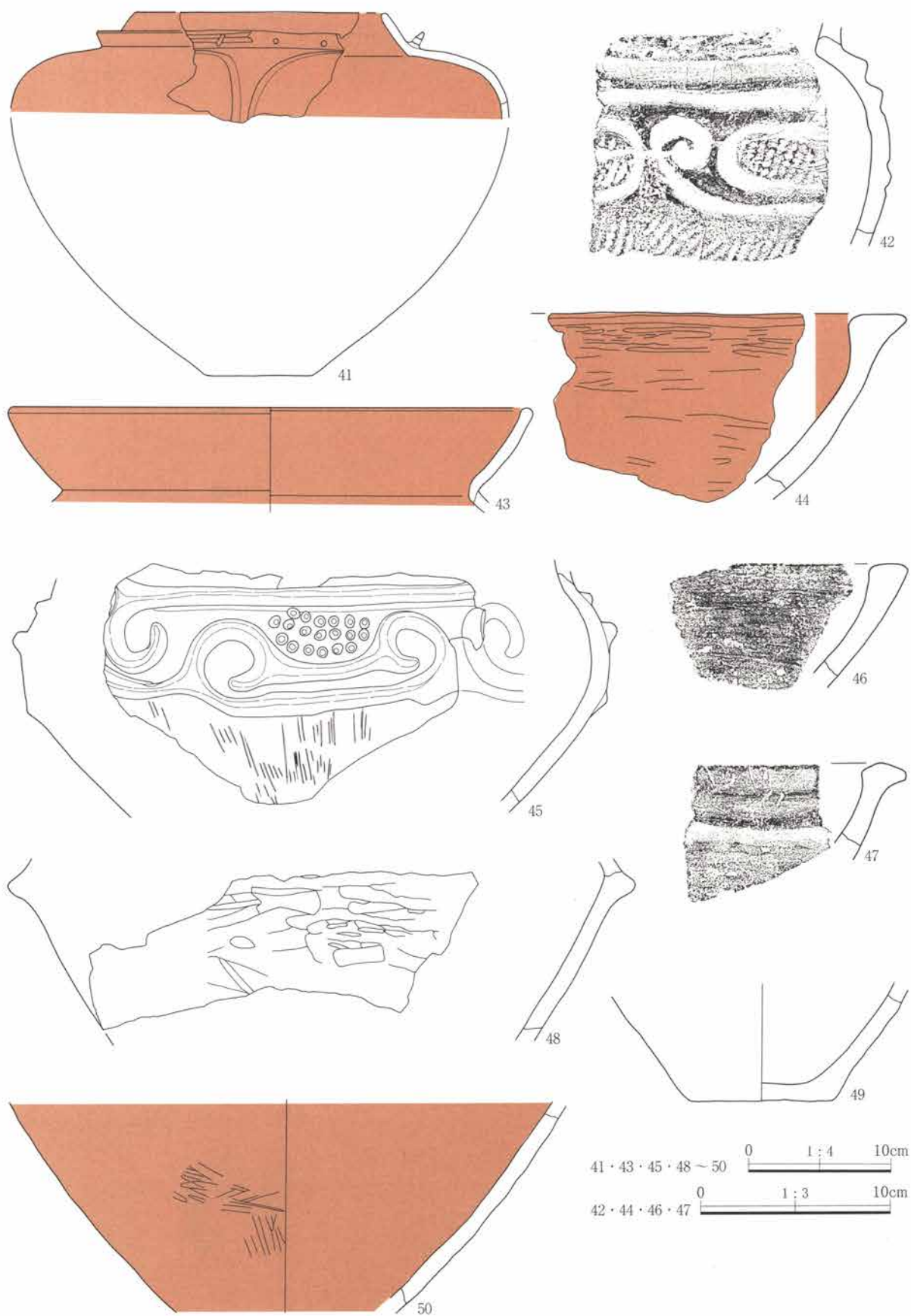


第103図 20区104号住居出土遺物(2)

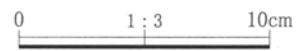
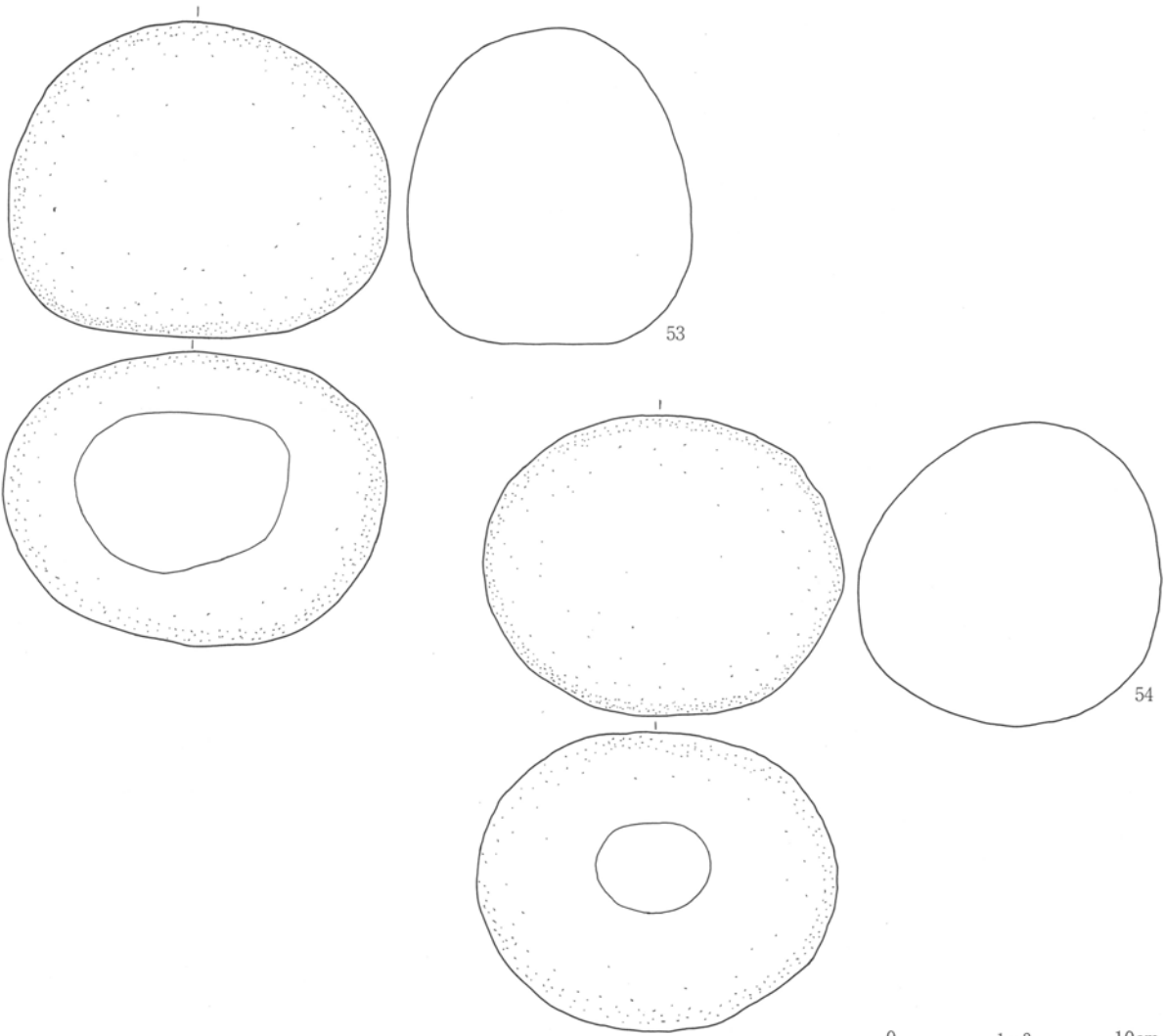
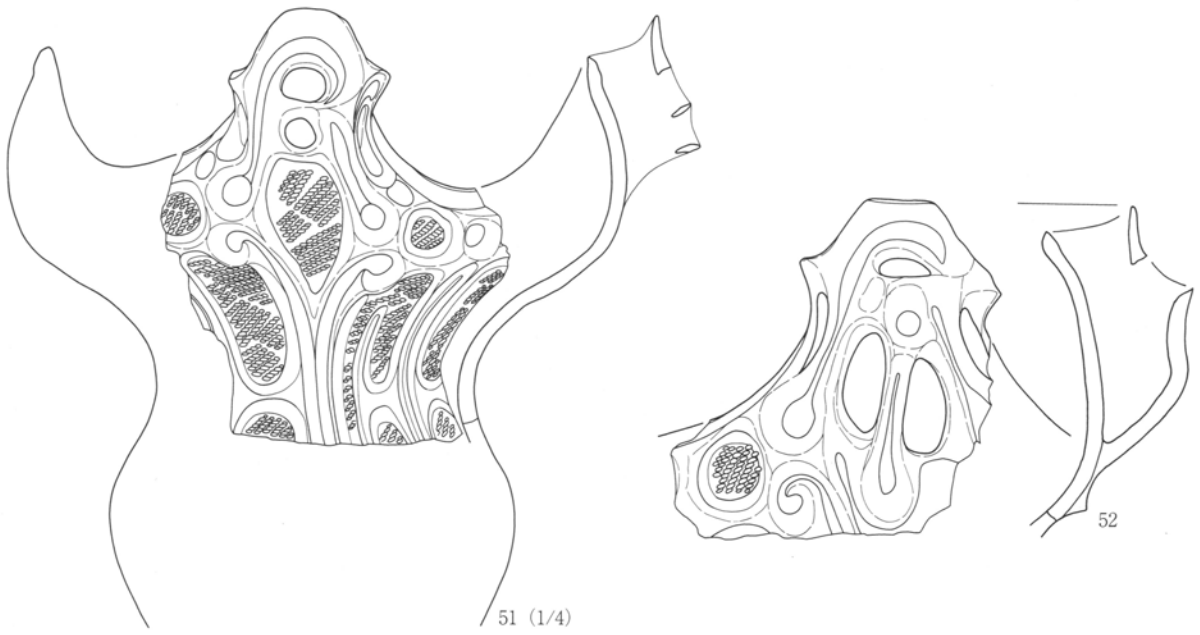




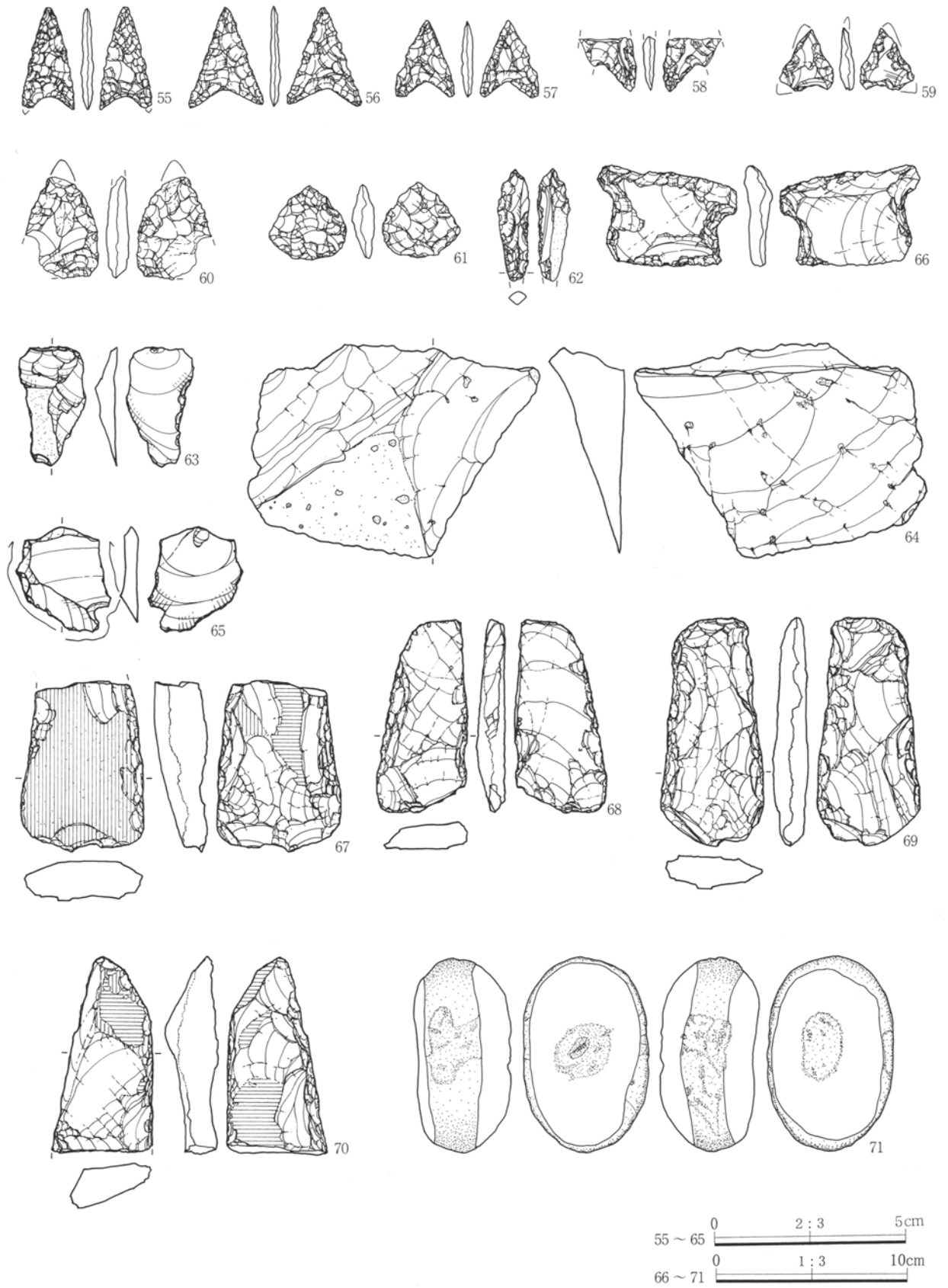
第104図 20区104号住居出土遺物(3)



第105図 20区104号住居出土遺物(4)



第106図 20区104号住居出土遺物(5)



第107図 20区104号住居出土遺物(6)

63は柱2の傍らから、64はその北側1mのところ  
に置かれていた。2つとも長さ15cmほどの楕円形  
の円礫で、底面の平坦面だけに加工を施して置ける  
ように調整しており、同じ形態の丸石が97号住居  
でも1つ見つかっている。この場所は出入り口が想  
定される場所であり、また長方形配石にも近いこ  
とから、注目しておきたい。

**時期** 出土遺物は加曽利E3式期古段階を主体  
としており、本住居も当該期に比定されよう。

#### 20区105号住居

**調査年度** 平成15年度

**位置** G-12グリッド

**経過** 105号住居の名称は、調査時に104号住居  
の北側に重複する住居を想定して付けられたもの  
だが、その後の検討で一旦欠番扱いとなった。一方、  
102号住居を検討する中で、埋甕とされた埋設土器  
が住居の炉であることが判明したため、これを105  
号住居として扱うことにした。

したがって105号住居は炉のみの確認であるが、  
その周囲に土坑等の単独で扱われた遺構があり、こ  
れも含めて検討することにする。

**重複** 102号住居の北側に重複し、これを切る。  
周囲には18号・20号・23号埋甕、及び476号・503号・  
522号・533号土坑等が重複するが、このうち23号  
埋甕は中期後半の住居炉と考えられ、本住居に切ら  
れている。18号・20号埋甕は後期の単独埋設土器で、  
本住居を切っている。

**形状** 不明。

**床面** 手懸かりはほとんどないが、炉石が使用時  
の現況を留めている前提に立てば、102号住居の床  
面より40cmほど高い位置にあったと考えられる。

**炉** 土器埋設方形石囲い炉であったと想定す  
る。炉内埋設土器の北西に隣接する、長さ50cmほ  
どに大きな扁平礫が炉石で、かろうじて使用時の現  
況を留めていると考えたい。

埋設土器は、深鉢2の内に1が入れ子の状態で検  
出されており、炉石とは逆の南東側にやや傾いた状

態で発見された。使用された土器は、外側が加曽利  
E式系の深鉢(2)で、胴下半部を打ち欠いて正位  
に埋設されていた。内側は唐草文系の深鉢(1)で、  
胴下半部と口縁部の波頂部を打ち欠いて、深鉢2の  
内側に重ねて正位に埋設されていた。なお、外側の  
深鉢(1)は半身を失っており、残っていたのは半  
個体分である。

炉内で焼土等は確認されていないが、埋設土器の  
口縁部には被熱痕跡が残っており、特に内側の深鉢  
(2)は変色・劣化が著しい。

**柱穴** 不明。

**遺物** 本住居の遺物は、炉内に埋設されていた土  
器2個体のみであり、1は唐草文系新段階に、2は  
加曽利E3式中段階に、それぞれ該当する。

**時期** 出土土器から、本住居は加曽利E3式期  
中段階に比定されよう。

#### 20区107号住居

**調査年度** 平成15年度

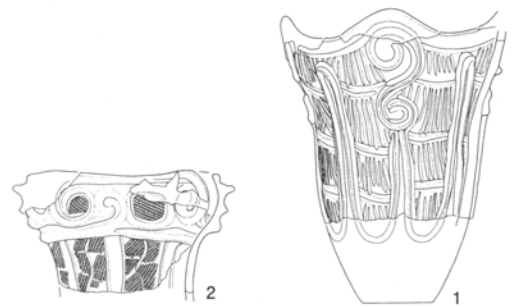
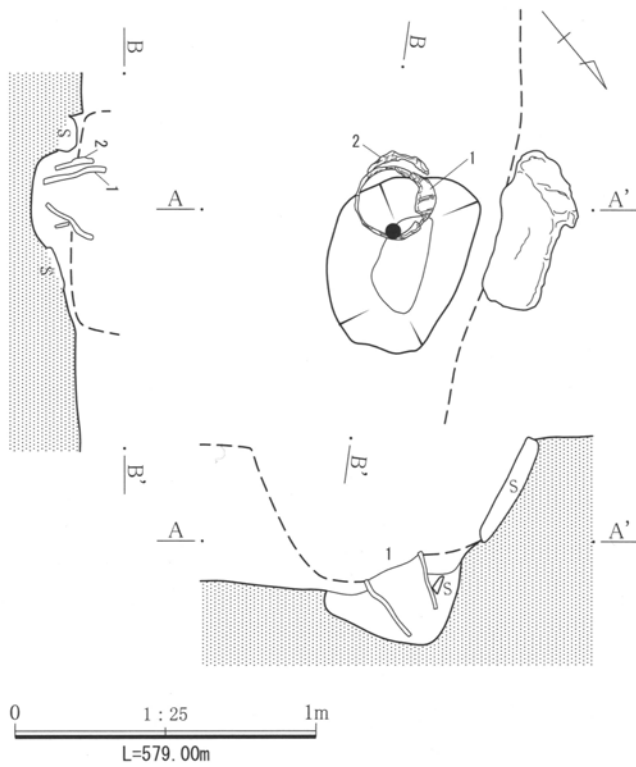
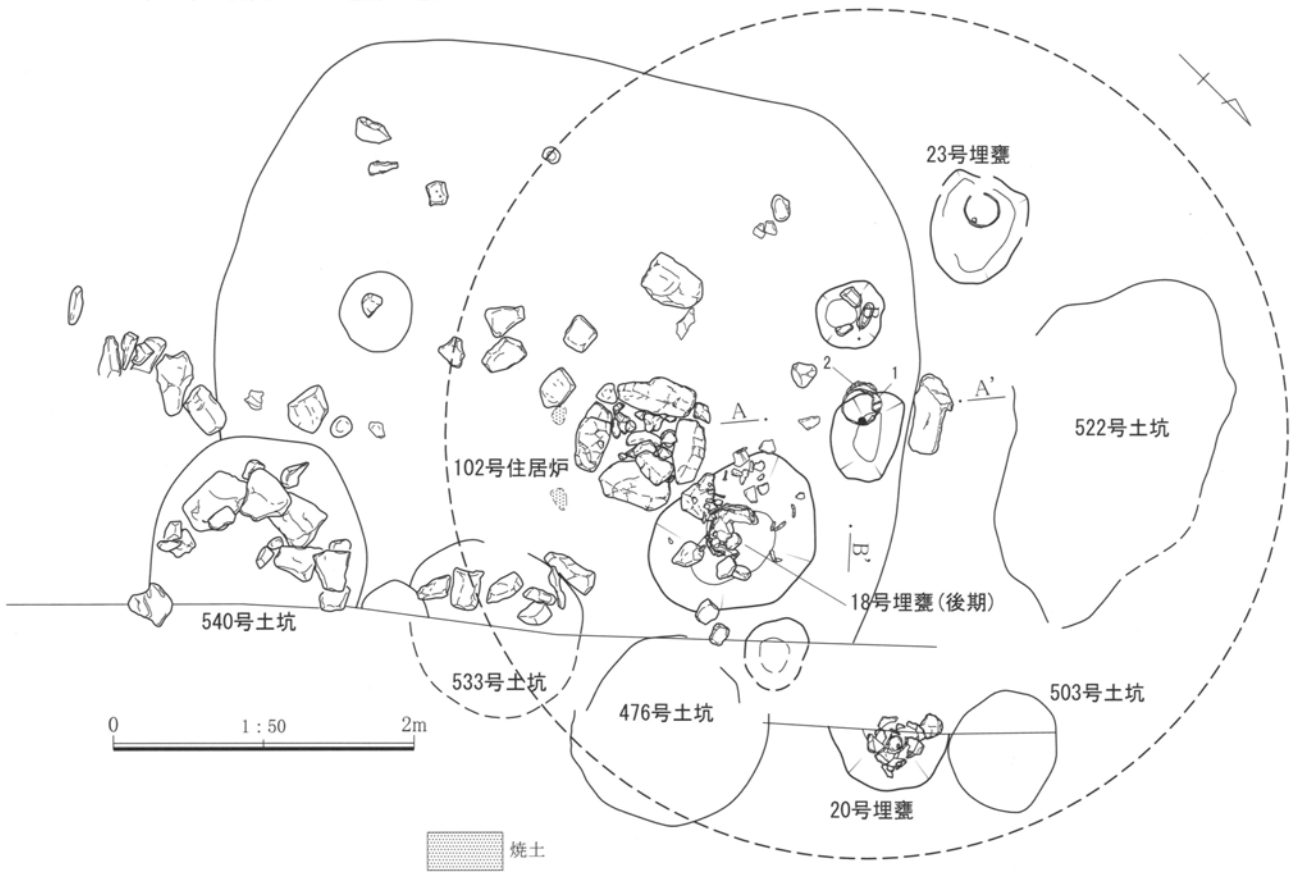
**位置** D-13グリッド

**経過** 20区94号住居の床下から多量の遺物が出  
土するため、住居の存在を想定して20区99号住居  
と命名して調査を進めたが、炉を確認することが  
できず、一旦は中断した。ところが、最終確認段階  
でその下から石囲い炉が検出され、その段階で新規  
に20区107号住居と命名された。その後、炉の南  
側で床面に置かれた土器や伏甕、および石蓋を伴う  
埋甕などが次々と発見された。

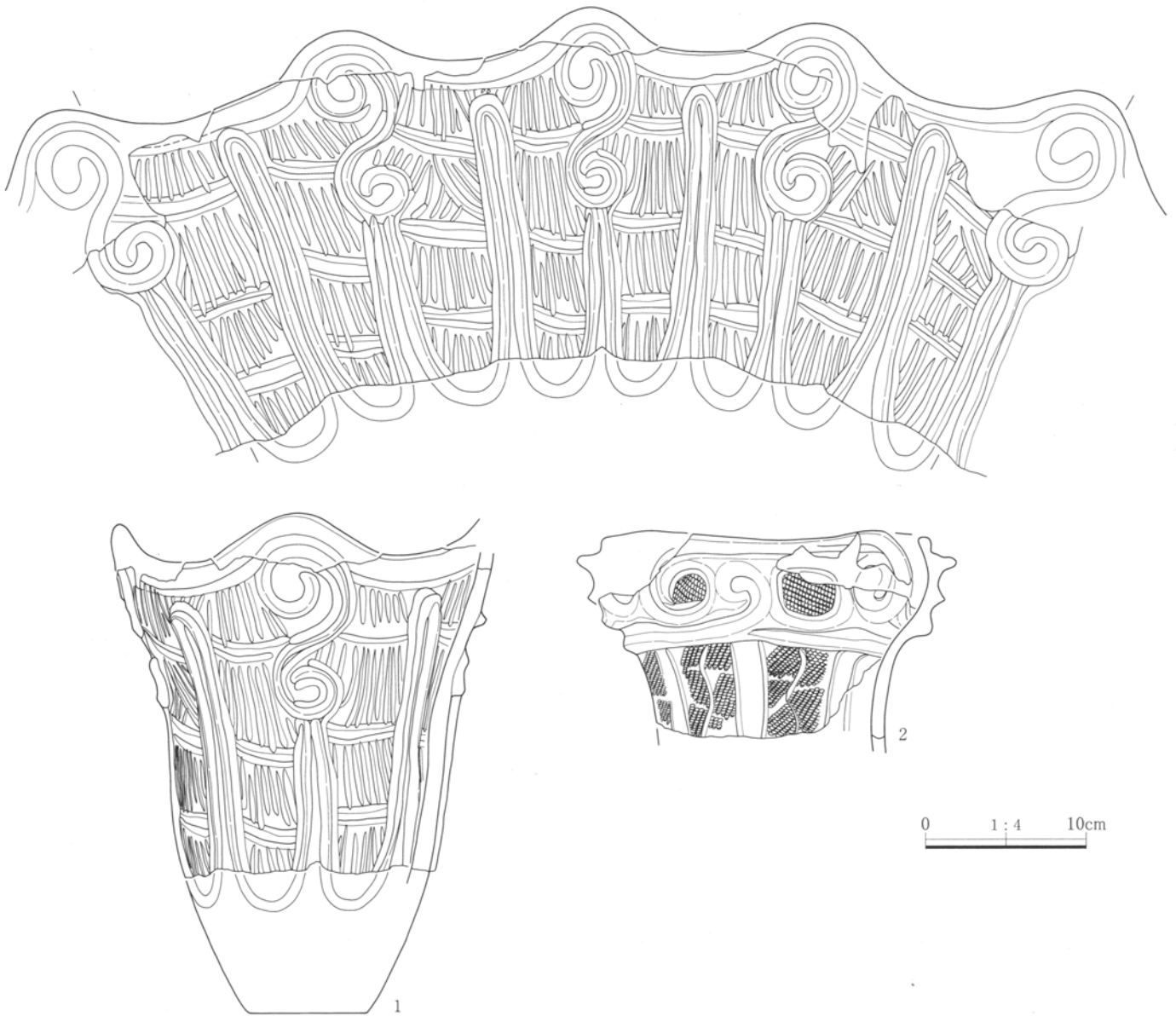
なお、99号住居の遺物分布範囲と本住居の範囲  
はほぼ重なるため、99号住居で取り上げられた遺  
物等は、総て20区107号住居の所属に変更して扱っ  
た。

**重複** 南側を大きく94号住居と重複し、これに  
切られる。また、東側の一部を79号住居と重なるが、  
切り合い関係は不明である。その他に、24号埋甕  
と519号・520号・539号・550号土坑と重複する。

**形状** 明確な壁は確認できなかったが、本住居の  
周囲は地山礫が多く、それが片付けられた空間は炉



第108図 20区105号住居



第109図 20区105号住居出土遺物（1）

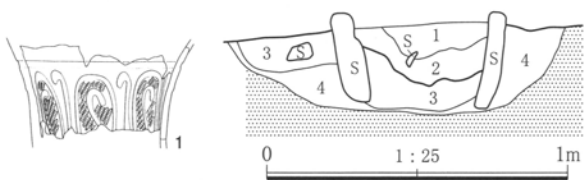
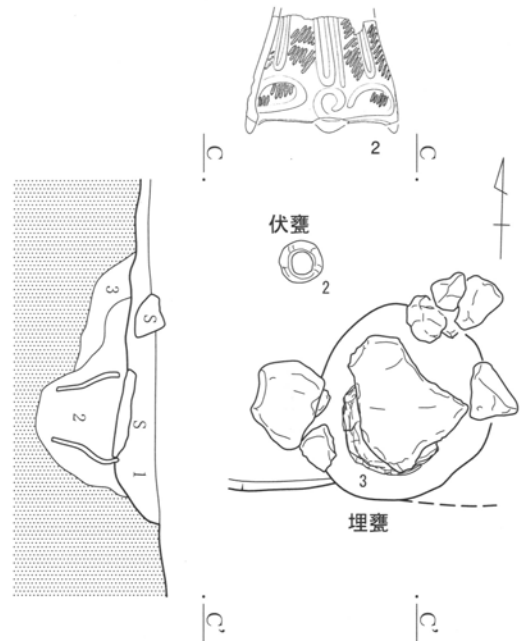
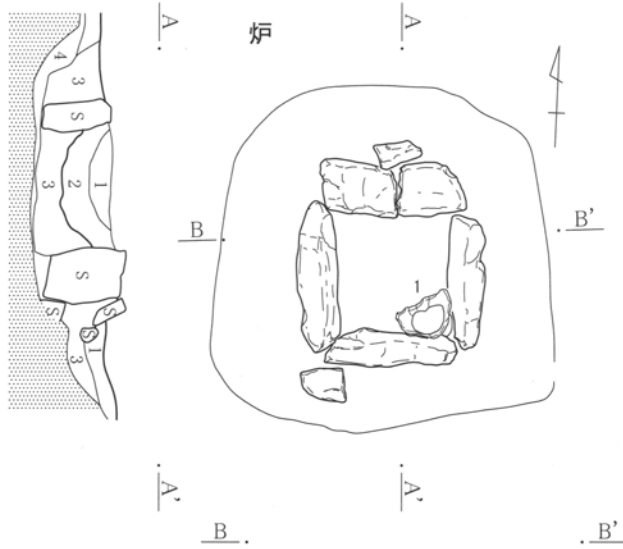
を中心に南北4 m、東西3.5 mの範囲で、調査時にはその輪郭を住居範囲として認定された。それは図の礫をつないだ範囲に相当する。ここでは、整理担当の権限を最大限に活用し、炉の大きさ、埋甕の位置と炉からの距離、遺物の出土範囲等を考慮して、もう一回り大きな直径4.5 mほどの範囲を想定したい。

**床 面** 炉の周辺を除いて、目立った硬化面は確認されていないが、地山の礫は取り除かれて、ほぼ水平な平坦面が構築されている。

なお、埋甕の北西30 cmのところ、床に口縁部

を伏せた状態で土器（2）が確認された。この土器は加曽利E式系の小さな深鉢で、胴下半部と口縁の突起があらかじめ打ち欠いてあった。口縁部がやや変色・劣化しており、炉内の埋設土器として使われていたものかもしれない。

**炉** 大きな扁平礫4石で組んだ土器埋設方形石囲い炉で、住居の中央に位置するものと想定する。炉石は長辺40～50 cmの長さに調整し、側縁を垂直に立てて整った正方形を構成している。埋設土器は、加曽利E式系の深鉢（1）を使用し、口縁部と胴下半部を打ち欠いて、炉内南東隅に正位に設置して



- 1、暗褐色土。やや軟質。
- 2、暗褐色土。粘性があり、炭化物を含む。
- 3、暗褐色土。黒褐色土を含み、やや砂質。
- 4、暗褐色土。地山土を含む。

1、暗褐色土。炭化物と礫を少量含む。 L=578.20m

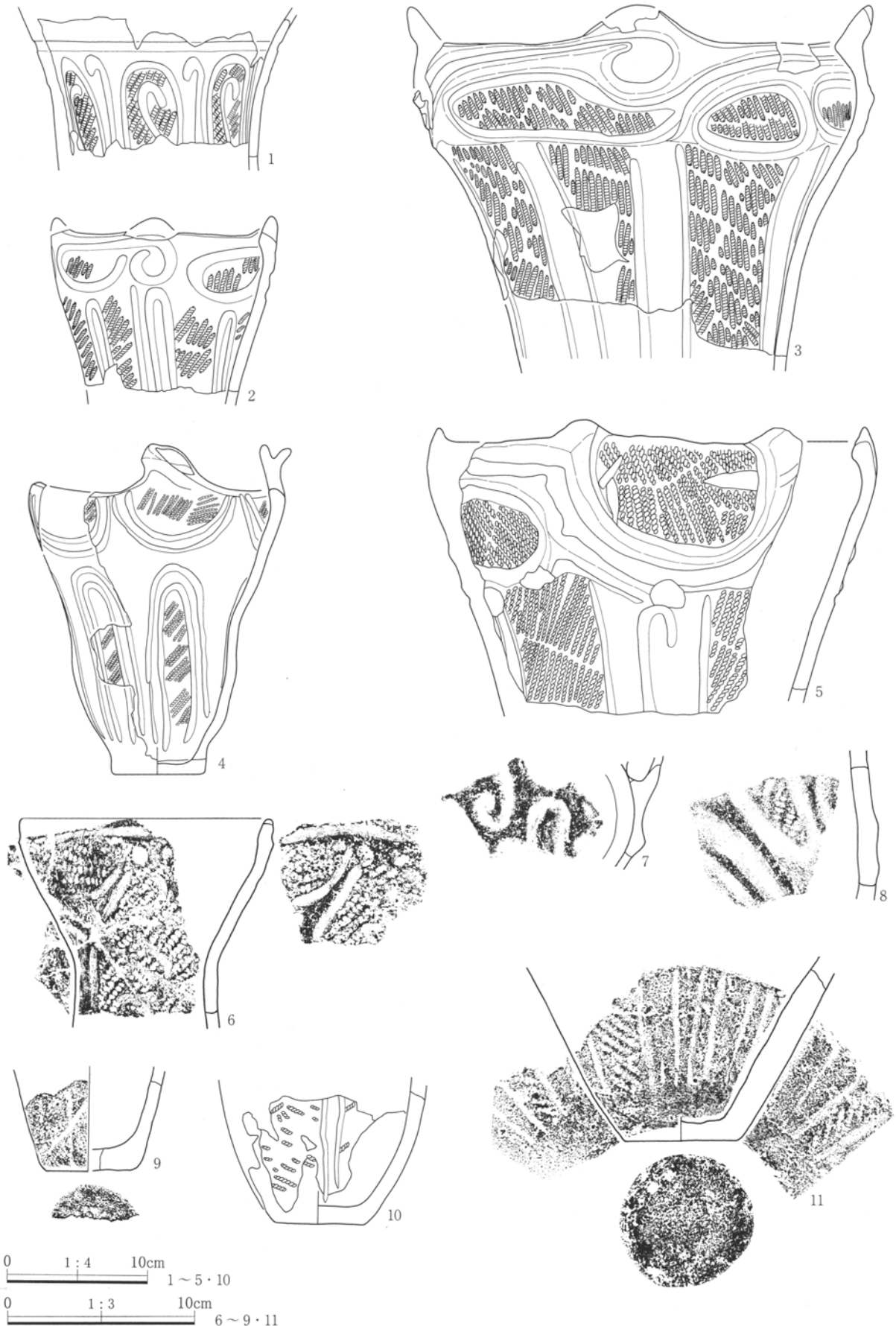
2、暗褐色土。粘性があり、炭化物を含む。

3、暗褐色土。黒褐色土を含み、やや砂質。

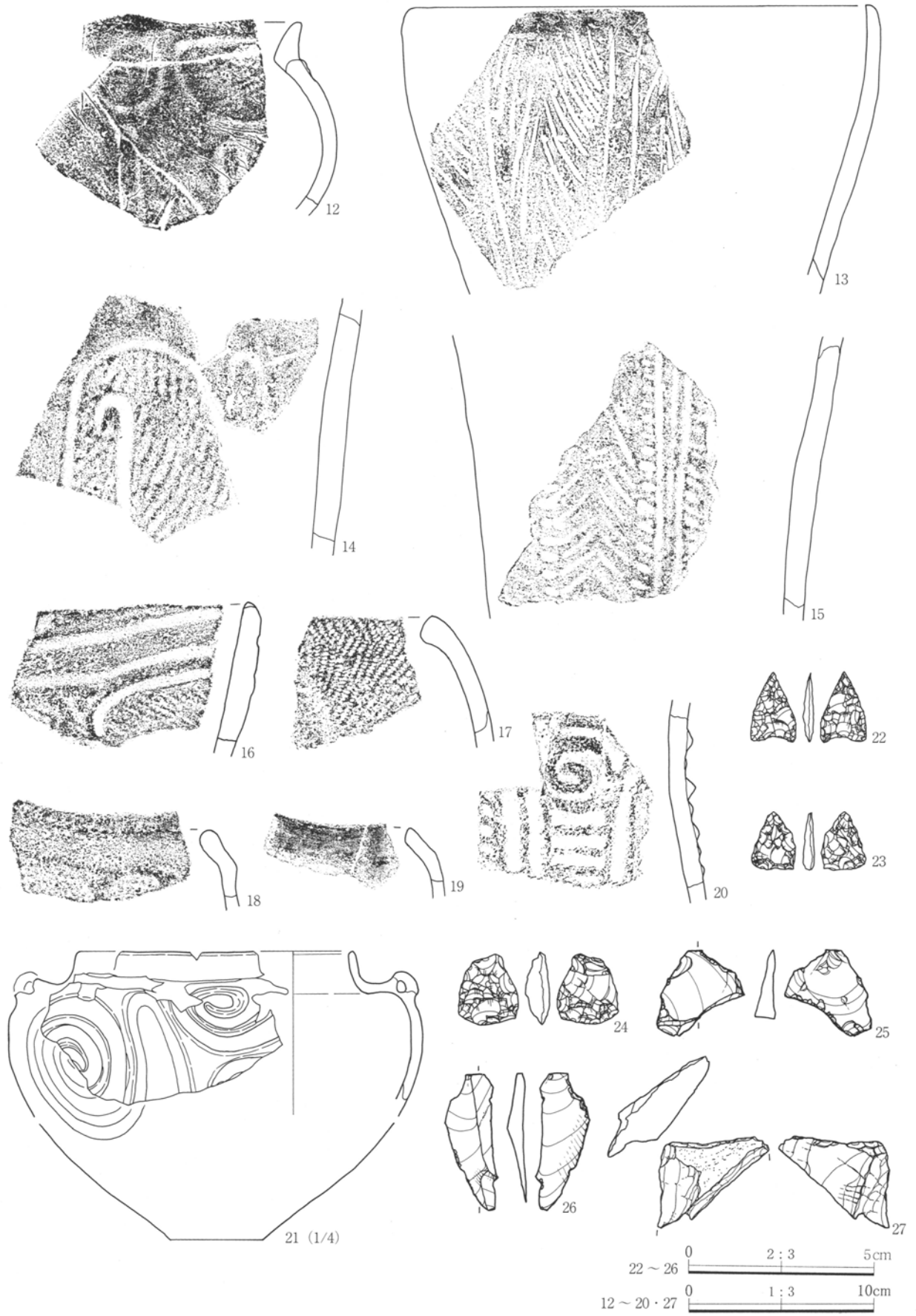
4、暗褐色土。地山土を含む。

第110図 20区107号住居

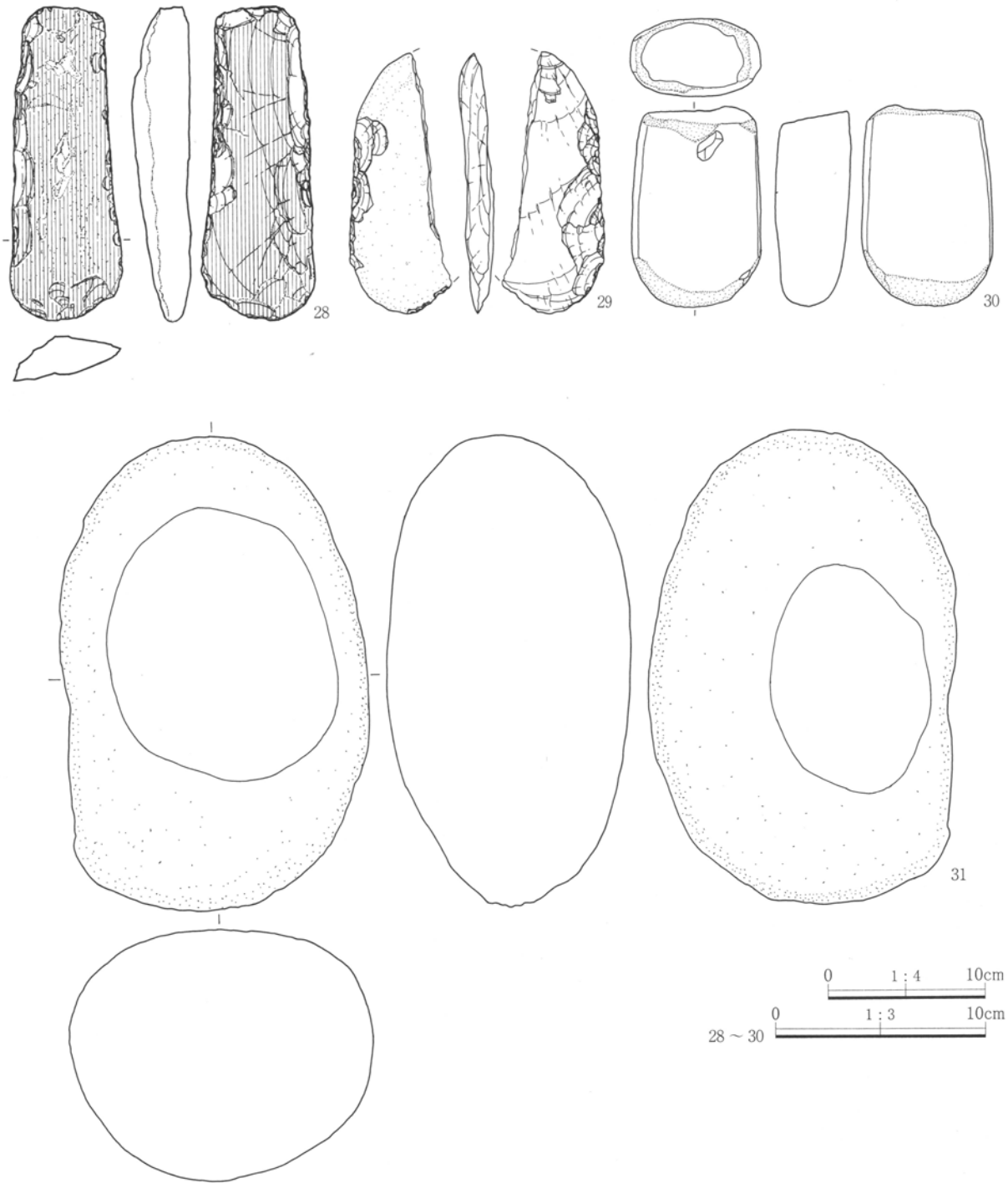




第111図 20区107号住居出土遺物(1)



第112図 20区107号住居出土遺物(2)



第113図 20区107号住居出土遺物(3)

いる。なお、土器の口は炉の内部に傾けた状態で置かれていた。

炉内に焼土はほとんど残っていなかったが、炉石および埋設土器には、変色・劣化・ひび割れ等の被熱痕跡が明瞭に認められた。

柱 穴 確認できなかった。

埋 甕 炉の南側 1.9 m に位置する。図には表現さ

れていないが、埋甕の上には口縁部を覆う板石が一枚あり、その上に東側にずれたもう一枚の板石があり、さらにその周囲に小さな礫が根詰めするように配置されていた。これらの礫は床面から少し沈み込んでいたため、当初は地山礫の一部が床からのぞいているように見えていた。断面図Cが示すように、埋甕の口縁部は床面よりかなり下に沈み込んでい

### 第3章 発見された遺構と遺物

る。これは上面に大きな蓋石がのっていたためと判断するが、あるいはその上を住人が幾度もものっていたのかもしれない。

埋甕に使用された土器は、加曾利E式系の中型の深鉢(3)で、胴下半部を打ち欠いたものを、正位に埋設していた。なお、埋甕内および掘り方に、それに伴うと考えられるものは認められなかった。

**遺物** 覆土中を中心に数多くの礫と遺物が出土した。土器は総数467点が出土した。主な土器は加曾利E3式が215点と圧倒的で、その他に唐草文系新段階が48点、曾利式古段階が4点、焼町土器が4点、勝坂式が2点、阿玉台式が1点ある。このうち6・11・16・20は床面からの出土で、6は床面に置かれていた可能性が高い。なお、4・5・7～10・12～15・18・19・21は、欠番となった20区99号住居の出土である。

石器は、石鏃未製品6点、削器1点、加工痕ある剥片4点、打製石斧2点、敲石1点、砥石1点があり、ほかに石核2点(黒曜石1点、珪質変質岩類1点)、剥片19点(黒曜石15点、珪質変質岩類4点)、碎片8点(黒曜石8点)がある。

**時期** 炉内埋設土器と埋甕、および覆土中から出土した土器は加曾利E3式期新段階を主体としており、本住居は当該期に比定されよう。

#### 20区111号住居

**調査年度** 平成16年度

**位置** M-4グリッド

**経過** 本地区は、旧地割りの東西と南北の主要道が交わる基点に隣接しており、江戸時代初期頃の建造と考えられる「地藏堂」が建てられた場所の北側に該当する。地藏堂は現在、別の場所に移動されており、その後は畑地として使用されていた。

調査は、まず地藏堂に伴う石垣や基礎について実施し、その後にあらためて遺構確認作業を実施した。その段階ですでに敷石の一部と大小様々な円礫が認められ、敷石住居としての調査が開始された。周縁部にかなり欠落はあるが、幸い主体部の約7割と出

入り口部の約5割の敷石が残っていた。本住居に伴う遺物は周囲にかなり散在したものと思われるが、それでも土器片や石器はかなりの数が礫の陰に残っていた。なお、本住居の周囲の石垣にも板石や扁平礫が数多く使われている。この地区では柄鏡形住居が多く確認されており、全てが本住居の敷石とは言えないが、再利用されたものも多いであろう。

**重複** 東側を122号住居と、南東部の出入り口部の一部を後期の121号住居と重複し、122号住居を切り、121号住居に切られる。

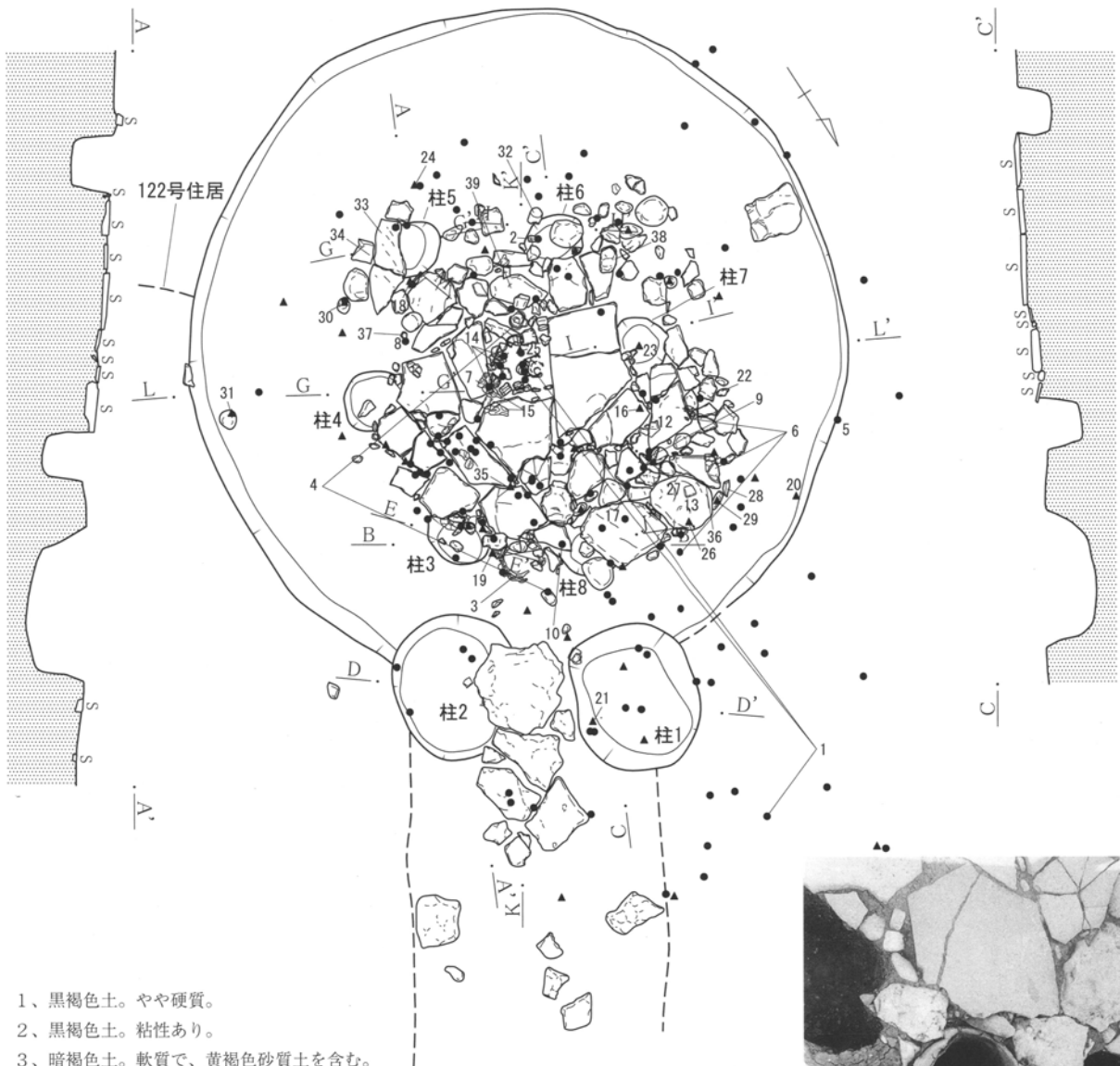
**形状** 柄鏡形敷石住居で、主体部は直径4.7mほどの円形を呈し、谷側にあたる北東方向に敷石を施した出入り口部が付く。確認面からの深さは、山側で10cmほどである。

**床面** 山側から谷側に向かってゆるく傾斜するが、平坦な床面が構築されている。敷石は柱穴を結ぶ範囲の全面にわたって施されていたと思われるが、周縁部の一部は欠失している。おそらく、残っているのは全体の約7割であろう。

敷石面の形状は六角形と想定されるが、現状では奥壁にあたる部分の形状が判然としない。敷石には大きな板石を選んで使用しており、周縁の一部に扁平な円礫も使っている。また、板石の間の根詰めには小さな細長い円礫を好んで使用しているが、このやり方は本地域の特色でもある。ちなみに、敷石に使われる板石は、本遺跡の南にある「丸岩」の周囲で入手できる。敷石面の規模は、現状で東西2.7m、南北2.5mほどである。なお、炉の周辺の敷石面は煤が付着して黒色化していた。

一方、出入り口部にも幅70cm、長さ1.6mにわたって敷石が残っていた。主体部との接合部分には敷石が認められないが、これは他の地点と同様に後世の攪乱による可能性が高い。主体部との高低差については、柱1と2の間に敷かれた大きな厚手の敷石が数cm高いレベルにあるが、その先は緩やかに下っている。

**炉** 大形の板石4石で組んだ土器埋設長方形石囲い炉で、住居の中央に位置する。



- 1、黒褐色土。やや硬質。
- 2、黒褐色土。粘性あり。
- 3、暗褐色土。軟質で、黄褐色砂質土を含む。
- 4、暗褐色土。やや硬質で、炭化物を少量含む。

E. 柱3 .E' G. 柱4 .G'



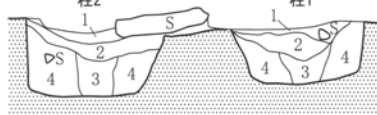
B. .B'



G. 柱5 .G' H. 柱6 .H'

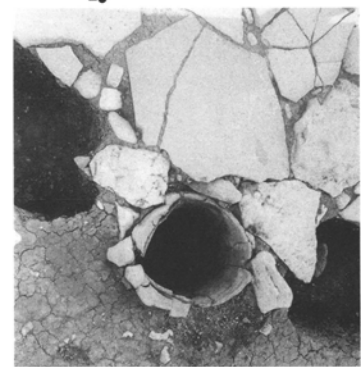


D. 柱1・2 .D'

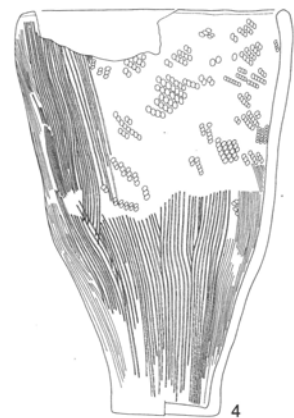


L=583.00m

I. 柱7 .I' J. 柱8 .J'

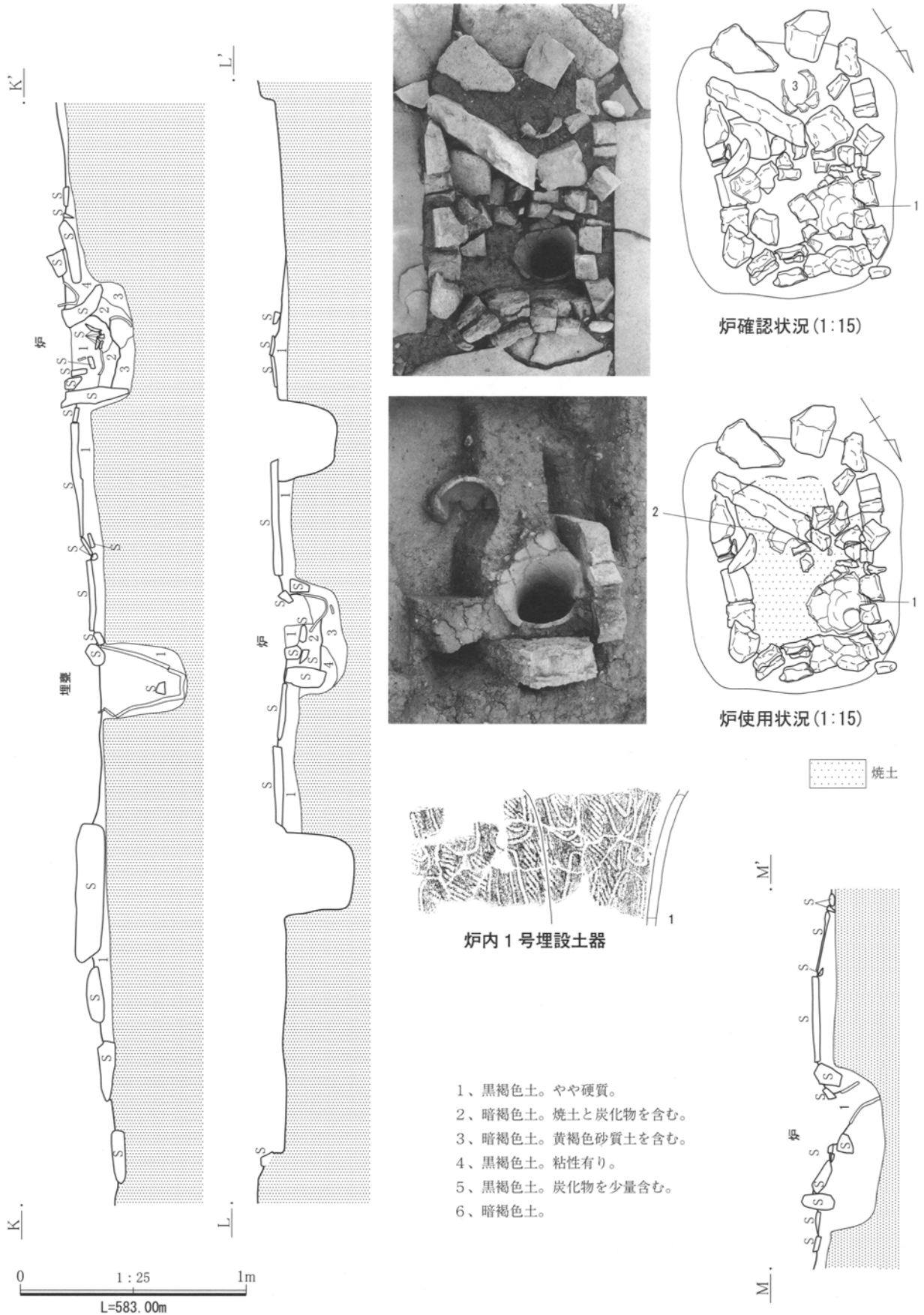


出入口部埋塞

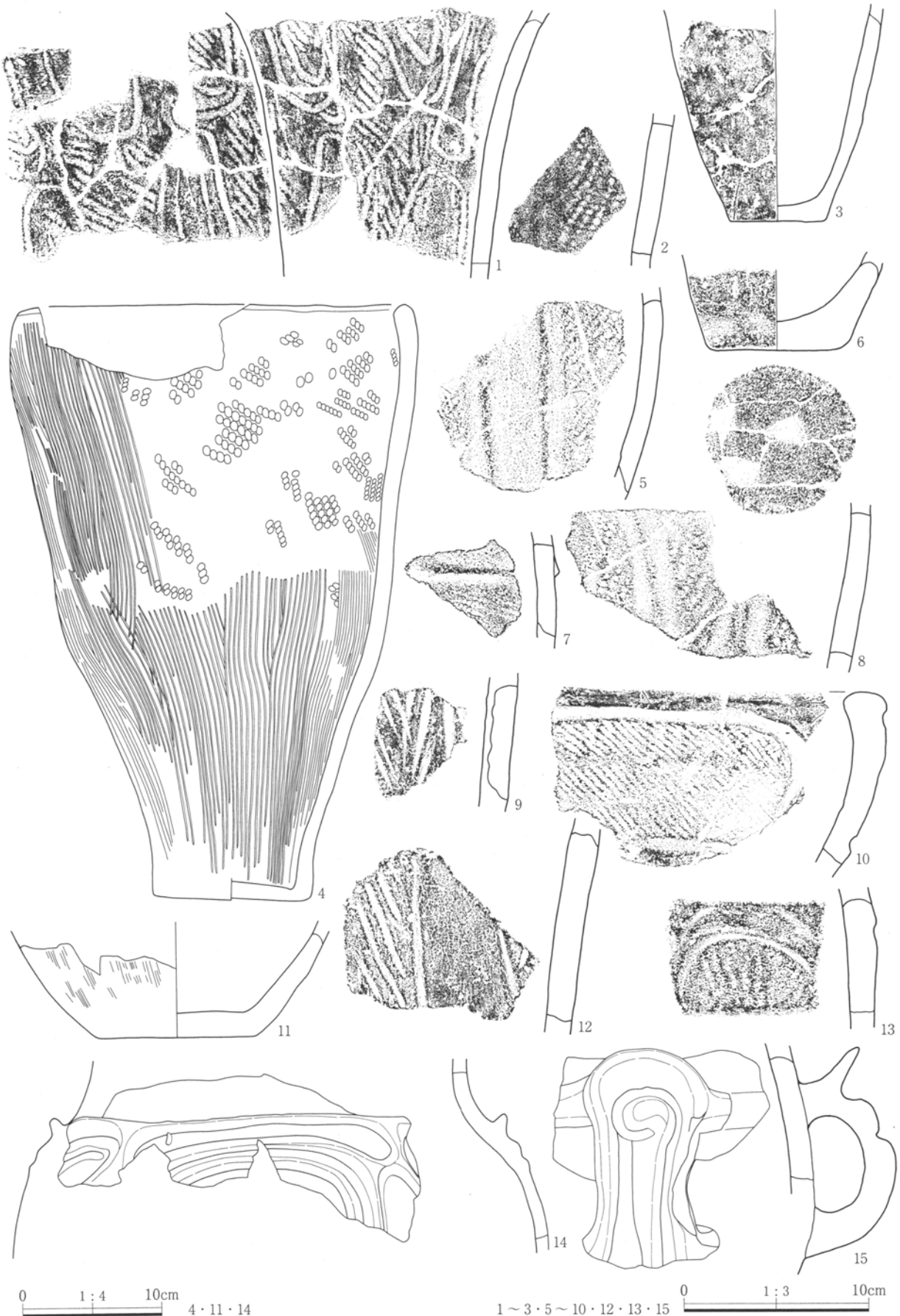


埋葬

第114図 20区111号住居 (1)

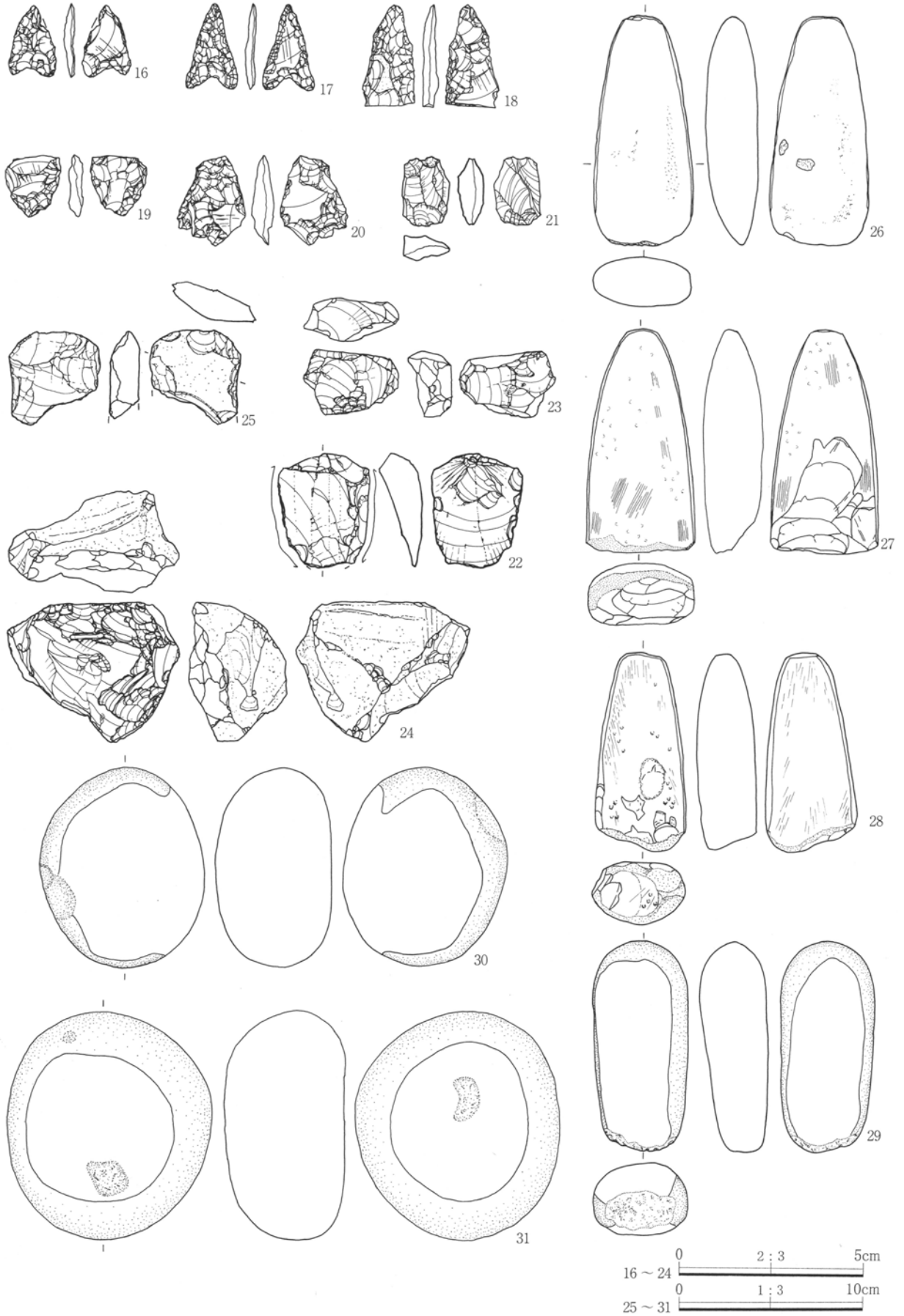


第115図 20区111号住居 (2)



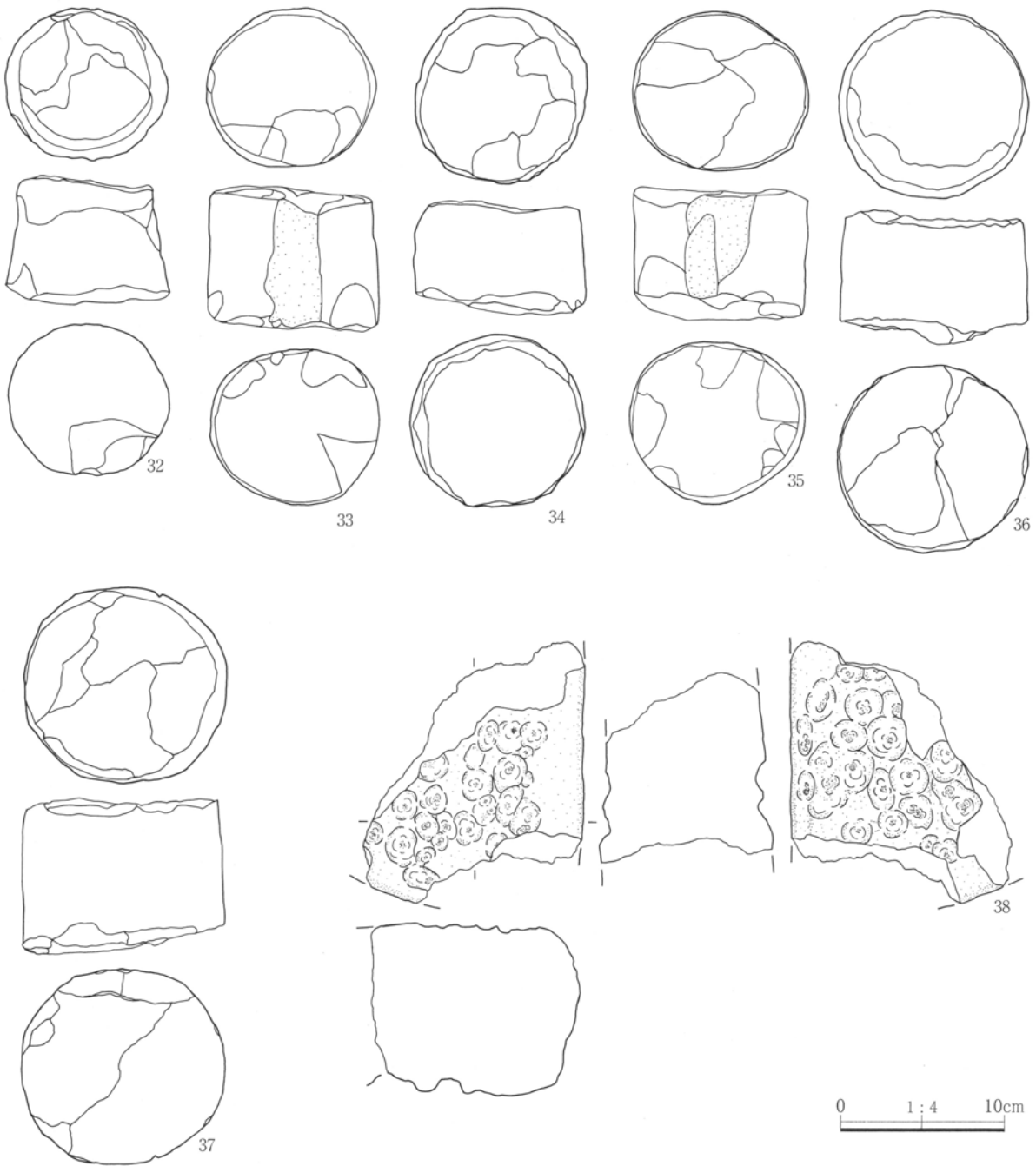
第116図 20区111号住居出土遺物(1)

第3章 発見された遺構と遺物



第117図 20区111号住居出土遺物(2)





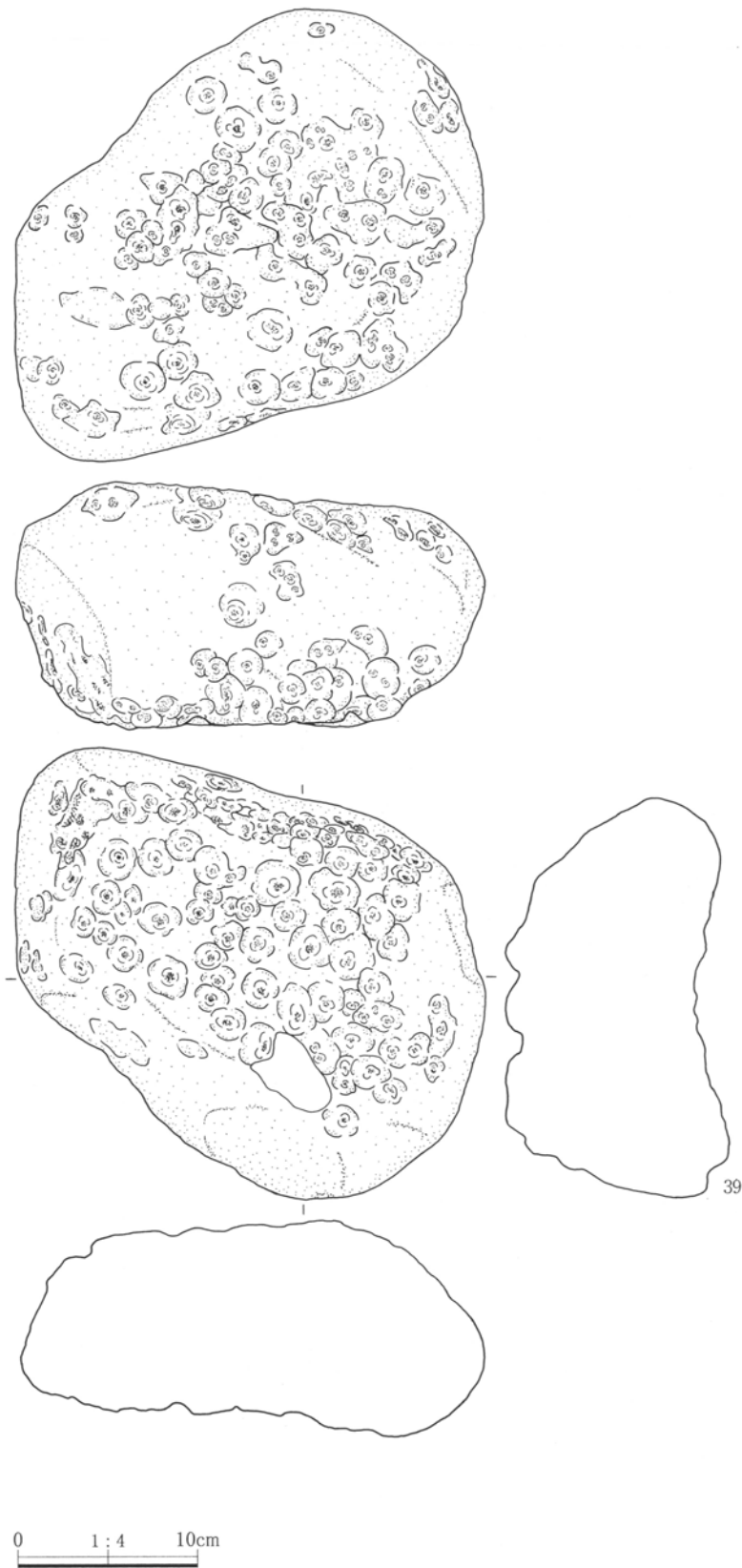
第118図 20区111号住居出土遺物(3)

炉石は側縁を直角に立てて設置しており、規模は長辺60cm、短辺45cmで、床面から使用面までの深さは15cmである。炉石は被熱による劣化・ひび割れが著しく、上端部は打ち欠かれて破片が炉内に散らばり、南側の炉石はくの字に折れて内側に突き出していた。

炉内埋設土器は2個体発見された。1号埋設土器は、やや小型の加曾利E式系深鉢(1)で、口縁

部と胴下半部を打ち欠いて、炉内北隅に正位に設置していた。また、土器は内側にかなり傾けて設置されており、焼土面より出ている上半部には被熱痕跡が認められた。2号埋設土器は焼土面の下にあり、炉の長軸線上の中央より南側寄りに設置されていた。深鉢の胴部の約半分が残存していたが、劣化が著しく、復元は不可能だった。

柱穴 主体部敷石面の周縁および内部で6本、柄



第119図 20区111号住居出土遺物(4)

部の両側で2本、合計8本が確認されているが、本住居の主柱とするには規格性に乏しく、位置がそぐわない。炉の中心から埋甕の中心までの距離は1.45 mであるが、炉を中心に1.45 mで円を描いた範囲が敷石範囲にあたり、柱穴はその外側に位置する規格であったと考える。

確認された柱穴の規模(長辺×短辺×深さ)は、柱1:105×90×42、柱2:104×93×52、柱3:51×40×34、柱4:51×44×34、柱5:48×42×33、柱6:50×39×25、柱7:41×36×29、柱8:47×41×31である。

**埋 甕** 炉の北東1 mのところ設置されている。この位置は、炉と出入り口敷石の中央を通る主軸線上にのっており、炉の中心から埋甕の中心までの距離は1.45 mである。埋甕は、主体部側の敷石に接するように設置されており、口縁部を敷石面の上にわずかに覗かせていた。また、確認時には埋甕の上に10 cmほどの円礫がのっていた。

埋甕に使用された土器は、口縁部から底部まで完存する大型の深鉢で、正位に埋設されていた。文様は、体部上半に節の大きな斜縄文を疎らに施文し、下半には全面に縦方向の条線を施すが、上半の5分の1の部分だけ下半と同じ条線を施文している。器形・文様ともに粗製土器のつくりであり、日常品を転用したものではなく、この住居の専用品として急遽つくられたもののように思われる。もしそうだとすれば、縄文は関東、条線は信濃の特色であり、気にかかる土器である。

なお、埋甕の内部あるいは掘り方から、共伴と思われる遺物等の出土は認められなかった。

**遺 物** 覆土下層から床面にかけて少量の遺物が出土している。土器は総数208点が出土した。主体となるのは加曽利E3式が74点で、その他に唐草文系新段階6点、加曽利E4式2点、後期土器21点がある。このうち、3と14は炉辺からの出土である。また、10は北西13 mに位置する119号住居出土土器との接合資料である。

石器は石鏃2点、石鏃未製品4点、使用痕ある剥

片1点、打製石斧1点、磨製石斧1点、敲石4点、磨石2点、石棒破片6点、多孔石2点があり、ほかに石核3点(黒曜石2点)、剥片18点(黒曜石6点)、碎片14点(黒曜石14点)がある。

石棒の破片6点(32～37)は同個体であり、おそらく1本の石棒を8 cm前後の厚さで輪切り状に分割したものと思われ、切断面を丁寧に調整して平坦面を作り出している。いずれも切断後の調整痕も含めて被熱を受けているが、周縁部が剥落しているものもあり、切断前にすでに強い被熱を受けていた可能性もある。出土位置は、4点が炉の南側の覆土下層から、1点が炉と埋甕の間の覆土中からの出土である。大型の多孔石(39)は、炉のすぐ南側の覆土下層から、石棒などと共に出土した。

**時 期** 炉内埋設土器、および覆土中からの出土土器は、加曽利E3式期新段階から加曽利E4式期古段階を主体としており、本住居は当該期に比定されよう。

ちなみに、加曽利E3式期新段階の柄鏡形敷石住居は、本県でも最古段階の事例の一つである。

## 20区112号住居

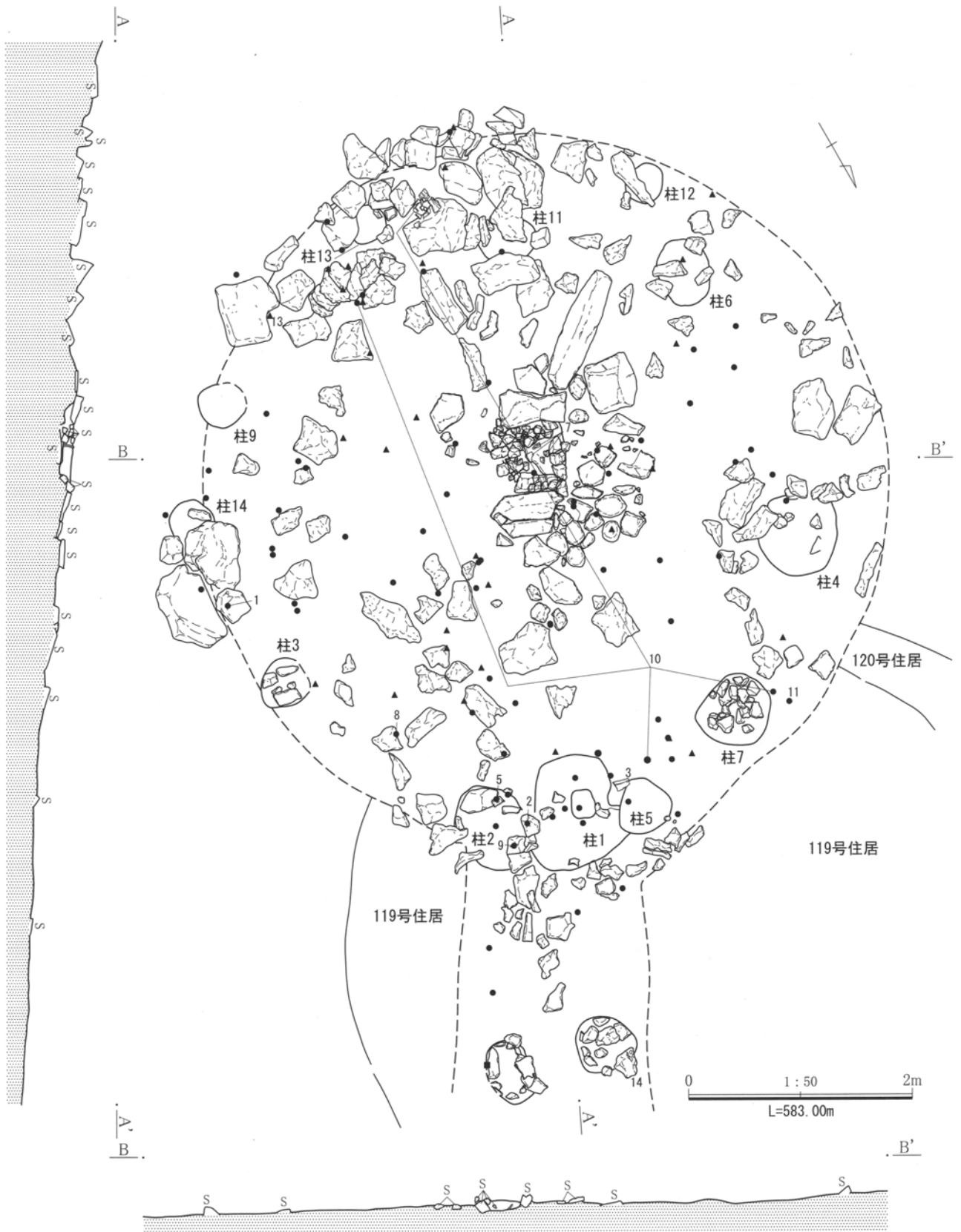
**調査年度** 平成16年度

**位 置** 0-7グリッド

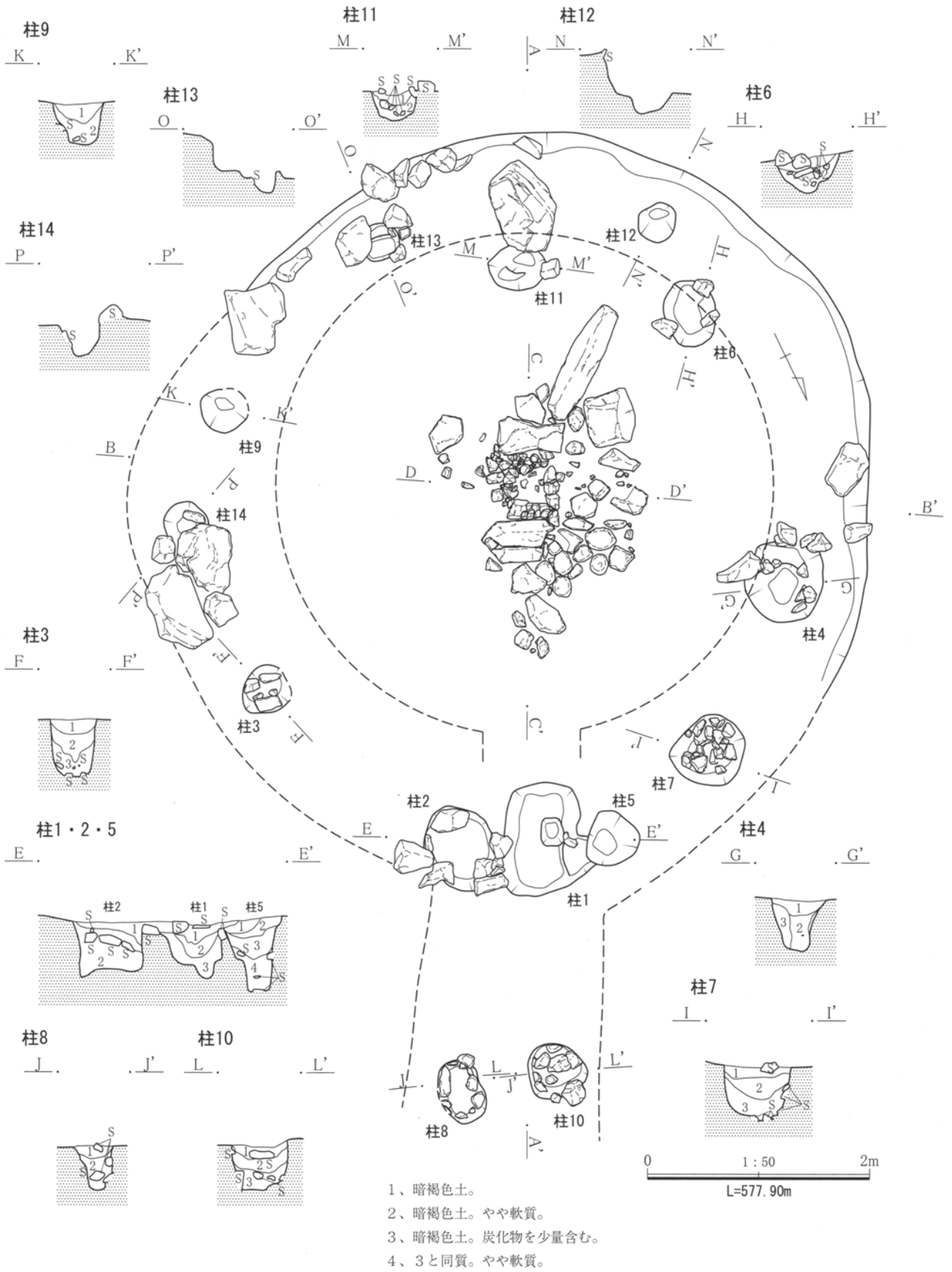
**経 過** 表土掘削後の遺構確認作業で、石囲い炉と敷石の一部が露出し、住居調査に切り替えられた。大型の礫が数多く点在する地区であり、これを手懸かりに調査を進めた。敷石面が確認できたのは、炉の周辺と出入り口の一部だけであり、遺物も含めて残存するものはわずかだった。

**重 複** 北側を119号・120号住居と重複し、これを切る。また、西側の一部を後期の115号住居と重複し、これに切られる。

**形 状** 谷側にあたる北東方向に出入り口部をもつ柄鏡形敷石住居であるが、残存する手懸かりは少ない。調査段階では、南西側に半周する立ち上がりを確認しており、これを延長すると直径6 mになるが、南側ではこの範囲内に多量の大型地山礫が集積・突



第120図 20区112号住居 (1)



第121図 20区112号住居 (2)



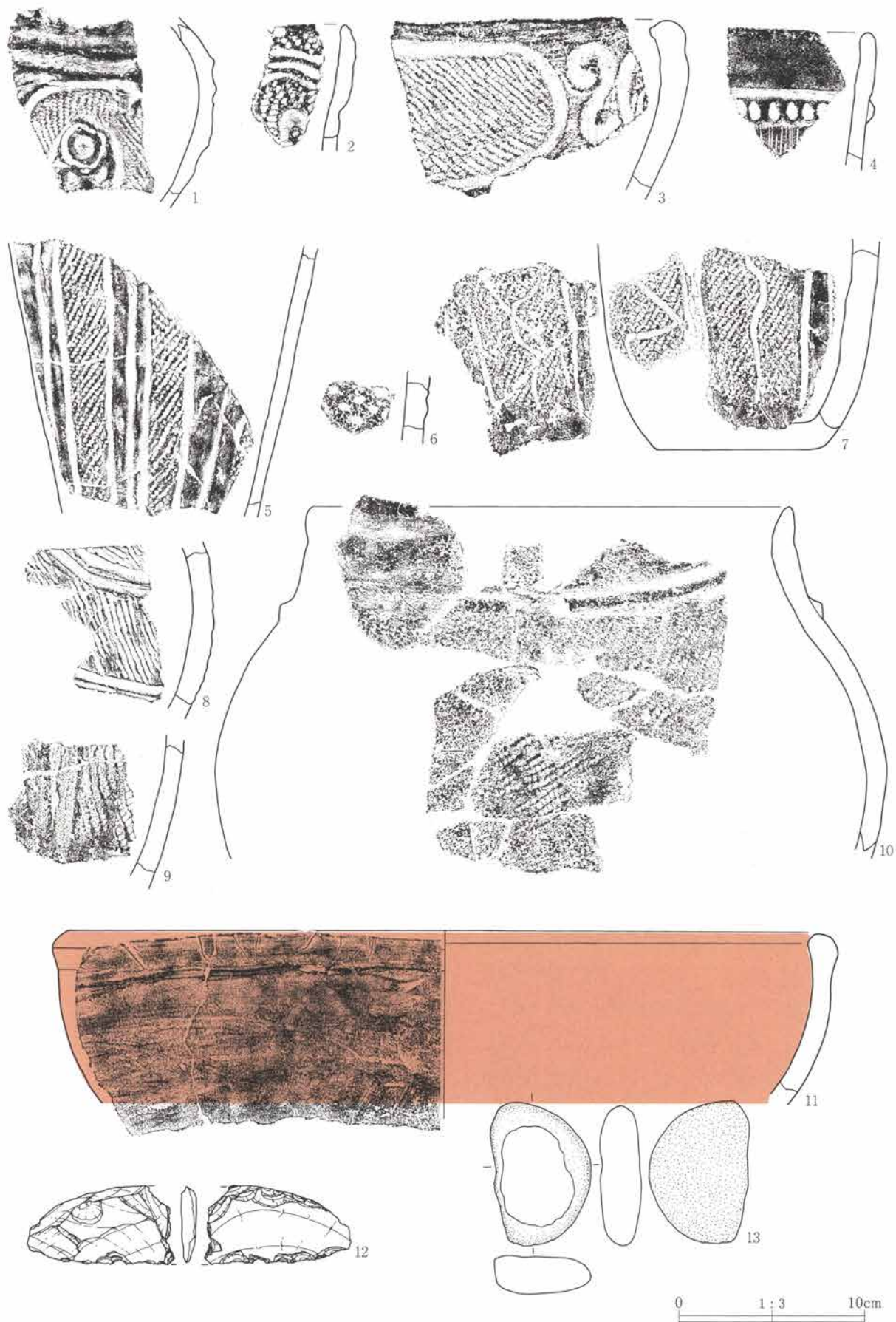
炉周辺の敷石



炉石復元



第122図 20区112号住居 (3)



第123図 20区112号住居出土遺物(1)



第124図 20区112号住居出土遺物(2)

出しており、この地山礫の上に床があったとは考え難い。ちなみに20区111号住居の直径は4.7mであるが、これを本住居に当てはめると、周縁部にある大型地山礫を避けられる。本住居も20区111号住居と同じ程度の規模であった可能性が高い。

**床面** 谷側に向かって緩やかに傾斜しており、大型の地山礫が露出する場所もあるが、ほぼ平坦な床面だったと考えられる。敷石は、炉の周囲から北西側の一部が残存していた。炉の南北に大きな板石が設置されているが、その他では板石と共に扁平な円礫が多用されている。炉の中心から敷石の北端までの距離は1.4mほどあるが、この距離は20区111号住居の埋甕までの距離とほぼ同じである。また、このサイズなら周縁部の大きな地山礫は、壁外ということになる。以上のことから、本住居の敷石面も111号住居と同じ程度の大きさだった可能性が高く、本来は全面に敷石が施されていたと考える。

**炉** 大型の扁平礫4石で組んだ方形石囲い炉で、住居の中央に設置されていたと思われる。規模は1辺50cmほどで、炉石は側縁を直角に立てて設置されていたと思われるが、発見時にはかなり壊れていた。炉内に焼土は残っていなかったが、炉石に

は明瞭な被熱痕跡が認められた。なお、炉内から土器7が出土している。

**柱穴** 合計14本を確認した。本住居を20区111号住居とほぼ同規模と考えると、住居範囲内に入るのは柱6と11の2本のみとなる。確認された柱穴の規模(長辺×短辺×深さ)は、柱1:101×67×38、柱2:73×58×45、柱3:47×42×52、柱4:72×71×49、柱5:48×47×67、柱6:59×48×35、柱7:65×63×49、柱8:58×42×40、柱9:44×39×38、柱10:57×54×44、柱11:57×41×28、柱12:36×34×55、柱13:33×-×51、柱14:40×-×27である。

**遺物** 覆土中から少量の遺物が出土している。土器は総数137点が出土しており、そのうち主要な土器は加曾利E3式48点で、その他に加曾利E4式5点、焼町土器2点、後期土器18点、晩期土器1点等がある。このうち、3は20区111号住居10と同個体である。

石器は、石鏃未製品1点、削器1点、加工痕ある剥片2点、砥石1点、多孔石1点が出土しており、ほかに石核1点、剥片15点(黒曜石14点)、碎片8点(黒曜石8点)がある。



**時期** 出土土器の主体は加曽利E3式期に該当するが、1・2・10などの加曽利E4式期の土器も出土している。いずれも破片資料が多く、明確な共伴を欠いている。ここでは、20区111号住居との共通性を考慮し、加曽利E3式期新段階からE4式期古段階に比定しておきたい。

#### 20区113号住居

**調査年度** 平成16年度

**位置** R-9グリッド

**確認** 表土掘削後の遺構確認の段階で、多量の礫と遺物の集中が認められ、住居候補地点としての扱いに切り替えられた。礫と遺物の出土は床面付近まで認められ、炉は確認できなかったが、床面と壁の一部および一括状態の土器等が確認され、住居として確定された。

本住居の床面は地山の黄色シルト質土まで達しており、床と壁、柱穴や周溝までが明瞭な状態で検出できた。このことは、本遺跡の住居の本来的な形態を把握するうえで希少な資料となる。

なお、本住居の南東部に重なって礫と遺物の集中する場所があり、当初は117号住居とされたが、その後の調査で決め手が得られず、欠番扱いとなっている。

**重複** 南東側を604号・606号・607号土坑と重複する。

**形状** やや歪んだ隅丸方形をなす。規模は長辺4.55m、短辺4.5mで、確認面からの深さは山側で60cmほどである。壁は土坑が重複する南東部の一部を除いて全周しており、ほぼ垂直に立ち上がる。

**床面** 南東部の一部を除いて地山の黄色シルト質土を床としており、ほぼ水平で平坦な床面を構築している。また、炉の周囲の床はやや硬化しており、黄色ローム質土を薄く敷いた貼り床を施した部分も認められた。

また、本住居では壁に沿ってほぼ全周する周溝が確認された。規模は、幅が20～25cm、深さは5～10cmであるが、出入り口を想定した南東部では深

さが18cmほどあった。

**炉** 住居中央のやや北側に寄ったところに位置する。炉石はすべて取り払われていたが、床面から15cmほど下の面に焼土の一部が残っていた。掘り方は1辺75cmほどの隅丸方形を呈し、深さは床面から45cmであった。本来は方形の石囲い炉であったと思われる。

なお、炉内から出土した2点の土器破片が、1つは土器1に、もう1つは土器3に接合している。

**柱穴** 合計12本の柱穴が確認された。このうち柱5・4・9・7・12・11の6本が主柱に該当するであろう。この6本は他に比べて深さもあり、その配置は亀甲形となる。

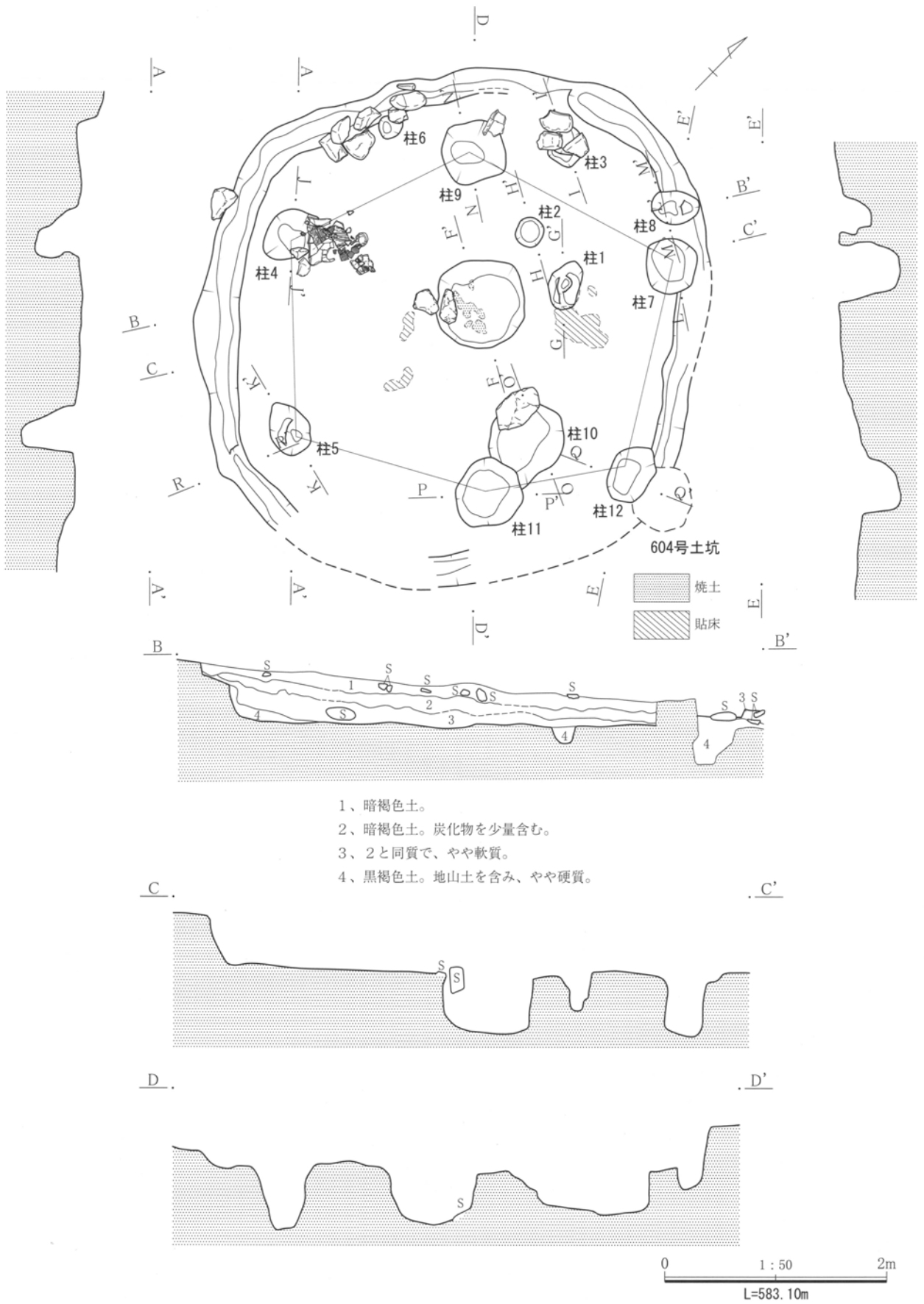
規模(長辺×短辺×深さ)は、柱1:45×28×27、柱2:26×24×16、柱3:38×34×23、柱4:57×43×30、柱5:50×36×52、柱6:24×21×21、柱7:52×50×55、柱8:43×30×28、柱9:63×61×55、柱10:68×-×23、柱11:64×58×44、柱12:55×39×43である。

**遺物** 覆土の上層から下層にわたって多量の礫と遺物が出土している。土器は総数352点が出土しており、主な土器は唐草文系新段階が146点、加曽利E3式が45点であり、ほかに加曽利E1式11点、加曽利E4式2点、後期土器が6点ある。

このうち、1と10は床面からの出土で、1は柱4の上に横転した状態で、10は柱9の上にやはり横転した状態で検出された。1は炉内出土の土器片1つが接合しているが、完存品であり、意図して置かれた可能性もある。28は欠番となった117号住居の主要土器だが、その一部が本住居内から出土していることから本住居で扱ったが、時期が少し新しいかもしれない。

石器は、石鏃2点、加工痕ある剥片2点、打製石斧1点、砥石1点、磨石2点がある。

**時期** 出土土器は加曽利E3式期古段階を主体としており、本住居は当該期に比定されよう。



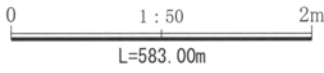
第125図 20区113号住居 (1)

第3節 縄文時代の竪穴住居

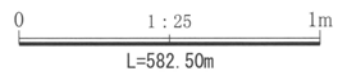
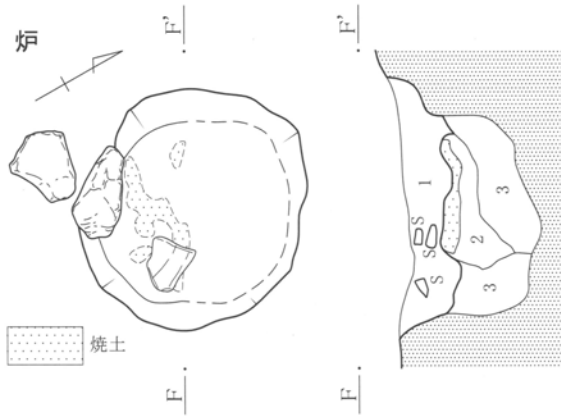
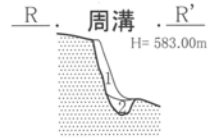
G. 柱1 .G' H. 柱2 .H' I. 柱3 .I' J. 柱4 .J' K. 柱5 .K' L. 柱7 .L'



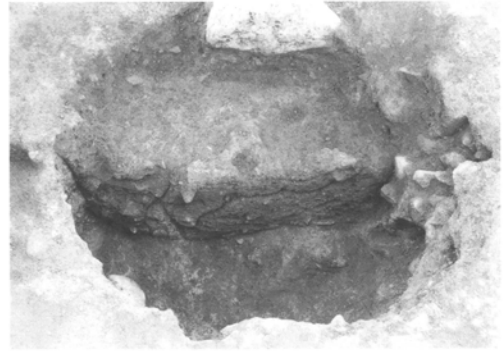
M. 柱8 .M' N. 柱9 .N' O. 柱10 .O' P. 柱11 .P' Q. 柱12 .Q'



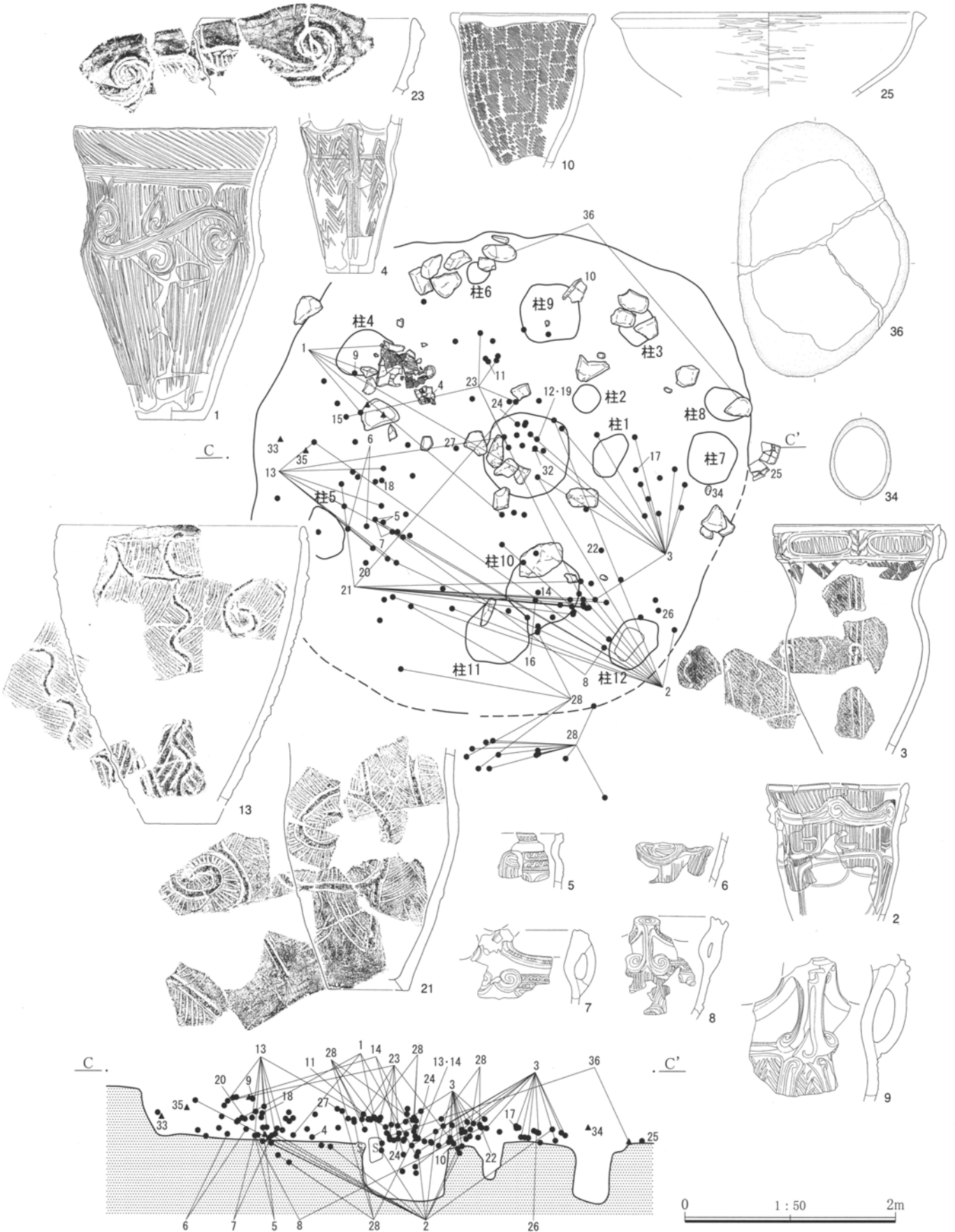
- 1、黒褐色土。
- 2、黒褐色土。黄褐色砂質土を含む。
- 3、黒褐色土。炭化物を少量含む。



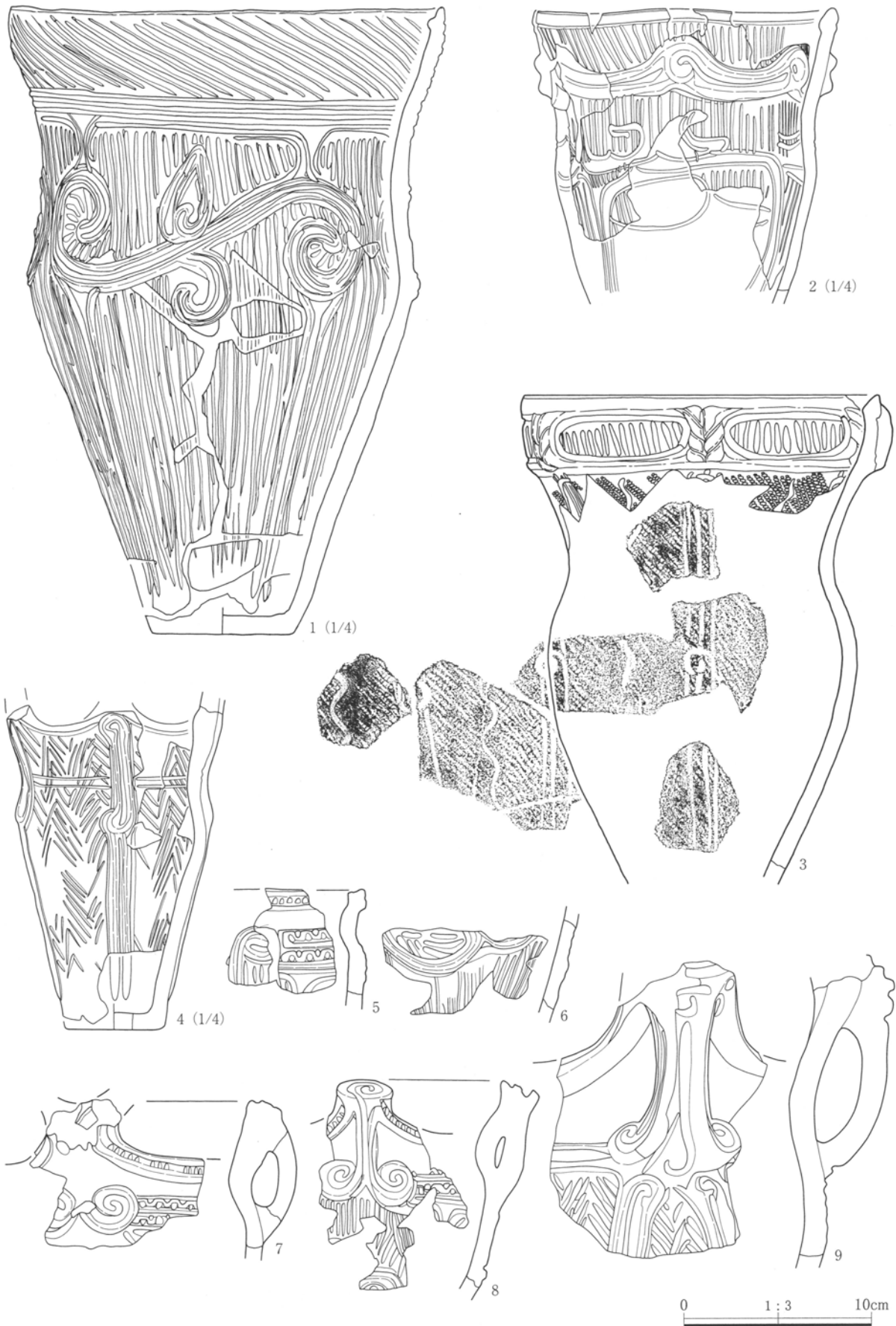
- 1、黒褐色土。硬質。
- 2、暗褐色土。焼土と炭化物を含む。
- 3、暗褐色土と黒褐色土の混土。



第126図 20区113号住居(2)



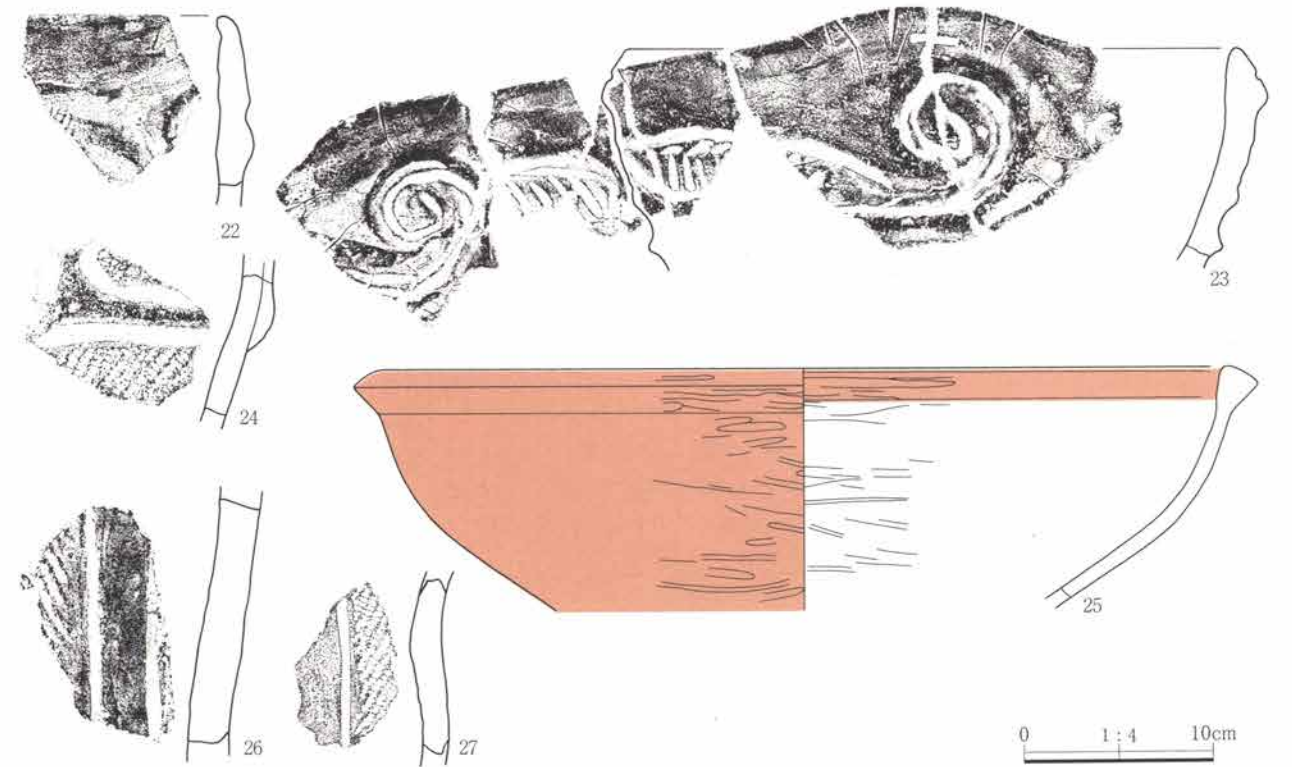
第127図 20区113号住居 (3)



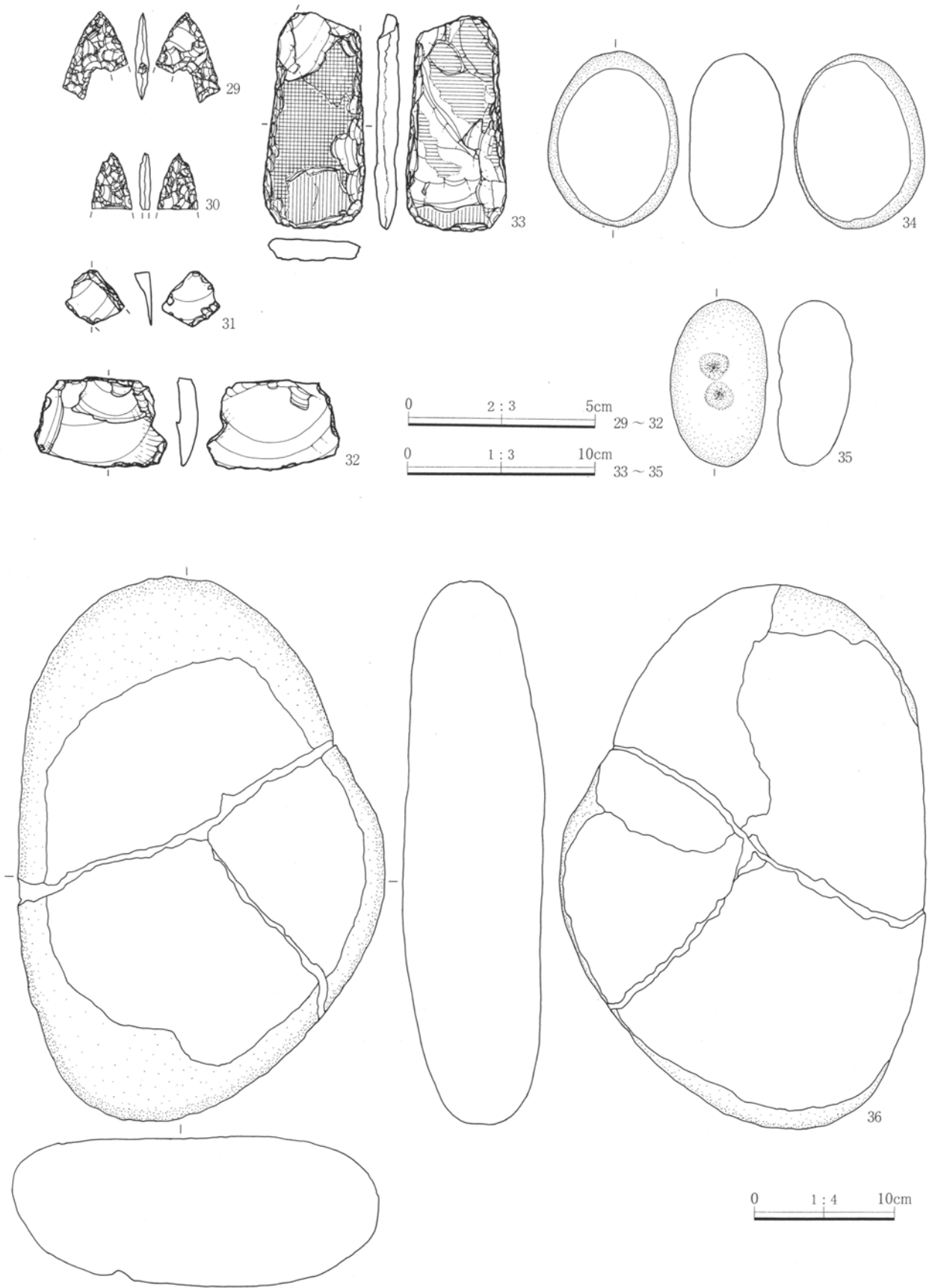
第128図 20区113号住居出土遺物(1)



第129図 20区113号住居出土遺物(2)



第130図 20区113号住居出土遺物(3)



第131図 20区113号住居出土遺物(4)



20区 116号住居

調査年度 平成16年度

位置 M-11グリッド

経過 一面に礫が集積した地区に遺物がまとまって出土する地点があり、その遺物の下から石囲い炉が確認された。炉を中心とする遺物の分布範囲から住居範囲を想定し、目安がたった段階で柱穴の配置を想定した。礫のなかには板石や扁平礫も多く含まれていたため、敷石住居の可能性も考慮しながら調査は進められた。

重複 中世以後の遺構と重複するが、縄文時代はない。

形状 壁が確認されていないため不明だが、炉の中心から東側の大きな地山礫間での距離は2.2mであり、直径4.5m前後の規模であったと考えられる。床面 明瞭な床面は確認できなかった。調査面には大小の地山礫が突出しており、床面よりやや下がっている。

炉 大きな扁平礫4石で組んだ土器埋設方形石囲い炉で、規模は長辺80cm、短辺70cm、炉石上端からの深さは30cmほどである。

炉石は打ち欠かれたものが多く、倒れたもの、ずれたものも認められるが、本来は側縁を立ててやや開いた状態で設置されていたものと思われる。また、西側の隅に棒状の円礫が立っていたが、端部は打ち欠かれていた。

埋設土器は、炉の中央よりやや東に寄った位置に、正位に設置されていた。残っていたのは半周分である。使用された土器は小型の唐草文系深鉢(1)で、口縁部と胴下半部を打ち欠いてあった。

炉内に焼土はほとんど残っていなかったが、炉石および埋設土器には、変色・劣化・ひび割れ等の被熱痕跡が明瞭に認められた。

柱穴 合計9本が確認された。このうち、炉との距離がほぼ一致する柱1・2・3・5・6は主柱の可能性が高い。規模(長辺×短辺×深さ)は、柱1:48×45×29、柱2:37×-×49、柱3:49×-×36、柱4:31×30×27、柱5:51×41×

37、柱6:41×34×46、柱7:40×39×40、柱8:53×-×28、柱9:66×-×30である。

遺物 覆土中から少量の遺物が出土した。土器は総数152点が出土している。主な土器は加曾利E3式が75点、唐草文系新段階が35点で、ほかに阿玉台式1点、勝坂式1点、焼町土器1点、後期土器10点がある。このうち、1は炉内埋設土器、3・11は炉の上面から、2・12・13は炉の南側床面付近からの出土である。

石器は、石鏃1点、削器2点、砥石1点、台石1点、多孔石1点が出土しており、ほかに剥片1点、碎片11点(黒曜石11点)がある。このうち、砥石16と18は炉石の一部として転用されていた。

時期 炉内埋設土器および覆土中出土土器は加曾利E3式期新段階を主体としており、本住居は当該期に比定されよう。

20区 118号住居

調査年度 平成13・16年度

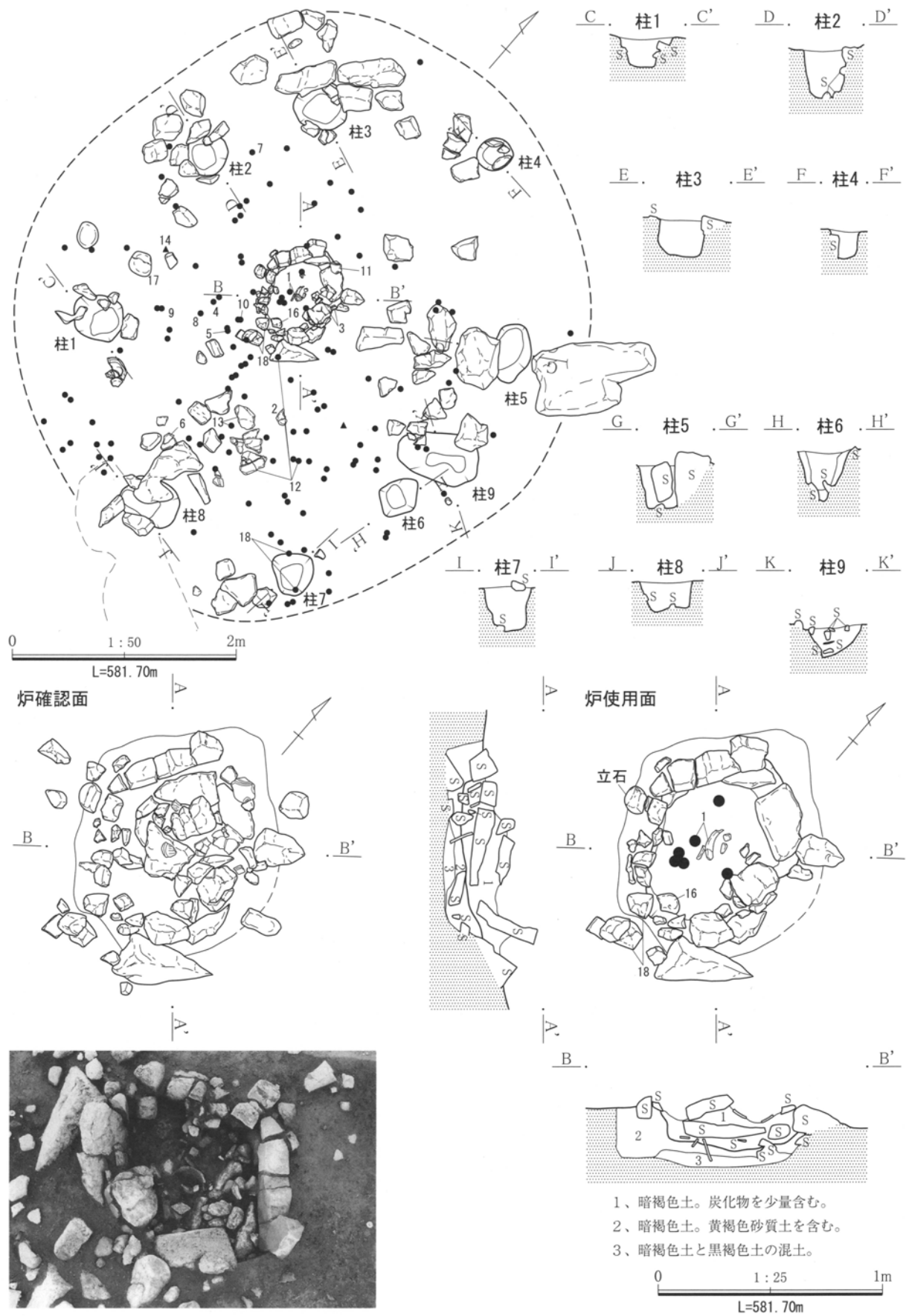
位置 O-12グリッド

経過 一面に礫が集積した地区の端に遺物がまとまって出土する地点があり、住居の存在を想定した。覆土中に多量の礫が集積しており、その下から石囲い炉が確認された。床面は地山の黄色シルト質土に達しており、柱穴も比較的容易に確認することができた。住居北側の一部は平成13年度調査区にあり、輪郭の一部はすでに消滅していたが、再調査の結果、主柱の一部を検出することができた。

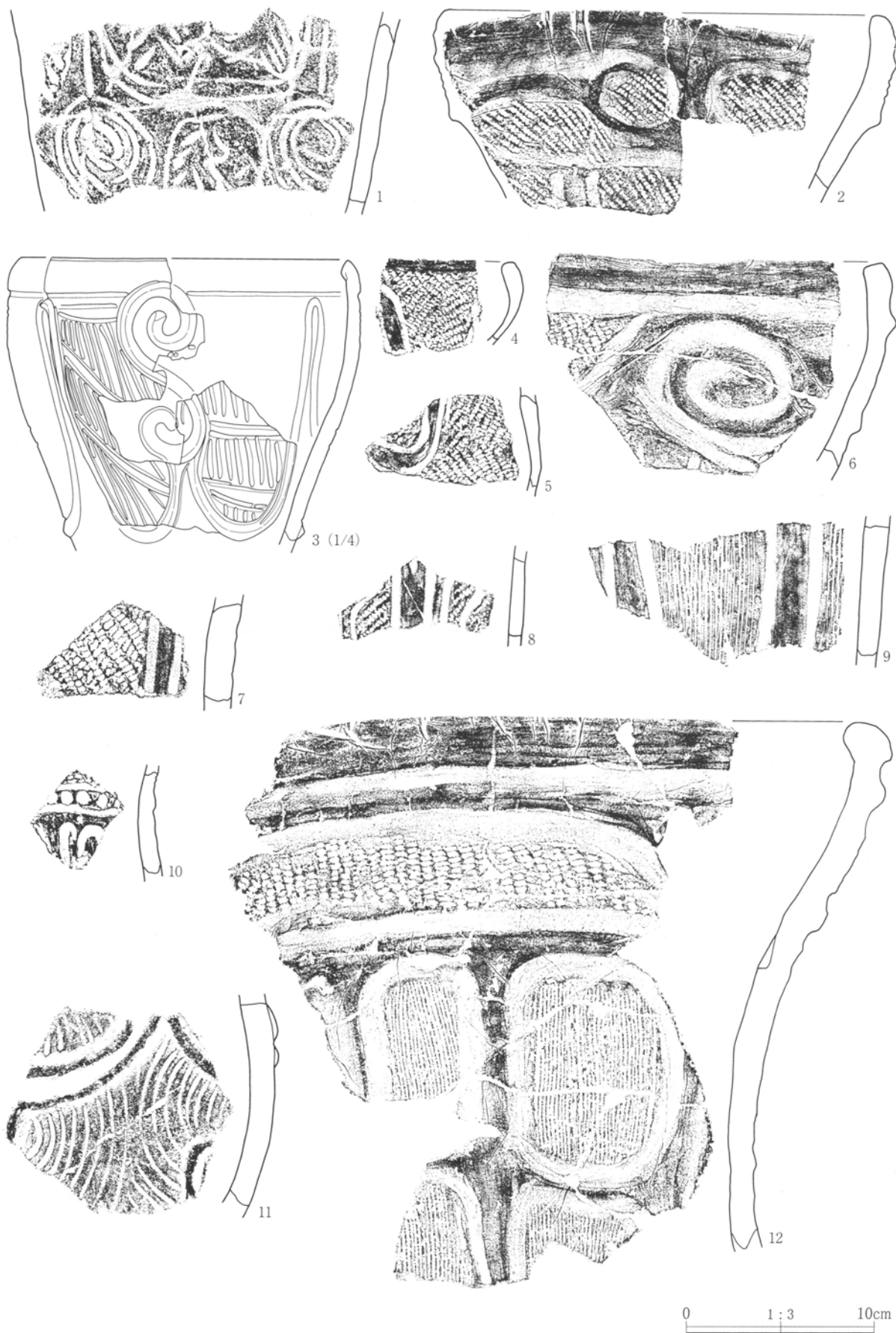
重複 なし。

形状 長辺推定4.6m、短辺4.5mの隅丸方形である。地山の上半部と覆土の区別は同じ黒褐色土で難しく、壁は丸く立ち上がる部分が多い。確認面からの深さは、山側で40cmであった。

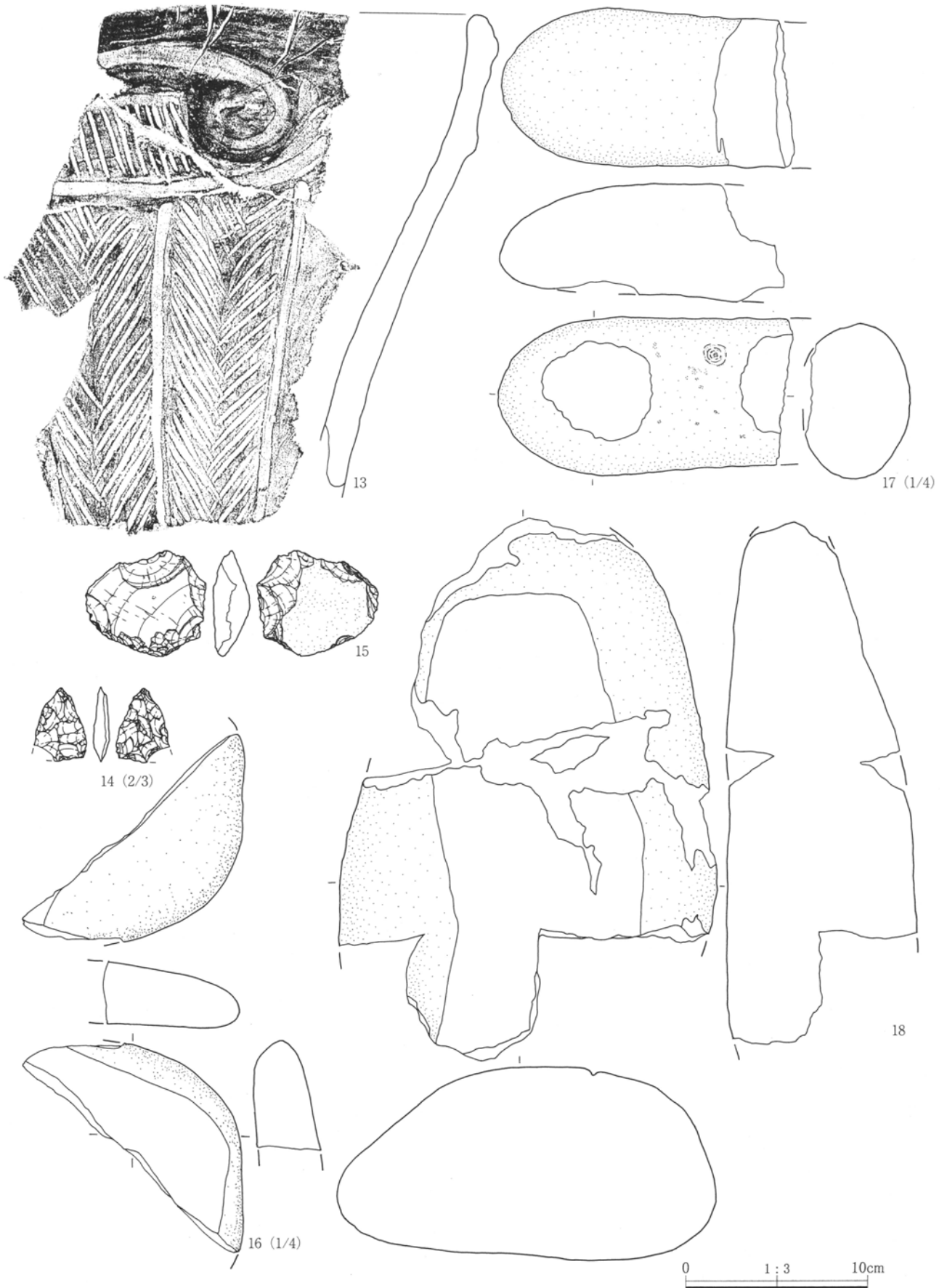
床面 地山の黄色シルト質土面を水平に削平し、柱穴の内側に地山の黒褐色土を敷きならして、貼り床状の硬化面を構築している。床の下は一面の地山礫であり、相当量の礫を片付けて床面を構築したのであろう。



第132図 20区116号住居

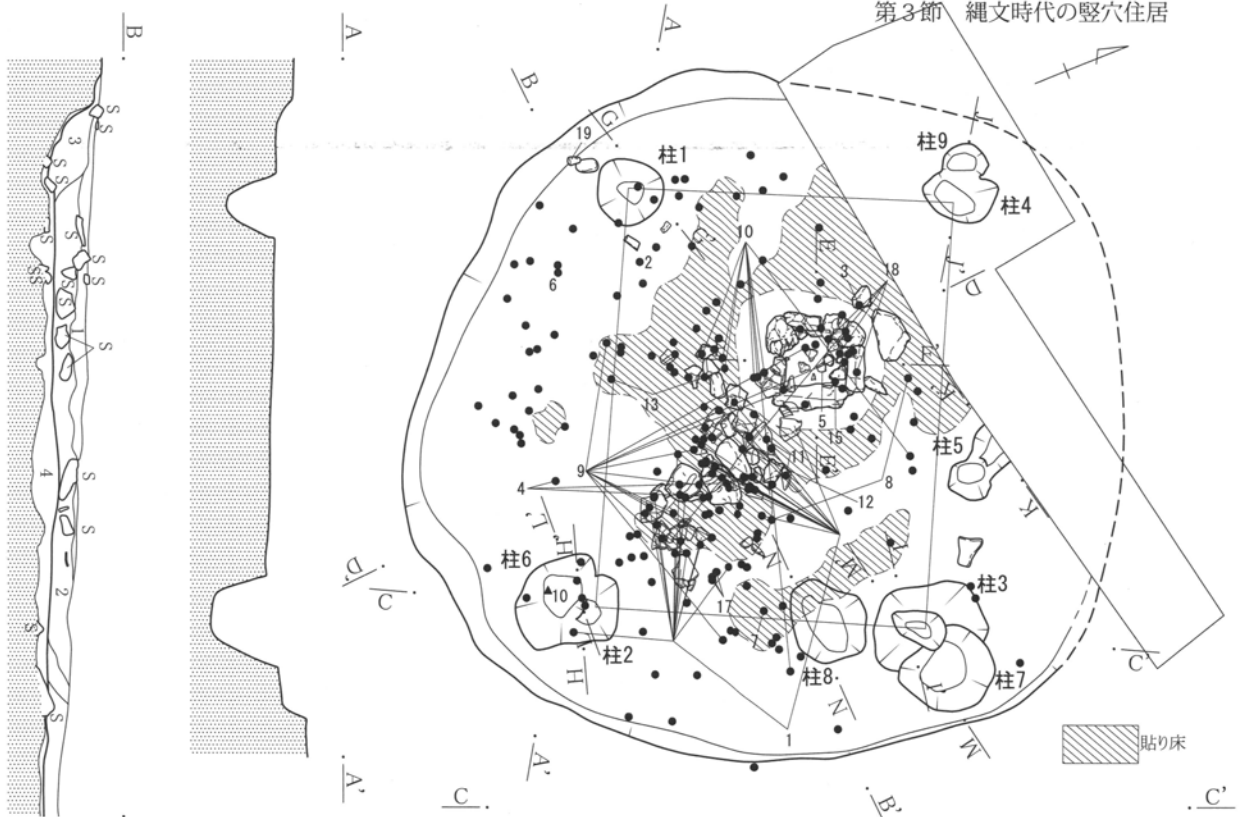


第133図 20区116号住居出土遺物(1)



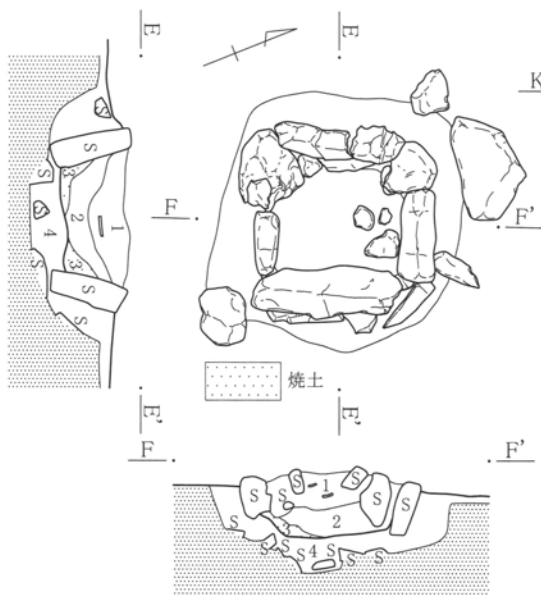
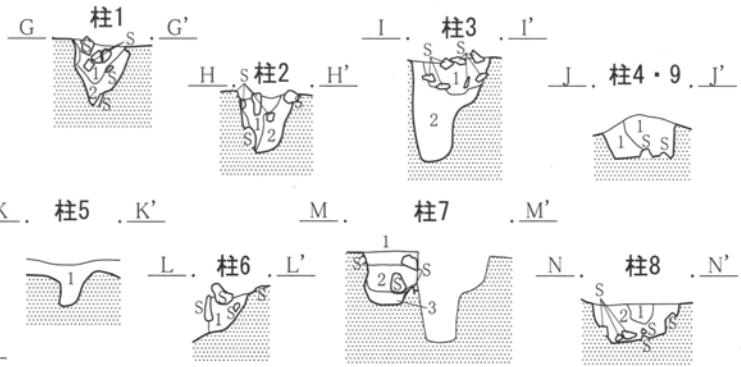
第134図 20区116号住居出土遺物(2)

第3節 縄文時代の竪穴住居



- 1、暗褐色土。
- 2、暗褐色土。炭化物を少量含む。
- 3、暗褐色土。地山土を含む。
- 4、暗褐色土。黒褐色土を含む。

0 1 : 50 2m  
L=581.20m

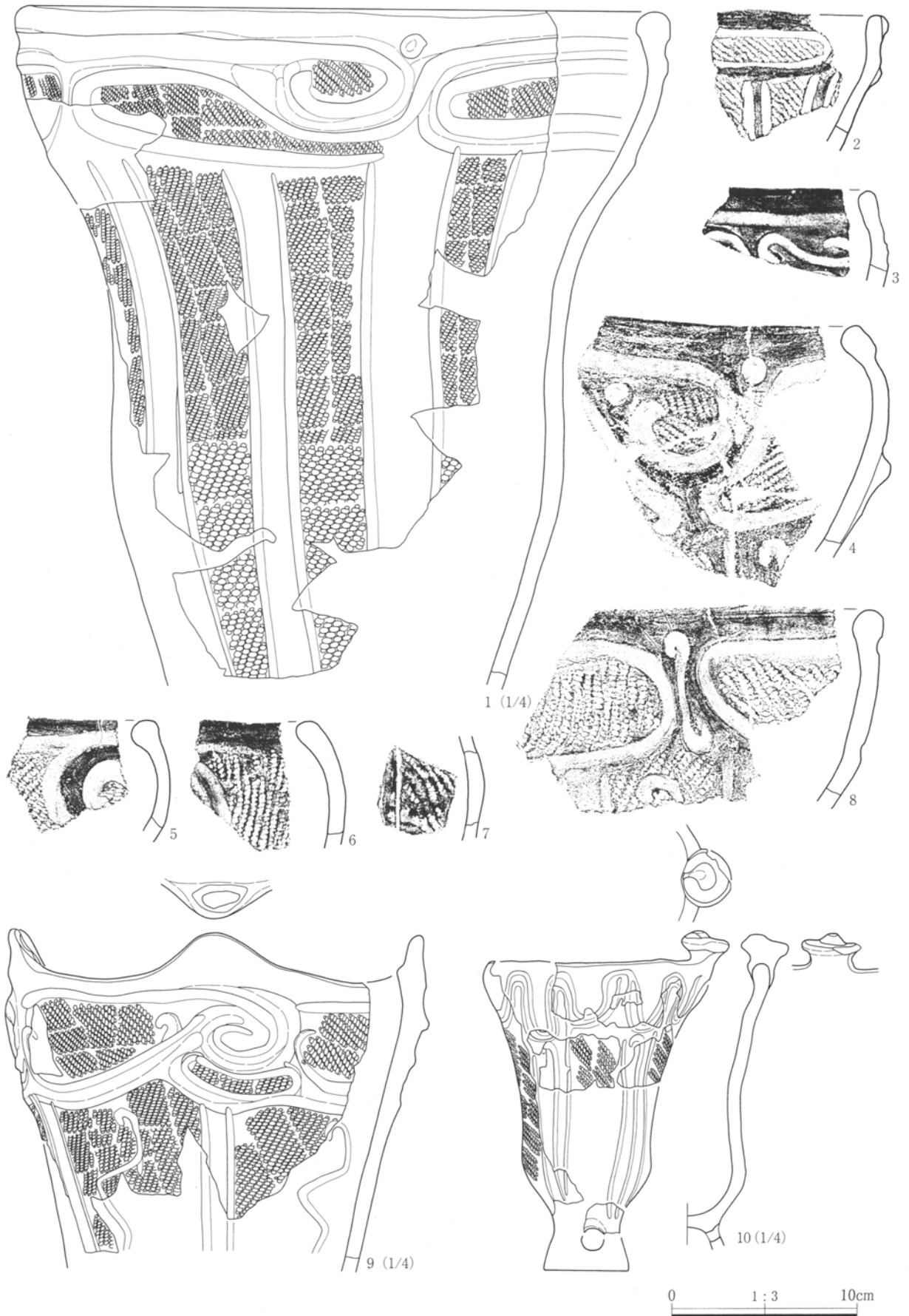


- 1、暗褐色土。
- 2、暗褐色土。地山土を含む。
- 3、焼土。

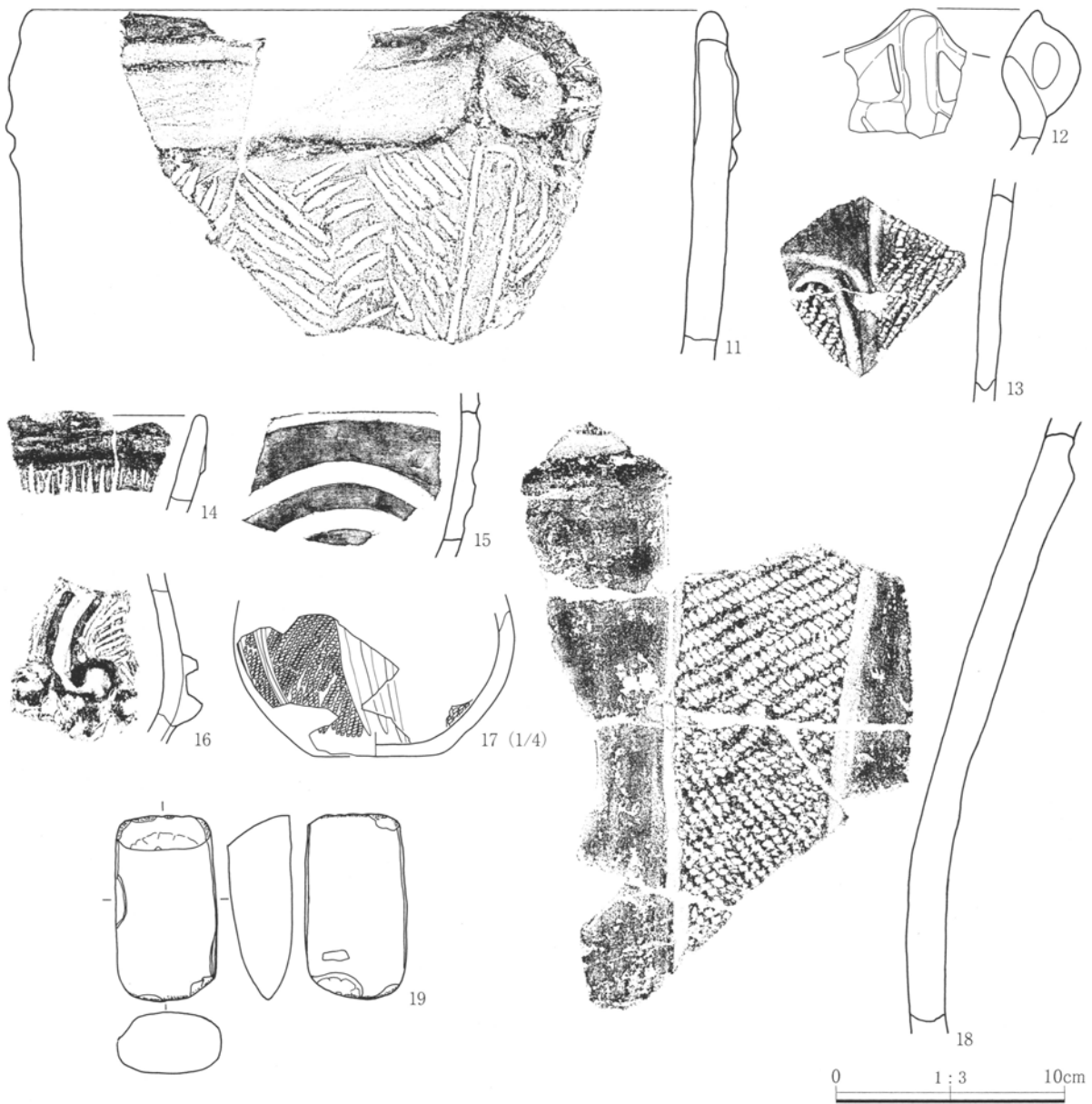
- 1、暗褐色土。焼土と炭化物を含む。
- 2、黒褐色土。焼土と炭化物を含む。
- 3、焼土。
- 4、黒褐色土。炭化物を少量含む。

0 1 : 25 1m  
L=580.80

第135図 20区118号住居



第136図 20区118号住居出土遺物(1)



第137図 20区118号住居出土遺物（2）

**炉** 大きな扁平礫と不定型の礫を組み合わせ  
て組んだ方形石囲い炉で、住居中央より北側に寄っ  
た位置に設置している。

炉石は扁平礫の側縁を立てて組み、隅部に不定型  
な礫を入れて調整している。規模は一辺 60 cm の方  
形で、炉石上端から使用面までの深さは 20 cm ほど  
である。なお、炉内には周縁部を中心に焼土が残っ  
ており、炉石にも被熱痕跡が明瞭に認められた。

**柱 穴** 合計 9 本が確認された。主柱は柱 2・1・  
4・3 の 4 本が該当すると考えられるが、そのうち  
柱 1 を除く 3 本は重複しており、改築が行われたと  
考えてよいだろう。なお、本住居は北東側を出入り  
口と想定しているが、その場合、柱 8 は炉の主軸線  
上に位置することになり、出入り口施設の一部と関  
連する可能性が考えられる。

規模（長辺×短辺×深さ）は、柱 1：56×47×

### 第3章 発見された遺構と遺物

43、柱2：43×－×41、柱3：75×－×69、柱4：50×－×27、柱5：28×－×21、柱6：71×－×31、柱7：64×55×35、柱8：60×51×26、柱9：30×－×25である。

**遺物** 覆土中から多量の礫と共に遺物が出土した。土器は総数276点が出土している。主な土器は加曾利E3式が171点、唐草文系新段階が29点で、ほかに阿玉台式5点、勝坂式2点、加曾利E1式3点、後期土器8点、晩期土器3点、土製円盤1点がある。このうち、1・8・9・11・17・18は覆土中から多量の礫と共に、10は覆土中に分散した状態でそれぞれ出土した。また、3・5・15と18の一部は炉内からの出土である。

なお、10は小型の台付き深鉢で、口縁に渦巻文を表現した把手が一つ付く。器形と文様は加曾利E式系であるが、台付きは信濃地域に特徴的な要素であり、興味深い。

石器の出土量はきわめて少なく、磨製石斧を転用した敲石(19)2点のほかに、剥片4点(黒曜石3点)、碎片7点(黒曜石7点)のみであった。

**時期** 出土土器は加曾利E3式期新段階を主体としており、本住居は当該期に比定されよう。

#### 20区119号住居

**調査年度** 平成16年度

**位置** O-8グリッド

**経過** 112号住居の掘り方調査に伴って、一定範囲から遺物の出土があり、掘り進めたところ、石囲い炉が確認された。周囲は地山礫が累々と点在しており、炉を中心に遺物の分布と礫の少ない範囲を考慮して、住居範囲を想定した。この範囲には板石や扁平礫が数多く点在するため、敷石住居を念頭に調査は進められた。そのため、調査時には谷側にあたる北東方向に出入り口部をもつ柄鏡形住居が想定された。また、掘り方調査で、炉の北西で埋設土器(2)が発見されている。

その後、本住居の下で石囲い炉が確認され、120号住居とされた。この住居の調査では、4本の柱穴

と炉の南東で配石と埋甕が発見された。120号住居の整理作業のなかで、炉内埋設土器と埋甕に時間差のあることがはっきりし、調査記録を検討の結果、この埋甕と配石は119号住居に所属することが判明した。実は119号住居の調査時に配石の一部がすでに確認されていたが、その段階では性格がはっきりしなかった。120号住居の調査段階で埋甕が検出され、注意されたのだが、使われた土器の時期は119号住居と一致しており、炉との距離も妥当性が高いと判断した。

**重複** 南側を大きく112号住居と、また住居範囲のほとんどを120号住居と重複し、120号住居を切り、112号住居に切られる。

**形状** 調査では、西側の一部で壁と思われる立ち上がりを確認し、この輪郭をもとに、南側は大きな地山礫を目安として、直径6mほどの円形の住居範囲を想定した。しかし、埋甕の存在が判明したことで、本住居は直径4.5mほどの規模で、南東方向に出入り口をもつ柄鏡形敷石住居であったと考えるに至った。

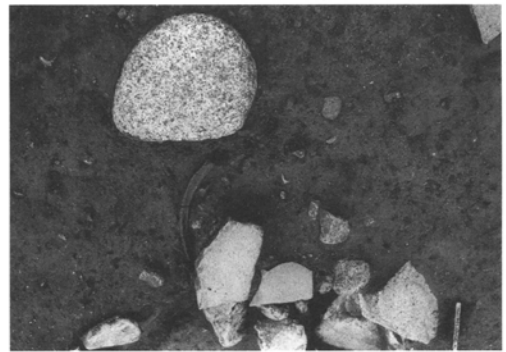
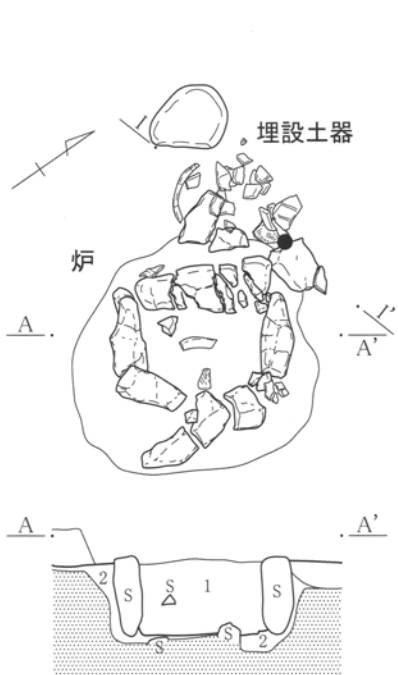
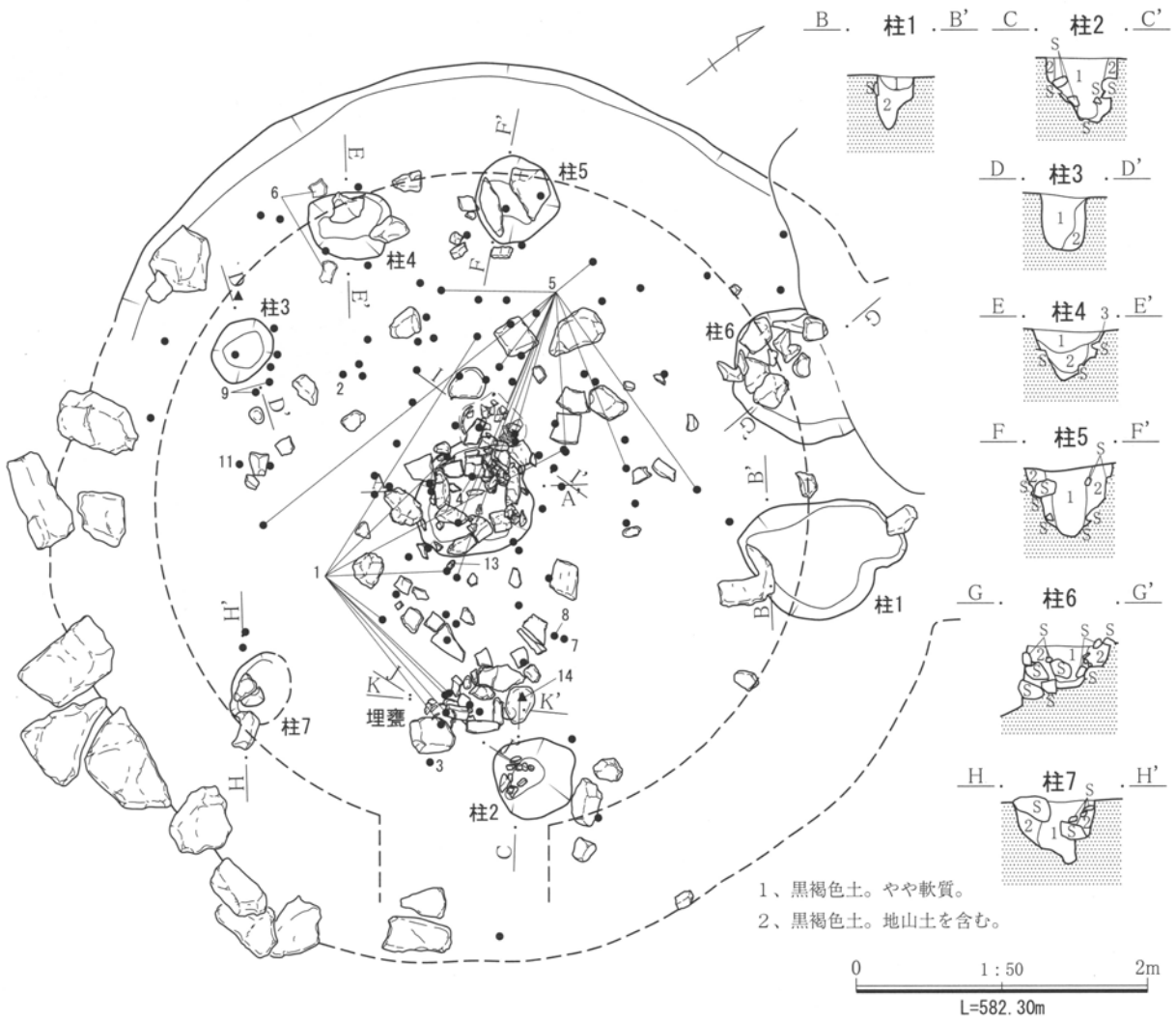
**床面** 炉のレベルを目安に床面を精査したが、硬化面等は確認できない。床面には所々に板石と扁平礫が点在しており、残念ながら面的に残っている地点はないが、出入り口部に方形石組みがあり、その周囲に板石と扁平円礫、および敷石住居に多用される小さな円礫が配されていた。本来は全面に敷石が施されていたものとする。

**炉** 大形の扁平礫4石で組んだ、方形石囲い炉であったと思われる。南東側の炉石が動いているが、他の3石は側縁を垂直に立てて設置されている。規模は南北方向が55cmで、炉石上端から使用面までの深さは27cmほどである。炉内に焼土は残っていなかったが、炉石は変色・劣化・ひび割れ等の被熱痕跡が明瞭に認められた。

なお、炉の掘り方調査で、北西側から埋設土器(2)が確認された。埋設状態で認められたのは一部の破片で、その他は内側に重なった状態で検出された。また、整理段階でこの土器の一部が覆土中にも散在



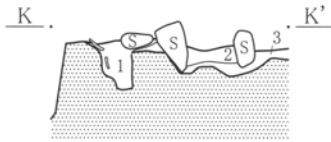
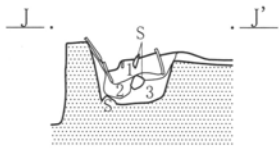
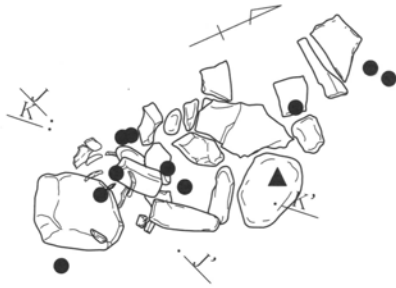
第3節 縄文時代の竪穴住居



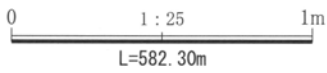
第138図 20区119号住居 (1)

第3章 発見された遺構と遺物

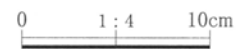
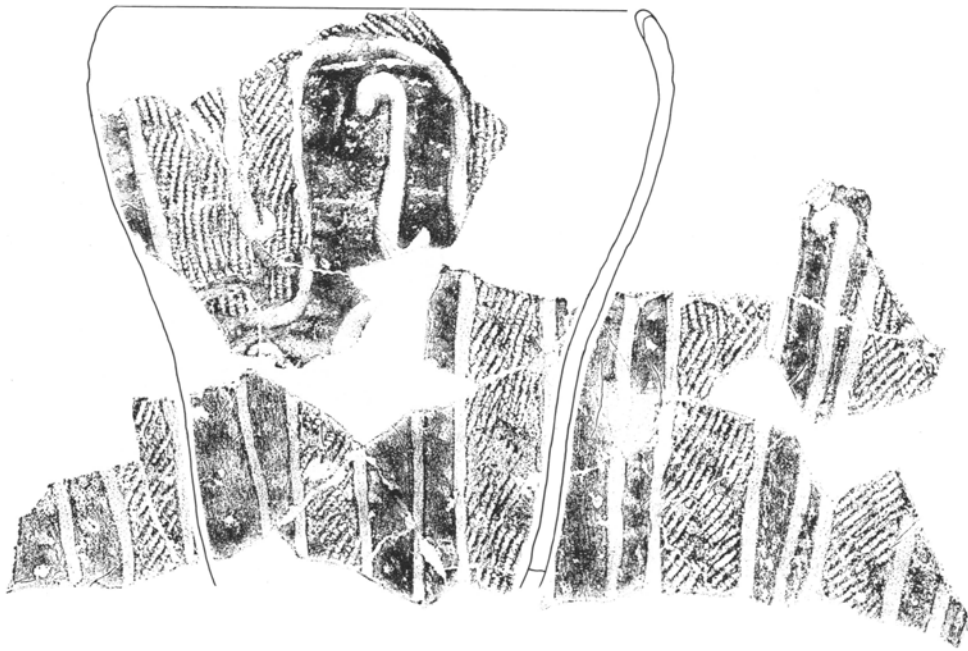
埋甕



- 1、黒褐色土。炭化物を少量含む。
- 2、黒褐色土。
- 3、黒褐色土。地山土を含む。



第139図 20区119号住居 (2)

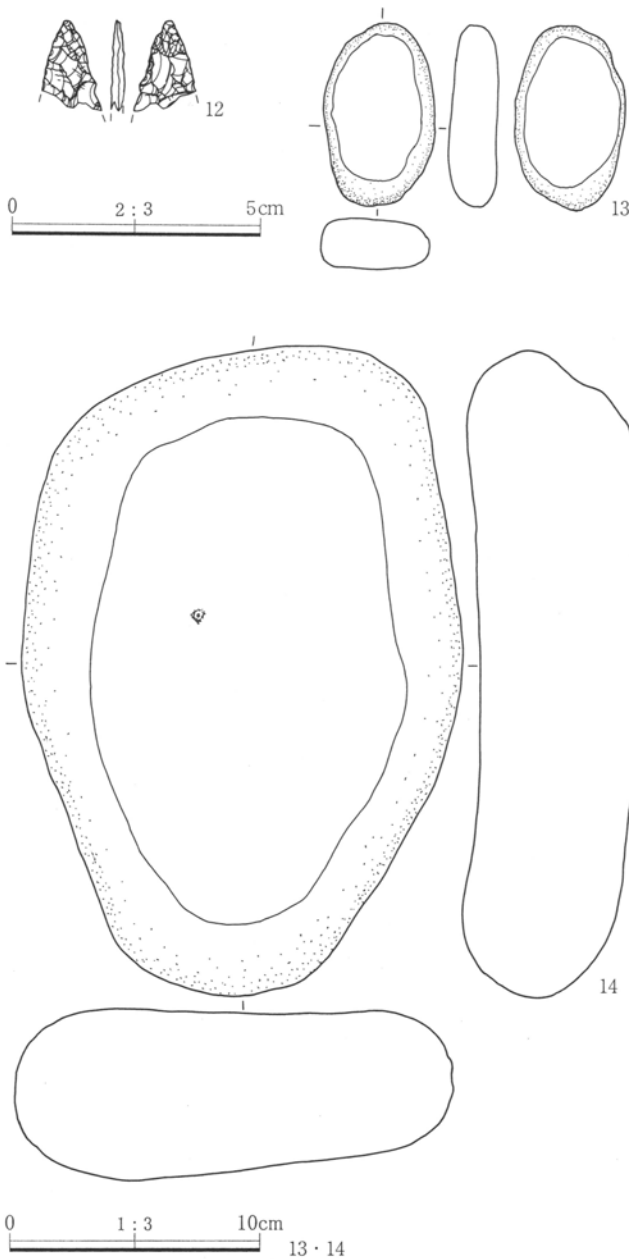


第140図 20区119号住居出土遺物 (1)



第141図 20区119号住居出土遺物(2)

第3章 発見された遺構と遺物



第142図 20区119号住居出土遺物(3)

していることが判明し、接合関係を検討した結果、口縁部から胴部中位までの破片が存在するが、かなりの部分を欠落していることがわかった。検出された位置から旧炉に伴う埋設土器の可能性もあるが、大型の土器であり、単独の埋設土器の可能性もある。いずれにしても、その惨状から、本住居の炉の設置に伴って破損したものと考えられる。なお、時期的には本住居の埋甕と大差はないであろう。

**柱 穴** 合計7本が確認されているが、炉と埋甕の

位置から想定すると、柱7・3・5・6・2の5本は主柱となる可能性がある。規模(長辺×短辺×深さ)は、柱1:116×79×36、柱2:57×52×44、柱3:45×37×39、柱4:57×46×35、柱5:60×58×50、柱6:95×-×29、柱7:51×-×44である。

**埋 甕** ここでは埋甕と配石について報告する。先述のとおり、この埋甕と配石は重複する120号住居の所属として扱われてきたが、先の理由により、本住居の一部として扱う。

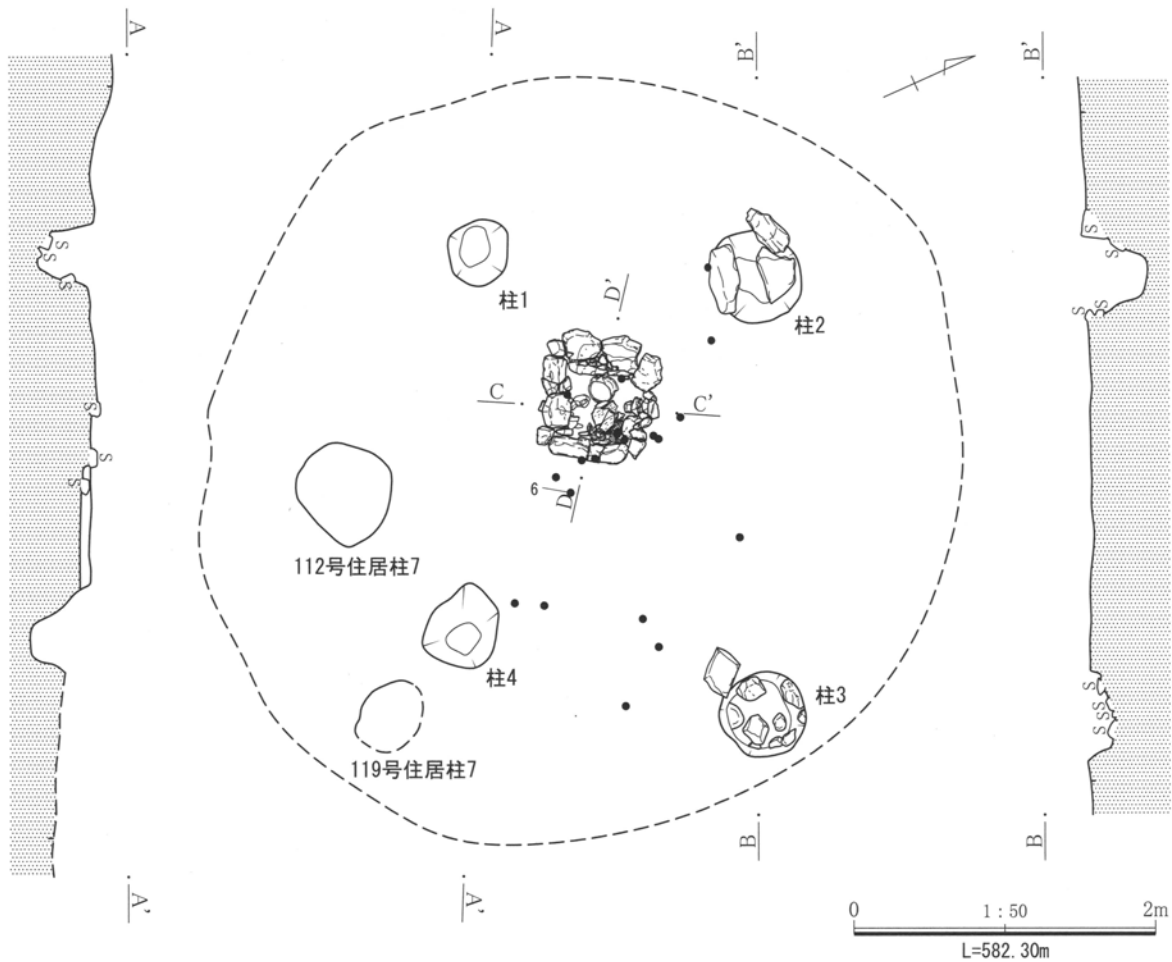
埋甕は炉の南東にあり、その位置は炉の主軸線上にはほぼのっている。炉の中心から埋甕の中心までの距離は1.5mほどであり、この距離は20区111号住居のそれと近似する。使われた土器は、中型の加曾利E式系の深鉢で、底部付近を打ち欠いて、正位に埋設されていた。この土器の一部は住居内に散在しているが、おそらく上面の配石の設置等に伴って一部が欠落したのであろう。なお、被熱痕跡は認められない。

配石は、埋甕のすぐ横にあり、埋甕を押しつぶすように設置されていた。確認当初は、長さ20~25cm、幅12~17cmの扁平な礫4石を、側縁を立てて方形に組んだ配石で、その周囲に板石と扁平な円礫、根詰め棒状円礫などを配しており、この配石は柄鏡形敷石住居に特徴的な出入り口部の方形石組みと考えられる。

以上のことから、埋甕と配石は本住居の出入り口部に伴う施設であり、当初は埋甕を埋設したが、その後方形石組に変更されたものと考えられる。

**遺 物** 覆土中から多量の礫と少量の遺物が出土している。土器は総数136点が出土した。主な土器は加曾利E3式が57点、唐草文系新段階が32点で、ほかに後期堀之内式7点、晩期土器2点がある。このうち、1は出入り口部の埋甕、5は炉の横から確認された埋設土器で、いずれも一部が住居内に散乱していた。なお、4・6・9・10・11は時期が古く、重複する120号住居の土器であろう。

石器の出土量は少なく、石鏃1点、砥石2点のほ



第143図 20区120号住居（1）

かに、石核1点（黒曜石1点）、剥片12点（黒曜石7点）、碎片10点（黒曜石10点）がある。

**時期** 埋甕と埋設土器、および覆土中出土土器は加曾利E3式器新段階を主体としており、本住居は当該期に比定されよう。

**20区120号住居**

**調査年度** 平成16年度

**位置** O-8グリッド

**経過** 119号住居掘り方調査で石囲い炉が確認され、120号住居と命名された。住居範囲のほとんどを119号住居と重複しており、床面とのレベル差は数cmである。床面は地山の黄色シルト質土に達しており、周囲は地山礫が累々と取り囲んでいる。住居範囲はほぼ固定されているが、明瞭な壁は確認でき

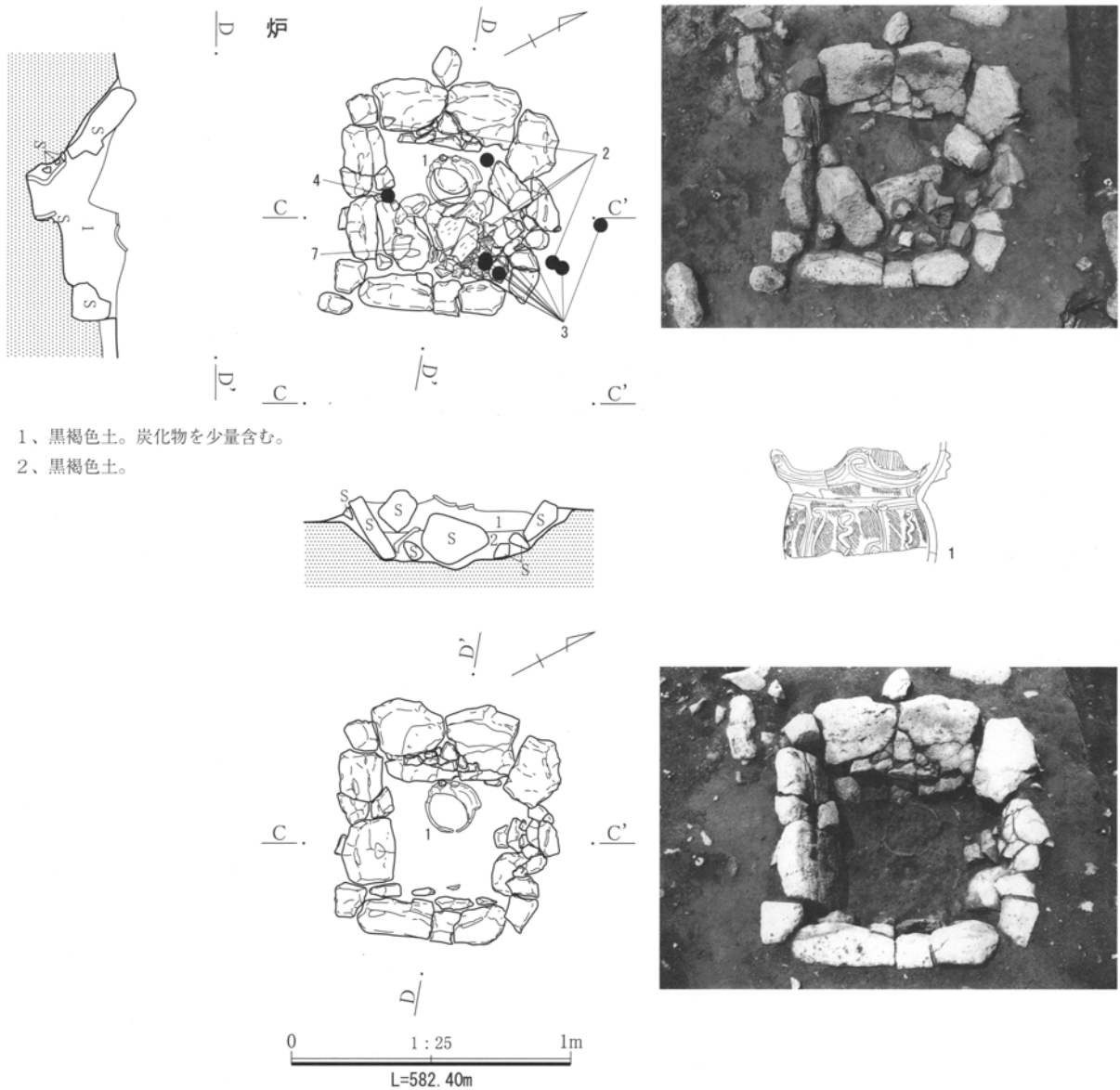
なかった。なお、炉の南東側2mのところ埋甕と配石が確認され、調査では本住居の施設として扱われたが、整理作業のなかで検討した結果、119号住居に伴うことが判明した。

**重複** ほとんどの範囲を119号住居と重複し、これに切られる。また、南側を112号住居と重複し、これにも切られている。

**形状** 直径4.7m前後の円形状を呈するものと思われる。

**床面** 地山礫を片付けて水平で平坦な床面を構築している。柱穴の内側はやや硬化した床面が認められた。

**炉** 大きな扁平礫数石で組んだ土器埋設石囲い炉で、住居中央の北西に寄った位置に設置している。炉石は側縁を立てて上方に開いた状態で設置してお



第144図 20区120号住居 (2)

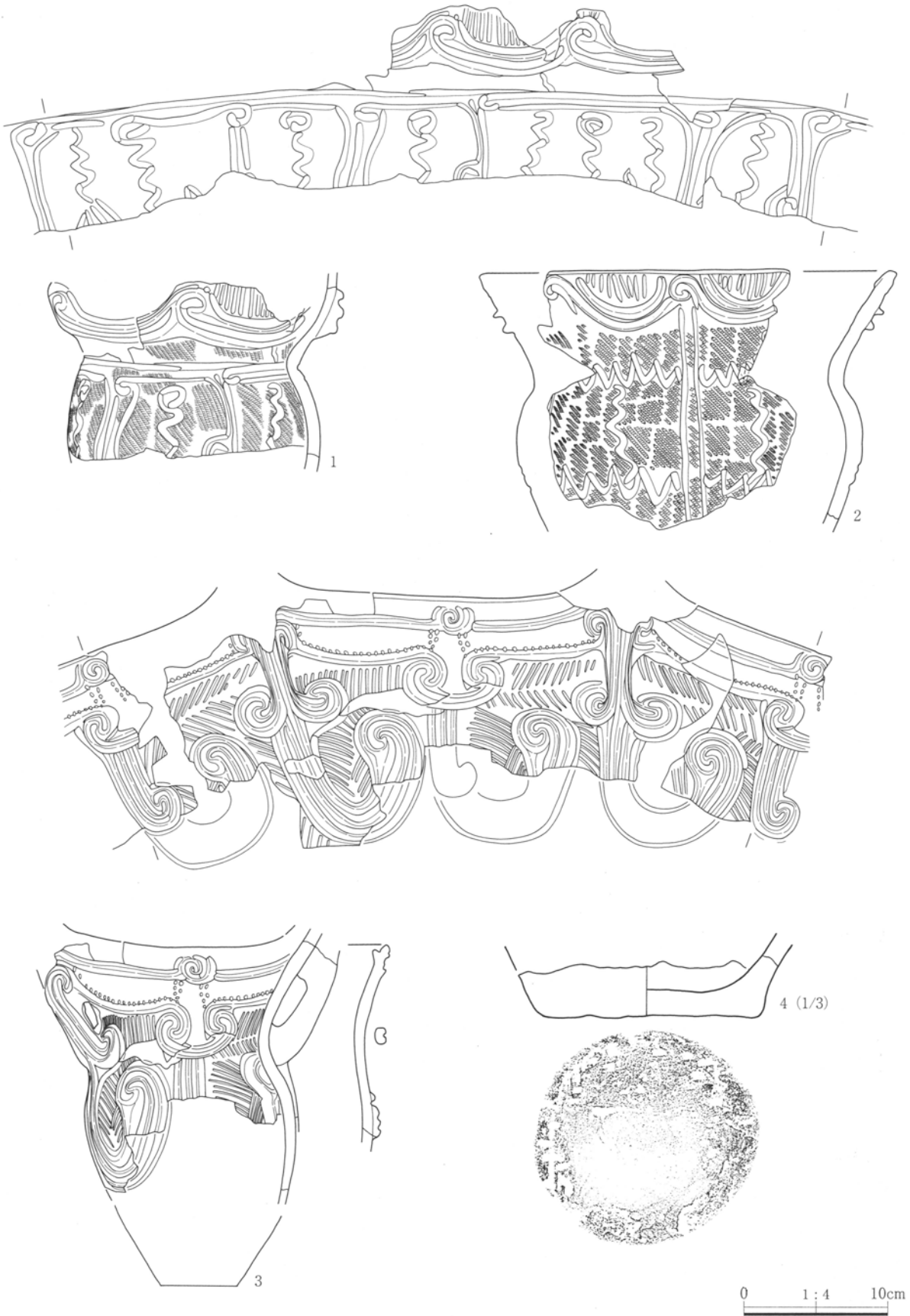
り、主軸にあたる東西の炉石には長さが50cmもある一枚石を使い、南北には2~3枚を組み合わせている。規模は一辺80cm方形で、炉石上端から使用面までの深さは25cmほどである。

埋設土器は、北西側炉石の中央に接するように設置されている。使われた土器は中型の加曾利E式系深鉢で、口縁部上端と胴下半部を打ち欠いて、正位に埋設されていた。

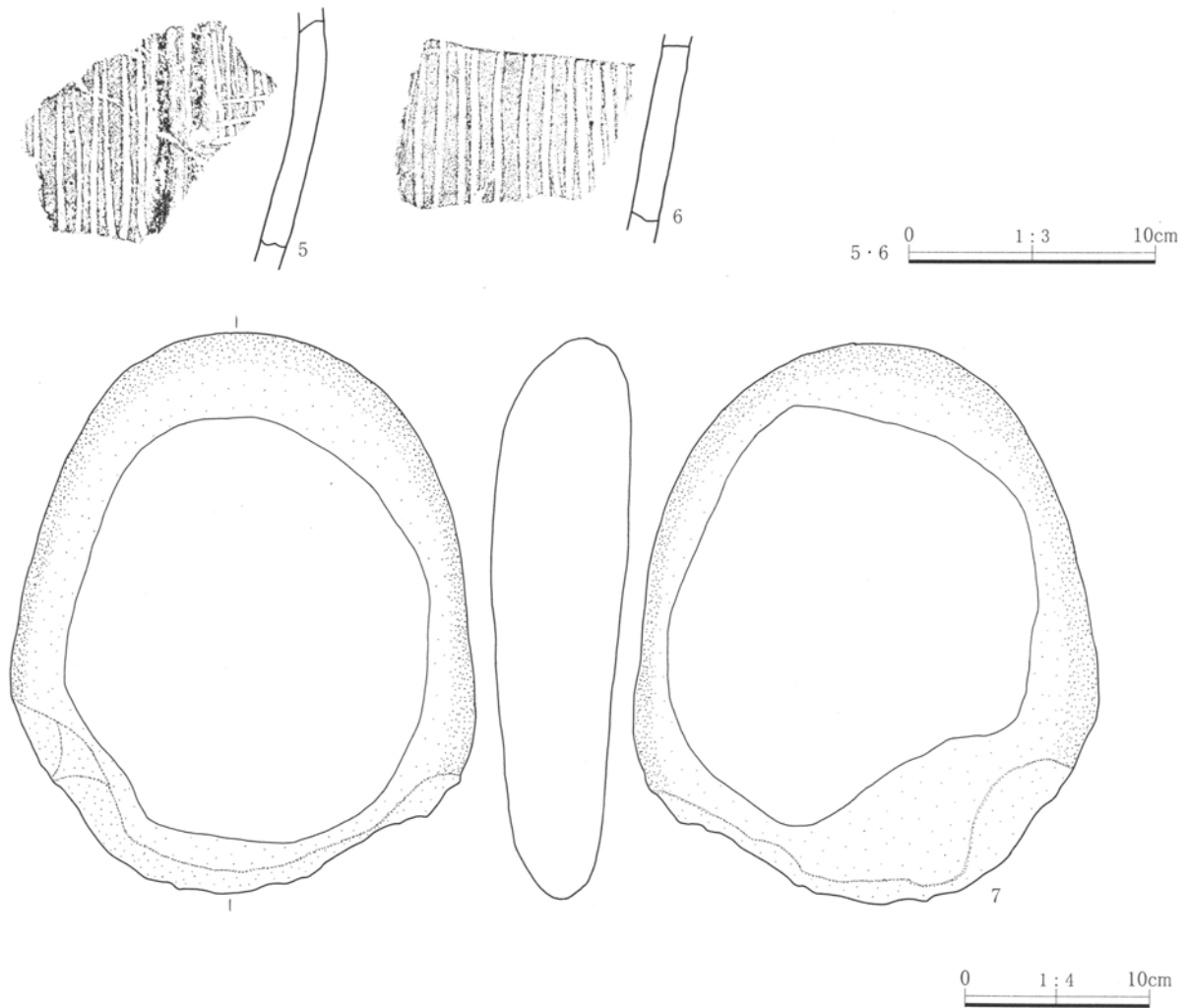
炉内に焼土は残っていなかったが、炉石と埋設土器は変色・劣化・ひび割れ等の被熱痕跡が明瞭に認

められた。

**柱 穴** 本住居の調査で確認された柱穴は柱1~4の4本であるが、このうち柱2は119号住居の柱5と共用、柱3は112号住居の柱10と共用である。これに112号住居の柱7と119号住居の柱7を加えると、図のような配置となる。ここでは便宜的にそれを柱5・6とする。おそらく本住居に伴う主柱は、柱6・5・1・2・3を合わせた配置で、これに柱2と3の間に未確認の1本を加えた6本が該当するであろう。規模(長辺×短辺×深さ)は、柱1:45



第145図 20区120号住居出土遺物(1)



第146図 20区120号住居出土遺物(2)

× 41 × 37、柱2 : 64 × 57 × 40、柱3 : 57 × 57 × 19、柱4 : 55 × 47 × 40である。

**遺物** 床面付近から少量の遺物が出土している。土器は総数55点が出土しており、主要なものは唐草文系新段階が35点、加曾利E3式が7点で、その他に阿玉台式1点、勝坂式1点がある。1は炉内埋設土器、2と3は炉内およびその直近床面に密着した状態で出土した。4・6も炉内からの出土で、4は底面に網代痕が付く。

石器は、使用痕ある石器1点、台石1点のみで、ほかに剥片6点(黒曜石5点)、碎片4点(黒曜石4点)が出土している。

**時期** 炉内埋設土器および出土土器は加曾利E3式期古段階を主体としており、本住居は当該期に比定されよう。

#### 20区122号住居

**調査年度** 平成15・16年度

**位置** L-5グリッド

**経過** 20区111号住居の北東側で後期の121号住居が確認され、その調査に伴って本住居の石囲い炉が検出された。この地点は現在の道路の真下であり、上面は攪乱が及んでいた。また、本住居は平成15年度と16年度の調査区境を跨いでいるため、石囲い炉のすぐ東側は前年度に床下まで掘り下げられてしまった。そのため、炉の西側は床面が残っていたが、東側は床下のみ調査である。

なお、平成15年度の調査で柱1の南東から埋設土器が検出され、単独の遺構として「20区17号埋甕」と命名された。使われた土器は、中期加曾利E3



式期のものである。この埋甕の確認面は、本住居の確認面より10 cmほど低いが、出土位置および帰属時期を検討した結果、本住居の埋甕と考えて問題はないと判断した。

**重複** 西側を111号住居と、北側を後期の121号住居と重複し、両住居に切られる。また、東側に後期の楕円形の土坑が重複し、これに切られている。この土坑は調査時に柱穴8とされたものだが、規模が大きく、後期の土器が多量に出土していることから、本住居から除外した。

**形状** 炉の西側で床面は確認できたが、明瞭な壁は検出できなかった。調査時には、床面と遺物の出土状況を考慮して直径7 m前後の円形を呈する住居形状を想定したが、東側で確認された埋甕(20区17号埋甕)を前提にすれば、直径5.5 m前後の形状が妥当であろうと考える。

**床面** 炉の西側では平坦な床面が確認され、少量の遺物と礫が床面から出土している。また、炉の周囲に若干の硬化面が認められた。確認面からの深さは、山側で15 cmほどであったが、明確な壁は確認されていない。なお、炉の東側はすでに削平されて消失していた。

**炉** 大型の扁平礫4石で組んだ土器埋設方形石囲い炉で、住居の中央付近に位置するものと思われる。炉石は、長辺60 cmほどの大きな石を、側縁を垂直に立てて組んでいる。規模は、長辺90 cm、短辺80 cmで、炉石上端から使用面までの深さは20 cmほどである。

埋設土器は、炉内南東部隅に、口縁を内側に大きく傾けた状態で、正位に設置されている。使われた土器(1)は小型の加曾利E式系深鉢で、口縁部は打ち欠いてあった。上半部は被熱による劣化が著しく、接合は不可能だったため、図は下半部のみになっている。

なお、この土器の下に別の土器2点(3・7)があり、このうち7は1の下に正位に埋設されていたことから、1を使用する以前の埋設土器の一部であると考えられる。ちなみに、3・7も加曾利E式

系の土器である。

**柱穴** 合計8本が確認されている。このうち、柱1・2・3・4の4本は炉の中心から2 mの等距離にあり、柱7・5・6の3本は2.15 mの等距離にある。また、柱7・3・4・6の位置は、石囲い炉の隅部の延長上にほぼ対応している。また、柱1は炉の主軸線上に近い位置にある。以上のことから、柱9を除く7本は主柱の一部である可能性もある。

なお、柱3の南側根元の床面から、大型の黒曜石剥片5点(総重量277 g)がまとまって検出されている。

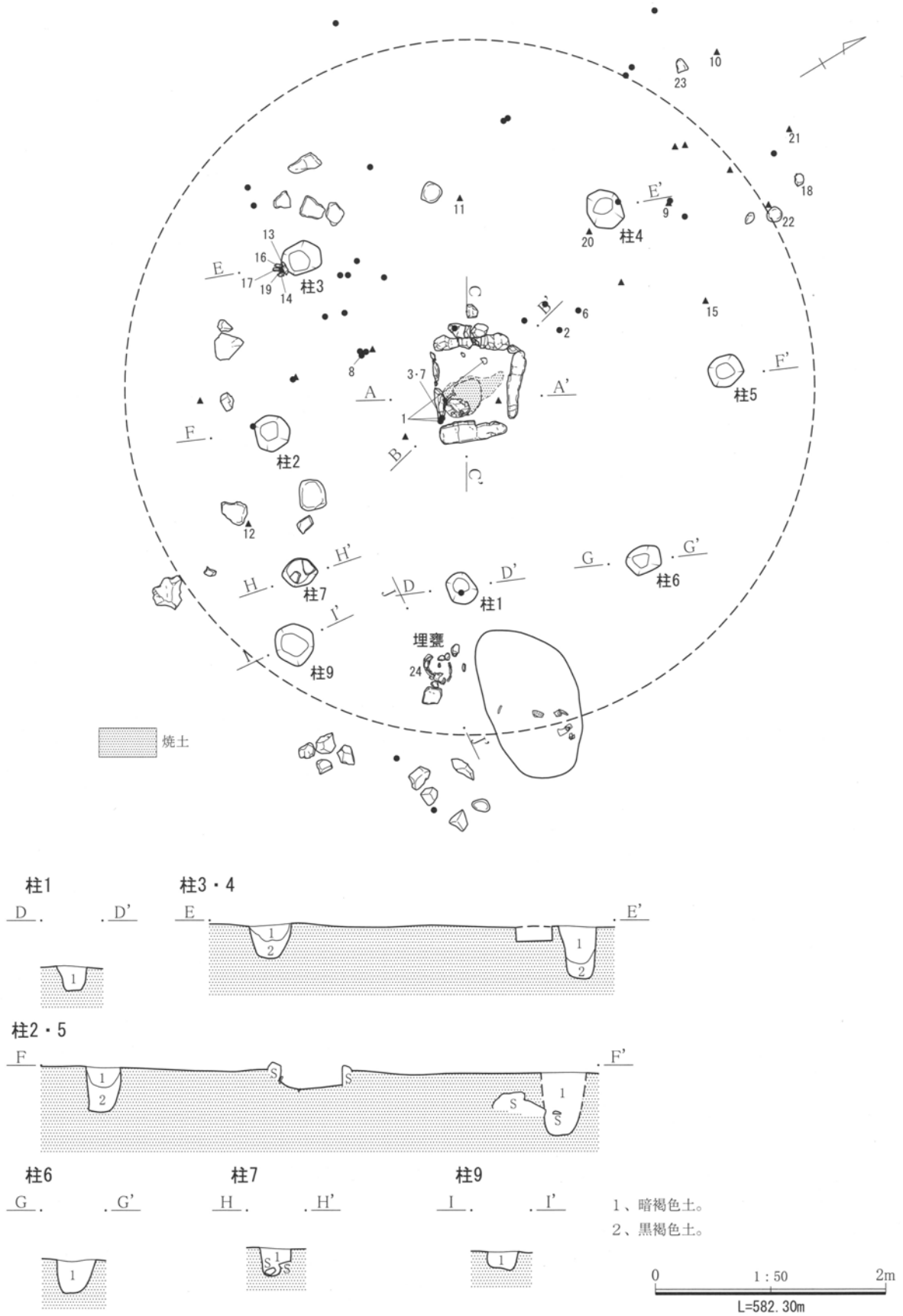
それぞれの規模(長辺×短辺×深さ)は、柱1:28×23×22、柱2:31×30×39、柱3:33×26×31、柱4:35×29×46、柱5:29×26×54、柱6:30×23×29、柱7:31×24×25、柱9:34×33×21である。

**埋甕** 先述のとおり、この埋甕は本住居確認以前に、単独の遺構(20区17号埋設土器)として調査されたものである。出土位置は、炉の南東2 mほどの位置にあり、炉の中心からの距離は2.35 mである。炉の主軸線上からやや南にずれているが、同様の事例は本遺跡でも確認されている。確認面は炉よりも10 cmほど低いレベルであるが、このことは埋甕の上半部が消失していることと合致している。

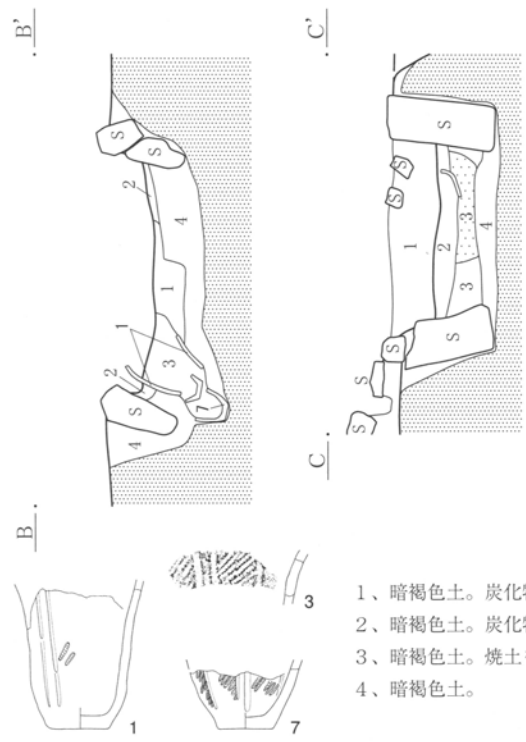
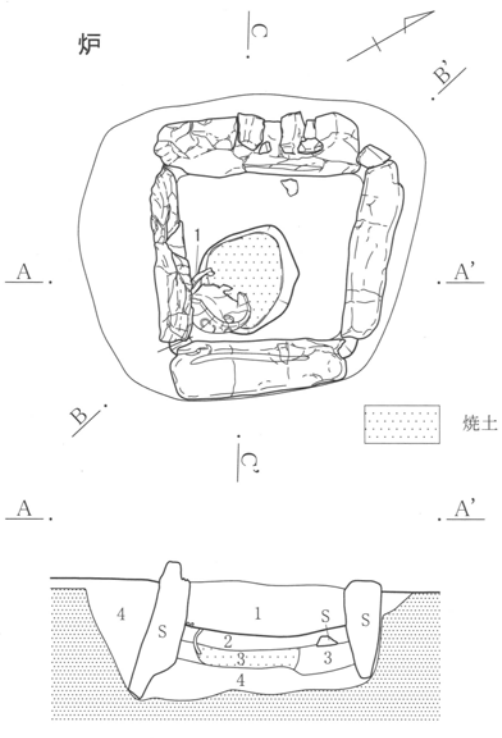
使用された土器は、中型の加曾利E式系深鉢(24)で、胴上半部を失っている。これは後世の削平によるものと思われ、本来は上半部があったと考える。なお、土器に被熱痕跡は認められない。

**遺物** 覆土下層から床面にかけて、少量の遺物が出土している。土器は総数75点出土した。劣化摩耗した土器が大半であり、時期が判明したものは加曾利E3式土器10点、加曾利E4式土器1点のみである。このうち、1・3・7は炉内埋設土器、24は埋甕である。

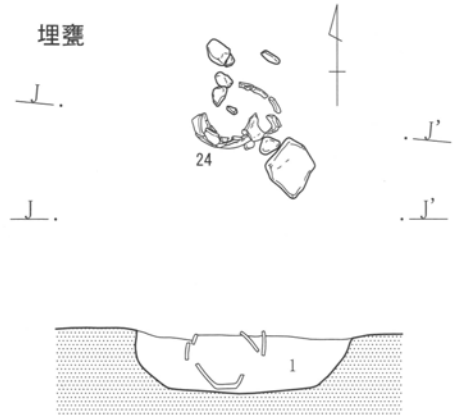
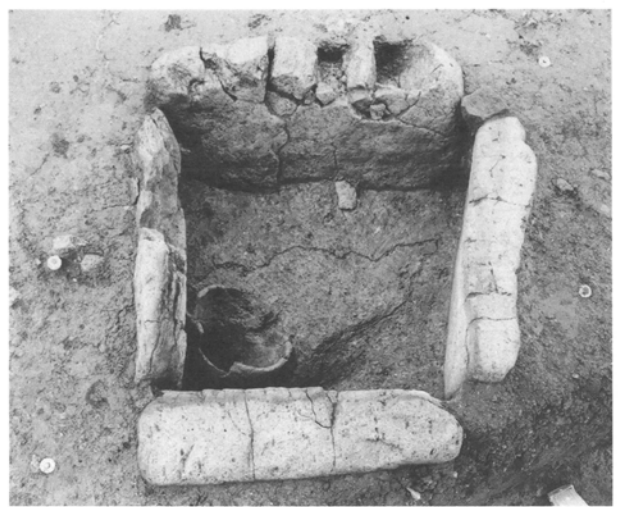
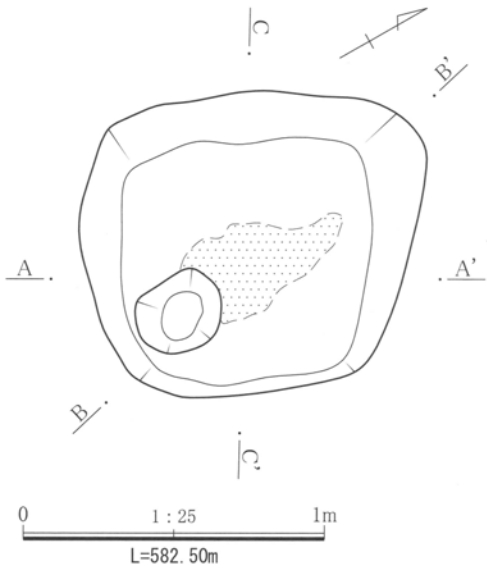
石器は、石鏃2点、石鏃未製品1点、削器1点、使用痕ある剥片2点、打製石斧2点、磨石2点が出土しており、ほかに石核2点(黒曜石1点)、剥片40点(黒曜石31点、珪質変質岩類4点)、碎片7点(黒



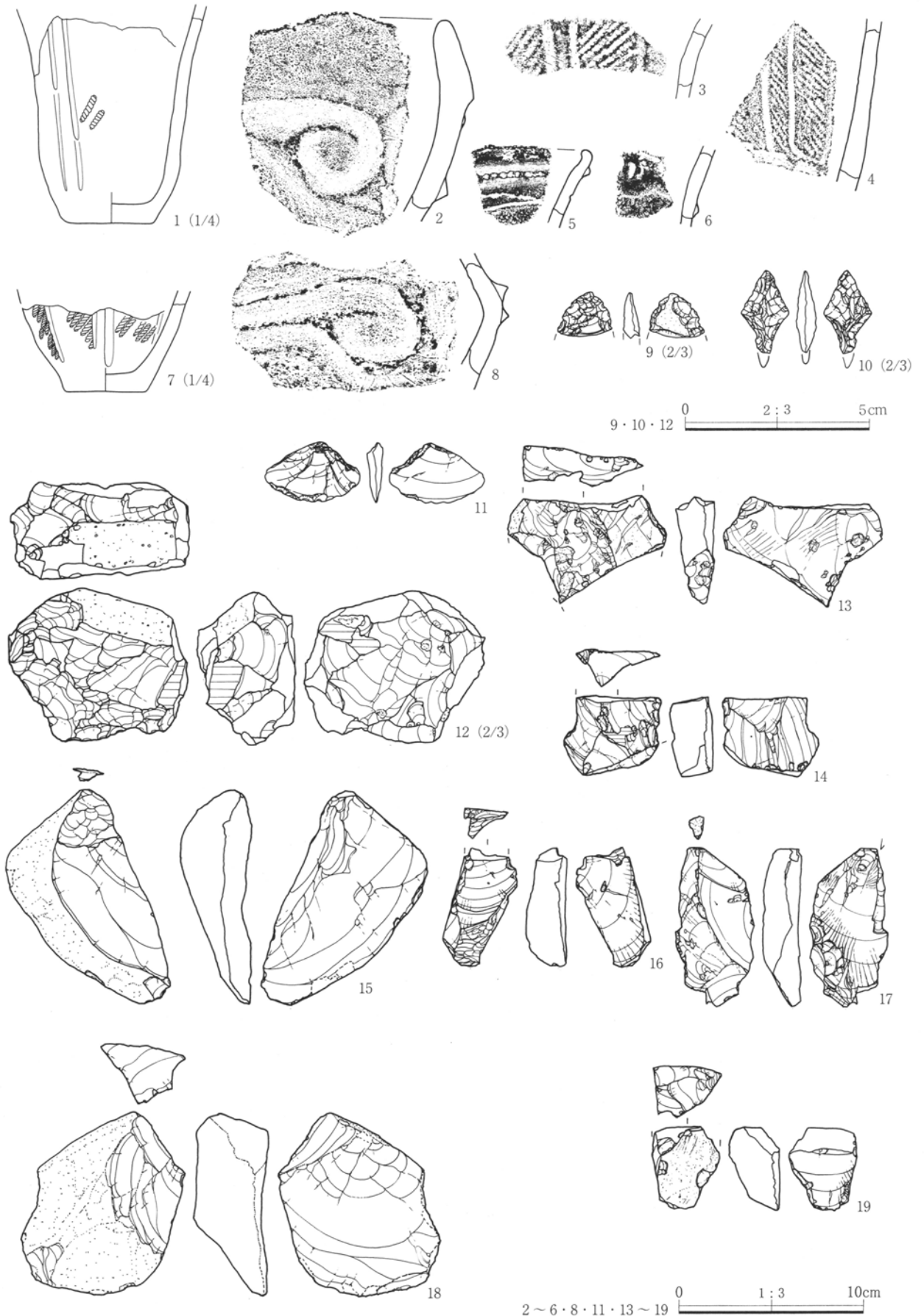
第147図 20区122号住居 (1)



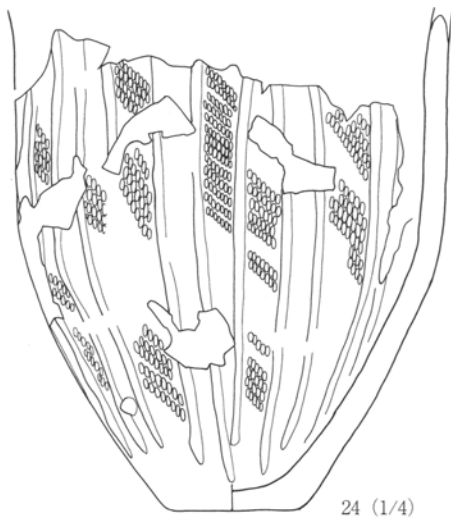
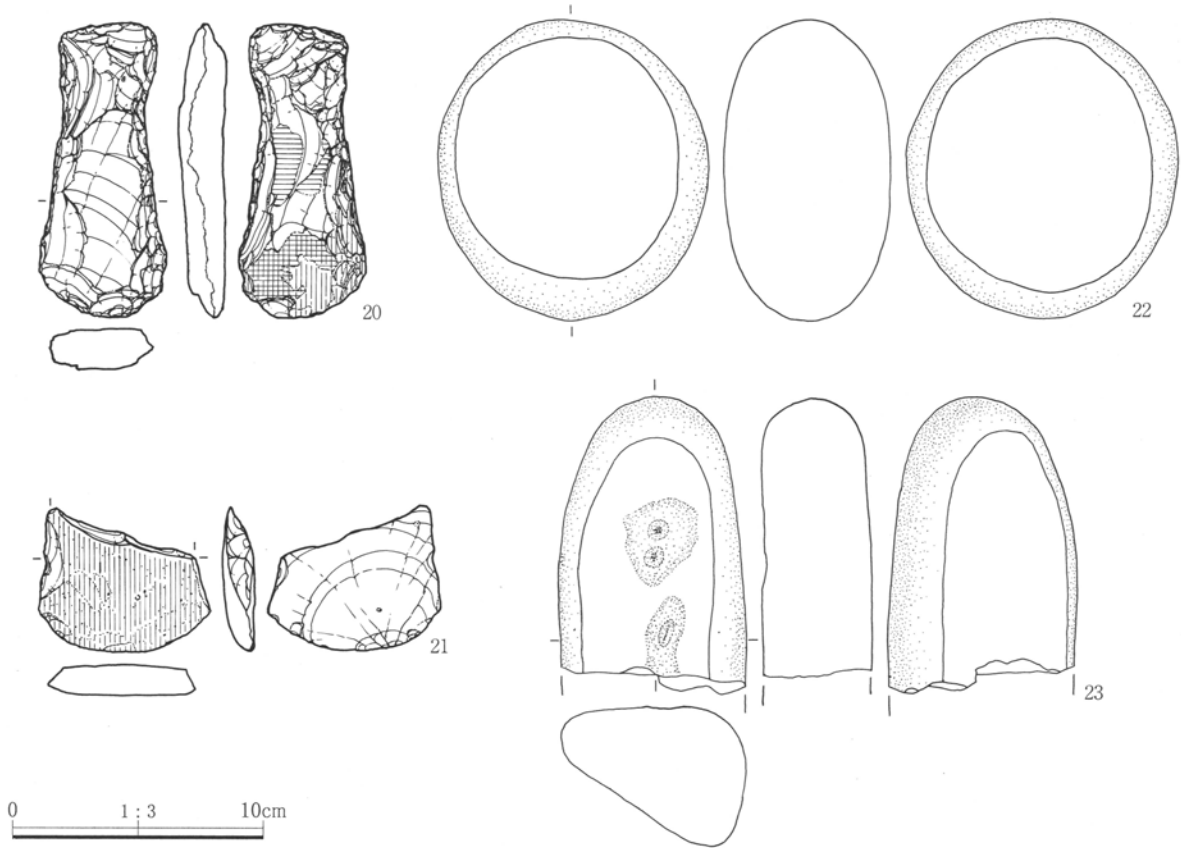
- 1、暗褐色土。炭化物を少量含む。
- 2、暗褐色土。炭化物を多量に含む。
- 3、暗褐色土。焼土を含む。
- 4、暗褐色土。



第148図 20区122号住居 (2)



第149図 20区122号住居出土遺物(1)



第150図 20区122号住居出土遺物(2)

曜石4点、珪質変質岩類2点)がある。このうち、大型の黒曜石剥片5点(13・14・16・17・19)は、柱3の根元の床面からまとまって出土している。

**時期** 炉内埋設土器および埋甕は加曽利E3式期中段階のものであり、本住居は当該期に比定されよう。

第3章 発見された遺構と遺物

表3 横壁中村遺跡20区縄文時代中期の住居一覧

住居番号	グリップ	時期	焼骨 (g)	形状	長軸	短軸	深さ	竈	柱	切合四縁 (古)	切合四縁 (新)	備 考
72号住居	I-15	加E 3式中	0.5 (円形)	-	590	540	-	土器埋設方形石囲炉	7	73住	93住	貼り床あり。 72住の床下で確認。
73号住居	I-15	加E 3式中	-	-	-	-	-	土器埋設方形石囲炉	4	-	73住、93住	-
74号住居	A-20	晩期	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
75号住居	C-17	後期	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
76号住居	B-19	加E 4式古	横壁 (2)	横壁 (2)	-	-	-	-	-	-	-	-
77号住居	A-16	縄之内1式	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
78号住居	A-14	加E 2式新	17.6 楕円形	楕円形	430	367	57	円形石囲炉	6	80住	287坑、517坑	貼り床あり。大型砥石出土。
79号住居	C-12	加E 1式古	12.3 楕円形	楕円形	570	513	68	(土器埋設石囲炉)	6-7	-	-	貼り床あり。和取り環し。石棒片出土。 旧埋設土器あり。大型石棒片出土。
80号住居	A-12	加E 2式古	4.2 (楕円形)	-	630	608	-	隅丸方形石囲炉	-	-	-	-
81号住居	C-2	後期	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
82号住居	C-4	後期	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
83号住居	J-1	平安時代	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
84号住居	I-12	加E 1式古	6 隅丸方形	隅丸方形	467	458	15	土器埋設楕円形石囲炉	4	なし	なし	-
85号住居	E-10	加E 3式新	1 円形	円形	610	-	15	土器埋設方形石囲炉	8	91住 (平安時代)	91住	柱6に逆位埋設土器。
86号住居	H-10	加E 3式	(円形)	(円形)	500	-	40	方形石囲炉	4	なし	なし	-
87号住居	C-14	加E 2式新	11.8 楕円形	楕円形	663	606	74	土器埋設長方形石囲炉	-	92住、98住 (後期)	92住、98住 (後期)	貼り床。床面伏せあり。石棒未製品出土。
88号住居	E-12	加E 3式新	円形	円形	450	-	15	不定型石囲炉	6	なし	なし	石棒未製品出土。
89号住居	J-7	加E 1式新	円形	円形	430	-	15	長方形石囲炉	5	なし	なし	-
90号住居	B-7	平安時代	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
91号住居	F-10	平安時代	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
92号住居	D-14	加E 3式古	0.3 -	-	-	-	-	方形石囲炉	-	87住	-	南側に埋設。
93号住居	I-14	加E 3式新	隅丸方形	隅丸方形	-	-	-	方形石囲炉	4	72住、73住	-	竈石棒に多孔石。赤彩小型深鉢出土。
94号住居	D-12	加E 3式新	3.4 (円形)	(円形)	-	-	-	方形石囲炉	-	97住、107住	-	柱穴の根詰め。
95号住居	A-17	後期	1.5 円形	円形	430	-	60	土器埋設円形石囲炉	-	104住	-	有文右形土器、赤彩石付き鉢出土。
96号住居	D-11	加E 3式中	円形	円形	540	-	10	不定型石囲炉	-	-	91住 (平安時代)	-
97号住居	G-11	加E 3式新	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
98号住居	B-15	縄之内式	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
99号住居	欠番	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
100号住居	欠番	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
101号住居	D-1	加E 3式新	円形	円形	486	-	10	土器埋設方形石囲炉	7	なし	なし	北東と南東に埋設各1あり。
102号住居	G-12	加E 3式新	-	-	-	-	-	方形石囲炉	4	105住	105住	石皿片出土。
103号住居	E-4	加E 3式新	円形	円形	530	-	45	土器埋設長方形石囲炉	-	なし	なし	石皿片出土。
104号住居	C-11	加E 3式古	楕円形	楕円形	800	692	68	(土器埋設石囲炉)	7	96住	96住	貼り床。和取り環し。方形配石あり。丸石2個出土。
105号住居	G-12	加E 3式中	-	-	-	-	-	土器埋設方形石囲炉	-	102住	18、20埋設土器	-
106号住居	J-4	要確認	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
107号住居	D-13	加E 3式新	(円形)	(円形)	-	-	-	土器埋設方形石囲炉	-	94住	-	南側に埋設と床面伏せ。大型砥石。
108号住居	A-3	後期	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
109号住居	G-1	後期	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
110号住居	不明	要確認	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
111号住居	M-4	加E 4式古	楕円形散石	楕円形散石	470	-	10	土器埋設方形石囲炉	-	122住	121住	北東に埋設と出入り口あり。炉内に旧埋設土器。石棒片6個出土。
112号住居	O-7	加E 4式古	柄鏡形散石	柄鏡形散石	-	-	-	方形石囲炉	-	115住	119住、120住	-
113号住居	R-9	加E 3式古	隅丸方形	隅丸方形	455	450	60	(方形石囲炉)	6	-	-	貼り床。和取り環し。大型砥石出土。
114号住居	S-8	後期	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
115号住居	Q-7	後期	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
116号住居	M-11	加E 3式新	-	-	-	-	-	土器埋設方形石囲炉	-	なし	なし	大型砥石出土。
117号住居	欠番	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
118号住居	O-12	加E 3式新	隅丸方形	隅丸方形	460	450	40	方形石囲炉	4	なし	なし	貼り床あり。
119号住居	O-8	加E 3式新	柄鏡形散石	柄鏡形散石	(450)	-	-	長方形石囲炉	-	120住	112住	南東に埋設と方形石組みあり。和のそばに埋設土器あり。
120号住居	O-8	加E 3式古	(隅丸方形)	(隅丸方形)	(470)	-	-	土器埋設方形石囲炉	4	112住、119住	112住、119住	-
121号住居	L-5	後期	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
122号住居	L-5	加E 3式中	-	-	-	-	-	土器埋設方形石囲炉	-	-	111住、121住	南東に埋設あり。黒曜石大型割片5点出土。

## 第4章 まとめ

### 第1節 竪穴住居について

今回の報告で対象とした住居は、平成15・16年度に発掘調査した20区の縄文時代中期の住居30軒である。中期の住居については、これまでに横壁中村遺跡(2)～(4)まで3冊に分載して126軒を報告してきた。今回の報告はその4冊目となるが、ここでは整理作業を通じて得られた所見を書き留めて、今後の報告書作成ならびに総集編作成の準備としたい。そのため、ここでの内容は中間報告的な内容であることをご了解頂きたい。

今回の報告で対象とした地区は、先述のように中期後半期環状集落の南端部の一画にあっており、さらにその南側に数軒づつの住居が点在している。環状集落とその南側の点在地区は、ほぼ東西グリッド10ラインを境にしており、ここでは便宜的に前者をAエリア、後者をBエリアとする。

30軒の住居を時期別(表4参照)に見ると、加曽利E1式段階が79号・84号・89号の3軒、加曽利E2式期が78号・80号・87号の3軒、加曽利E3式期古段階が104号・113号・120号の3軒、加曽利E3式期中段階が72号・73号・92号・96号・105号・116号・122号の7軒、加曽利E3式期新段階が85号・86号・88号・93号・97号・101号・102号・103号・107号・118号・119号の11軒、加曽利E4式期が111号・112号の2軒となり、加曽利E式期の各段階の住居が揃っている。これらの分布状況(図1参照)を見ると、E2式段階の3軒の住居がAエリアの東側に集中している以外は、各段階とも両エリアに展開しており、時期別に数カ所のブロックに分かれて居住地点を踏襲しているような傾向が伺える。特に環状集落域にあたるAエリアでは、住居の重複が多い。

住居の形状については、正確に把握できた事例は少ないが、円形・隅丸方形・楕円形・柄鏡形が認められた。このうち、楕円形は加曽利E2式期から

E3式期古段階に多く、大型住居もこの時期に多い傾向が認められた。柄鏡形は、敷石の敷設と同時に加曽利E3式期新段階から派生した可能性が高く、その後は主体をしめる形状として変遷するようである。

炉は、加曽利E1式期から石囲い炉が主体であり、本地域ではこの傾向が後期前中期まで続くようである。形状は円形・楕円形・長方形・方形等があり、炉内に口縁部や胴下半部を打ち欠いた土器を埋設する事例も多い。

図2に主要な事例を時期別に並べてみた。加曽利E1式期の石囲い炉には楕円形と長方形がある。今回の調査区では確認されていないが、円形も認められる。炉石はやや小振りな礫を使用する傾向があり、炉内に埋設土器を設置するものもこの時期から認められる。加曽利E2式期では長方形と円形、隅丸方形などが確認されている。E1式期と同様に小振りな礫を使用するものもあるが、大型の石囲い炉では大きな礫を使用する傾向が認められ、炉内に埋設土器を設置するものも多い。

加曽利E3式期になると、方形石囲い炉に一本化される傾向が伺える。特に大型の炉では大きな扁平礫4石で組む傾向が強く、炉内に埋設土器を設置するものも多い。また、方形石囲い炉では炉内埋設土器を隅に設置する事例が多いが、その場合埋設土器は大半が炉の中心に向けて傾けた状態で設置されている。このことは、炉内埋設土器の用途を考える際のポイントになるだろう。なお、96号住居のような円形のものや、88号住居・97号住居のような不定型な石囲い炉も存在する。不定型炉は小型住居に伴うことが多く、小振りな扁平礫を斜めに立てて囲う特徴がある。

ところで、今回の対象住居では、炉が完全に取壊されていた事例が3例あった。加曽利E1式期の79号住居では、炉内に炉石と多量の礫が廃棄されていた。加曽利E3式期古段階の104号住居では、やはり炉内に炉石と多量の礫が廃棄され、その傍らに炉内埋設土器が正位に置かれていた。加曽利

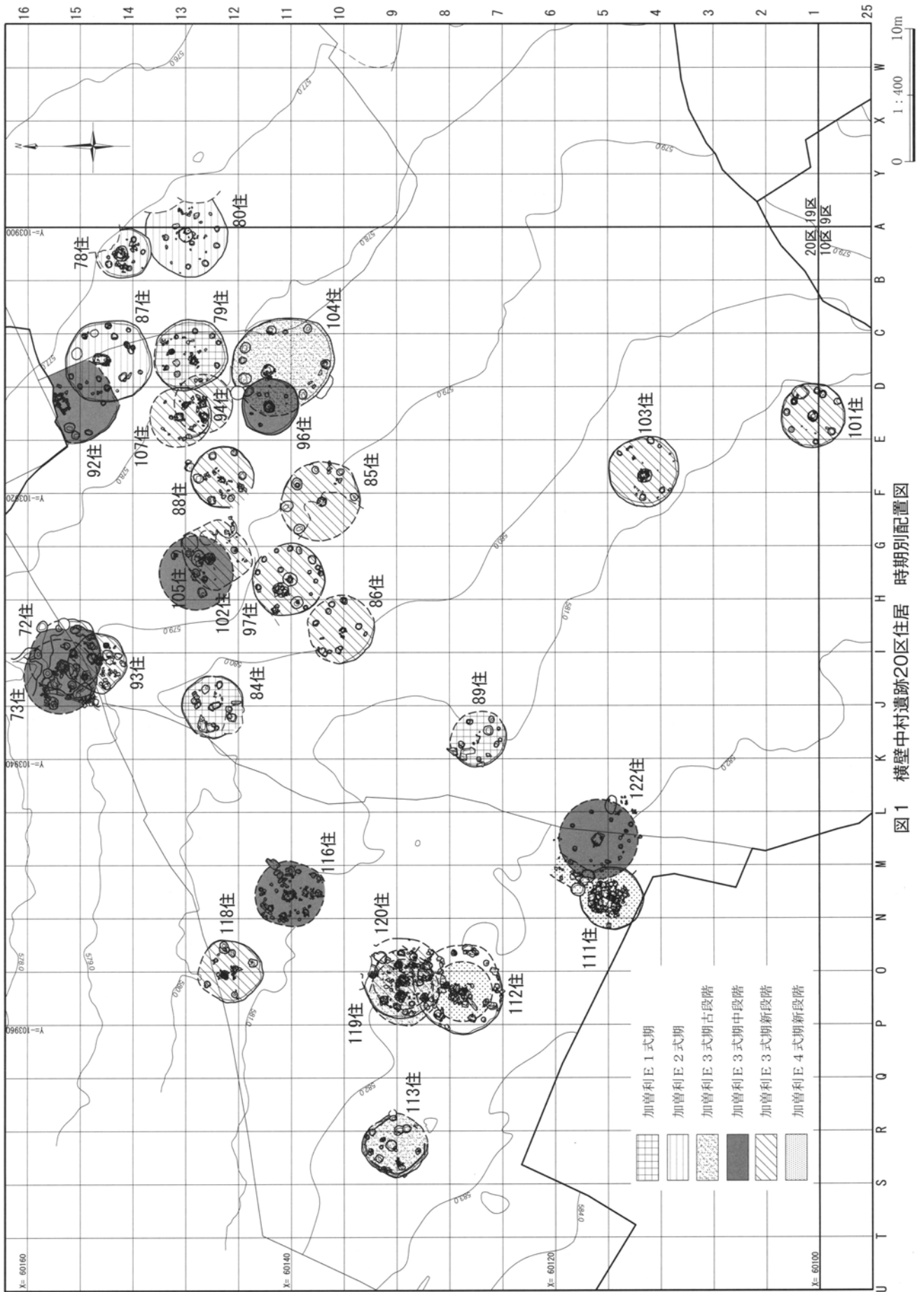


図1 横壁中村遺跡20区住居 時期別配置図



表4 横壁中村遺跡20区縄文時代中期住居 時期別一覧

住居番号	グリッド	時期	形状	長軸	短軸	深さ	炉	柱	切合関係(古)	切合関係(新)	備考
79号住居	C-12	加E1式古	楕円形	570	513	68	(土器埋設石囲炉)	6~7			貼り床。炉取り壊し。石棒片出土。
84号住居	I-12	加E1式古	隅丸方形	467	458	15	土器埋設楕円形石囲炉	4	なし	なし	
89号住居	J-7	加E1式新	円形	430		15	長方形石囲炉	5	なし	なし	
78号住居	A-14	加E2式新	楕円形	430	367	57	円形石囲炉	6	80住	287坑、517坑	貼り床。大型砥石出土。
80号住居	A-12	加E2式古	(楕円形)	630	608	-	隅丸方形石囲炉	-	-	-	旧炉埋設土器あり。大型石棒片出土。
87号住居	C-14	加E2式新	楕円形	663	606	74	土器埋設長方形石囲炉	-	-	92住、 98住(後期)	貼り床。床面伏せ甍あり。石棒未製品出土。
104号住居	C-11	加E3式古	楕円形	800	692	68	(土器埋設石囲炉)	7		96住	貼り床。炉取り壊し。方形配石あり。 丸石2個出土。
113号住居	R-9	加E3式古	隅丸方形	455	450	60	(方形石囲炉)	6			貼り床。炉取り壊し。大型砥石出土。
120号住居	O-8	加E3式古	(隅丸方形)	(470)	-	-	土器埋設方形石囲炉	4	112住、119住		
72号住居	I-15	加E3式中	(円形)	590	540	-	土器埋設方形石囲炉	7	73住	93住	貼り床。
73号住居	I-15	加E3式中	-	-	-	-	土器埋設方形石囲炉	4	73住、93住	73住、93住	72住の床下で確認。
92号住居	D-14	加E3式中	-	-	-	-	方形石囲炉	-	87住		南南東に埋甍。
96号住居	D-11	加E3式中	円形	430		60	土器埋設円形石囲炉	-	104住		有文台形土器、赤彩台付き鉢出土。
105号住居	G-12	加E3式中	-	-	-	-	土器埋設方形石囲炉	-	102住	18、20埋設土器	
116号住居	M-11	加E3式中	-	-	-	-	土器埋設方形石囲炉	-	なし	なし	大型砥石出土。
122号住居	L-5	加E3式中	-	-	-	-	土器埋設方形石囲炉	-		111住、121住	南東に埋甍あり。黒曜石大型剥片5 点出土。
85号住居	E-10	加E3式新	円形	610		15	土器埋設方形石囲炉	8		91住(平安時代)	柱6に逆位埋設土器。
86号住居	H-10	加E3式	(円形)	500		40	方形石囲炉	4	なし	なし	
88号住居	E-12	加E3式新	円形	450		15	不定型石囲炉	6	なし	なし	石棒未製品出土。
93号住居	I-14	加E3式新	隅丸方形	-	-	-	方形石囲炉	4	72住、73住		炉石横に多孔石。赤彩小型深鉢出土。
94号住居	D-12	加E3式新	(円形)	-	-	-	方形石囲炉	-	97住、107住		柱穴の根詰め。
97号住居	G-11	加E3式新	円形	540		10	不定型石囲炉	-		91住(平安時代)	
101号住居	D-1	加E3式新	円形	486		10	土器埋設方形石囲炉	7	なし	なし	北東と南東に埋甍各1あり。
102号住居	G-12	加E3式新	-	-	-	-	方形石囲炉	4	105住		石皿片出土。
103号住居	E-4	加E3式新	円形	530		45	土器埋設長方形石囲炉	-	なし	なし	石皿出土。
107号住居	D-13	加E3式新	(円形)	-	-	-	土器埋設方形石囲炉	-	94住		南側に埋甍と床面伏甍。大型砥石。
118号住居	O-12	加E3式新	隅丸方形	460	450	40	方形石囲炉	4	なし	なし	貼り床あり。
119号住居	O-8	加E3式新	柄鏡形敷石	(450)		-	長方形石囲炉	-	120住	112住	南東に埋甍と方形石組みあり。炉の そばに埋設土器あり。
111号住居	M-4	加E4式	柄鏡形敷石	470		10	土器埋設方形石囲炉	-	122住	121住	北東に埋甍と出入り口あり。炉内に 旧埋設土器あり。石棒片6個出土。
112号住居	O-7	加E4式	柄鏡形敷石	-		-	方形石囲炉	-	115住	119住、120住	



図2 横壁中村遺跡20区住居 石囲い炉の変遷

E 3 式期古段階の 113 号住居では、炉石が持ち去られていた。このほかに、炉石の一部を抜き取った事例は、加曾利 E 2 式期古段階の 80 号住居と E 3 式期中段階の 96 号住居でも認められた。

出入り口部に埋甕を設置した事例は、30 軒中 6 軒で認められた。これらを時期別にあげると、加曾利 E3 式期中段階の 92 号住居と 122 号住居、E 3 式期新段階の 101 号住居と 107 号住居および 119 号住居、E 4 式期の 111 号住居である。埋甕が埋設された方位と使用された土器および埋設方法は、

92 号住居	南南東	深鉢完形	正位
122 号住居	南東	深鉢下半部	正位
101 号住居	北東	深鉢上半部	逆位
107 号住居	南	深鉢上半部	正位
119 号住居	南東	深鉢上半部	正位
111 号住居	北東	深鉢完形	正位

である。

ここで注意すべきは、本遺跡は北向きの斜面に立地し、南側に山地を背負っていることである。地山は北北東から北東方向に傾斜し、雨水や土砂はこの傾斜に沿って流下する。そして、朝日は山地側の東南東から差し込み、冬季には午後 3 時で西南方向の山地に日没する。そのため、現在の集落の家も北東か南東に向けて建てられている。

南東方向は、本遺跡では地山の傾斜に対して直行する関係にあり、その東側は日の出の方向にあたる(図 1)。筆者は、中期の大半の住居はこの方向に出入り口を持つと想定している。ただし、柄鏡形(敷石)住居の場合は、突出した出入り口施設が雨水や土砂の流下にさらされるため、地山の傾斜に沿った北東方向、つまり谷側に出入り口を設置していると考えている。111 号住居がその好例であり、その点では 101 号住居も柄鏡形敷石住居であった可能性がある。唯一南側に埋甕をもつ 107 号住居は、図 1 で見るとかなり山側を向いて出入り口があったことになる。周囲に古手の住居もあり、なにか個別の事情があったのであろうか。

その他の施設では、加曾利 E 3 式期古段階の 104

号住居で、柱 1 と 2 の間で扁平礫を長形状に配した配石が確認された。これは長方形の 4 隅に礫を配したもので、1 石は失われていたが、同様の遺構が 20 区 34 号住居および 20 区 10 号住居でも確認されている。両事例とも配石に伴って胴下半部を打ち欠いた土器を伴っていたが、本例では確認されていない。この遺構の性格等はまだ解らないが、事例の増加を期待したい。

## 第2節 出土土器について

表 5 に出土土器の時期別点数と総量を示した。住居の時期は中期加曾利 E 1 式期から E 4 式期に該当する。現段階ではこれらを 6 期に区分しているが、可能であればさらに分類して、集落の動向を分析しようと考えている。

本地域の出土土器は、地元の唐草文系(本報告ではこの名称を当てておく)のほかに、関東地方の加曾利 E 式、南信地域の曾利式、北信～越後地域の系統などが混在する複雑な様相を示している。なかでも主体を占める地元の土器や北信～越後地域の土器は、研究者の間でもいまだ未決着の土器群であり、破片資料を主体とする整理作業では、これらの峻別作業はかなりの困難を伴った。したがって、ここでのデータはおおまかな傾向を示したものと捉えて頂きたい。なお、時期区分については群馬県の標準的な区分に従った。

主な出土土器を時期別に示すと、図 4～9 のようになる。加曾利 E 1 式段階では、関東の加曾利 E 1 式土器の出土が目立っており、本地域でも主体となる土器群だったようだ。E 1 式古段階の土器(97 住 19・23・42)は、勝坂 3 式土器(79 住 1・9)や焼町土器(89 住 1・2)と共伴するが、焼町土器が目立つのは、この地域の特色であろう。加曾利 E 1 式期新段階の資料が少ないため、まだはっきりしないが、この段階では曾利式や唐草文系の姿はまだ希薄なようである。また、浅鉢も加曾利 E 式の系統が多いようである。